仙台市文化財調査報告書第166集

沼　遺　跡

―仙台市上谷刈土地区画整理事業関係調査報告書―

１９９２年3月

仙台市教育委員会

仙台市文化財調査報告書第166集

沼　遺　跡

—仙台市上谷刈土地区画整理事業関係調査報告書—

１９９２年３月

仙台市教育委員会

序　　文

沼遺跡は、以前から縄文時代の土器の散布地として知られていました。また遺跡内を通る道路は、地元では「丸太沢古道」あるいは「秀衡街道」とも呼称され、かっての奥州街道であったと伝えられてきておりました。

しかし、豊かな田園地帯の中にあった沼遺跡の周辺も、現在では住宅団地に囲まれ、急速に都市化が進行してきております。

今回の調査は、遺跡を含む一帯に区画整理事業が計画されたことによります。調査は、初年度の遺跡範囲確認調査と次年度の本調査と2年にわたって行なわれ、予想を上回る遺構・遺物が発見されたため、整理・調査報告書刊行については今年度事業とすることとなりました。

沼遺跡は、七北田川の中流域に位置しており、周辺には縄文時代中期の土器が大量に出土した高柳遺跡をはじめ、火山灰に覆われた平安時代の水田跡が発見された赤生津遺跡などの遺跡があります。

今後これらの遺跡の調査研究が進み、周辺の遺跡との関連もとらえられていくことと思います。

このような遺跡は文化遺産として、土地に刻まれた形で継承されてきました。しかし、変化の激しい今日、各種の開発事業によって絶えず破壊・消滅の危機にさらされてきております。これからは意識して「まちづくり」の中に、どのように文化遺産を取り込んでいくべきか、市民の皆様と一緒に知恵を出しあっていく必要が感じられます。

これからも文化財保護への深いご理解とご協力をお願いするとともに、区画整理組合の方々はもとより、地元の皆様及び調査や整理作業にたずさわっていただいた多くの方々のご協力を得ましたことに対しまして、心より御礼申し上げる次第であります。

1992年3月

仙台市教育委員会
教育長　**東海林　恒英**

例　　言

1．本書は、仙台市上谷刈第二土地区画整理組合による区画整理事業の実施に伴う沼遺跡の発掘調査報告書である。

2．報告書作製にあたっての遺物整理は佐藤好一・工藤信一郎が担当し、石器実測については工藤哲司の協力をえた。

3．本文の執筆・編集は工藤信一郎が行なったが、第Ⅶ章の執筆については、プラントオパール分析を古環境研究所、花粉分析は東北大学理学部守田益宗氏に依頼した。

4．本書中で使用した地形図は、建設省国土地理院発行の１：25,000「仙台市東北部・西北部」の一部を使用している。

5．本書中の土色については、「新版標準土色帳」（小山・竹原：1973）を使用した。

6．実測図中の水糸高は標高で示している。

7．実測図中の方位は磁北に統一してある。仙台市において磁北は真北に対して西偏約7°20′である。

8．本書中で使用した遺構略号は次の通りである。

SI：竪穴（住居）　SK：土坑（土壙）　SD：溝　SB：掘立柱建物跡　P：ピット

9．本調査における出土遺物、実測図、写真等の資料は、仙台市教育委員会文化財課で保管しているので活用されたい。

調　査　要　項

1．遺跡の名称　　沼遺跡

2．遺跡所在地　　仙台市泉区上谷刈字山下、塚、遠聖堂他

3．調査主体　　仙台市教育委員会

4．調査担当　　仙台市教育局社会教育部文化財課調査係

5．担当職員　　教諭　佐藤好一　　主事　工藤信一郎

6．調査期間　　遺跡範囲確認調査　　1989年11月1日～12月8日

　　本調査　　1990年4月11日～9月4日

7．調査対象面積　約80,000 m²

8．発掘調査面積　遺跡範囲確認調査　　約1,550 m²　　本調査　　約5,650 m²

9．調査協力　　仙台市上谷刈第二土地区画整理組合

　　株式会社ヒフミ設計コンサルタント

10．調査参加者

相沢美佐子　阿部　聡子　阿部健太郎　荒川　悦子　石川かつ子　遠藤　千穂
大友とし子　貝原　英幸　加藤　久　熊谷　清　熊谷　友治　熊谷きぬ子
熊谷キミ子　小泉　幸子　昆　イヨ　近藤　悟　斉藤喜恵子　斉藤　慶子
佐藤　久　佐藤よし子　佐藤　悦子　佐々木　匡　佐々木　淳　佐々木昇子
塩野　礼子　須藤　敬子　須藤真紀子　須藤佳代子　高橋　弘子　高橋　喜子
田中つや子　田中世津子　筒井　尚美　東海林智子　名古　圭子　奈須野とよみ
堀籠　幸子　本間　春美　松浦せい子　丸屋　浪子　三塚　里香　村本　茂子
村山よし子　山村よし子　横田　正治　若生　洋子　和山　敬子　渡辺まき子

本　文　目　次

Ⅰ．調査に至る経過……1
Ⅱ．遺跡の位置と環境……1
　1．遺跡の位置……1
　2．遺跡周辺の歴史的環境……1
Ⅲ．調査の経過と方法……3
Ⅳ．遺跡範囲確認調査……4
　1．発掘調査の経過と方法……4
　2．各調査対象区の基本層位……4
　3．発見された遺構と遺物……4
Ⅴ．本調査……6
　1．発掘調査の経過と方法……6
　2．発見された遺構と遺物……6
　3．近世水田跡調査区……6
　　(1)西区水田跡……6
　　(2)東区水田跡……12
　　(3)北区水田跡……13
　　(4)近世土壙墓群……16
　4．道路跡調査区……21
　　(1)道路跡……21
　　(2)「切り通し」遺構……24
　　(3)その他の遺構……24
　5．縄文時代遺物包含層……26
　　(1)基本層序……26
　　(2)発見された遺構と遺物……26
　　①竪穴住居跡……26
　　SI-1 竪穴住居跡……29
　　SI-2 竪穴住居跡……35
　　SI-3 竪穴住居跡……40
　　SI-4 竪穴住居跡……44
　　SI-5 竪穴住居跡……47
　　SI-6 竪穴住居跡……59
　　SI-7 竪穴住居跡……66
　　SI-8 竪穴住居跡……74
　　②土坑群……82
　　③溝跡……84
　　④遺物包含層出土遺物……93
　　(3)縄文時代の遺構と遺物……106
　　土器……106
　　石器・石製品……107
　　竪穴住居跡と炉跡……108
Ⅵ．調査のまとめ……110
Ⅶ．分析……112
　1．プラントオパール分析……112
　2．花粉分析……117

挿　図　目　次

図1　沼遺跡と周辺の遺跡……2
図2　遺跡範囲確認調査試掘トレンチ配置図……5
図3　沼遺跡調査区（本調査）……7
図4　水田跡調査区遺構平面図……9，10
図5　水田跡調査区土層柱状図……8
図6　SK2土坑……11
図7　西区水田跡遺構配置図（土壙墓群SD1溝SK1．2土坑）……12
図8　SK3土坑……13
図9　SD2溝跡……13
図10　水田跡調査区出土遺物(1)……14
図11　水田跡調査区出土遺物(2)……15
図12　土壙墓セクション図……16
図13　近世土壙墓群（西区水田跡調査区）……17
図14　土壙墓出土遺物(1)……19
図15　土壙墓出土遺物(2)……20
図16　道路跡調査区遺構配置図基本層序（89年13トレンチ南壁）……22
図17　道路跡南半調査区……23
図18　SD6．7溝跡セクション図……24
図19　「切り通し」遺構縦横断面図……25
図20　SK4土坑セクション図……25
図21　包含層地区遺構配置図……27．28
図22　包含層地区トレンチ配置図……26
図23　SI-1　竪穴住居跡……30
図24　SI-1　竪穴住居炉跡……31
図25　SI-1　竪穴住居跡出土土器(1)……32
図26　SI-1　竪穴住居跡出土土器(2)……33
図27　SI-1　竪穴住居跡出土石器(1)……33
図28　SI-1　竪穴住居跡出土石器(2)……34
図29　SI-2　竪穴住居跡……36
図30　SI-2　竪穴住居炉跡……37
図31　SI-2　竪穴住居跡出土土器……38
図32　SI-2　竪穴住居跡出土石器(1)……38
図33　SI-2　竪穴住居跡出土石器(2)……39
図34　SI-3　竪穴住居跡……41
図35　SI-3　竪穴住居炉跡……42
図36　SI-3　竪穴住居跡出土土器……43
図37　SI-3　竪穴住居跡出土石器……43
図38　SI-4　竪穴住居跡……45
図39　SI-4　竪穴住居炉跡……46
図40　SI-4　竪穴住居跡出土土器……47
図41　SI-4　竪穴住居跡出土石器……48
図42　SI-5　竪穴住居跡……50
図43　SI-5　竪穴住居炉跡……51
図44　SI-5　竪穴住居跡出土土器(1)……53
図45　SI-5　竪穴住居跡出土土器(2)……54
図46　SI-5　竪穴住居跡出土土器(3)……55
図47　SI-5　竪穴住居跡出土石器(1)……56
図48　SI-5　竪穴住居跡出土石器(2)……57
図49　SI-5　竪穴住居跡出土石器(3)……58
図50　SI-6　竪穴住居跡……59
図51　SI-6　竪穴住居炉跡……61
図52　SI-6　竪穴住居跡出土土器(1)……63
図53　SI-6　竪穴住居跡出土土器(2)……64
図54　SI-6　竪穴住居跡出土石器(1)……64
図55　SI-6　竪穴住居跡出土石器(2)……65
図56　SI-7　竪穴住居跡……67
図57　SI-7　竪穴住居炉跡……68
図58　SI-7　竪穴住居跡出土土器……70
図59　SI-7　竪穴住居跡出土石器(1)……71
図60　SI-7　竪穴住居跡出土石器(2)……72
図61　SI-7　竪穴住居跡出土石器(3)……73
図62　SI-8　竪穴住居跡……75
図63　SI-8　竪穴住居炉跡……76
図64　SI-8　竪穴住居跡出土土器(1)……78
図65　SI-8　竪穴住居跡出土土器(2)……79
図66　SI-8　竪穴住居跡出土石器(1)……80
図67　SI-8　竪穴住居跡出土石器(2)……81
図68　土坑(1)……85
図69　土坑(2)……86
図70　土坑(3)……87
図71　土坑(4)……88
図72　土坑出土土器……89
図73　土坑出土石器(1)……90
図74　土坑出土石器(2)……91
図75　土坑出土石器(3)……92
図76　包含層セクション図　89年40トレンチ東壁　90年FNライン……93
図77　包含層出土土器(1)（89年40トレンチ）…96
図78　包含層出土土器(2)（89年40トレンチ）…97
図79　包含層出土土器(3)……98
図80　包含層出土土器(4)……99
図81　包含層出土石器(1)（40トレンチ）……100
図82　包含層出土石器(2)……101
図83　包含層出土石器(3)……102
図84　包含層出土石器(4)……103
図85　包含層出土石器(5)……104
図86　包含層出土石器(6)……105

写真図版目次

写真１　沼遺跡航空写真（1947年撮影）……121
写真２　沼遺跡航空写真（南方上空）……122
写真３　西区水田跡検出状況（西方より）
写真４　東区水田跡検出状況（南方より）
写真５　墓壙群（西区水田跡）（西方より）……123
写真６　道路跡・掘立柱建物跡（南方より）
写真７　切り通し遺構（北西より）
写真８　縄文包倉層地区空撮（南方より）……124
写真９　竪穴住居跡完掘状況（東方より）
写真10　１号住居跡完掘状況（東方より）
写真11　２号住居跡完掘状況（南方より）……125
写真12　３号住居跡完掘状況（北方より）
写真13　４号住居跡完掘状況（東方より）
写真14　５号住居跡完掘状況（南方より）……126
写真15　６号住居跡完掘状況（東方より）
写真16　６号住居炉跡（新）（南方より）
写真17　６号住居炉跡（古）（南方より）……127
写真18　７号住居跡完掘状況（北東より）
写真19　８号住居跡完掘状況（西方より）
写真20　SI-1 竪穴住居跡出土土器……128
写真21　SI-2 竪穴住居跡出土土器
写真22　SI-3 竪穴住居跡出土土器……129
写真23　SI-4 竪穴住居跡出土土器
写真24　SI-5 竪穴住居跡炉埋設土器……130
写真25　SI-5 竪穴住居跡出土土器
写真26　SI-5 竪穴住居跡出土土器
写真27　SI-5 竪穴住居跡出土土器……131
写真28　SI-6 竪穴住居跡出土土器……132
写真29　SI-7 竪穴住居跡出土土器……133
写真30　SI-8 竪穴住居跡出土土器（1）
写真31　SI-8 竪穴住居跡出土土器（2）……134
写真32　土坑出土土器……135
写真33　包含層出土土器（1）89年40トレンチ
写真34　包含層出土土器（2-1）89年40トレンチ
写真35　包含層出土土器（2-2）89年40トレンチ…136
写真36　包含層出土土器（3）
写真37　包含層出土土器（4）
写真38　竪穴住居跡出土石器（SI-1～SI-5）……137
写真39　竪穴住居跡出土石器（SI-5～SI-7）……138
写真40　竪穴住居跡出土石器（SI-7・SI-8）……139
写真41　竪穴住居跡出土礫石器……140
写真42　土坑・包含層出土石器……141
写真43　包含層出土石器……142
写真44　包含層出土石器……143
写真45　水田跡出土石器……144
写真46　水田跡・土壙墓出土遺物
写真47　プラント・オパールの顕微鏡写真……145
写真48　花粉の顕微鏡写真……146

Ⅰ．調査に至る経過

仙台市北西部に位置する泉区は、急速に都市化が進行してきた地域である。地下鉄の開通と1988年の政令都市指定によってこうした傾向はいっそう進んでいる。そのなかにあって、沼遺跡の所在する一帯は水田や畑地として利用されながら、良好な保存状態が保たれてきていた。

1988年、仙台市上谷刈第二土地区画整理事業組合設立準備委員会により、当遺跡地内に区画整理事業が立案された。仙台市教育委員会では、提出された開発行為事前協議書にもとづいて準備委員会との協議を行なった。その結果、初年度は開発申請予定地内の埋蔵文化財の保護に必要な処置を検討する資料を得るため、遺跡範囲確認調査を実施することとなった。

遺跡範囲確認調査は1989年11月１日～12月８日にかけて実施された。

調査は開発予定地内の遺構・遺物の分布状況を把握するため、全域にトレンチを設定し調査を行なった。その結果、開発予定地内の北部に縄文時代の土坑・溝跡・ピット・遺物包含層が確認された。北西部には中世の道路跡と考えられる遺構が検出されたほか、南部に近世の水田跡が分布していることが確認された。出土遺物としては、縄文時代中期の土器や石器のほか、陶磁器・古銭・土師器等がある。

遺跡範囲確認調査によって、縄文時代中期・中近世の遺構・遺物が良好に保存されていることが確認された。調査成果に基づいて再び協議を行い、次年度に記録保存を前提とした開発地域内の事前調査を行なうこととなった。

本調査は、1990年４月11日～９月４日にかけて実施された。

Ⅱ．遺跡の位置と環境

１．遺跡の位置

沼遺跡は、仙台市泉区上谷刈字山下・塚・遠聖堂他に所在しており、泉区役所の南西約2.5 km、地下鉄八乙女駅からは西方約２kmの地点にあたる。

泉区東部は、奥羽山脈から派生する富谷丘陵と七北田丘陵によって北と南を挟まれ、この間を開析して七北田川が東流している地域である。七北田川には数段の河岸段丘が発達している。この河岸段丘は、沼遺跡周辺より西では顕著にみられるが、下流の東部では小規模な中位・下位段丘がみられるだけで、自然堤防・後背湿地の拡がる七北田低地となっている。

沼遺跡は、七北田川南岸の河岸段丘上に立地している。遺跡内の標高は24～25ｍ程である。

２．遺跡周辺の歴史的環境

沼遺跡の所在する仙台市西北部の七北田川中流域には、それほど多くの遺跡が分布している

遺跡地名表

No	遺跡名	立地	種別	時代	備考
1	沼遺跡	河岸段丘	包含地	縄文・古式	縄文土器・土師器・須恵器
2	赤生津遺跡	〃	〃	縄文・平安	1988年調査　平安時代の水田跡 大洞A′式期の遺物包含層
3	柳遺跡	沖積平野	〃	古代	土師器・須恵器
4	高柳遺跡	河岸段丘	〃	縄文・古代 中世	1989年調査　大木8a・8b式期の遺物包含層 ・土坑　近世の屋敷墓
5	長命館跡	丘陵	城館	中世	1985年調査　13～15世紀の施紬陶器 ・無紬陶器・火鉢等出土

図1　沼遺跡と周辺の遺跡

とはいえない(図１)。このように遺跡の少ない理由として、丘陵地の大部分がすでに住宅団地等の自然改変地と化していることと、七北田川によって形成された河岸段丘上に肥沃な水田地帯が開け、詳細な遺跡分布調査が行なわれてこなかったためと思われる。

縄文時代の遺跡としては、高柳遺跡・赤生津遺跡がある。高柳遺跡は沼遺跡の東方約２kmに位置している。1989年に発掘調査が行なわれ、大木8a・8b式期を主体とする良好な遺物包含層が検出され、大量の遺物が出土している。赤生津遺跡は沼遺跡の対岸、七北田川北岸の最低位の河岸段丘上に位置している。1988年に発掘調査が行なわれ、縄文時代晩期大洞A′式を中心とする遺物包含層が検出されたほか、10世紀前半に降下したと考えられている灰白色火山灰に覆われた平安時代の水田跡が発見されている。

古代の遺跡としては柳遺跡等がある。また中世の遺跡としては沼遺跡の西方の丘陵上に位置する長命館跡がある。長命館跡は、「吾妻鏡」にみえる「国府中山上物見岡」の擬定地のひとつと考えられてきたところである。1985年に発掘調査が行なわれ、13～15世紀の施釉陶器・無釉陶器・火鉢等の遺物が出土している。

III. 調査の経過と方法

調査対象面積が約80,000 m²あることから、初年度は遺跡の範囲と性格を究明するための遺跡範囲確認調査を実施することとし、本調査はその成果を受けて次年度実施することとした。

確認調査はトレンチを基本として行い、その結果３地点において、それぞれ近世の水田跡・中世の道路跡と考えられる遺構・縄文時代の遺物包含層が確認された。それ以外に遺構・遺物の検出された６カ所のトレンチについては、拡張を行なった上で調査を終了させている。

また近世の水田跡が拡がっていると予想される地点については、確認調査中に調査対象となる道路計画部分約2,100 m²について表土削除を終了させている。

本調査は、発見された水田跡を現在の地形や水路などから、調査地点をそれぞれ「西区水田跡」・「東区水田跡」・「北区水田跡」の３地点にわけたうえで、西区水田跡から開始した。その後道路跡の調査に入り、ついで縄文時代の遺物包含層地区の調査に入った。包含層地区では、前年の確認調査では発見されていなかった、縄文時代中期末葉の複式炉をもつ竪穴住居跡８軒をはじめとする遺構が検出された。なお、８月４日に調査成果についての現地説明会を開催している。

Ⅳ．遺跡範囲確認調査

1．発掘調査の経過と方法

調査は区画整理事業予定地内のうち、主に道路が計画されている部分を中心として行ない、その他区画整理の施工上切り土等の掘削を伴う部分を対象として行なっている。

調査の方法は、3×9ｍのトレンチを基本として合計42地点に調査区を設定し、重機によって表土排除を行なったのち、人力により遺構確認を行なった。その際遺構の検出されたトレンチについては、性格究明のため若干の拡張を行ない調査を実施している。

調査は対象区を便宜的に南側から第１地点～第６地点までの６区に分け、第１地点から調査を開始した。その後第５地点において縄文時代の遺物包含層が検出されたことから、分布範囲を確認するための調査グリッドを、No. 43～52までの10地点に設定し調査を行なっている（図２）。

2．各調査対象区の基本層位

調査対象区南側の第１～３地点では、現在の水田耕作土下20～30 cmで近世の水田跡が検出されている。西部の第４地点では、表土下15～20 cm程で黄褐色の地山面となり、ここが遺構確認面となっている。北部の第５地点では、畑耕作土の下に黒褐色シルト層があり、この層から縄文土器がまとまって出土している。この遺物包含層の下は黄褐色の地山面となり、ここが遺構確認面となっている。

3．発見された遺構と遺物

調査の結果、第１～３地点においてほぼ全域に水田跡が拡がっていることが確認され、第４地点では13・39トレンチにおいて、道路跡の西側に取りつくと考えられる溝跡を検出した。

第５地点では40トレンチを中心として、縄文時代中期前葉の遺物を中心とする遺物包含層が検出され、この地点に当該期の住居跡を含む遺構が存在することが予想された。

確認調査の結果、遺構・遺物の確認されたトレンチについては表１に掲げている。

表１　遺跡範囲確認調査成果一覧

試掘トレンチ No	調査面積	検出遺構	出土遺物	備考
2～4・27～35トレンチ	355 m²	近世水田跡	陶磁器・古銭・キセル・石器	東・西区水田跡調査区
37・38トレンチ	54 m²	近世水田跡	陶磁器	北区水田跡調査区
12・13・39トレンチ	100 m²	中世道路跡	陶磁器・中世陶器	道路跡調査区
40～42トレンチ・43～52グリッド	390 m²	縄文時代遺物包含層	縄文土器・石器	包含層地区調査区
1トレンチ	36 m²	溝跡1条（時期不明）	陶磁器・土師器	
9トレンチ	27 m²	溝跡1条（時期不明）		
10トレンチ	72 m²	溝跡3条（時期不明）	陶磁器・土師器	
11トレンチ	27 m²	ピット・焼土		
14トレンチ	45 m²		縄文土器	
16・17トレンチ	65 m²	溝跡（時期不明）	縄文土器・石器	包含層地区調査区
19トレンチ	45 m²	溝跡・土坑（時期不明）		

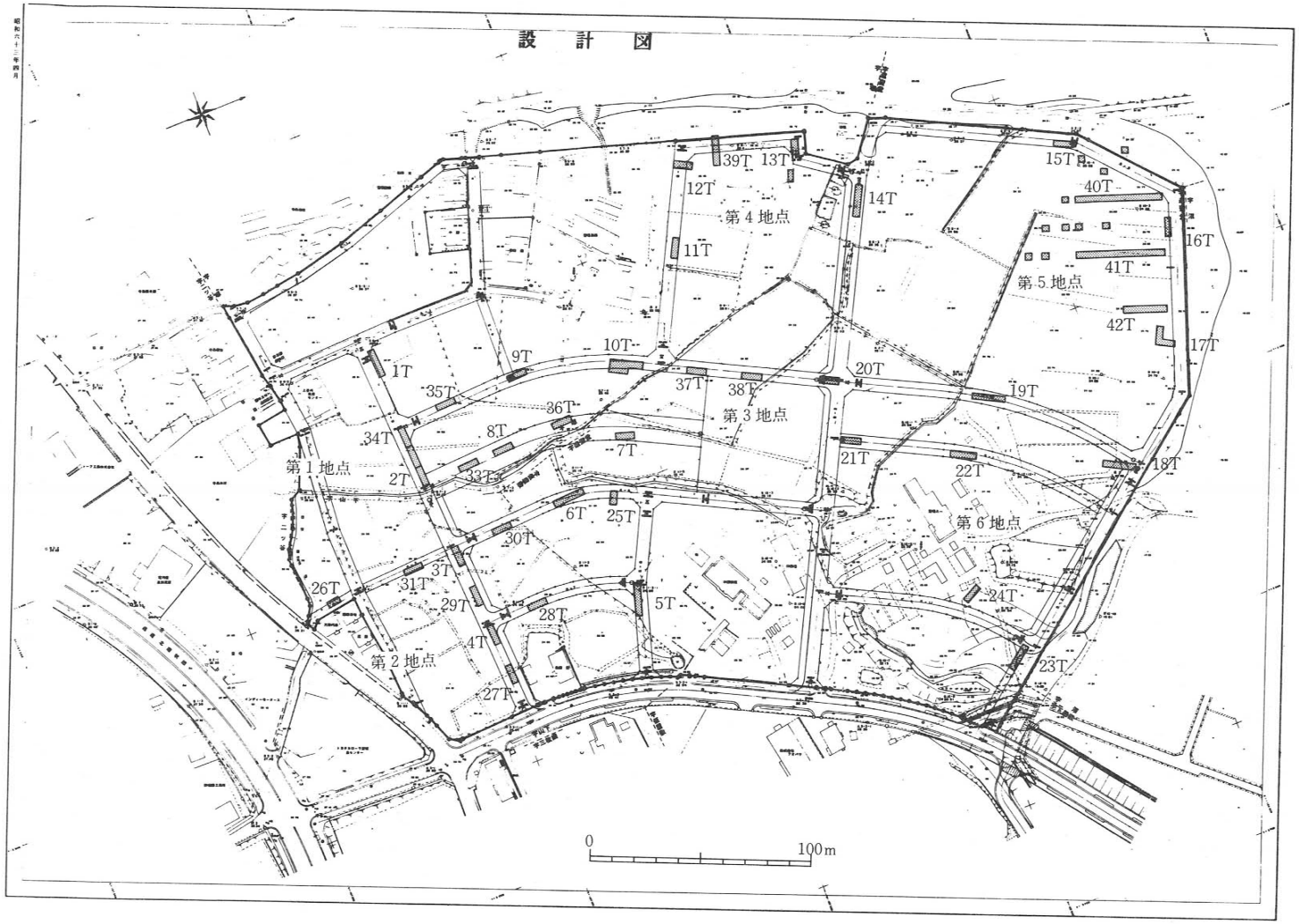


図２　遺跡範囲確認調査試掘トレンチ配置図

Ⅴ．本調査

1．発掘調査の経過と方法

確認調査によって検出されていた、近世の水田遺構・中近世の道路跡・縄文時代の遺物包含層の３地点を対象として本調査を実施した。

調査は、西区及び東区水田跡をＡ・Ｂ区、北区水田跡をＣ区、道路跡をＤ・Ｅ区、包含層地区をＦ区として３ｍグリットを基準として測量杭を設定している。

2．発見された遺構と遺物

調査対象区南側のＡ～Ｃ区において近世の水田跡、西区水田跡北側において土壙墓12基が検出された。耕作土中および土壙墓の埋土中からは陶磁器・古銭・煙管等が出土している。

西端部のＤ･Ｅ区では、確認調査によって検出されていた道路跡の他に、これに伴うと考えられる溝跡や道路跡以前のものと考えられる掘立柱建物跡等が発見された。

北側のＦ区では、確認されていた遺物包含層のほか縄文時代中期の竪穴住居跡８軒・土坑・溝跡等が発見された。遺物としては、縄文土器・石器・石製品等が出土している。

3．近世水田跡調査区（Ａ～Ｃ区）

現在の水田直下に検出されており、遺存状況はよくない。耕作の影響によって畦畔は残存せず擬似畦畔として検出される。調査区のほぼ中央部に、西から東に向かって緩やかな沢が入りこんでおり、現地形面も東に向かって緩やかに傾斜している。傾斜は10～15 cm/10 m程度である。

検出された水田跡の面積は約2,100 m²である。調査区の北側や東側では耕作による影響が大きく畦畔は検出されず、特にＣ区の北区水田では部分的に水田土壌が残存している程度である。未調査部分を含めると水田域は約15,000 m²と推定される（図４）。

水田土壌は黒褐色粘質シルトで、ほとんどの地点において現水田耕作土下に検出され、下層は地山面となっている（図５）。

水田区画の形態は、一枚の区画すべてを検出していないため不明であるが方形を基調とする大区画になると思われる。水口や水路などの遺構は不明である。

西区水田では水田域に近接して近世の土壙墓12基が検出されている。

(1)西区水田跡

西区水田跡は他に比べて遺存状況はよく、方形を基調とする１枚ごとの水田区画の規模が推測される。出土遺物としては陶磁器片（肥前染付皿・相馬）・煙管・古銭・石匙・石製品がある（図10-1．4．5．9図11-3．5）。図10-1．4はともに肥前焼染付皿で、１は見込蛇ノ目釉ハギのもので、17～18世紀のものである。

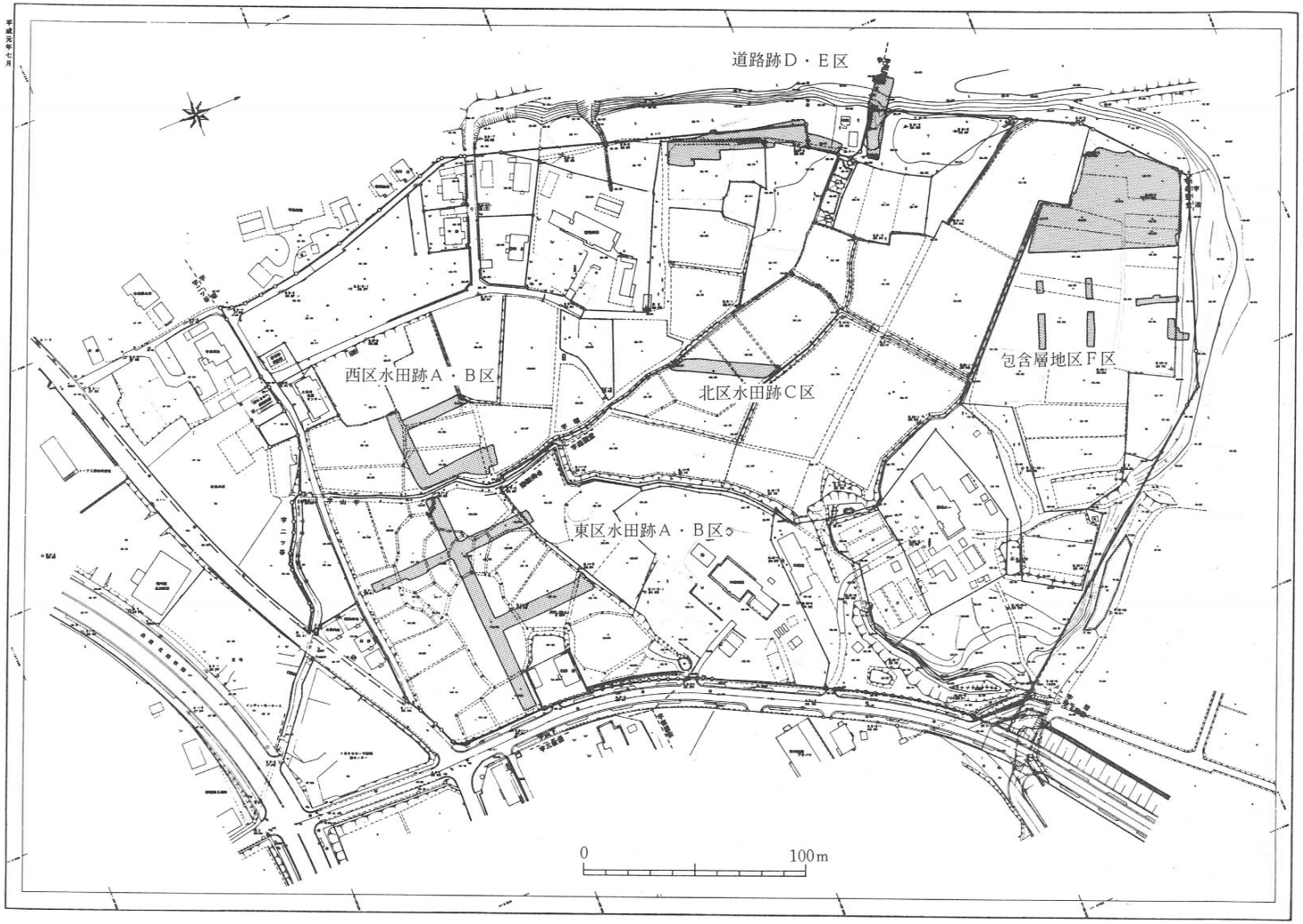


図3　沼遺跡調査区（本調査）

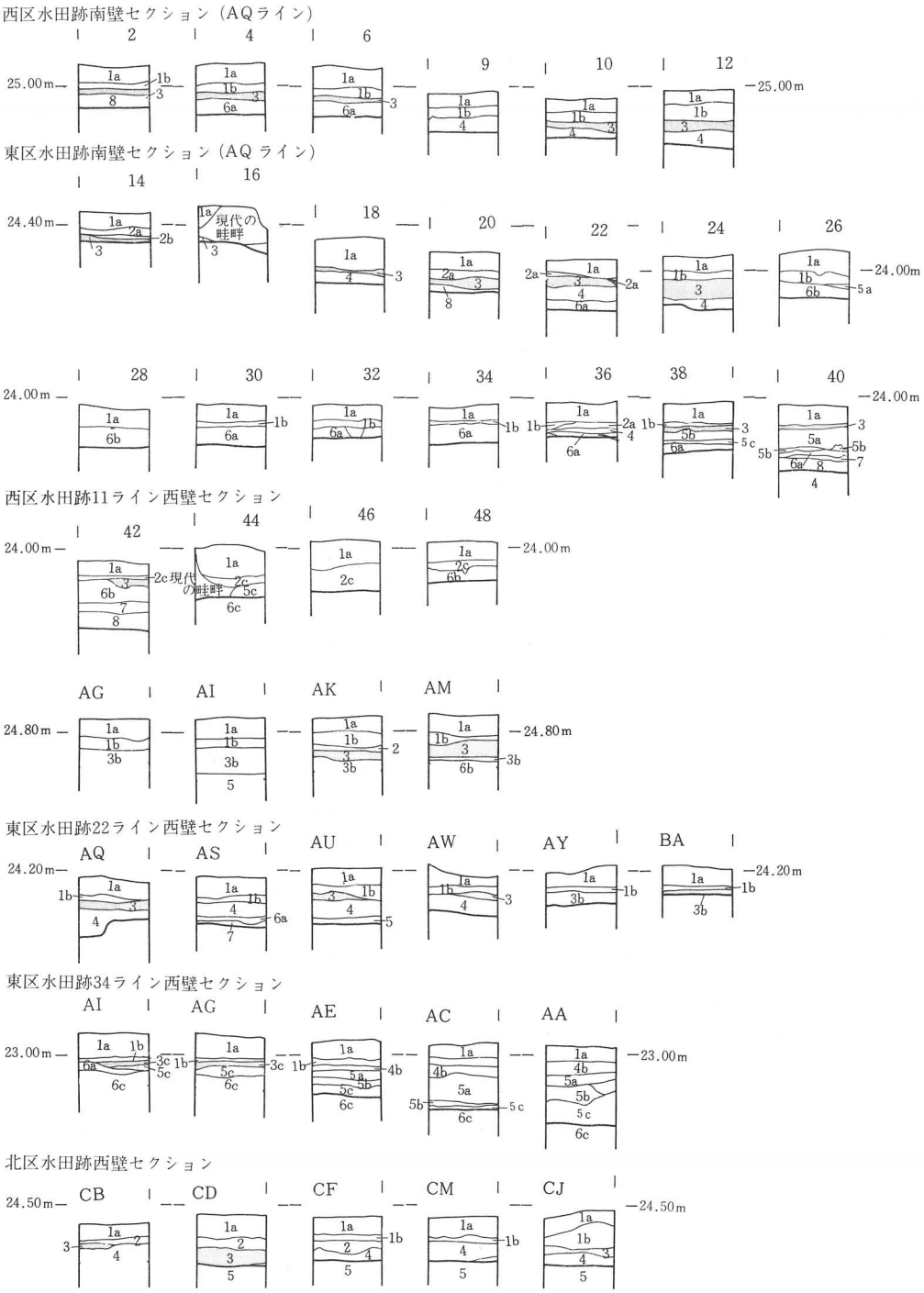


図4　水田跡調査区土層柱状図

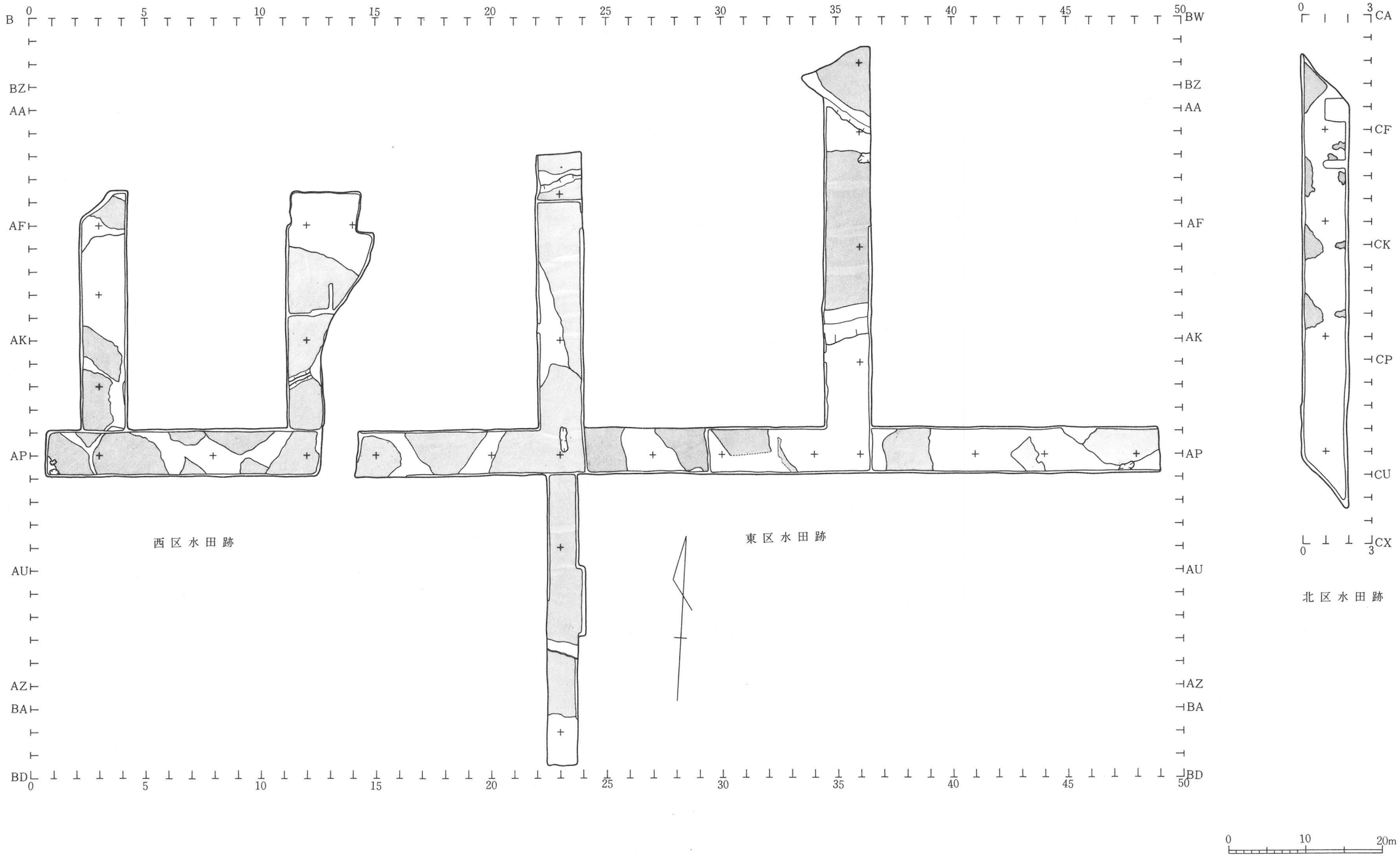


図5　水田跡調査区遺構平面図

西地区水田跡土層注記表

層No.	土　色	土 性	備　考
1a			現水田耕作土
1b	明褐色 7.5 YR5/8	シルト	酸化鉄集積層
2	黒褐色 10 YR3/2	シルト	
3a	黒褐色 10 YR3/1	シルト	近世水田耕作土
3b	黒褐色 10 YR3/1	シルト	
4	灰黄褐色 10 YR5/2	シルト	黒褐色 10 YR2/2 まじる
5	黒色 10 YR2/1	粘土質シルト	灰白色火山灰が若干まじる
6a	黄褐色 10 YR5/6	粘質シルト	
6b	5層土と7層土のブロック層	粘土	
7	にぶい黄燈色 10 YR7/3	粘土質シルト	
8	褐色 10 YR4/4		礫まじり層

北区水田跡土層注記表

層No.	土　色	土 性	備　考
1a			現水田耕作土
1b			酸化鉄集積層
2	黒褐色 2.5 YR3/2	シルト	
3	黒褐色 10 YR2/2	シルト	近世水田耕作土 10 YR5/4 がまじる
4	黒褐色 2.5 YR3/2	粘土質シルト	マンガン遺まじり、5層土がブロック状に入る
5	浅黄色 2.5 YR7/4	粘土	

東地区水田跡（西部）土層注記表　AQ14～AQ29 区

層No.	土　色	土 性	備　考
1a			現水田耕作土
1b			酸化鉄集積層
2a	褐灰色 10 YR4/1	シルト	酸化鉄まじり
2b	黄褐色 10 YR5/6	シルト	
3	黒褐色 10 YR3/1	シルト	近世水田耕作土
4	黒褐色 10 YR2/2	シルト	10 YR4/1 が若干まじる
5a	黒褐色 10 YR3/1 とにぶい黄燈色 10 YR6/4 のブロック層	粘質シルト	天地返し？
6a	黒褐色 10 YR2/2	粘質シルト	
6b	明黄褐色 10 YR6/6	粘質シルト	

東地区水田跡（東部）土層注記表　AQ29～AQ48 区

層No.	土　色	土 性	備　考
1a			現水田耕作土
1b			酸化鉄集積層
2a	褐灰色 10 YR4/1	粘質シルト	
2c	褐灰色 10 YR5/1	粘質シルト	
3b	褐色 10 YR4/1	粘質シルト	近世水田耕作土
3c	オリーブ黒色 5 Y3/1	粘質シルト	近世水田耕作土
4b	褐色 5 Y4/4	シルト	
5a	黒褐色 10 YR3/1 とにぶい黄燈色 10 YR6/4 のブロック層	シルト	天地返し？
5b	褐灰色 10 YR4/1	シルト	近世水田耕作土
6a	黒褐色 10 YR3/1	シルト	
6b	明黄褐色 10 YR7/6	粘土	
6c	黒色 7.5 Y2/1	粘土	

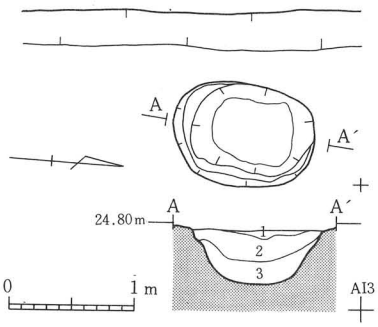
表２　水田跡調査区土層注記表

〈その他の遺構〉

土坑２基、溝跡１条が検出されている。このうち SK2 土坑・SD1 溝跡は近世水田跡の下で検出されているが、いずれも出土遺物がなく時期は不明である。

「SK1 土坑」　調査区南壁 AP-1 区に1/2程度検出された（図７）。現水田耕作土下で近世の水田面を切って構築されている。長軸で 120 cm の方形を呈すると思われ、底面までの深さは約 15 cm である。埋土は黒褐色10YR3/2 シルトの単層である。

「SK2 土坑」　A1-2 区で検出された（図６）。長軸110×短軸 80 cm の楕円形を呈しており、底面までの深さは約 40



土層注記表

遺構 No	層	土 色	土性	層	土 色	土性	層	土 色	土性
SK6	1	黒褐色 10YR3/1	シルト	2	黒色 10YR1.7/1	粘土質シルト	3	黒色 10YR2/1	粘土質シルト

図６　ＳＫ２土坑

cm である。埋土は 3 層に分けられる。

「SD1 溝跡」　AM～AP-10～12 区にかけて検出され、南北方向に直線的に延びており、AN-12 区で東に分岐している（図 7）。幅は約 90～120 cm 程度で壁は 15～20 cm 残存している。底面形は舟底形を呈し緩やかな角度で立ち上がっている。底面のレベルは北に向かって傾斜している。埋土は 2 層に分けられる。埋 1 層は黒褐色10YR3/2 シルト層で、マンガン斑が混じる。埋 2 層は10YR3/1 シルト層で底面には薄い砂層がみられる。

(2)東区水田跡

西側部分は比較的遺存状況がよいものの調査区の東側にかけて遺存状況はよくない。出土遺物としては陶磁器片（相馬・堤・瀬戸美濃）・古銭・石器がある（図10-2．3．6．7．8図11-1．

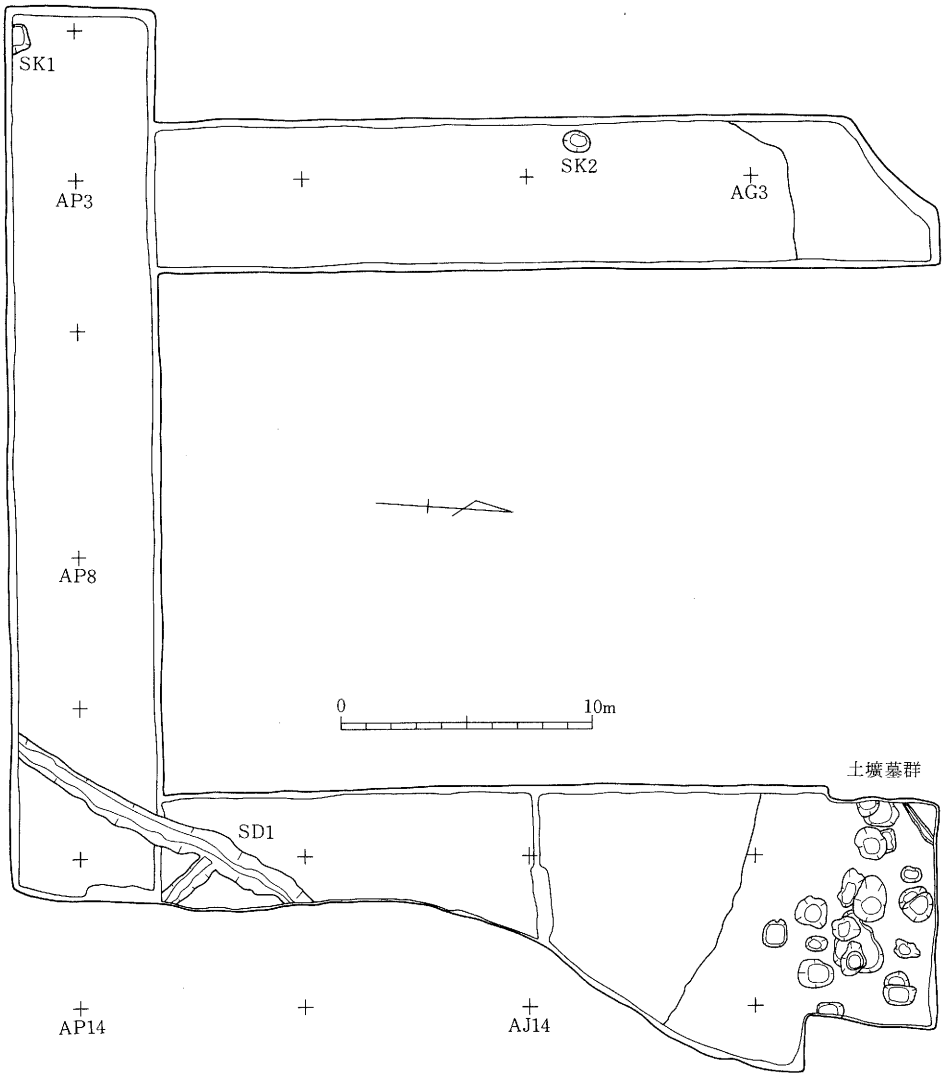


図７　西区水田跡遺構配置図（土壙墓群・ＳＤ１溝跡・ＳＫ１，２土坑）

2．4)。図10-2は肥前焼染付皿、図10-3は瀬戸美濃焼皿か鉢で、いずれも17世紀前～中葉のものである。

〈その他の遺構〉

作土下の地山面から土坑１基・溝跡１条が検出されているが、いずれも出土遺物がなく時期は不明である。

「SK3 土坑」 AB-35 区で検出された（図８）。長軸185×短軸 110 cm で方形を呈し、底面までの深さは約 35 cm である。埋土は褐灰色10YR4/1 シルトの単層である。

「SD2 溝」 AD22～23 区で検出された（図９）。東西方向に直線的に延びている。幅は 40～60 cm 程度で、壁は 5～10 cm 程残存している。底面形は舟底形を呈し、緩やかに立ち上がっている。底面のレベルは東にむかってゆるく傾斜している。埋土は黒褐色10YR3/1 シルトの単層であるが底面に薄い砂層が入っている。

(3)北区水田跡

北区水田跡は耕作による影響が大きく、作土の一部が残る程度で、水田の規模や形状は不明である。下層からの遺構は検出されていない。出土遺物としては陶磁器片（瀬戸美濃・肥前染付・相馬）があり、いずれも18～19世紀のものであった。

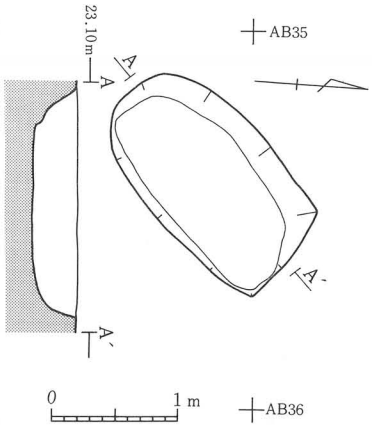


図８　ＳＫ３土坑

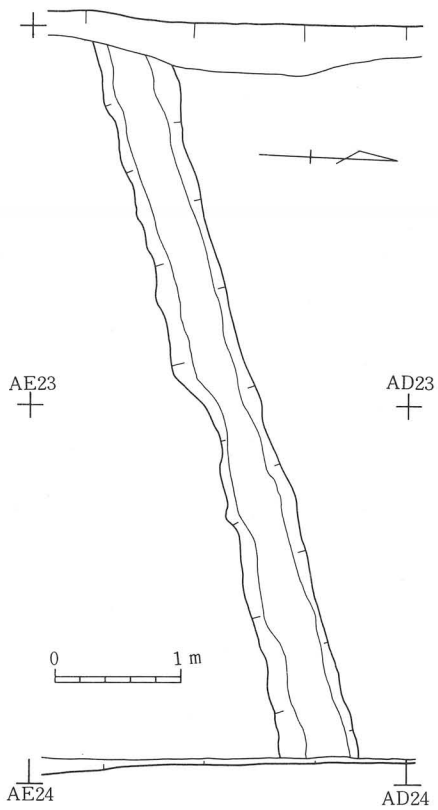


図９　ＳＤ２溝跡

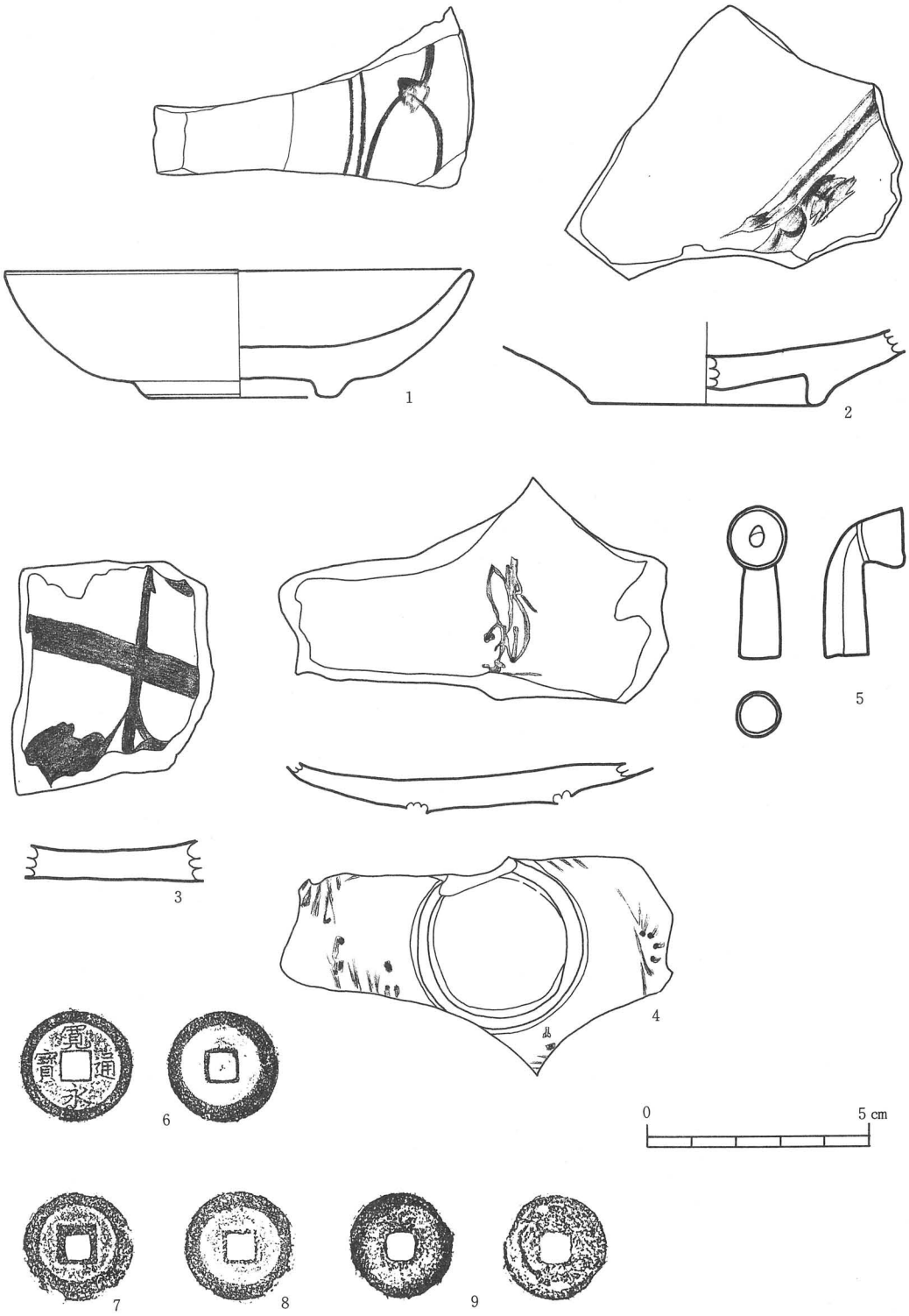


図10　水田跡調査区出土遺物（1）

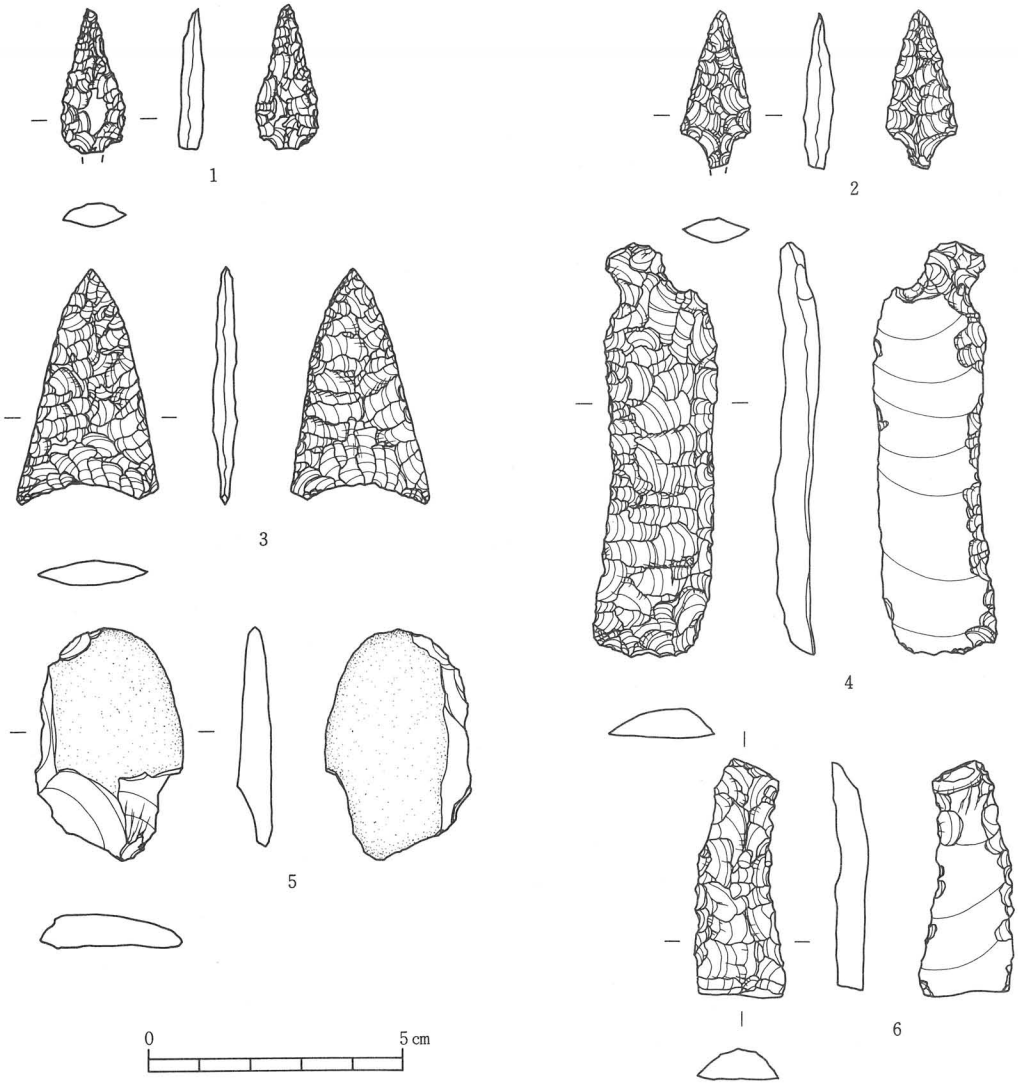


図 10、11　水田跡調査区出土遺物観察表

番　号	遺構 No	種　別	特　　徴	写真図版番号	番　号	遺構 No	種　別
10-1	8 トレンチ	陶磁器、皿	肥前、染付、見込蛇の目釉ハギ、18 世紀	46－1	10-6	AD-14 区	寛永通宝
10-2	28 トレンチ	〃	肥前、染付、17 世紀中葉？	46－3	10-7	〃	古銭
10-3	〃	陶磁器、皿か鉢	瀬戸美濃、鉄釉、17 世紀前～中葉	46－4	10-8	〃	〃
10-4	2 トレンチ	陶磁器、皿	肥前、染付、17～18 世紀	46－2	10-9	AH-2 区	〃
10-5	35 トレンチ	煙管	雁首・銅製	46－5			

番　号	地　区	層位	器　種	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重量(g)	石　材	写真図版番号	備　　考
11-1	27 トレンチ(東区水田)		石鏃III B 類	(2.8)	1.2	0.5	1.3	頁岩	45-1	
11-2			石鏃III B 類	(3.1)	1.45	0.6	1.6		45-2	
11-3	6 トレンチ	2 層	尖頭器	4.8	2.7	0.5	4.3	頁岩	45-3	
11-4	A0-8 区	1 層	石匙 I B 類	8.2	2.2	0.7	15.2	頁岩	45-4	
11-5	35 トレンチ		石製品	(4.5)	2.9	0.7			45-6	
11-6	7 トレンチ		石匙 I B 類？	(4.7)	1.7	0.5	5.3	頁岩	45-5	

図11　水田跡調査区出土遺物（2）

(4)近世土壙墓群

西区水田の水田域北側に接する AD12～14-AF12～14 区にかけて、土壙墓12基が検出された(図13)。改葬を受けていたため墓石などはなかった。

[1号墓] 規模は長軸105×短軸 100 cm、深さ 55 cm を計る。平面形は隅丸の方形である。埋土は 3 層に分けられる。底面はほぼ平坦であり、壁は底面から急な角度で立ち上がっている。50×50 cm の方形の木棺の底部が残存しており、棺底面にモミガラが入れられていた。

出土遺物としては、陶磁器椀・骨片がある。

[2号墓] 規模は長軸130×短軸 120 cm、深さ 55 cm を計る。平面形は不整円形である。埋土は 4 層に分けられる。底面はほぼ平坦で、径 55 cm 程の円形の木棺の底部が残存していた。

出土遺物としては、底面付近から寛永通宝 6 枚・煙管雁首・陶磁器片がある(図14-4．6～11)。

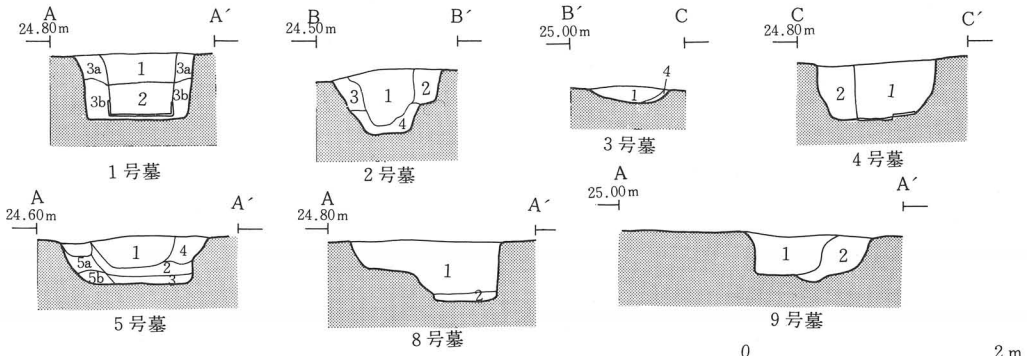
[3号墓] 規模は長軸80×短軸 60 cm、深さ 15 cm を計る。平面形は楕円形である。埋土は 2 層に分けられる。底面は舟底形である。

出土遺物としては、寛永通宝 6 枚がある (図14-12～16)。

[4号墓] 規模は長軸150×短軸 105 cm、深さ 45 cm を計る。平面形は長楕円形である。埋土は 2 層に分けられる。底面はほぼ平坦で、径 50 cm 程の円形の木棺の底部が残存していた。

出土遺物としては寛永通宝 6 枚・骨片がある (図14-17～22)。

[5号墓] 調査区東壁にかかって約1/2程度検出した。長軸110×短軸 45 cm 以上、深さ 40 cm を計る。平面形は方形を呈すると思われる。底面はほぼ平坦である。



土壙墓土層注記表

遺構No	層	土色	土性	備考	遺構No	層	土色	土性	備考	遺構No	層	土色	土性	備考
1号墓	1	黒褐色 10 YR2/2	シルト	10 YR5/6 混	3号墓	1	黒褐色 10 YR2/2	シルト		5号墓	1	黒色 10 YR2/1	シルト	
	2	10 YR2/2 ・10YR5/6	シルト			2	暗褐色 10 YR3/4	シルト			2	黄褐色 10 YR5/6	砂質シルト	10 YR2/2 混
	3 a	黒褐色 10 YR2/2	シルト	10 YR5/8 混	4号墓	1	黒褐色 10 YR2/2	シルト			3	10 YR5/6 ・10YR2/1	シルト	
	3 b	10 YR2/2 ・10YR5/8	シルト			2	10 YR2/2 ・10YR5/6	シルト			4	黒色 10 YR2/1	シルト	
2号墓	1	黒褐色 10 YR2/2	シルト		8号墓	1	にぶい黄褐色 10 YR4/3	砂礫層			5 a	黄褐色 10 YR5/6	砂質シルト	
	2	黄褐色 10 YR5/6	砂礫層	10 cm 大の礫混		2	黄褐色 2.5 Y5/3	砂			5 b	黒色 10 YR2/1	シルト	
	3	黒褐色 10 YR2/3	シルト		9号墓	1	褐色 10 YR4/4	シルト	礫混					
	4	10 YR5/6 ・10YR2/2	シルト			2	黒褐色 10 YR2/2	シルト	礫混					

図12 土壙墓セクション図

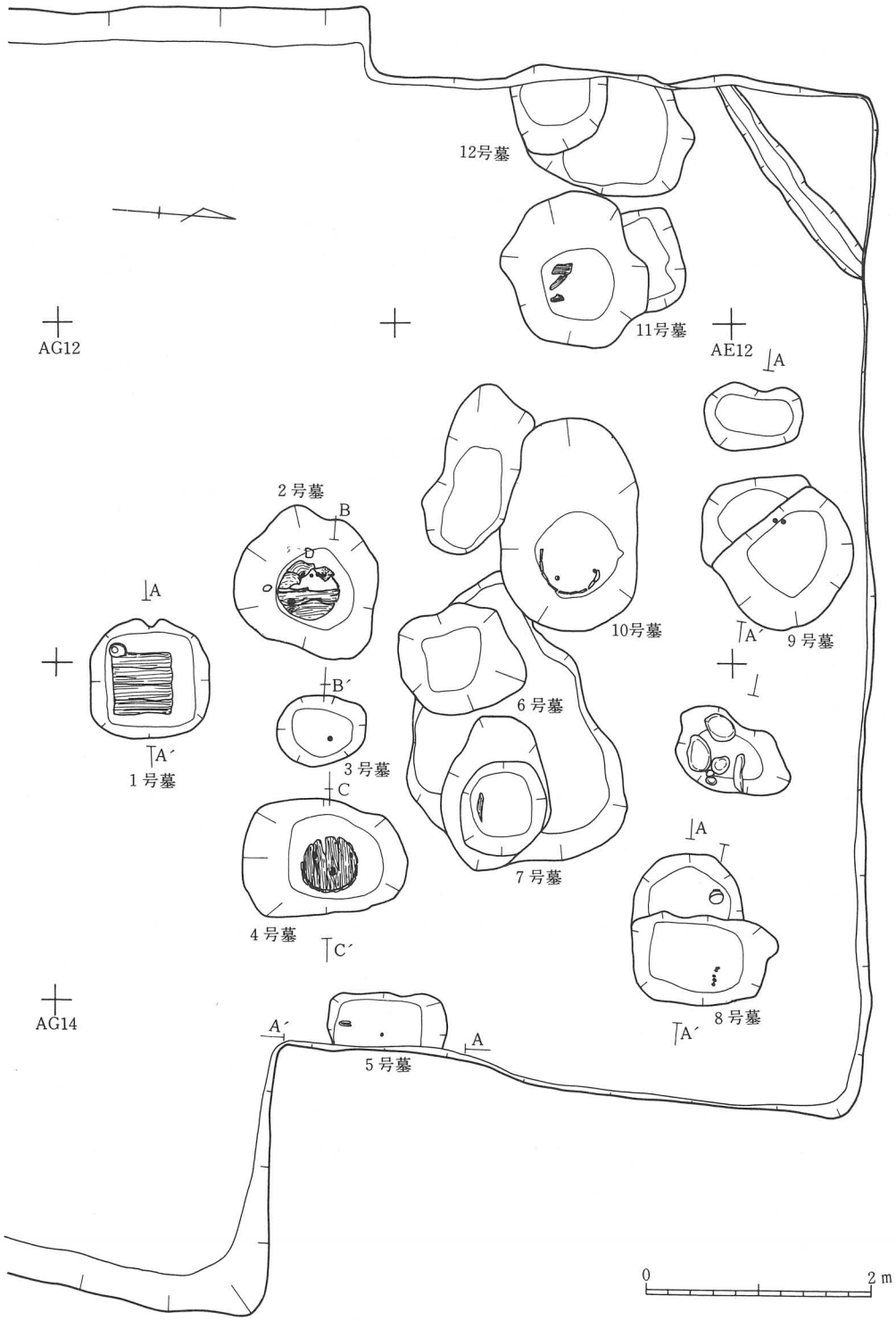


図13　近世土壙墓群（西区水田跡調査区）

出土遺物としては、寛永通宝４枚・骨片がある（図15-1～4）。

［６号墓］　規模は長軸110×短軸 100 cm、深さ 80 cm を計る。平面形は不整方形で、底面はほぼ平坦である。出土遺物はない。

［７号墓］　規模は長軸85×短軸 75 cm、深さ 45 cm を計る。平面形はほぼ円形である。底面はほぼ平坦で、木棺の材の一部が残存している。出土遺物はない。

［８号墓］　規模は長軸130×短軸 125 cm、深さ 47 cm を計る。平面形は隅丸方形である。埋土は２層に分けられる。底面はほぼ平坦で、壁は底面から急角度で立ち上がっている。出土遺物としては、底面付近から陶磁器椀・煙管吸口・櫛・玉（図14-1～3．5）・寛永通宝10枚（図15-6～13）がある。図14-1は仙台城三の丸跡・養種園遺跡に出土例のあるもので、淡青色の釉がかかり、胎土には白色砂粒が多い。産地は不明であるが18世紀前半のものと考えられている。

［９号墓］　規模は長軸120×短軸 100 cm、深さ 40 cm を計る。平面形は円形を呈するものと思われる。底面はほぼ平坦である。

出土遺物としては、寛永通宝６枚と布の一部があり、布に包まれて納められたものと考えられている。

［10号墓］　規模は長軸185×短軸 120 cm、深さ 80 cm を計る平面形は長楕円形である。底面はほぼ平坦で、円形の木棺の側板の一部が残存していた。

出土遺物としては寛永通宝７枚がある（図15-14～20）。

［11号墓］　規模は長軸140×短軸 110 cm、深さ 76 cm を計る。平面形は不整円形である。底面はほぼ平坦で、木棺の材の一部が残存している。出土遺物はない。

［12号墓］　調査区西壁にかかって1/2程度検出された。規模は長軸160×短軸 100 cm 以上、深さ 38 cm を計る。底面はほぼ平坦である。出土遺物はない。

「土壙墓群について」

墓壙は調査前に改葬されていたが、出土遺物をみると副葬品を伴う墓壙８基（１～５．８～10）と伴わない墓壙４基（６．７．11．12）に分けられる。副葬品を伴う墓壙のほとんどは、寛永通宝が出土している。木棺については、底部の残存していた３基には、方形のもの(1)と円形のもの（２．４）とがある。それ以外の墓壙については不明であるが、掘り方等からみて両方用いられていたようである。木棺の形態によって時期差があるかどうかについては不明である。

墓壙は調査区西側に隣接する寺島家のもので、当主の寺島清悦氏によれば改葬前墓石は11基あり、最古のものは江戸時代中期正徳年間（1711～1715）のものであったとのことで、墓壙群の時期についてもそれ以降のものと考えておきたい。

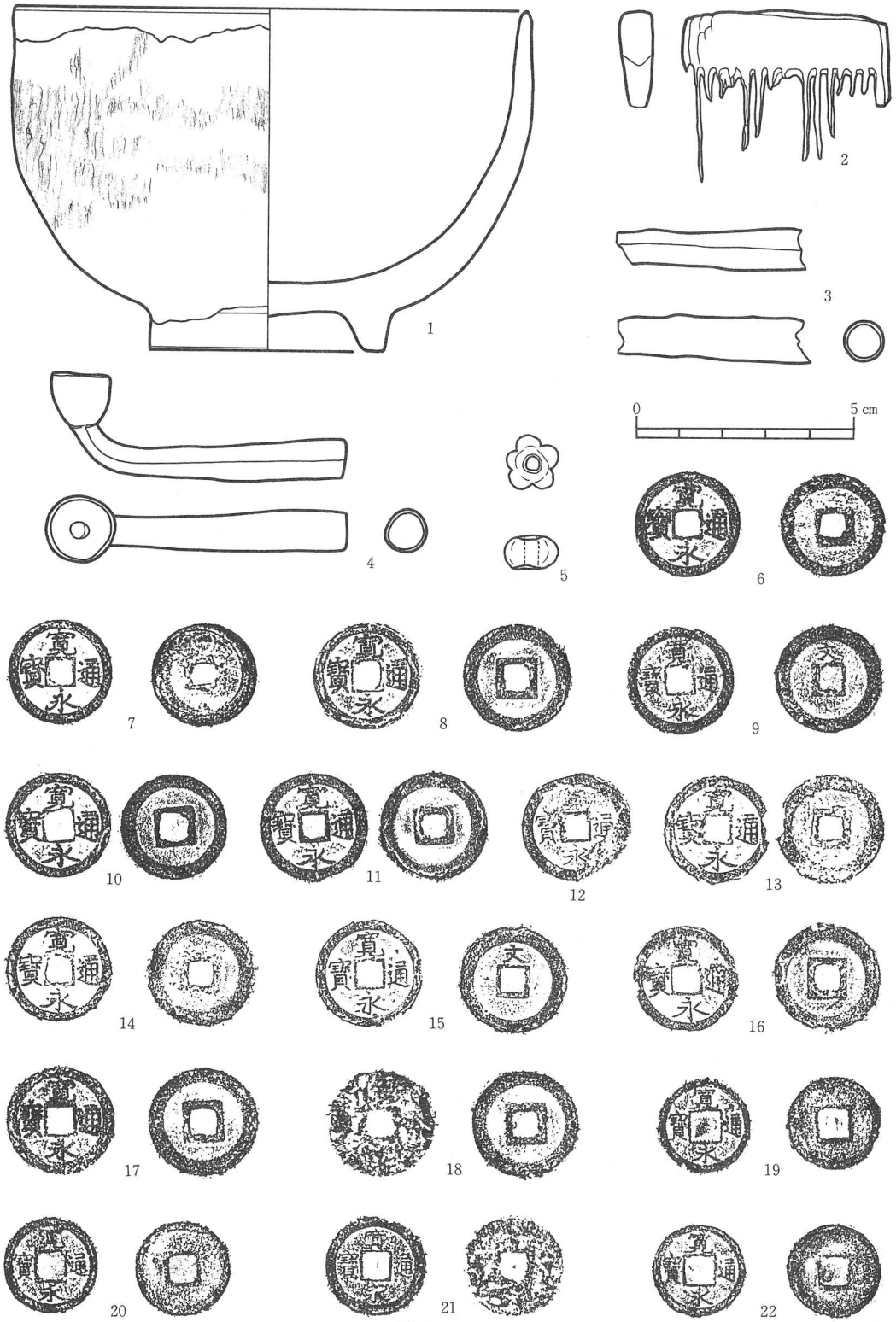
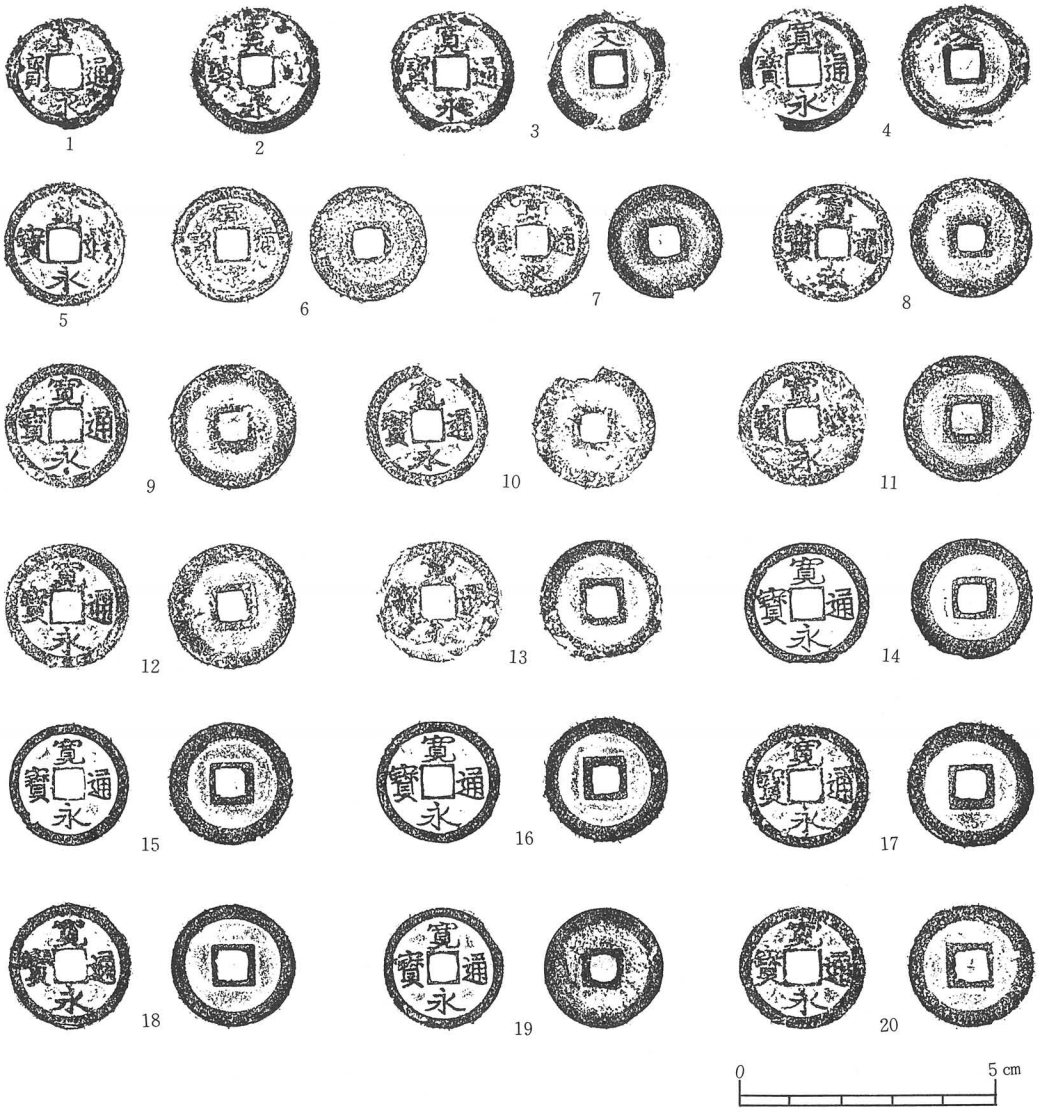


図14　土壙墓出土遺物（1）



土壙墓出土遺物観察表

No	遺構 No	種　別	特　　徴	写真図版番号
図 14－ 1	8 号墓	陶磁器・碗	淡青色の釉・体部下半及び高台内側は露胎・重ね焼目跡 3 点有・産地不明、18 世紀	46－10
図 14－ 2	〃	クシ		46－6
図 14－ 3	〃	煙管	雁首・銅製	46－8
図 14－ 4	2 号墓	〃	雁首・銅製	46－7
図 14－ 5	8 号墓	数珠玉	ガラス製	46－9

図　版　No	遺　構　No	種　別	図　版　No	遺　構　No	種　別
図 14－ 6～11	2 号墓	寛永通宝	図 15－ 1～4	5 号墓	寛永通宝
図 14－12～16	3 号墓	寛永通宝	図 15－ 5～13	8 号墓	寛永通宝
図 14－17～22	4 号墓	寛永通宝	図 15－14～20	10 号墓	寛永通宝

図15　土壙墓出土遺物（2）

4．道路跡調査区

調査対象区の西端部D･E区において、道路跡に伴うと考えられる遺構が検出されている。この地点は調査開始以前から調査区北端にある道路神社（道六神社）までの道路として利用されていた。（注１）地元では「丸田沢古道」と呼称されており、中世からの奥州街道であったとも伝えられている。小字名である「塚」には、最近まで塚が残っていたとのことで、これが「安永風土記－上谷刈村書上－」に記載のある一里塚であったとおもわれる。（注２）

江戸時代初期までの奥州街道は仙台城下から荒巻古街道－古堤－丸田沢－丸山峠を経て上谷刈村に入り、神社前を通って七北田川を渡り、本七北田－朴沢－宮床を経て黒川に向かっていたと考えられている。（注３）街道が付け替えられたのは元和九年（1623）とみられ、同年四月東方に移設された七北田宿に対し、諸役を免許し六斎市を立てることを許す石母田文書がのこっている。（注３）

今回の調査では、現道の直下にこの古街道の関連施設と考えられる溝跡を確認し、さらに神社前から七北田川に下りる「切り通し」遺構を検出している。調査面積は約780 m²である。

（注１）　（安永風土記－上谷刈村書上）

一、道六神社　　一、狼ノ川原　　一、勤請　誰勤請ト申儀并年月共相知不申候事

一、社地　竪八間　横七間　　一、社東向貳尺作

（注２）　（安永風土記－上谷刈村書上）

一、古塚　壹ツ狼ノ川原　　一、壹里塚

一、往古中山通七北田海道之節　相立候由ニ申傳候事

（注３）　（安永風土記－七北田村書上）

「元和年中本七北田ヨリ當所江驛場被相廻候事」

（石母田文書－元和九年四月の定）

「国分之内七北田当町被相立候付而　御印判之通役諸役成御免候一ケ月

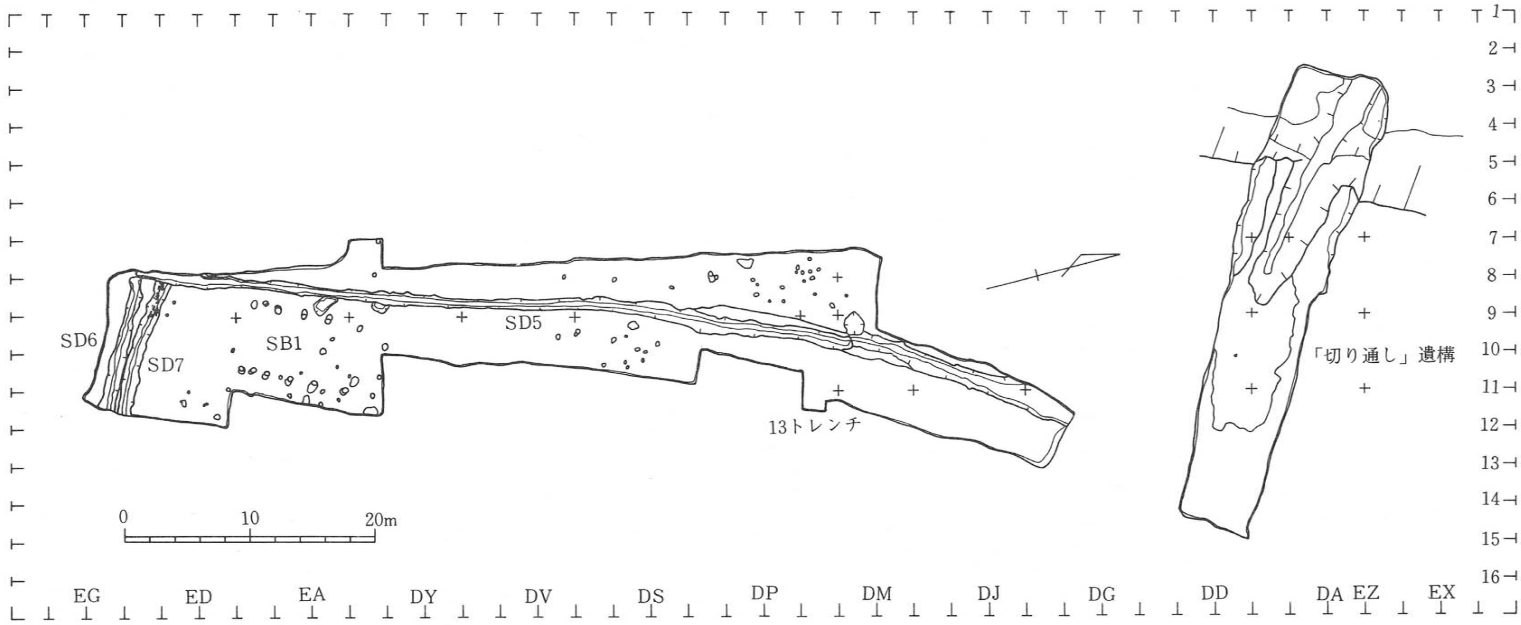
市之日　三月八日　十三日　十八日　廿三日　廿八日　右之通可相立者也」

(1)道路跡

道路跡西側の関連施設と考えられる溝跡SD5と、これに直交する溝跡2条SD6･7を確認した。道路跡の路面施設などは確認されず、規模についても東側での溝跡等の遺構検出がなかっ

土層注記表

遺構No	層	土　色	土　性	備　考	遺構No	層	土　色	土　性	備　考
基本層序	Ⅰa	黒褐色10 YR3/1	シルト		SD 5	1	黒褐色10 YR3/2	シルト	
	Ⅱa	黒褐色2.5 Y3/1	シルト	カーボン粒混入		2	暗褐色10 YR3/3	シルト	10 YR4/6が混じる
	Ⅱb	黒褐色10 YR3/2	シルト	10 YR4/6が若干混じる		3	黒褐色10 YR3/2	シルト	10 YR4/6・カーボン粒混じる
	Ⅱc	褐色10 YR4/4	シルト			4	暗褐色10 YR3/3	シルト	10 YR4/6が混じる
	Ⅲa	褐色10 YR4/6	シルト	2.5 Y3/1が混じる					



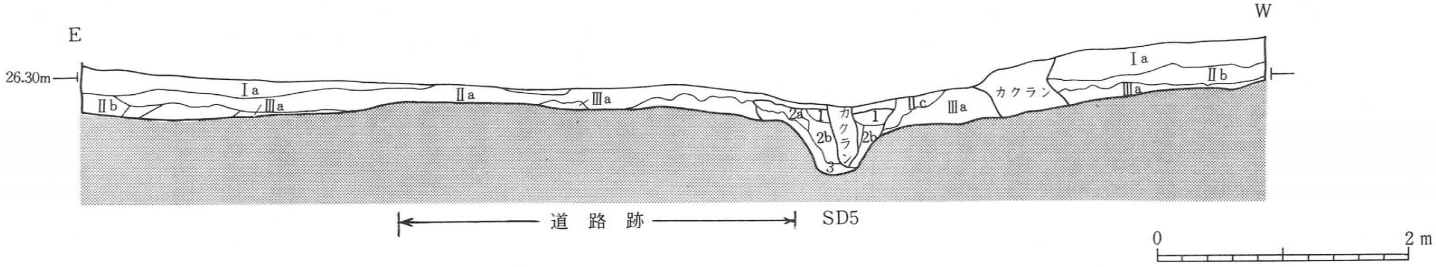


図16　道路跡調査区遺構配置図基本層序（89年13トレンチ南壁）

図17　道路跡南半調査区

たことから不明である。

〈SD5 溝跡〉（図16）

巾 50〜70 cm、深さ 20〜45 cm の素掘の溝跡で、側溝としての機能を有していたと考えられる。底面の形状は、南部では逆台形状を呈し北部では巾の広い U 字状を呈している。底面のレベルは北に向かって傾斜している。

〈SD6 溝跡〉（図17）

SD5 の南端に接して東に延びる溝跡である。巾 50〜120 cm、深さは約 5 cm と浅く底面のレベルはほぼ平坦である。

〈SD7 溝跡〉（図17）

SD6 とほぼ並行して走り、SD5 と重複している。巾 100〜150 cm、深さ 15 cm 程度で、底面の形状はレンズ状を呈している。東に向かってゆるく傾斜しており、東西のレベル差は約 10 cm である。西側の埋土上面部分で長さ 3 m にわたって 10〜20 cm 大の礫の集中がみられた。何らかの道路跡に関係する施設とも考えられる。

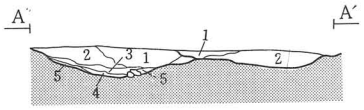


図 18　SD 6・7　溝跡土層注記表

遺構 No	層	土　色	土性	備　考	遺構 No	層	土　色	土性	備　考
SD 6	1	暗褐色 10 YR3/3	シルト	10 YR4/2 が混じる	SD 7	3	黒褐色 10 YR3/2	シルト	
	2	黒褐色 10 YR3/2	シルト			4	黒褐色 10 YR3/2	シルト	10 YR4/2 が混じる
SD 7	1	10YR3/3・10YR5/6	シルト			5	黄褐色 10 YR5/6	シルト	10 YR3/3 が混じる
	2	暗褐色 10 YR3/3	シルト	10 YR5/6 が混じる					

図18　SD 6・7 溝跡セクション図

(2)「切り通し」遺構

道路跡は、神社前で西にほぼ直角に折れて七北田川に向かっている。ここで段丘面を一段下りるかたちとなり、段丘崖に作られた切り通し遺構を検出している。

砂岩質の岩盤を切って構築されており、道幅はここで極端に狭くなる。切り通しは二段構造になっており、一段目は、上端部で最大幅 9 m、下端で 7.5 m を計る。二段目は、上端部で幅 2〜5 m、下端で 50〜100 cm を計る。傾斜は、4 m/15 m 程度とかなり急に下っている。(図19)。

(3)その他の遺構

調査区南側で、掘立柱建物跡 1 棟を含むピット群・土坑 3 基を検出した。いずれも出土遺物がなく、時期などは不明であるが道路跡以前に構築されたものと考える。

図 17　SB-1 掘立柱建物跡柱穴土層注記表

遺構 No	層	土　色	土　性	備　考	遺構 No	層	土　色	土　性	備　考
P−5	1	黒褐色 10 YR2/2	シルト	10 YR4/3 が混じる	P−12	1	黒褐色 10 YR2/2	シルト	10 YR4/3・カーボン粒が混じる
P−7	1	10 YR3/2・10YR5/6	シルト	10 YR4/3 が混じる	P−18	1	10 YR5/6・10YR3/2	シルト	カーボン粒が混じる
P−10	1	黒褐色 10 YR2/2		10 YR4/3・カーボン粒が混じる	P−24	1	黒褐色 10 YR2/2	シルト	カーボン粒が混じる
	2	10 YR2/2・10YR5/6				2	10 YR2/2・10YR5/6	シルト	

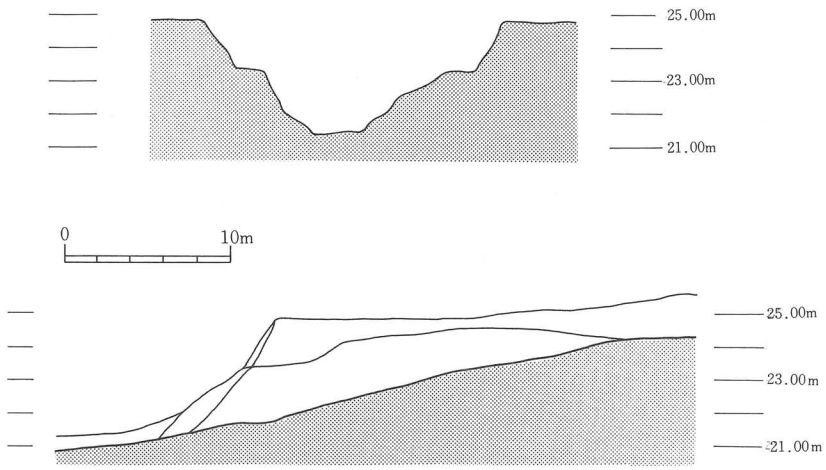


図19 「切り通し」遺構縦横断図

① SB-1 掘立柱建物跡（図17）

東西の桁行四間、総長 4.2 m(柱間寸法 90～120 cm、平均 100 cm)、南北の梁行一間、総長 2.6 m (柱間寸法 260 cm) の南北棟の建物である。建物の方向は東側柱列で N-28°-E である。柱穴は径 20～30 cm のほぼ円形のもので深さは 40～60 cm ほどある。抜き取り痕がみられる。

SB-1 以外にも柱列を構成するピットも考えられるが、規模の違いなどもあり可能性の域をでない。

② SK4 土坑（図17）

SD5 に西壁部分を切られている。長軸200×短軸 100 cm、深さは 25 cm で方形を呈する。埋土は 3 層に分けられる。

SK-4　土坑　土層注記表

遺構 No	層	土　色	土性	備　　考
SK-4	1	黒褐色 10 YR2/2	シルト	10YR5/6・カーボン粒混じる
	2	黒褐色 10 YR2/3	シルト	10 YR5/6 混じる
	3	黄褐色 10 YR5/6	粘質シルト	10 YR2/2 混じる

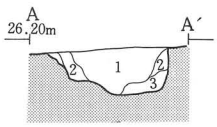


図20　ＳＫ４土坑セクション図

③ SK5 土坑（図17）

SD5 に西壁部分を切られている。長軸140×短軸 100 cm、深さは 30 cm で不整の円形を呈する。埋土は黒褐色10YR3/2 シルトの単層である。

④ SK6 土坑（図17）

調査区東壁にかかり1/2程度検出された。長軸 110 cm、深さは 10 cm で隅丸の方形を呈する。埋土は黒褐色10YR3/2 シルトの単層で、カーボン粒が若干入っていた。

5．縄文時代遺物包含層

確認調査によって、遺物包含層が検出された40トレンチを中心として東側の41トレンチまでの範囲の拡張をおこない、包含層全体を検出した。調査面積は約 2,500 m²である。

(1)基本層序

調査区の現況の地形は、北から南方向へ緩やかに傾斜する平坦地で、堆積土は 4 層に分層することができた。

1 層　層厚 20～30 cm 程度。暗褐色シルト10YR3/3 層。現在の畑の耕作土である。

2 層　層厚 10 cm 程度。黒色シルト10YR2/1 層。遺物包含層であり、調査区ほぼ中央部にみられる。

3 層　層厚 10 cm 程度。黒褐色シルト10YR2/2 層。遺物包含層。

4 層　層厚 5～10 cm 程度。暗褐色シルト10YR4/3 層。

5 層　地山面。黄褐色シルト10YR5/6 層。遺構確認面である。

(2)発見された遺構と遺物

今回の調査の結果、竪穴住居跡や土坑・溝跡・遺物包含層等の遺構と、縄文土器・石器・石製品などの遺物が発見された。

竪穴住居跡は、調査区南東部から南西部にかけて並ぶように 8 軒検出されている。土坑は調査区のほぼ全域にみられるが、竪穴住居跡の周辺に多く分布する傾向がある。遺物包含層は、調査区のほぼ中央部で北から南方向にゆるく傾斜する部分に形成されている。

①竪穴住居跡

竪穴住居跡は 8 軒確認されている。いずれも土器埋設石囲部、敷石石組部、掘り込み部からなる複式炉をもっていた。平面形は円形を基調とするものが多い。住居跡について重複関係はない。

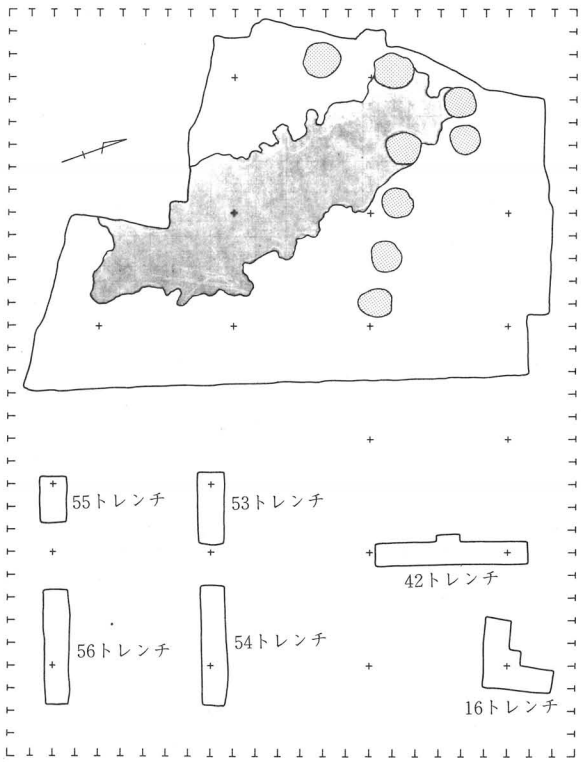


図21　包含層地区トレンチ配置図

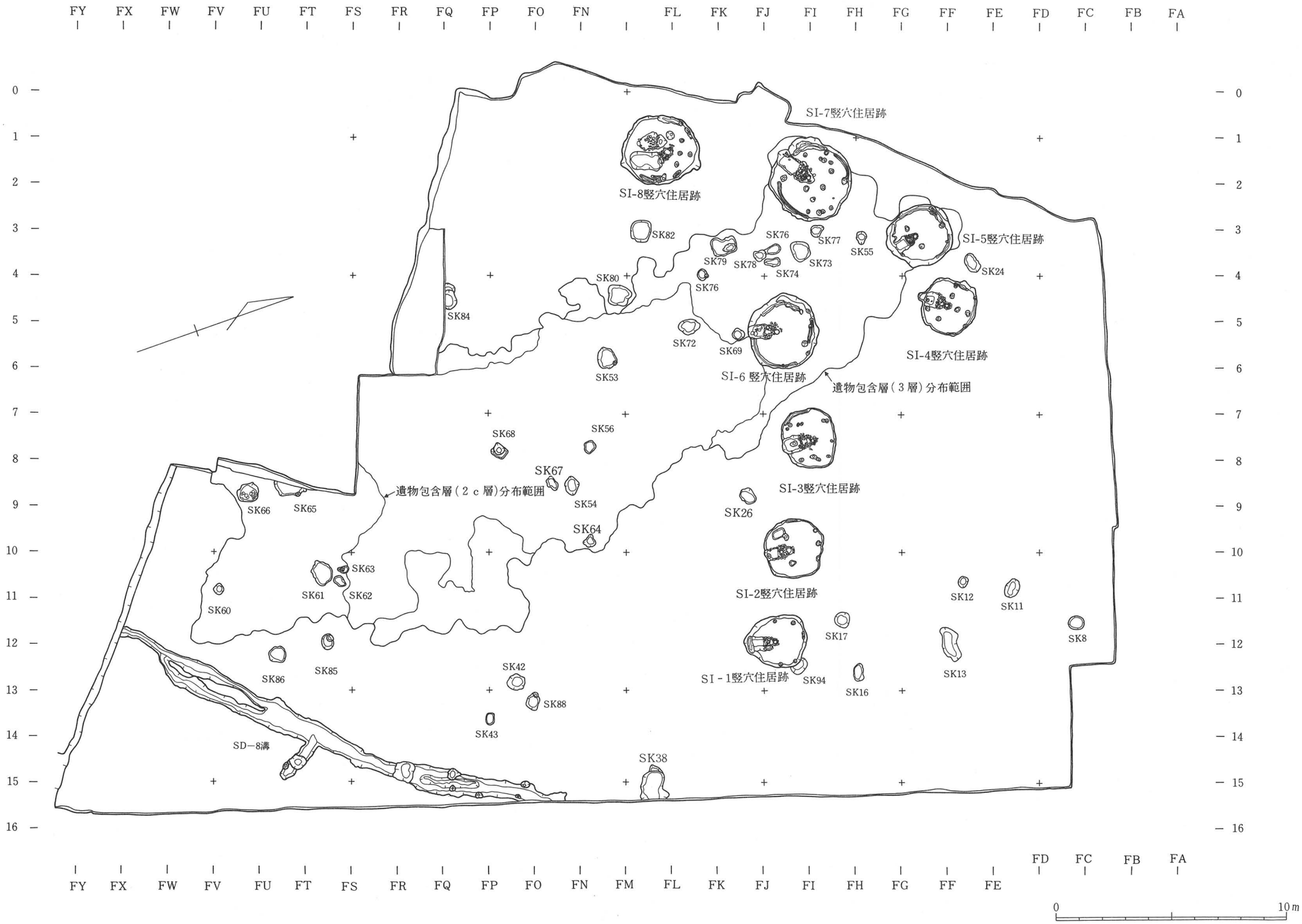


図22　包含層地区遺構配置図

SI-1 竪穴住居跡

［遺構確認］　FJ-12. 13 区に位置し、5 層上面で検出された。SK94 土坑を切って構築されている。

［規模・平面形］　長軸 4.20 m、短軸 3.40 m、楕円形で南壁部分がわずかに張り出している。

［埋土］　4 層に大別される。いずれも自然堆積である。

［壁］　15～25 cm 残存している。床面から急な角度で立ち上がっている。

［床面］　若干の凹凸はみられるが、床面レベルはほぼ一定である。

［柱穴］　住居跡内から、4 個のピットが検出された。いずれも掘り方のみで柱痕跡は認められなかった。4 個のピットは炉の長軸線上からほぼ対象となる位置にある。この 4 本を結ぶ線は長方形状となり、4 本主柱の構造になると思われる。

［その他の施設］　周溝その他の施設は検出されなかった。

炉

［位置・方位］　住居跡南東部に位置しており、掘り込みの端は住居の壁の一部となっている。炉の長軸方向は、N-13°-E である。

［規模・平面形］　最大長 225 cm、最大幅 110 cm のダルマ形である。

［構造］　土器埋設石囲部、敷石石組部、掘り込み部からなる複式炉である。

〈土器埋設石囲部〉　長さ 35 cm、幅 45 cm である。径 25 cm の埋設土器が残存し、土器の周囲に 10 cm 大の礫を二重ないし三重に巡らしている。埋設土器は底部を欠いているが、土器内の埋土下部に炭化物が多量に入っていた。

〈敷石石組部〉　長さ 65 cm、幅 100 cm である。床面から敷石底部面までの深さは約 25 cm である。底面には 10 cm 大の礫が数個みられるだけである。奥壁部分には長さ 35 cm 程の偏平な石を据えている。側壁部分には 10～20 cm 大の石を三段に積み上げている。敷石石組部と掘り込み部の境の部分には 20 cm 大の偏平な石がおかれている。奥壁及び側壁の石には火熱により赤変しているものが多い。

〈掘り込み部〉　長さ 100 cm、幅 110 cm の方形である。床面から掘り込み部底面までの深さ 15 cm である。底辺はほぼ平坦で、両側壁には石は置かれていない。

出土遺物

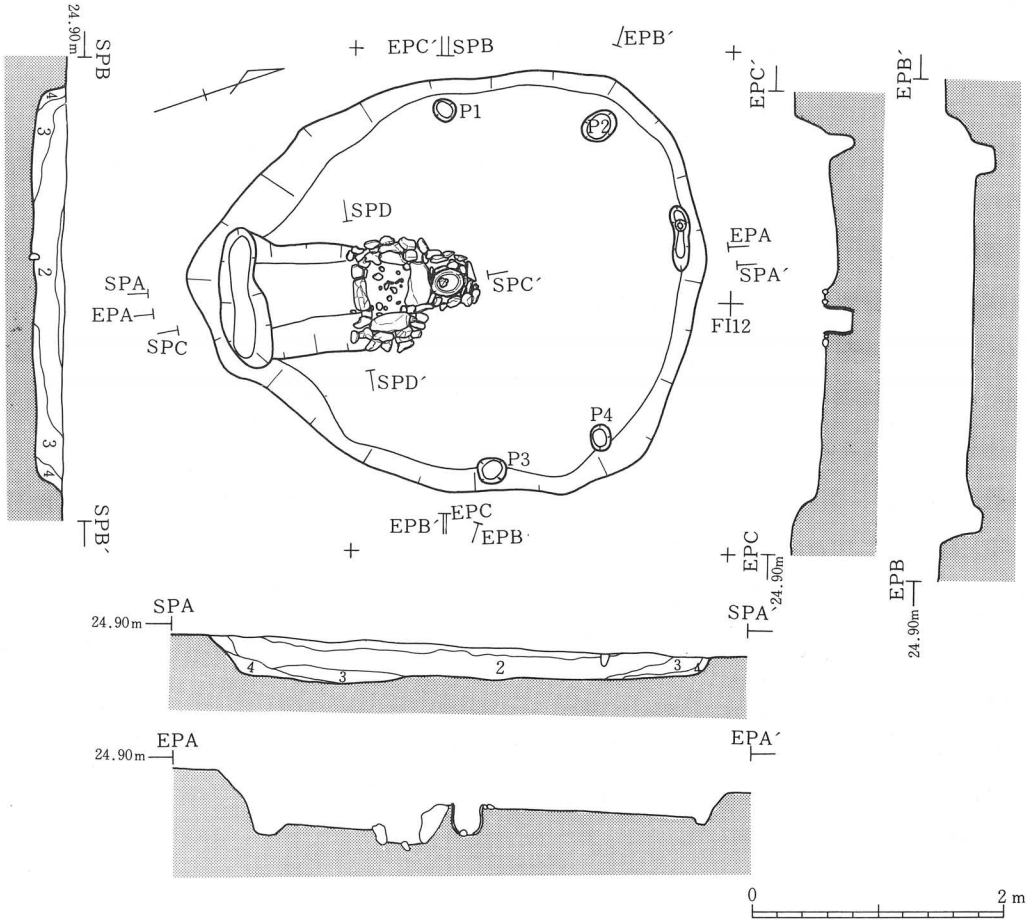
「土器」

（図25・26）図25-1は炉埋設土器で胴下半部を欠いている。胴部が丸みをもって立ち上がり

SI－1　住居跡ピット集計表

No	1	2	3	4
形状	円形	楕円形	円形	楕円形
深さ (cm)	23	20	18	21

胴上部でくびれ口縁部が外湾する深鉢である。沈線によって「〇」字状に区画され無節Ｌが充塡されている。「〇」字文は３単位描かれており、単位文様間の間隔のあく部分に「∫」字状の文様が入れられている。２～５はＢ群の土器である。このうち５は１と同様の器形のもので、丸みをもった胴部が胴上部でわずかにくびれ、口縁部が外湾し全面に縄文が施文されている。図26-1～3は口縁部資料である。１は口縁部が内湾して波状を呈するもので、区画沈線内に縄文が充塡されている。２は口縁部が外湾し、沈隆線によって無文帯と縄文帯を区画している。３も口縁部が外湾し、沈線によって巾の広い無文帯と縄文帯を区画している。５は胴上部がくびれ口縁部が外湾する器形のもので、２と同様沈隆線によって区画している。４・６は胴部資料で沈線によって区画している。

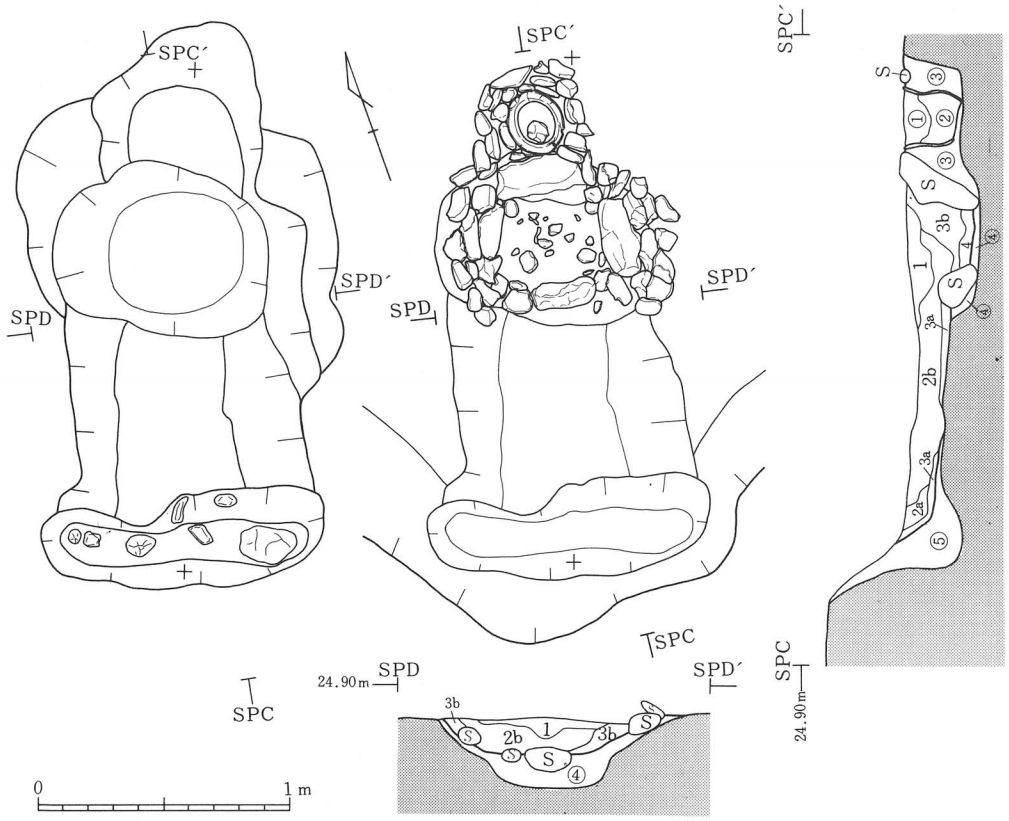


SI-1 住居跡土層注記表

	層	土　色	土　性	備　　考
SI-1 埋土	1	黒色 10 YR2/1	シルト	
	2	黒褐色 10 YR2/3	シルト	1～2 mm 大の小礫多量にまじる。カーボン粒子混入
	3	黒褐色 10 YR2/2	シルト	小礫まじり、カーボン粒子混入
	4	暗褐色 10 YR3/4	砂質シルト	褐色 10 YR4/4 砂まじり、小礫まじり

図23　ＳＩ－１竪穴住居跡

「石器」（図27・28）石鏃１点、石匙１点、磨製石斧１点、不定形石器２点、礫石器２点が出土している。石鏃：図27-1は基部が平基で側縁が外湾し厚みがある。　磨製石斧：図28-1は磨製石斧の基部で、横断面は上下にふくらんだ長方形を呈する。石匙：２は縦長の石匙で、二縁辺構成の身部となっている。磨凹石：４は磨凹石で、両面に磨面があり片面に浅い凹みをもっている。５は磨石で片面に磨面をもっている。



SI－１　炉跡土層注記表

	層	土　色	土　性	備　考		層	土　色	土　性	備　考
炉埋土	1	黒褐色 10 YR3/1	シルト	カーボン粒混	埋設土器埋土	①	黒褐色 10 YR3/1	シルト	カーボン粒混
	2a	黒褐色 10 YR2/3	〃			②	黒色 10 YR2/1		カーボン粒多量混
	2b	黒褐色 10 YR2/2	〃	カーボン粒混	炉掘り方	③	黒褐色 10 YR3/2	砂質シルト	
	3a	黒褐色 10 YR3/2	砂質シルト			④	暗褐色 7.5 YR3/3	〃	
	3b	黒褐色 2.5 YR3/1	シルト	カーボン粒混		⑤	暗褐色 7.5 YR3/3	〃	
	4	黒色 10 YR2/1	〃	カーボン粒混					

図24　ＳＩ-１ 竪穴住居炉跡

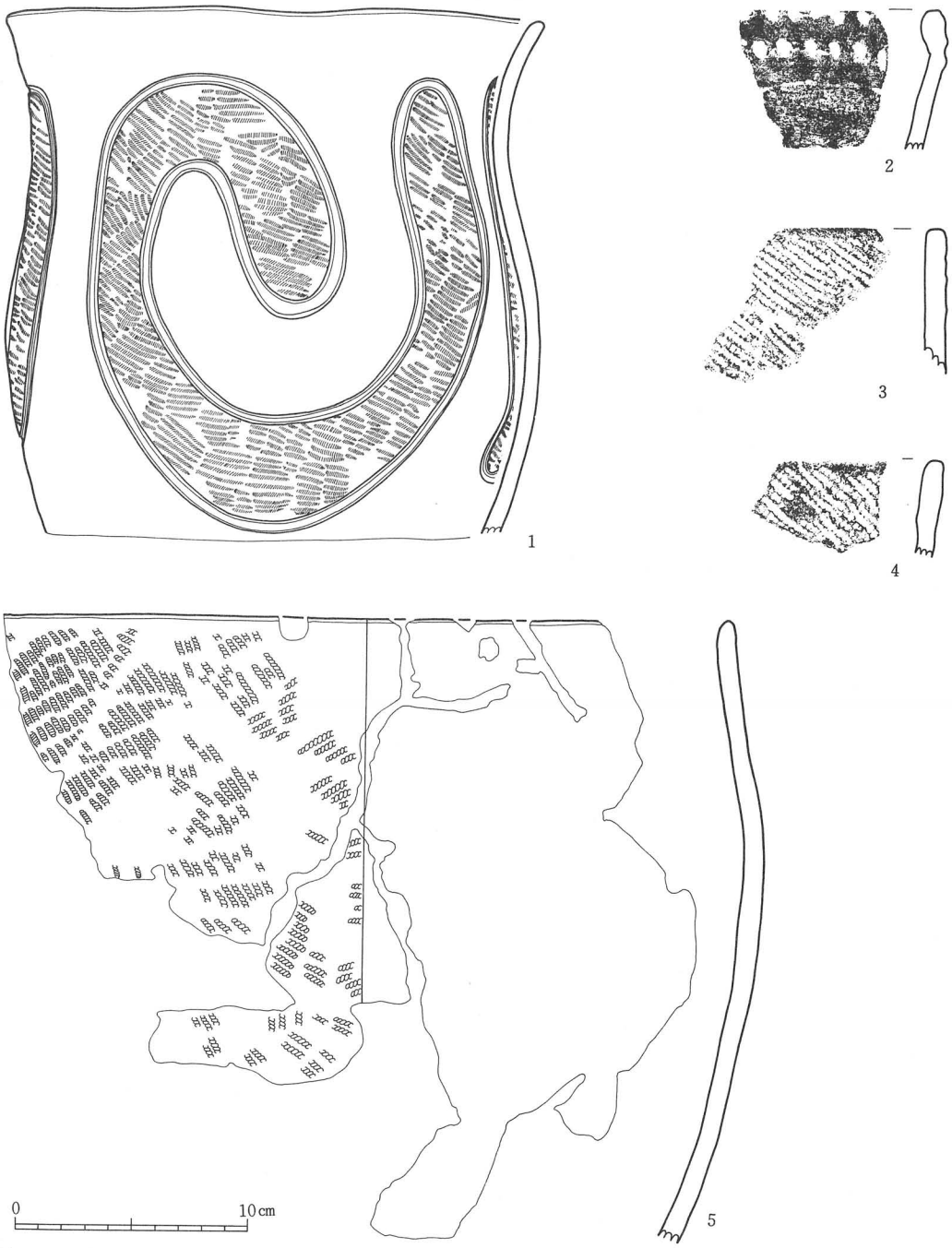


図 25 SI-1 竪穴住居跡出土土器観察表

番号	地区	層	器形	分類	特徴	写真図版番号	番号	地区	層	器形	分類	特徴	写真図版番号
1	炉埋設		深鉢	II類	「c」字状文、無節L	20−1	4	A区	1	深鉢	B群	LR縄文	20−4
2		2	〃	II類	降線刻目	20−2	5	P-7		〃	B群	LR縄文	20−6
3	P-8	2	〃	B群	LR縄文	20−3							

図25　SI-1 竪穴住居跡出土土器（1）

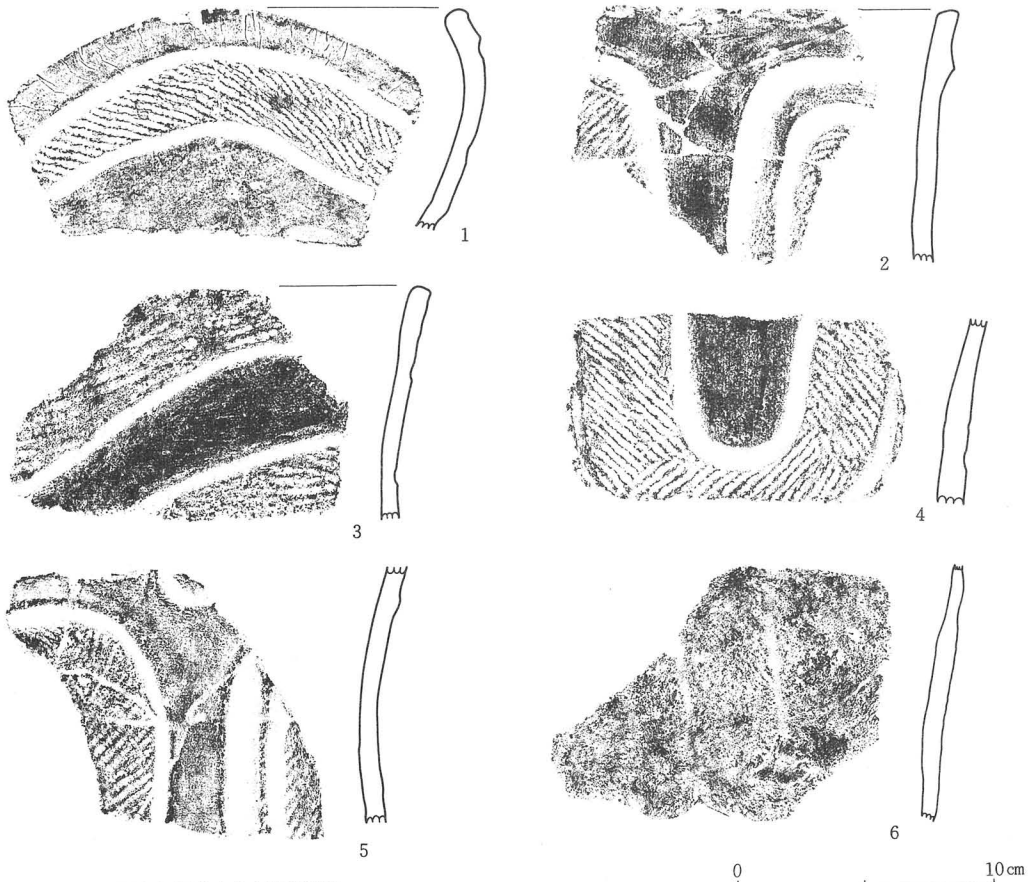


図 26　SI-Ⅰ竪穴住居跡出土土器観察表

番号	地　区	層	器　形	分　類	特　　徴	写真図版番号	番号	地　区	層	器　形	分　類	特　　徴	写真図版番号
1	P-5	2	深鉢	II群	区画沈線、波状口縁 RLR 縄文	20－5	4	P-2	2下	深鉢	II群	区画沈線	20－8
2	P-9	1上	〃	〃	区画沈隆線、RL 縄文	20－10	5	P-4	2上	〃	〃	区画沈隆線、LR 縄文	20－9
3	P-2	2下	〃	〃	区画沈線	20－7	6	P-3		〃	〃	区画沈線	20－11

図26　ＳＩ－１竪穴住居跡出土土器（２）

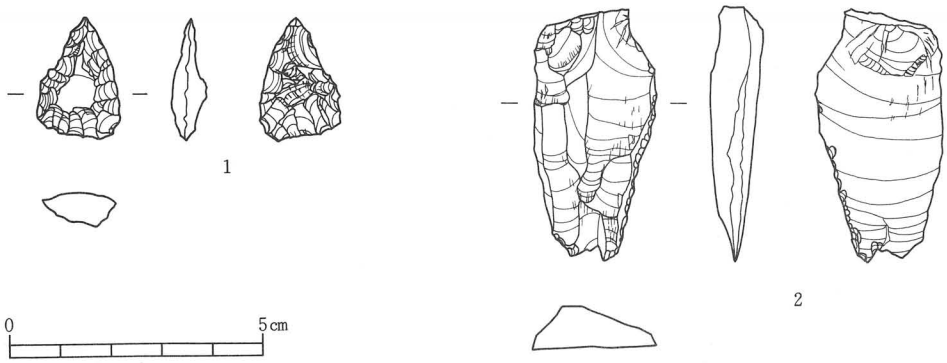


図 27　SI-1 竪穴住居跡出土石器観察表

番号	地　区	層位	器　　種	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重量(g)	石　材	写真図版番号	備　考
27-1	ピット１内		石鏃II A 類	2.4	1.7	0.8	1.8	頁岩	38－1	
27-2	A 区	2層	不定形石器C類	5.0	2.4	1.0	10.1	頁岩	38－2	

図27　ＳＩ－１竪穴住居跡出土石器（１）

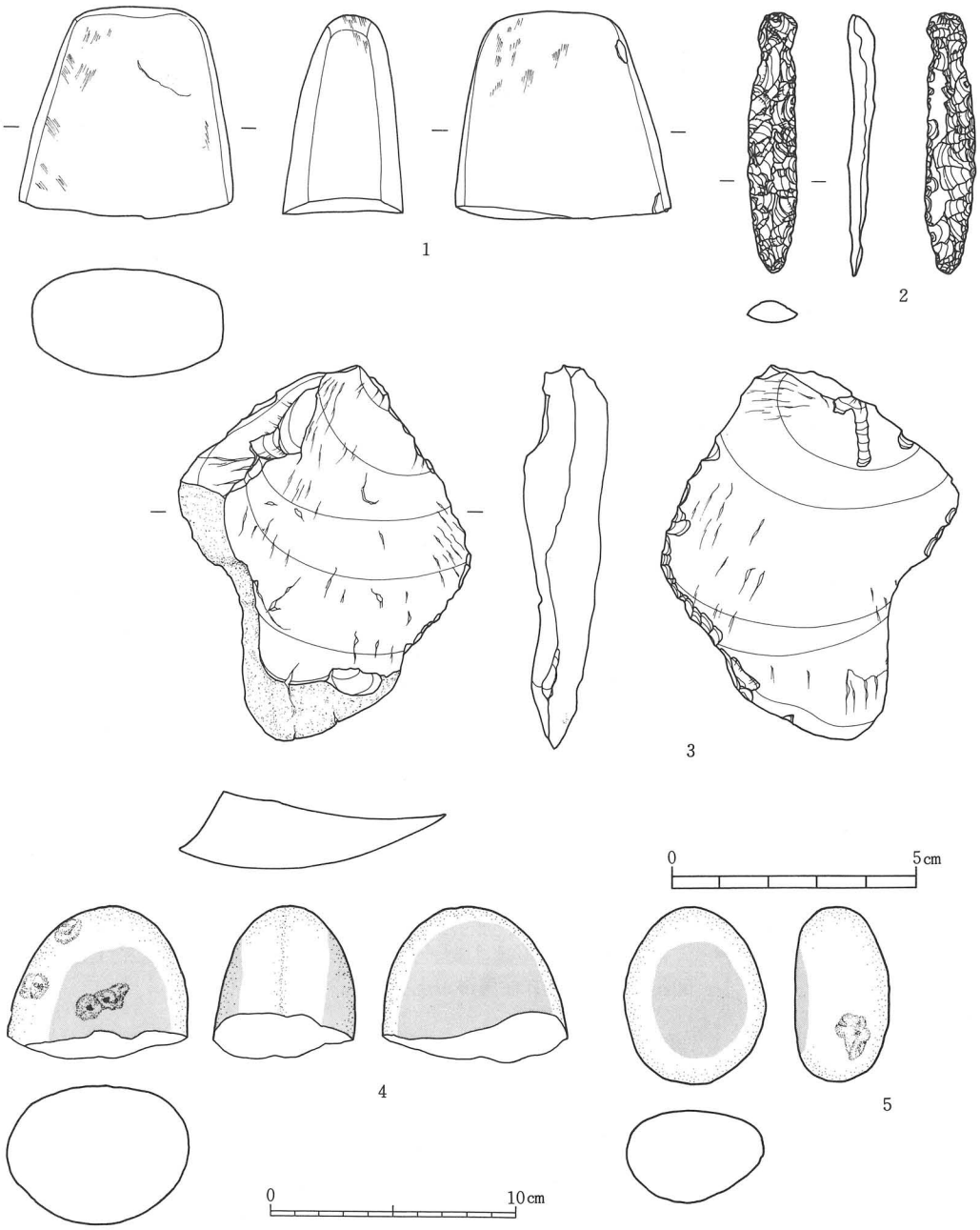


図 28　SI-１竪穴住居跡出土石器観察表

番号	地　区	層位	器　　種	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重量(g)	石　材	写真図版番号	備　考
28-1			磨製石斧	(4.4)	4.5	2.5	71.9		38－4	
28-2		S-4	石匙ＩＡ類	5.4	1.0	0.6	2.9	頁岩	38－3	
28-3			不定形石器Ｃ類	7.8	5.6	1.8	51.2		38－5	
番号	地　区	層位	器　　種	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重量(g)	石　材	使　用　痕	写真図版番号
28-4	Ｃ区	２層	磨凹石	74	59	42	200		磨-両面凹-片面	41－1
28-5	Ｃ区	２層	磨石	(63)	74	58	370		磨－片面	41－2

図28　ＳＩ-１竪穴住居跡出土石器（２）

SI-2 竪穴住居跡

［遺構確認］　FJ-11 区に位置し、5 層上面で検出された。

［規模・平面形］　長軸 3.90 m、短軸 3.90 m、ほぼ円形である。

［埋土］　6 層に大別される。いずれも自然堆積である。

［壁］　15～25 cm 程度残存している。床面から急な角度で立ち上がっている。

［床面］　若干の凹凸はみられるが、床面レベルはほぼ一定である。

［柱穴］　住居跡内から、15個のピットが検出された。いずれも掘り方のみで柱痕跡は認められなかった。P5・P6 は炉の長軸線上にあり、P1～P4 は長軸線上からほぼ対象となる位置にある。このうち P2・P3・P5 の 3 個のピットを結んだ線は二等辺三角形状を呈し主柱穴と考えられる。P4 も位置関係からその可能性も考えられるが、P1・P4・P6 については、補助的な柱としての機能が考えられる。

［その他の施設］　炉の北側長軸線上で焼土を検出している。また、炉の西側で土坑 1 基を検出した。長軸 90 cm、短軸 65 cm、深さは 10 cm 程で不整の方形を呈する。

炉

［位置・方位］　住居跡南部に位置しており、掘り込みの端は住居壁の一部になっている。炉の長軸方向は N-9°-E である。

［規模・平面形］　最大長 195 cm、最大幅 80 cm の長方形である。

［構造］　土器埋設石囲部、敷石石組部、掘り込み部からなる複式炉である。

〈土器埋設石囲部〉　長さ 40 cm、幅 50 cm である。埋設土器は残存しておらず石組も西側に残る程度である。

〈敷石石組部〉　長さ 65 cm、幅 80 cm である。床面から敷石底部までの深さは約 20 cm である。底面の石のうえに奥壁および側壁部の石がのっている。炉石は 10～20 cm 大の石が用いられており、火熱により赤変しているものが多い。敷石石組部と掘り込み部の境の部分に敷かれていたと考えられる石が崩れて石組部に落ち込んでいる。

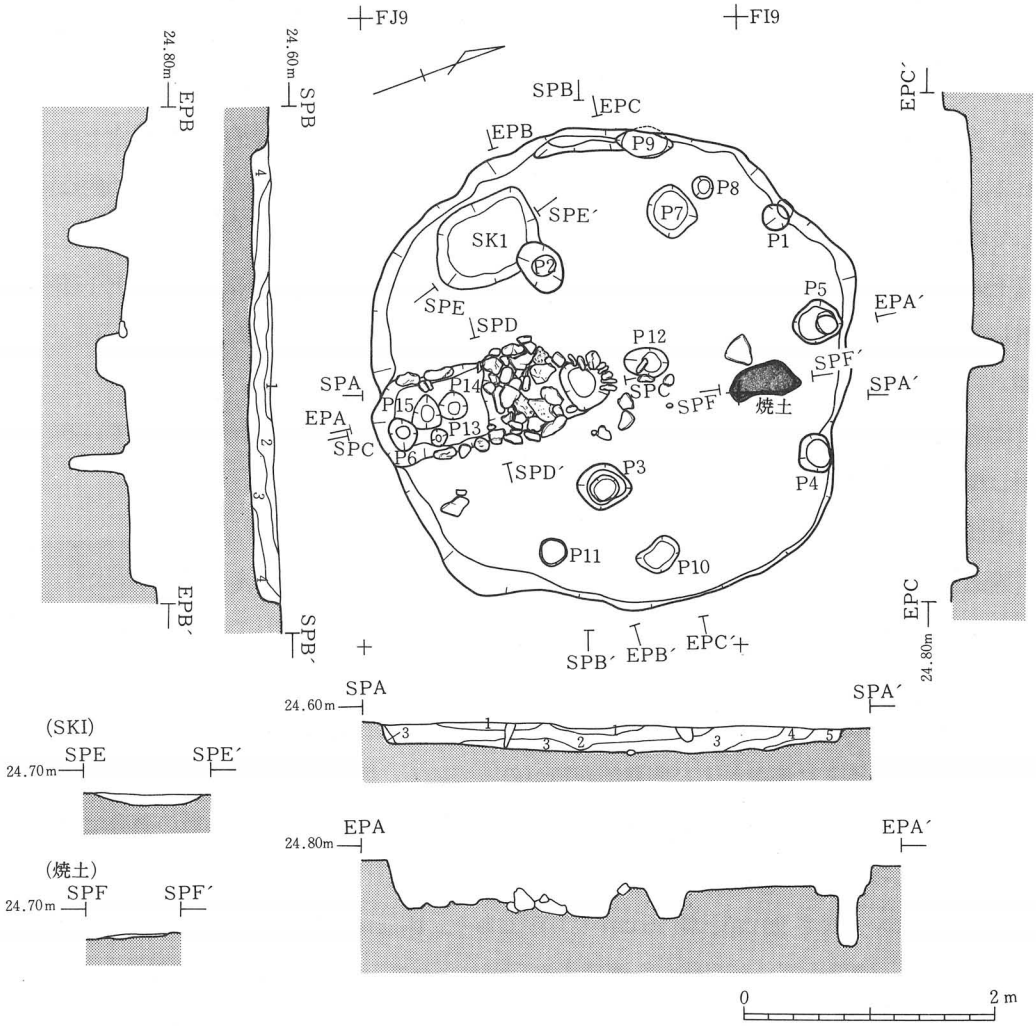
〈掘り込み部〉　長さ 90 cm、幅 75 cm の方形である。床面から掘り込み部底面までの深さは 15 cm である。側壁上部に石組部から連続する石がおかれている。底面はほぼ平坦で、ピット 3 基を検出している。

SI-2　住居跡土層注記表

	層	土　色	土　性	備　　考
SI-2 埋土	1	黒色 10 YR2/1	シルト	
	2	暗褐色 10 YR3/3	シルト	黒褐色 10 YR2/2 が小ブロック状に入る 1～2 mm 大の小礫まじり、カーボン粒子混入
	3	暗褐色 10 YR3/3	シルト	1～2 mm 大の小礫普遍的にまじる。カーボン粒子混入
	4	黒褐色 10 YR2/2	シルト	カーボン粒子混入
	5	黒褐色 10 YR2/2	シルト	褐色 10 YR4/4 がブロック状に入る
土坑埋土	1	黒褐色 10 YR2/2	砂質シルト	礫まじり

出土遺物

「土器」(図31)　1～3は口縁部が外湾して波状を呈するもので、沈線によって無文帯と縄文帯が区画されている。4も緩やかな波状を呈する口縁部が外湾し、沈隆線によって区画されている。6は口縁部がやや外湾し、沈線によって区画されている。7～9は胴部資料で沈線によって区画されている。

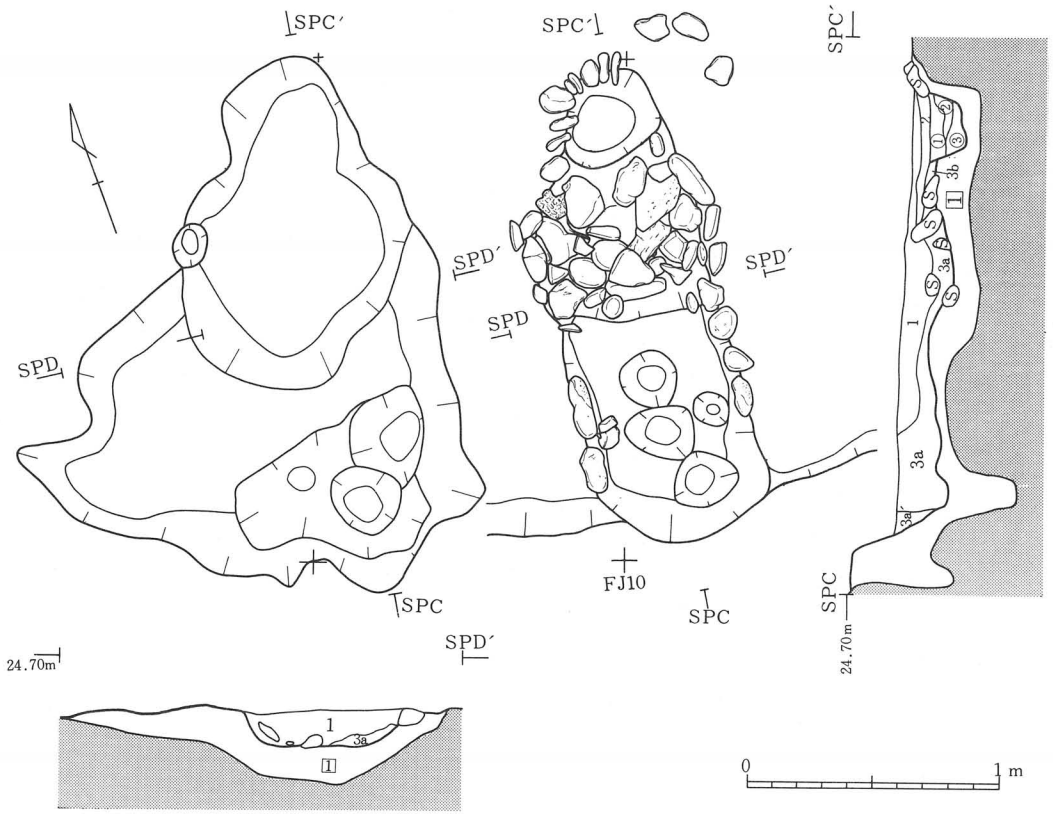


SI-2　住居跡ピット集計表

No	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
形状	円形	楕円形	円形	円形	円形	楕円形	隅丸方形	円形	長楕円形	方形
深さ(cm)	42	67	66	49	61	21	9	6	33	4
No	11	12	13	14	15					
形状	円形	楕円形	円形	円形	不整円形					
深さ(cm)	16	25	18	5	4					

図29　SI-2 竪穴住居跡

「石器」(図32・33)　不定形石器４点、礫石器５点が出土している。図32-1は不定形石器で、両側辺加工の刃部をもち突端部が作り出されている。２～４には顕著な二次加工はみられない。図33-1．2は凹石で、深い凹部を１は両面に２は片面にもっている。３．４は磨石で、磨面を３は二面に４は片面にもっている。５は敲石で長軸の一端に敲打面をもっている。



SI-2 住居炉跡土層注記表

	層	土　色	土　性	備　　考
炉埋土	1	黒褐色 10 YR3/2	シルト	黒褐色 10 YR2/2 が斑状にまじる。小砂粒含有
	2	黒褐色 10 YR2/2	シルト	小砂粒含有、カーボン粒子わずかに含有
	3 a	黒褐色 10 YR2/2	シルト	小砂粒含有、カーボン粒子わずかに含有
	3 a′	暗褐色 10 YR3/3	砂質シルト	
	3 b	黒褐色 10 YR3/2	砂質シルト	①層よりも明るい
土器埋設部埋土	①	黒褐色 10 YR3/2	シルト	カーボン粒子若干
	②	黒褐色 10 YR2/3	シルト	カーボン粒子若干
	③	黒褐色 10 YR3/1	砂質シルト	1～2 mm 大の小礫まじり
炉掘り方埋土	1	暗褐色 10 YR3/3	砂質シルト	地山の土を多く混入している。砂粒を多く含有している

図30　ＳＩ－２竪穴住居炉跡

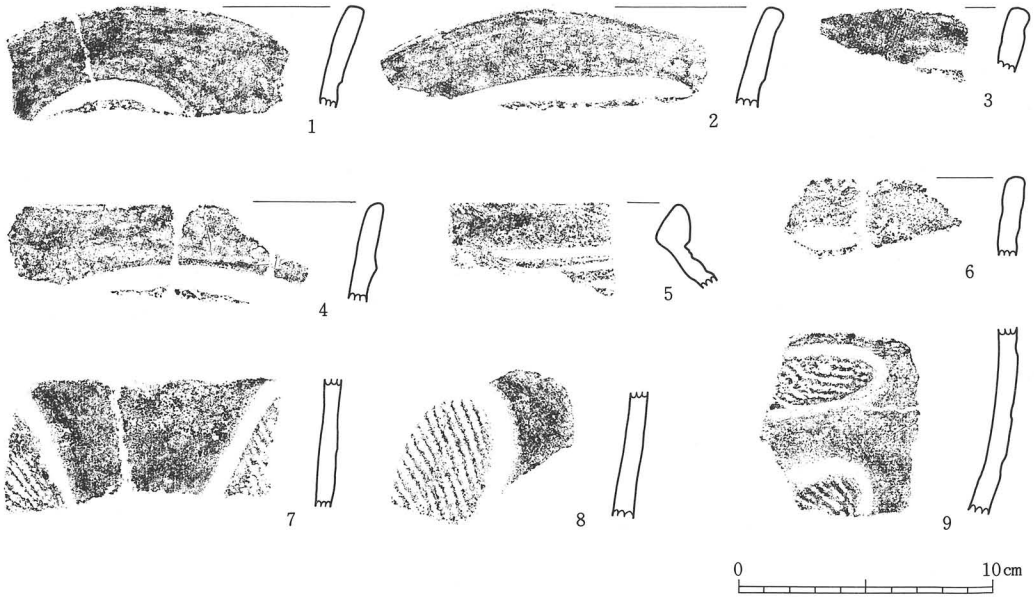


図31　ＳＩ－２ 竪穴住居跡出土土器

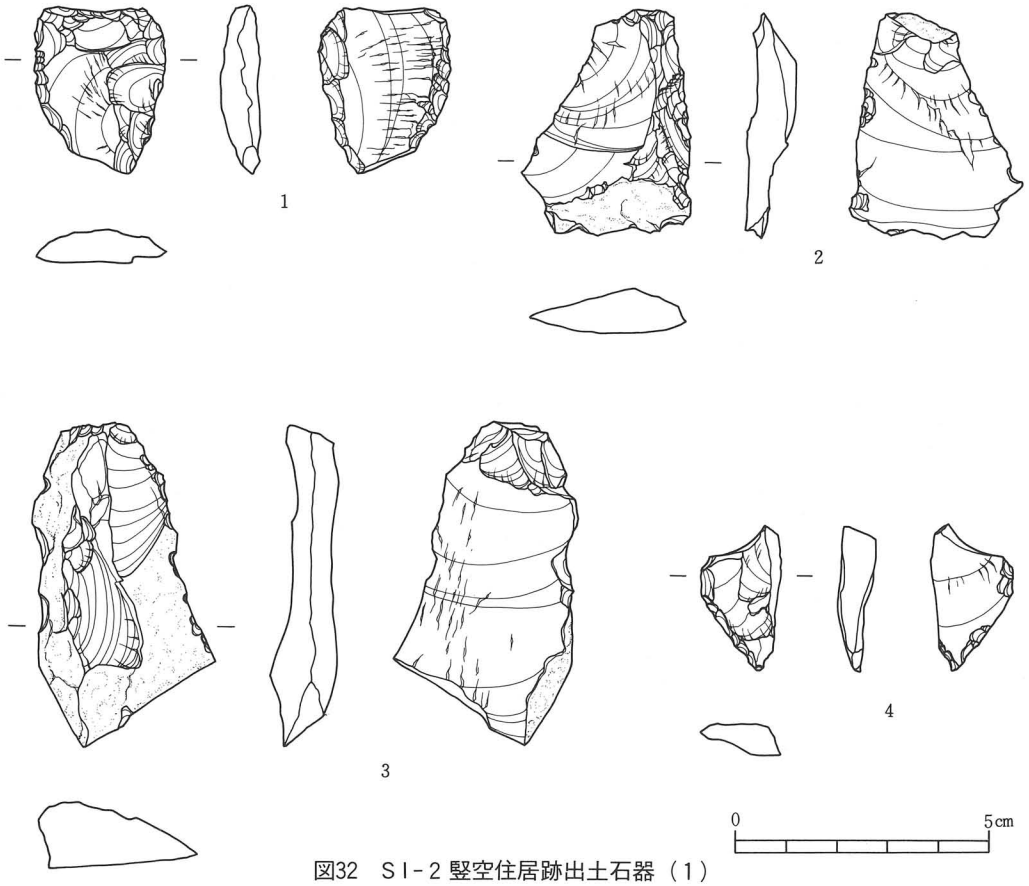


図32　SI－２ 竪空住居跡出土石器（１）

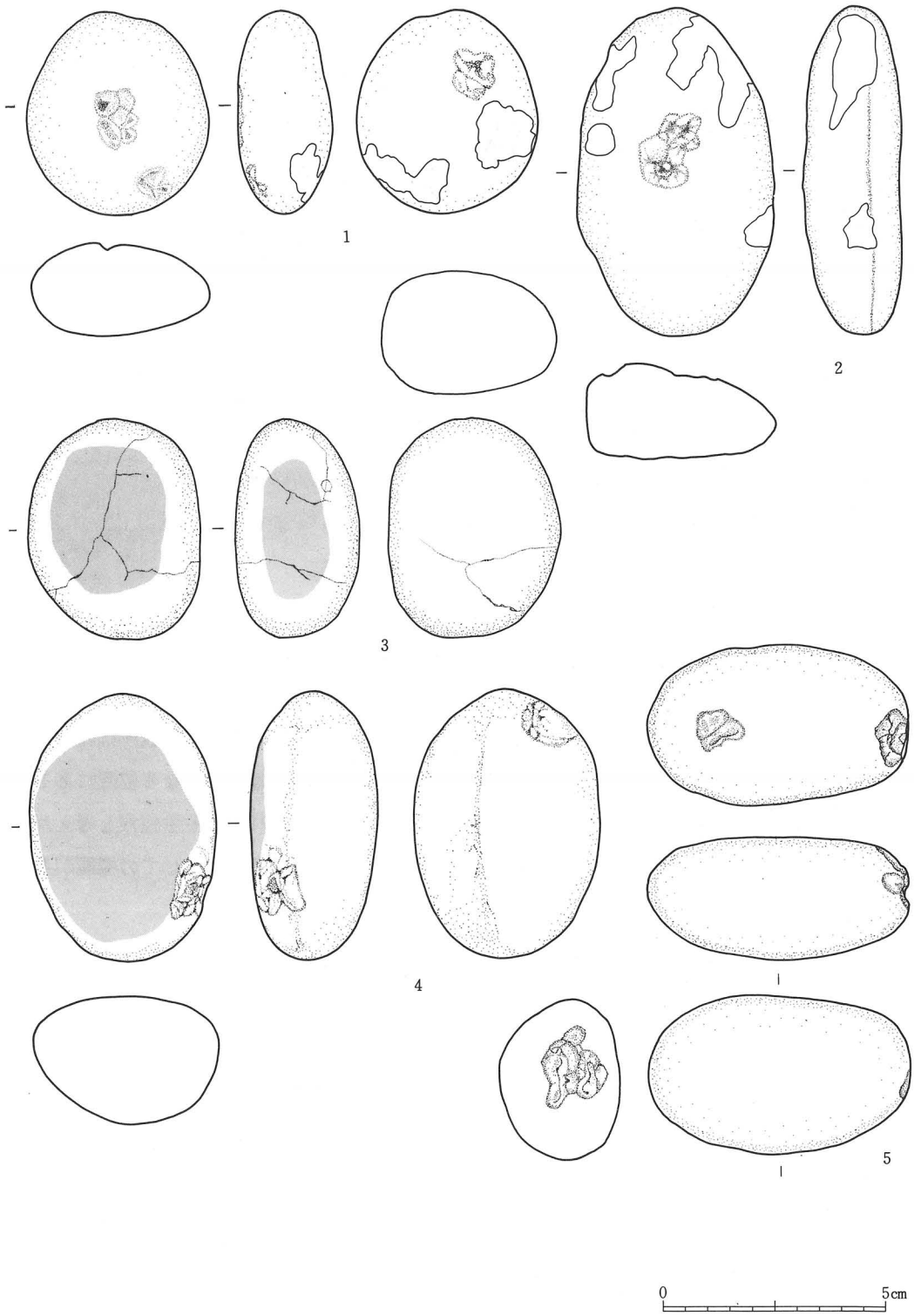


図33　SI-2 竪穴住居跡出土石器（2）

図31　SI-2竪穴住居跡出土土器観察表

番号	地　区	層	器　形	分　類	特　　徴	写真図版番号	番号	地　区	層	器　形	分　類	特　　徴	写真図版番号
1	P-1	床直	深鉢	II群	波状口縁、区画沈線	21－1	6	炉掘り方		深鉢	II群	区画沈線	
2	P-3	〃	〃	〃	波状口縁、区画沈線	21－2	7		1層	〃	〃	区画沈線、LR縄文	21－5
3	炉掘り方		〃	〃	波状口縁、区画沈線		8		2層	〃	〃	区画沈線、LR縄文	21－6
4	P-2	床直	〃	〃	波行口縁、区画沈隆線	21－3	9		埋上	〃	〃	区画沈線、LR縄文	21－7
5	A区	2層	鉢	〃	並行沈線	21－4							

図32、33　SI-2竪穴住居跡出土土石器観察表

番号	地　区	層位	器　種	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重量(g)	石　材	写真図版番号	備　考
32-1	A区	1層	不定形石器ⅠB類	3.3	2.6	0.8	5.8		38－6	
32-2	炉前庭部		不定形石器ⅠC類	4.4	3.4	0.8	11.4	頁岩	38－8	
32-3	炉前庭部		不定形石器ⅠC類	6.3	3.5	1.1	23.4		38－7	
32-4	炉内		不定形石器ⅠC類	3.0	1.6	0.7	2.4		38－9	
番号	地　区	層位	器　種	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重量(g)	石　材	使　用　痕	写真図版番号
33-1			凹石	92	82	43	430		凹－両面	41－3
33-2		炉石3	凹石	150	90	44	760		凹－片面	41－5
33-3		1層	磨石	100	78	56	680		磨－片面、片側面	41－4
33-4		炉石11	磨石	122	84	58	850		磨－片面	41－6
33-5		炉石7	敲石	119	72	56	630		敲－一端	41－7

SI-3竪穴住居跡

［遺構確認］　FJ-8区に位置し、5層上面で検出された。

［規模・平面形］　長軸4.00 m、短軸3.50 m、楕円形である。

［埋土］　3層に大別される。いずれも自然堆積である。

［壁］　10～15 cm程度残存している。床面から急な角度で立ち上がっている。

［床面］　若干の凹凸はみられるが、床面レベルはほぼ一定である。

［柱穴］　住居跡内から17個のピットが検出された。いずれも掘り方のみで柱痕跡は認められなかった。P1・P3・P4・P6・P7・P9・P10は炉の長軸線上からほぼ対象となる位置にある。このうちP3・P6は50 cm以上の深さがあり主柱穴と考えられる。P1・P7も主柱穴と考えれば4本柱の構造となる可能性もある。P4・P9～P12については、補助的な柱としての機能が考えられる。

［その他の施設］　西壁沿いで周溝の一部を検出した。巾15～20 cm、深さ35 cm、断面形はU字型である。

炉

［位置・方位］　住居跡南部に位置しており、掘り込みの端は住居壁の一部になっている。炉の長軸方向は、N-5°-Eである。

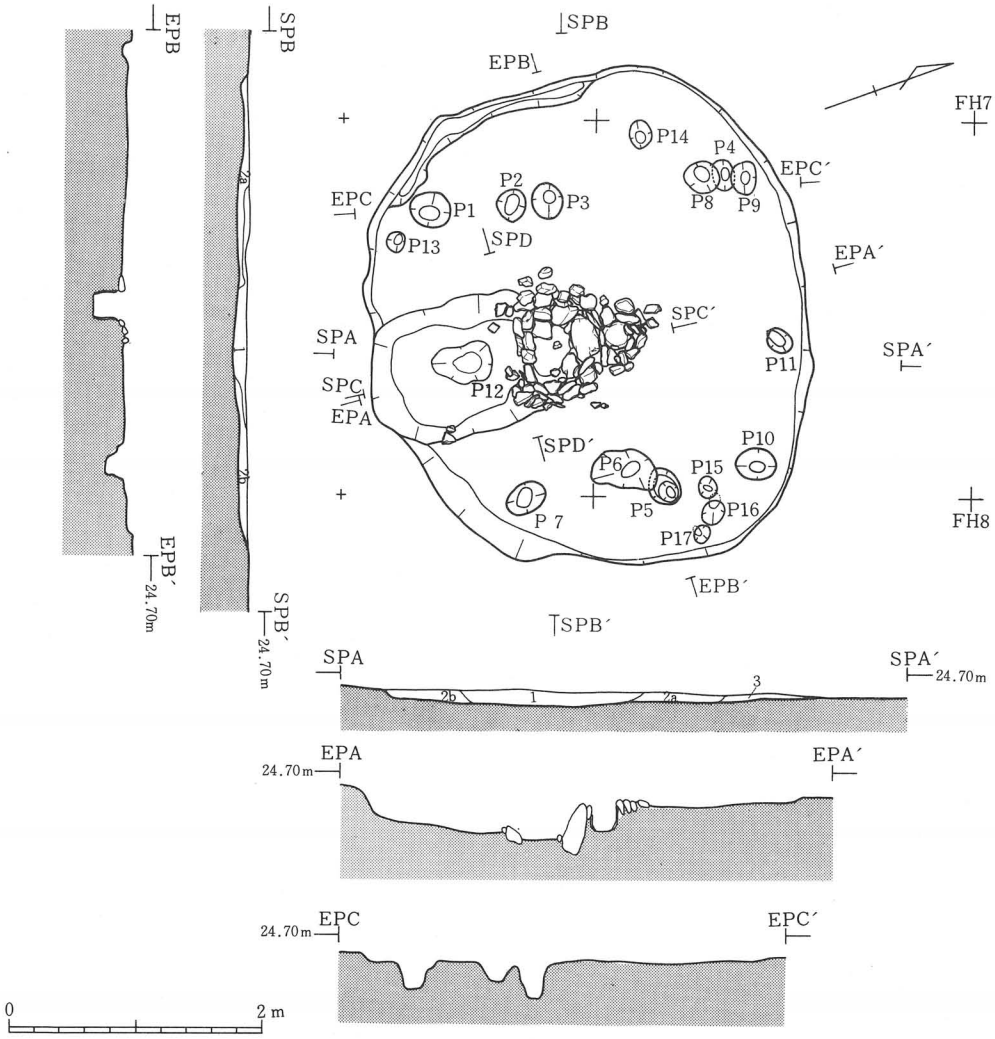
［規模・平面形］　最大長230 cm、最大幅110 cmのダルマ形である。

SI-3住居ピット集計表

No	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
形状	円形	円形	円形	円形	楕円形	不整形	楕円形	円形	円形	楕円形
深さ(cm)	34	11	56	26	16	56	44	46	27	16
No	11	12	13	14	15	16	17			
形状	楕円形	不整形	円形	楕円形	円形	円形	円形			
深さ(cm)	17	13	35	27	11	28	19			

［構造］　土器埋設石囲部、敷石石組部、掘り込み部からなる複式炉である。

〈土器埋設石囲部〉　長さ 35 cm、幅 55 cm である。埋設土器が残存し、土器の周囲に 10～20 cm 大の礫が二重に巡っている。埋設土器は底部を欠いているが、土器内の埋土下部に炭化物が入っていた。

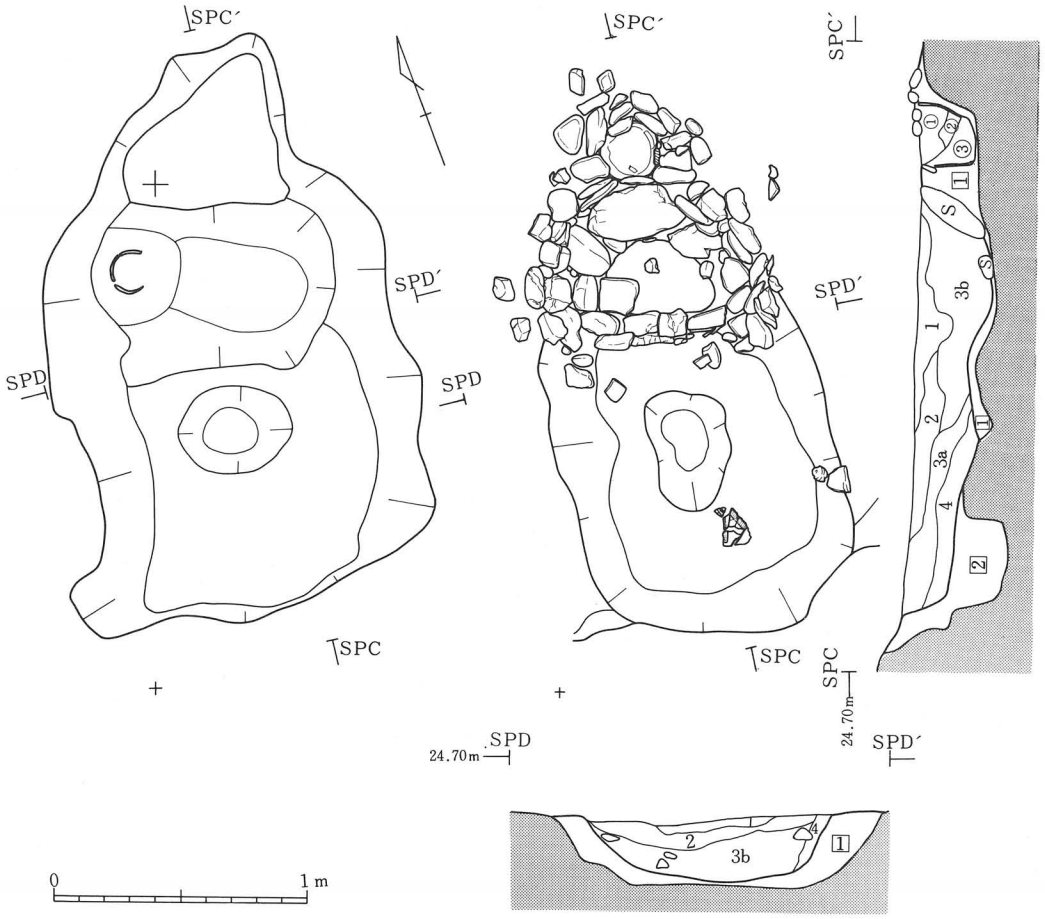


SI-3 住居跡土層注記表

	層	土　色	土性	備　　考
SI-3 埋土	1	黒色 10 YR2/1	シルト	ベルト中央部はとくに黒色がつよい
	2 a	黒褐色 10 YR2/3	シルト	1～3 mm 大の小石普遍的に入る
	2 b	黒褐色 10 YR2/2	シルト	
	3 a	黒褐色 10 YR3/2	砂質シルト	にぶい黄褐色 10 YR4/3　ブロック状に入る
	3 b	褐色 10 YR4/4	砂質シルト	黒褐色 10 YR3/2　ブロック状に入る

図34　ＳＩ－３竪穴住居跡

〈敷石石組部〉　長さ 70 cm、巾 100 cm である。床面から敷石底面までの深さは 20 cm である。底面には長さ 40 cm、巾 30 cm の偏平な石が置かれ、その上に奥壁および側壁部の石がのっている。奥壁には長さ 30 cm の偏平な石が据えられ、両側壁には 10〜20 cm 大の礫が三段に積み上げられている。敷石石組部と掘り込み部の境の部分には 10 cm 大の石が敷かれている。奥壁及び側壁の石には火熱により赤変したものが多い。石組部の掘り方西壁近くにピット状の凹みが検出され、その中から土器が正位の状態で出土している。



SI－3　炉跡土層注記表

	層	土　色	土　性	備　　考		層	土　色	土　性	備　　考
炉埋土	1	黒色 10 YR2/1	シルト		炉掘り方	1	暗褐色 10 YR3/3	砂質シルト	
	2	黒褐色 10 YR	〃	カーボン粒混若干		2	暗褐色 7.5 YR3/3	〃	
	3 a	黒褐色 10 YR2/3	〃	〃		3	暗褐色 7.5 YR3/4	〃	
	3 b	黒褐色 10 YR2/2	〃	〃					
	4	黒褐色 10 YR2/2	〃						
埋設土器埋土	①	黒色 10 YR2/1	〃						
	②	褐色 10 YR4/6	砂						
	③	黒褐色 10 YR3/1	シルト	カーボン粒多					

図35　S I－3 竪穴住居炉跡

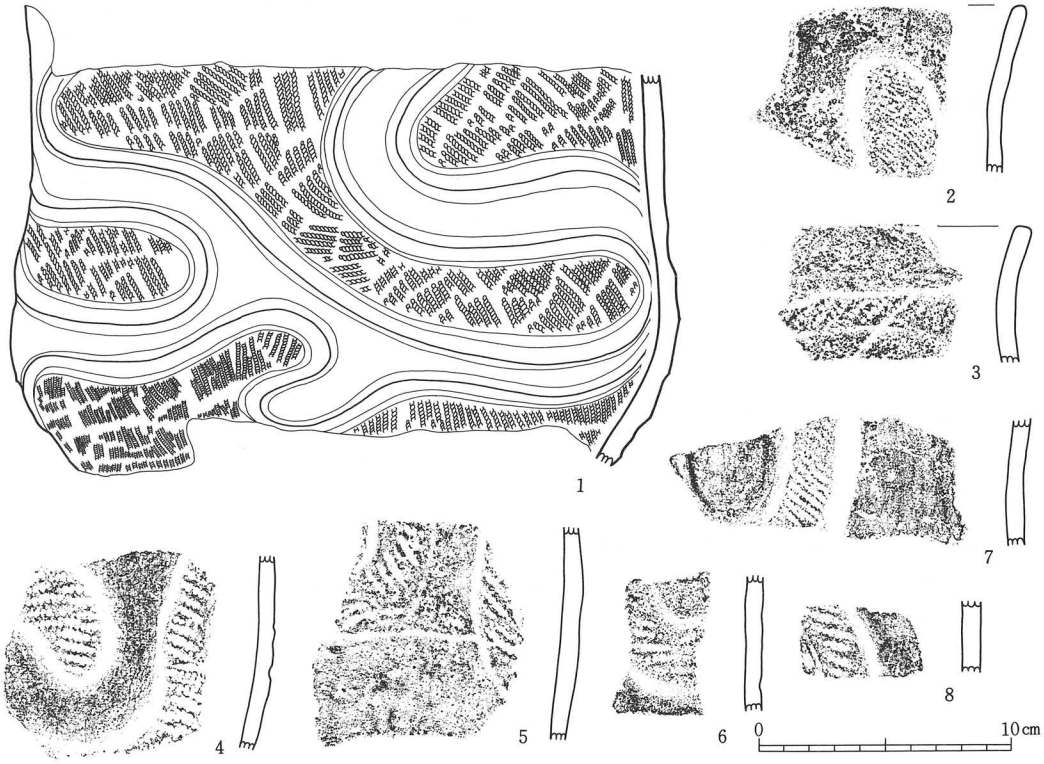


図 36　SI-3 竪穴住居跡出土土器観察表

番号	地　区	層	器　形	分　類	特　　徴	写真図版番号	番号	地　区	層	器　形	分　類	特　　徴	写真図版番号
1	炉埋設		深鉢		分節波濤文・RL 縄文	22－1	5	P-1	床直	深鉢		区画沈線・LR 縄文	22－7
2	P-2	炉床	〃		区画沈線	22－2	6			〃		〃	22－6
3		床直	〃		区区画沈線・LR 縄文	22－3	7		2	〃		区画沈隆線・RL 縄文	22－5
4	P-3	炉床	〃		区画沈線・LR 縄文	22－4	8			〃		区画沈線	

図36　SI-3 竪穴住居跡出土土器

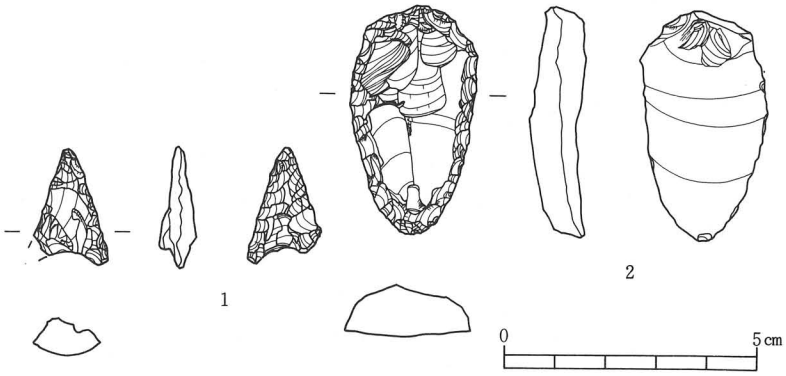


図 37　SI-3 竪穴住居跡出土石器観察表

番号	地　区	層位	器　　種	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重量(g)	石　材	写真図版番号	備　考
37-1	B区	2層	石鏃Ⅰ B 類	2.5	1.3	0.7	1.4		38－10	
37-2		床面	スクレイパー	4.5	2.4	0.9	12.3	頁岩	38－11	

図37　SI-3 竪穴住居跡出土石器

〈掘り込み部〉　長さ 120 cm、幅 110 cm の方形である。床面から掘り込み部までの深さは 20 cm である。両側壁に石はおかれていない。

出土遺物

「土器」(図36)　1 は炉の埋設土器で、口縁部と底部を欠いている。沈線による分節波濤文が 5 単位描かれているが、単位文様の間隔の狭い部分では文様帯がくずれている。またその下には、沈線が巡り各単位文様の下で「ノ」字状に垂下し 6 単位描かれている。2 ・ 3 は口縁部でやや外湾し、沈線によって無文帯と縄文帯を区画している。4 ～ 8 は胴部資料で、沈線によって区画されている。

「石器」(図37)　石鏃 1 点、スクレイパー 1 点が出土している。図37-1は両側辺加工のスクレイパーで縦長の形態を呈する。2 は石鏃で、基部は凹基で側辺は直線的になる。

SI-4 竪穴住居跡

［遺構確認］　FF-5 区に位置し、5 層上面で検出された。

［規模・平面形］　長軸 3.50 m、短軸 3.50 m、隅丸の方形に近い円形を基調とする。

［埋土］　4 層に大別される。いずれも自然堆積である。

［壁］　5～8 cm 程度残存している。床面から急な角度で立ち上がっている。

［床面］　若干の凹凸はみられるが、床面レベルはほぼ一定である。

［柱穴］　住居跡内から14個のピットが検出された。いずれも掘り方のみで柱痕跡は認められなかった。P2・P3 は炉の長軸線上からほぼ対象となる位置にあり、また P1・P5・P7 は長軸線上にある。このうち P2・P3・P5 の 3 個のピットを結んだ線は正三角形を呈し、規模や深さもほぼ同様であることから主柱穴と考えられる。P7 も主柱穴と考えれば 4 本柱の可能性もある。P4・P6 は補助的な柱としての機能が考えられる。

［その他の施設］　住居跡西壁および北壁で、周溝を検出している。北壁側では柱穴と重複しているが、巾 15～30 cm、深さ 5～10 cm、断面形は U 字形である。

炉

［位置・方位］　住居跡南西部に位置しており、掘り込みの端は住居壁の一部になっている。炉の長軸方向は N-38°-E である。

［規模・平面形］　最大長 185 cm、最大幅 95 cm のダルマ形である。

［構造］　土器埋設石囲部、敷石石組部、掘り込み部からなる複式炉である。

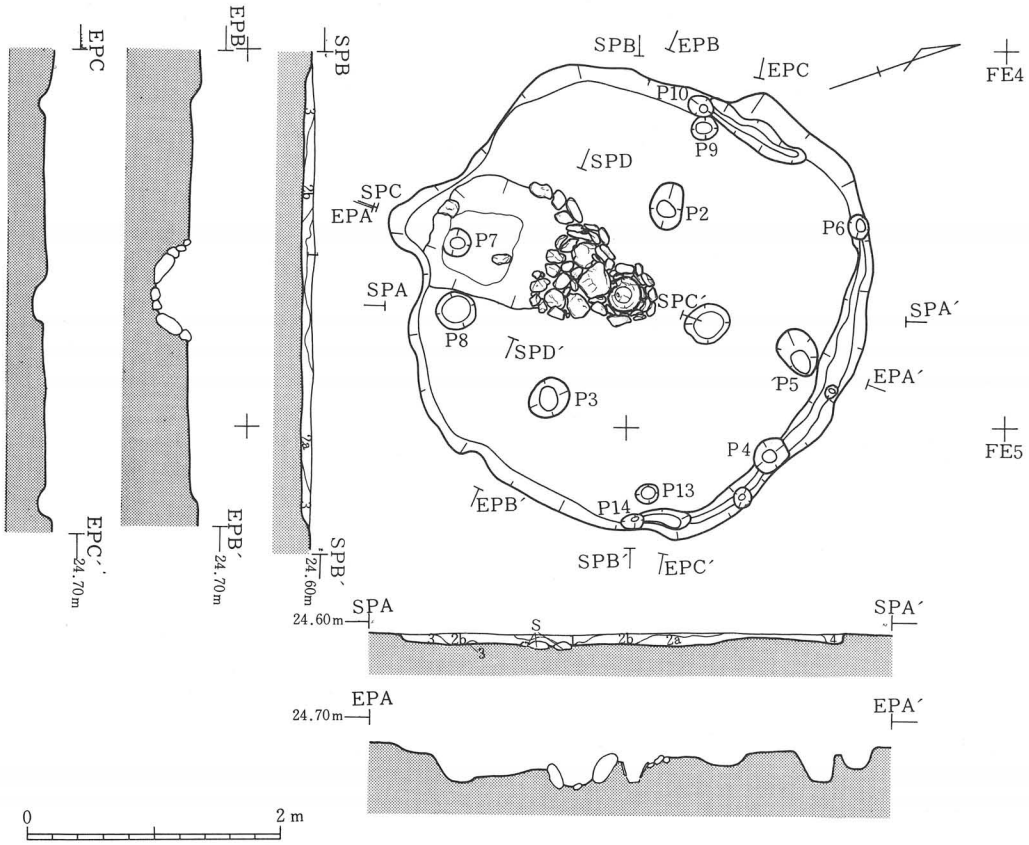
SI-4 住居跡ピット集計表

No	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
形状	円形	不整円形	円形	円形	長楕円形	円形	円形	円形	円形	円形
深さ(cm)	10	43	48	36	40	53	24	8	7	16
No	11	12	13	14						
形状	円形	円形	円形	楕円形						
深さ(cm)	5	7	4	11						

〈土器埋設石囲部〉　長さ 40 cm、幅 50 cm である。埋設土器が残存し、土器の周辺に 10〜15 cm 大の礫を二重ないし三重に巡らしている。埋設土器は底部を欠いており、底面には 20 cm 大の扁平な石が置かれている。土器内の埋土下部に炭化物がみられた。

〈敷石石組部〉　長さ 60 cm、幅 80 cm である。床面から敷石底面までの深さは約 20 cm である。底面には 10〜15 cm 大の石が敷かれ、その上に奥壁および側壁部の石がのっている。奥壁には 30 cm 大の扁平な石が据えられ、両側壁には 10〜15 cm 大の礫が二段から三段に積まれている。敷石石組部と掘り込み部の境の部分には 10〜15 cm 大の石が敷かれている。奥壁及び側壁の石には赤変したものが多い。

〈掘り込み部〉　長さ 95 cm、幅 95 cm の方形である。床面から掘り込み部までの深さは 30 cm で、敷石石組部よりも深くなっており壁際にむかって緩く傾斜している。



SI-4　住居跡土層注記表

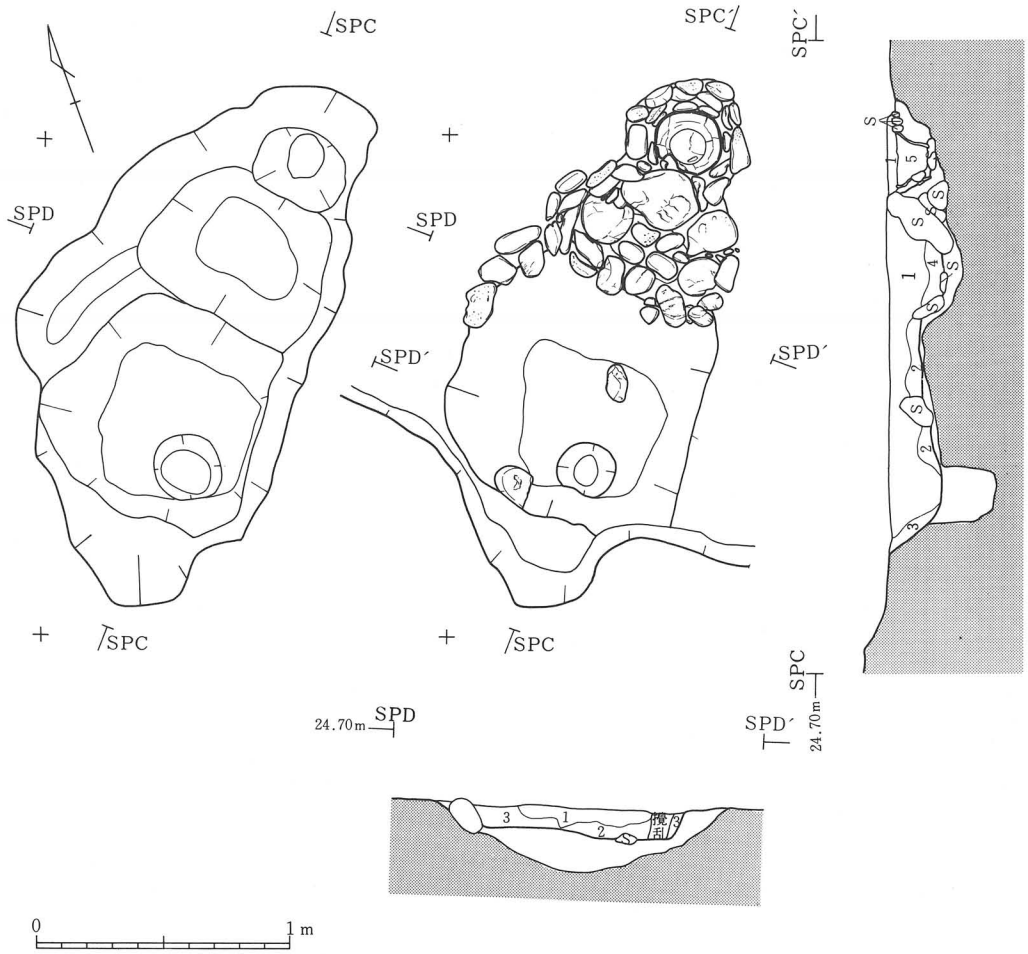
	層	土　色	土　性	備　　考
SI-4 埋土	1	黒色 10 YR2/1	シルト	
	2 a	黒褐色 10 YR2/3	シルト	1〜3 mm の小石含有、カーボン粒子若干、北壁側砂礫まじり
	2 b	黒褐色 10 YR2/2	シルト	カーボン粒子若干
	3	黒褐色 10 YR2/2	シルト	褐色 10 YR4/4 がまじる。下層部に褐色 10 YR4/6 砂まじり
	4	黒褐色 10 YR3/1	砂質シルト	礫まじり

図38　SI-4 竪穴住居跡

出土遺物

「土器」(図40)　8は炉の埋設土器で胴下部を欠いている。緩やかな波状を呈する口縁部が強く外湾している。口縁部に沿って巡る沈線によって区画された無文帯が「J」字状を呈している。「J」字文は4単位描かれ、その下は全面に縄文が施文されている。1～7は胴部資料である。1は細く深い沈線によって施文され、2は沈線によつて区画されている。3・4は隆線が渦巻き状に入り組んでいる。5は沈隆線によって区画され、6・7は地文のみである。

「石器」(図41)　石鏃2点、石匙1点、不定形石器2点、礫石器1点が出土している。



SI－4　炉跡土層注記表

	層	土色	土性	備考		層	土色	土性	備考
炉埋土	1	黒褐色 10 YR3/1	シルト	カーボン粒混	炉埋土	4	暗褐色 10 YR3/3	シルト	カーボン粒混
	2	黒褐色 10 YR2/2	〃	10 YR4/4・カーボン粒	埋設土器埋土	5	黒褐色 10 YR2/2	シルト	10 YR4/4・カーボン粒
	3	黒褐色 10 YR2/2	〃	10 YR4/4 混					

図39　SI－4竪穴住居炉跡

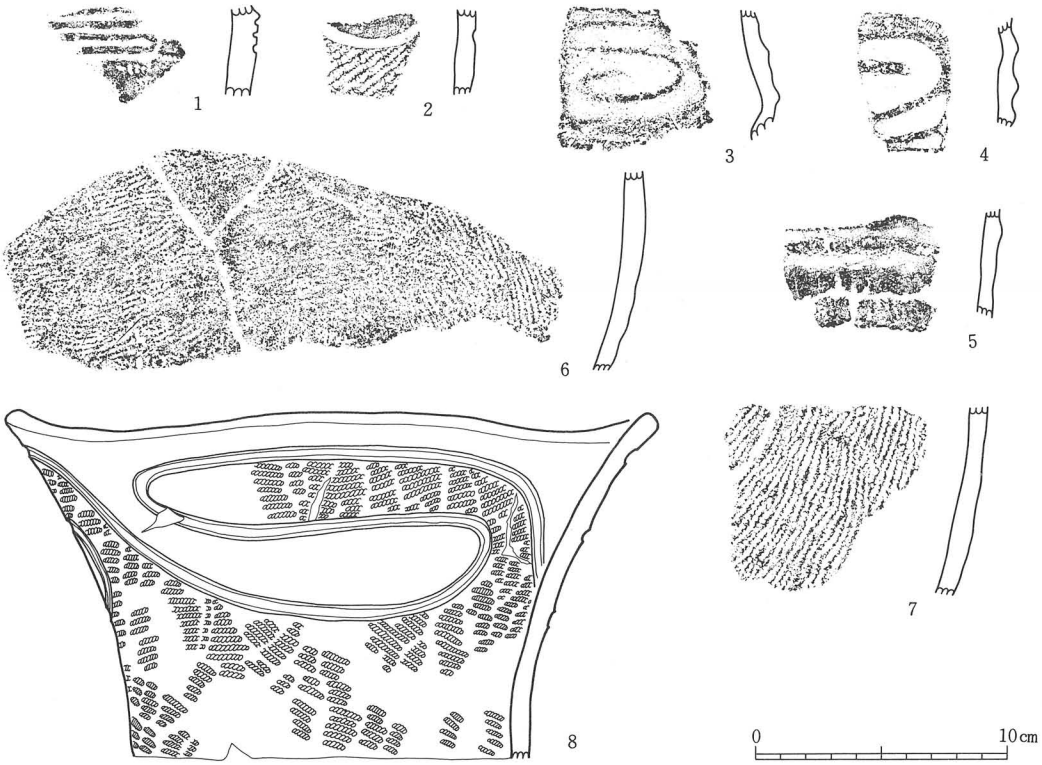


図 40　SI- 4 竪穴住居跡出土土器観察表

番号	地　区	層	器　形	分　類	特　　徴	写真図版番号	番号	地　区	層	器　形	分　類	特　　徴	写真図版番号
1	A 区	1	深鉢		沈線・LR 縄文	23－2	5	B 区	2	深鉢		隆帯・無文	
2	炉内		〃		区画沈線・LR 縄文	23－3	6	炉掘り方		〃		LR 縄文	23－7
3	B 区	床直	〃		隆線渦巻	23－4	7	B 区	2	〃		LR 縄文	23－6
4	B 区	〃	〃		〃	23－5	8	炉埋設		〃		「J」字状文・LR 縄文	23－1

図40　S I - 4 竪穴住居跡出土土器

図41-1. 2は石鏃である。1は基部が凹基で半円形の抉りがはいる。2は平基で側辺が外湾する。4は縦長の石匙で、大きなつまみ部と二縁辺構成の身部をもっている。6は凹石で、片面に深い凹部をもっている。

SI-5 竪穴住居跡

［遺構確認］　FG-3. 4 区に位置し、5 層上面で検出された。

［規模・平面形］　長軸 4.25 m、短軸 3.90 m、隅丸の方形に近い円形を基調とする。

［埋土］　3 層に大別される。いずれも自然堆積である。

［壁］　15～25 cm 程度残存している。床面から急な角度で立ち上がっている。

［床面］　若干の凹凸はみられるが、床面レベルはほぼ一定である。

［柱穴］　住居跡内から 8 個のピットが検出された。いずれも掘り方のみで柱痕跡は認められなかった。P1・P4 は炉の長軸線上からほぼ対象となる位置にあり、また P3 は長軸線上にある。

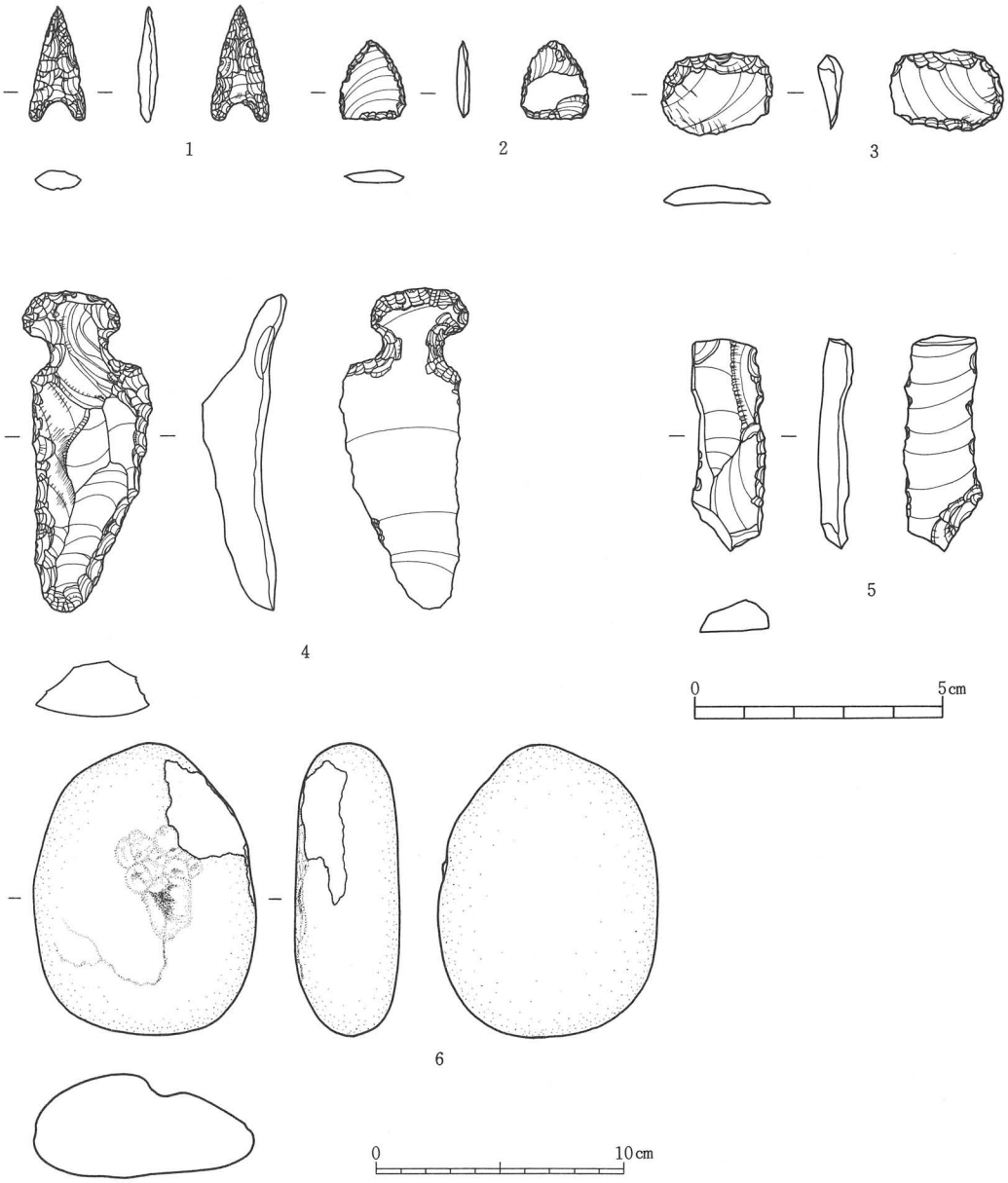


図41　SI-4竪穴住居跡出土石器観察表

番号	地　区	層位	器　種	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重量(g)	石　材	写真図版番号	備　考
41-1	C区		石鏃ⅠB類	2.4	1.2	0.4	0.6		38−12	
41-2	炉前庭部	底面	石鏃ⅡA類	1.6	1.4	0.25	0.6		38−13	
41-3	ピット8内		不定形石器A類	1.6	2.2	0.4	1.6	頁岩	38−14	
41-4	C区	床直	石匙ⅠA類	6.5	2.4	1.2	17.1	頁岩	38−15	
41-5	ピット1内		不定形石器C類	4.5	1.45	0.65	3.5		38−16	
番号	地　区	層位	器　種	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重量(g)	石　材	使　用　痕	写真図版番号
41-6		炉石55	凹石	119	89	42	580		凹−片面	41−6

図41　SI-4竪穴住居跡出土石器

この3個のピットを結んだ線は二等辺三角形状を呈し、規模もほぼ同様であることから主柱穴と考えられる。P5・P6及び炉掘り込み部底面で検出されたP7については補助的な柱としての機能が考えられる。

［その他の施設］　東壁の一部を除いて周溝が巡っている。巾、深さと一様ではなく、柱穴と重複する北壁部分がいちばん深く、東壁側が浅くなっている。

［遺物出土状況］　住居跡堆積土中及び床面から多量の土器が出土している。特に床面出土の土器の中には完形に近いものがあり、これらは住居廃絶時あるいはその直後に廃棄されたものと考えられる。堆積土中からの遺物は埋1層からのものが多く、このことは住居跡がかなり埋まった段階で集中して廃棄された結果と考えられる。

炉

［位置・方位］　住居跡南部に位置しており、掘り込みの端は住居壁の一部になっている。炉の長軸方向はN-13°-Wである。

［規模・平面形］　最大長205 cm、最大幅90 cmのダルマ形である。

［構造］　土器埋設石囲部、敷石石組部、掘り込み部からなる複式炉である。

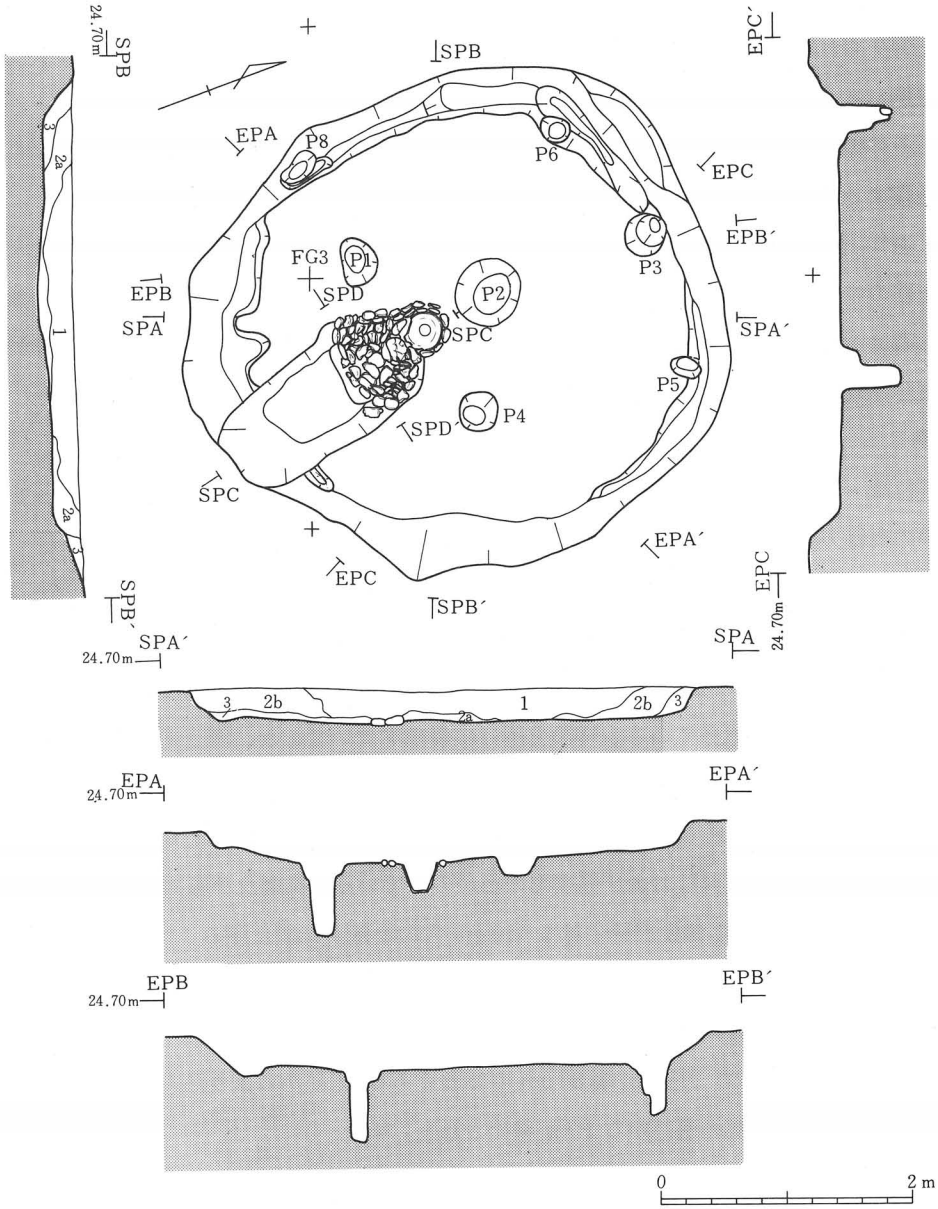
〈土器埋設石囲部〉　長さ40 cm、幅40 cmである。埋設土器が残存し、10 cm大の礫が西側で二重東側で一重に巡っている。埋設土器は口縁部を欠いており、埋土には若干の炭化物と焼土がみられただけであるが土器の周囲はかなり焼土化が進んでいた。

〈敷石石組部〉　長さ60 cm、幅85 cmである。床面から敷石底面までの深さは約20 cmである。底面の石の上に奥壁および側壁部の石がのっている。奥壁及び底面には15～20 cm大の石が用いられているが、側壁部分には5～10 cm大の小礫が三段に積み上げられている。断面の形状はレンズ状を呈している。敷石石組部と掘り込み部の境の部分には石が敷かれていない。奥壁及び側壁の石には火熱により赤変したものもみられる。

〈掘り込み部〉　長さ105 cm、幅80 cmの方形である。床面から掘り込み部までの深さは15 cmである。掘り込み部の底面からP7が検出された。

出土遺物

「土器」（図44・45）　図44-1は炉の埋設土器で胴上部から口縁部を欠いている。全体の文様構成は不明であるが、区画沈線の一部がみられる。胴下半には縄文が施文されているが、底部付近ではナデ調整によって縄文が消されている。2は台付きの浅鉢形土器で、胴上部が「く」字状に強く折れ内湾気味の口縁部からは鍔状の張り出しがつけられている。そのうえに胴部から続く隆帯による円窓状の把手が2単位つけられ、これとは別に吊り手状の把手が2単位ついている。胴部には隆線（稜線）によって「J」字状の無文帯が4単位描かれ、縄文帯と区画されている。その下には隆線（稜線）が一条巡り、台部と区画されている。3・5～7は口縁部資



SI-5 住居跡ピット集計表

No	1	2	3	4	5	6	7	8
形状	不整形	楕円形	円形	円形	楕円形	円形	方形	不整形
深さ(cm)	58	8	69	14	42	30	30	7

SI-5 住居跡土層注記表

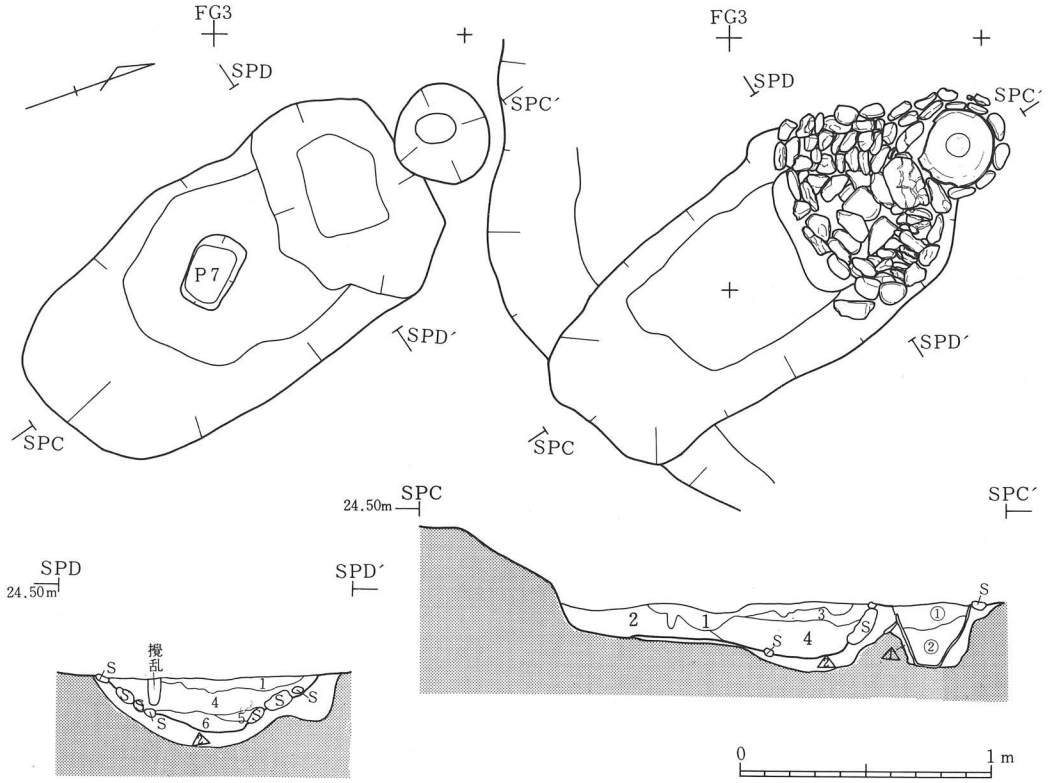
	層	土　色	土性	備　　考
SI－5 埋土	1	黒色 10 YR2/1	シルト	砂粒まじり
	2 a	黒褐色 10 YR3/2	シルト	黒色 10 YR2/1 が小ブロック状にまじる。砂粒が若干入る
	2 b	黒褐色 10 YR2/2	シルト	黒褐色 10 YR3/2 が斑状にまじる
	3	黒褐色 10 YR2/2	シルト	暗褐色 10 YR3/4 が若干まじる

図42　SI－5 竪穴住居跡

料で、ゆるく外湾し沈線によって縄文帯と無文帯を区画している。4はB群土器で、内湾する口縁部には沈線が巡り、その下は地文のみとなっている。

図45-1は鉢形土器で、胴中央部で「く」字に強く折れ平縁な口縁部には吊り手状の把手が4単位つけられている。隆線によって「J」字状の区画が描かれている。地文はなく全体がよく磨かれている。2は口縁部が内湾し、沈隆線による長楕円区画のなかに条線が施文されている。3も口縁部が内湾し沈隆線による楕円区画に縄文が充塡されている。

4・5は口縁部が外湾するもので、沈線により区画されている。6・7は胴部資料で、沈線によって区画されている。8は外湾する口縁部が、隆帯によって楕円区画され縄文が充塡されている。図46はいずれも胴部資料で、沈線または沈隆線によって縄文帯と巾の広い無文帯を区



SI－5　炉跡土層注記表

	層	土　色	土性	備　考		層	土　色	土性	備　考
炉埋土	1	黒色 10 YR2/1	シルト	カーボン粒混	埋設土器埋土	①	黒色 10 YR2/1	シルト	
	2	黒褐色 10 YR2/2	〃			②	黒褐色 10 YR2/3	〃	カーボン粒混
	3	黒褐色 10 YR3/2	〃		炉掘り方	△	暗赤褐色 5 YR3/3	〃	焼土
	4	黒褐色 10 YR2/3	〃			△	黒褐色 10 YR2/2	〃	
	5	にぶい黄褐色 10 YR4/3	砂質シルト						
	6	黒褐色 10 YR2/2	シルト						

図43　SI－5 竪穴住居炉跡

画している。2・3は沈隆線によって区画する同一固体と考えられる破片である。

「石器」(図47・48・49)　石鏃8点、尖頭器2点、石錐2点、石匙1点、スクレイパー2点、不定形石器4点、礫石器5点が出土している。

石鏃(図47-1～8)：2～4・8の基部は凹基で、2・3は側辺が外湾する。1・5～7の基部は平基で、側辺は直線的である。

尖頭器(図47-12・13)：二点とも小型のものである。12はやや厚手で基部は凹基となる。

石錐(図47-9・10)：ともに突端部を欠いているが棒状の形態を呈している。

石匙(図48-1)：刃部を欠いているが、横長の石匙のつまみ部分とおもわれる。

スクレイパー(図48-5・6)：5は側縁に沿ってはいる微細な二次加工による刃部を有し、6は両側縁からの二次加工によって突端部を作り出している。

不定形石器(図47-11・図48-2～4)：2・3は微細な二次加工による刃部を有している。

礫石器(図49)：1・3は磨凹石で、1は二磨面と浅い凹部をもつ。3は欠損品であるが、磨面と両面に深い凹部をもつ。2は凹石で、両面に浅い凹部をもつ。4は磨石で、二磨面をもっている。

図47、48　SI-5竪穴住居跡出土石器観察表

番号	地区	層位	器種	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重量(g)	石材	写真図版番号	備考
47-1	C区	1層	石鏃II B類	1.8	1.05	0.3	0.5		38-17	
47-2	C区	1〃	石鏃I A類	2.2	1.3	0.6	1.2	頁岩	38-18	
47-3	D区	1〃	石鏃I B類?	(2.5)	1.4	0.5	1.1		38-19	
47-4	B区	1〃	石鏃I B類	2.7	1.4	0.5	0.7	頁岩	38-20	
47-5	B区	1〃	石鏃II A類	(1.6)	1.6	0.4	1.1	頁岩	38-24	
47-6	C区	2〃	石鏃II B類	(1.25)	1.4	0.3	0.6		39-1	
47-7		1〃	石鏃II A類	2.5	1.95	0.35	1.5		38-25	
47-8		2〃	石鏃I B類	(1.5)	1.8	0.4	1.1		39-2	
47-9	C区	1〃	石錐I類	(1.8)	1.1	0.5	1.0	頁岩	38-27	
47-10			石錐I類	4.1	1.55	0.85	5.0	頁岩	38-26	
47-11	C区	1〃	不定形石器A類	3.3	1.6	0.6	3.7		38-21	
47-12	C区	1〃	尖頭器	4.6	2.9	1.05	12.6	頁岩	38-23	
47-13		床直	尖頭器	3.8	2.4	0.65	4.8	頁岩	38-22	
48-1	B区	床直	石匙?A類	3.5	2.0	1.0	6.6	頁岩	39-3	
48-2	D区	1層	不定形石器A類	1.5	2.15	0.2	0.8	頁岩	39-5	
48-3	土坑内		不定形石器II C類	3.3	2.2	0.8	5.6		39-4	
48-4	B区	床直	不定形石器A類	2.4	3.7	0.64	6.1		39-6	
48-5	炉前庭部	底面	不定形石器B類	4.7	5.3	1.14	20.2		39-7	
48-6		2層	不定形石器C類	5.35	5.3	0.94	23.8	頁岩	39-8	

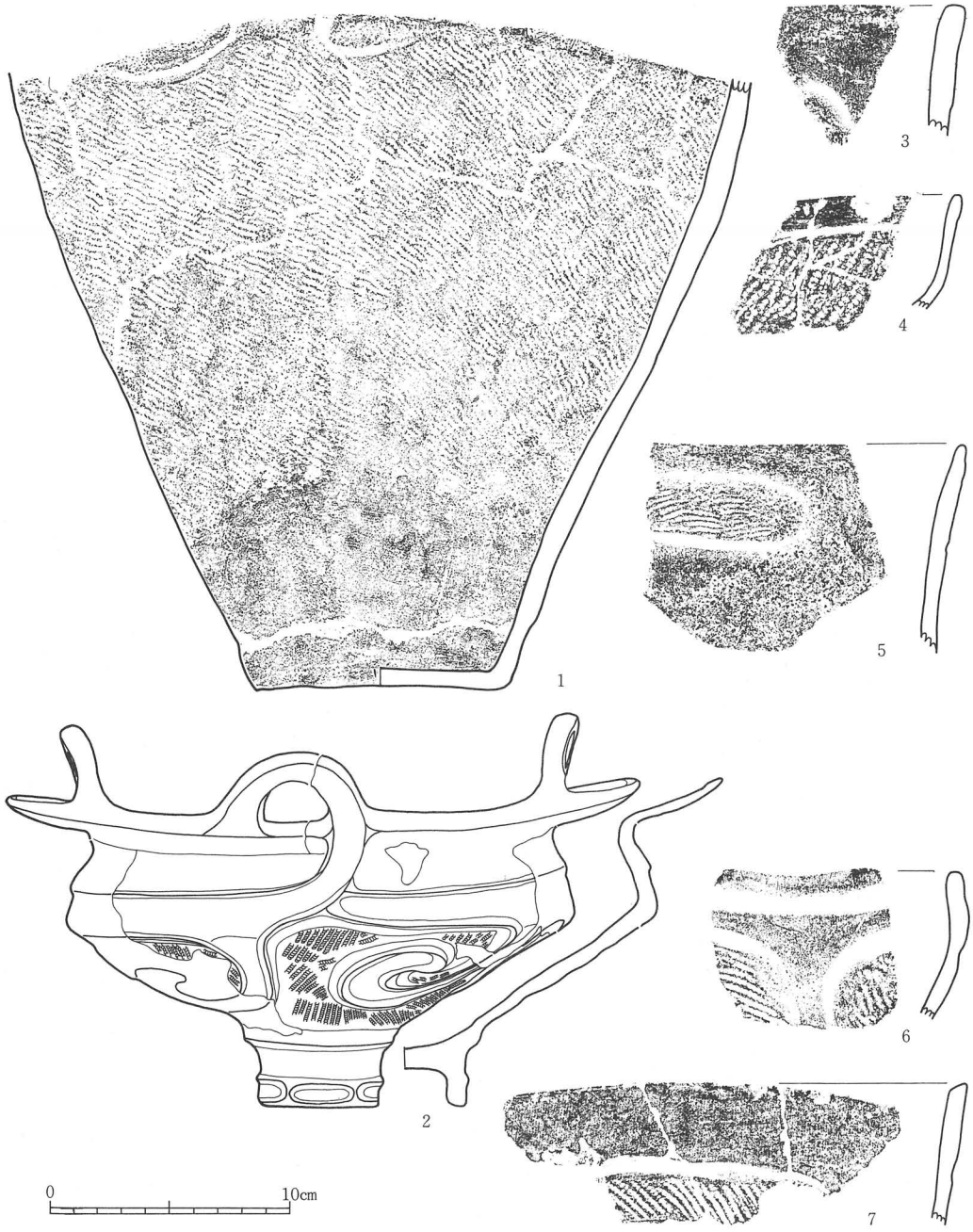


図 44 SI-5 竪穴住居跡出土土器観察表

番号	地 区	層	器 形	分 類	特 徴	写真図版番号	番号	地 区	層	器 形	分 類	特 徴	写真図版番号
1	炉埋設		深鉢	II群	沈線区画	24	5	P-1	1	深鉢	II群	区画沈線	27-3
2	P34・36		台付浅鉢	〃	「J」字状文	25	6	D区	2	〃	〃	区画沈線・RL 縄文	27-4
3		1.2	深鉢	〃	区画沈隆線	27-1	7	C区	1	〃	〃	区画沈線・LR 縄文	27-5
4	C区	〃	〃	〃	区画沈線・LR 縄文	27-2							

図44　ＳＩ－５竪穴住居跡出土土器（１）

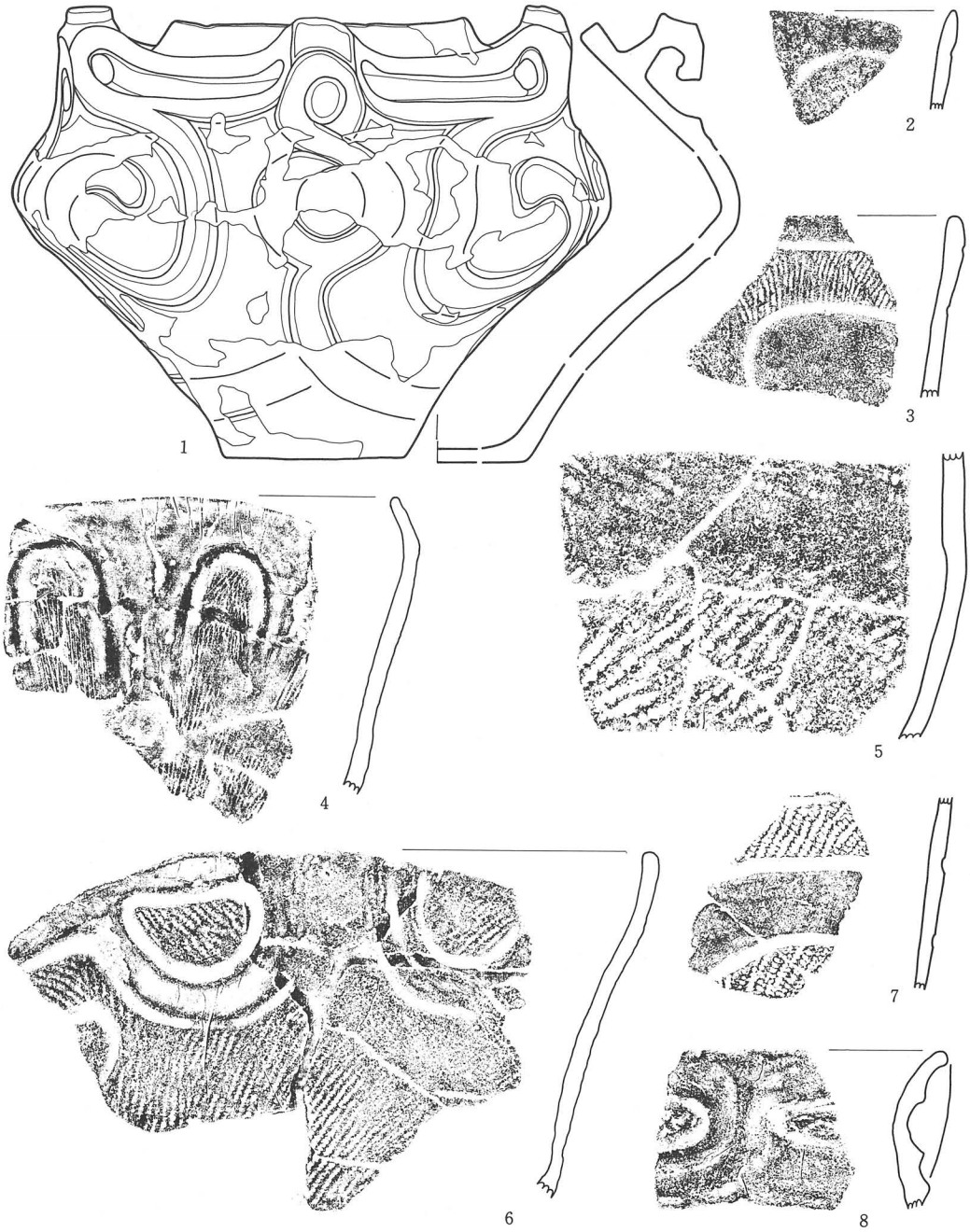


図 45　SI-5 竪穴住居跡出土土器観察表

番号	地区	層	器形	分類	特徴	写真図版番号	番号	地区	層	器形	分類	特徴	写真図版番号
1			鉢	II群	「J」字状文	26	5	P-28			II群	LRL 縄文	27－7
2	P-2	1	深鉢	〃	区画沈線	27－8	6	P43、62	床直		〃	区画隆線(稜線)・RL 縄文	27－9
3	P-1	1	〃	〃	区画沈線・撚り糸	27－10	7	C区P-52	1		〃	区画沈線・LR 縄文	27－11
4				〃	区画隆線・条線	27－6	8	P-48			〃	隆帯	27－12

図45　SI-5竪穴住居跡出土土器（2）

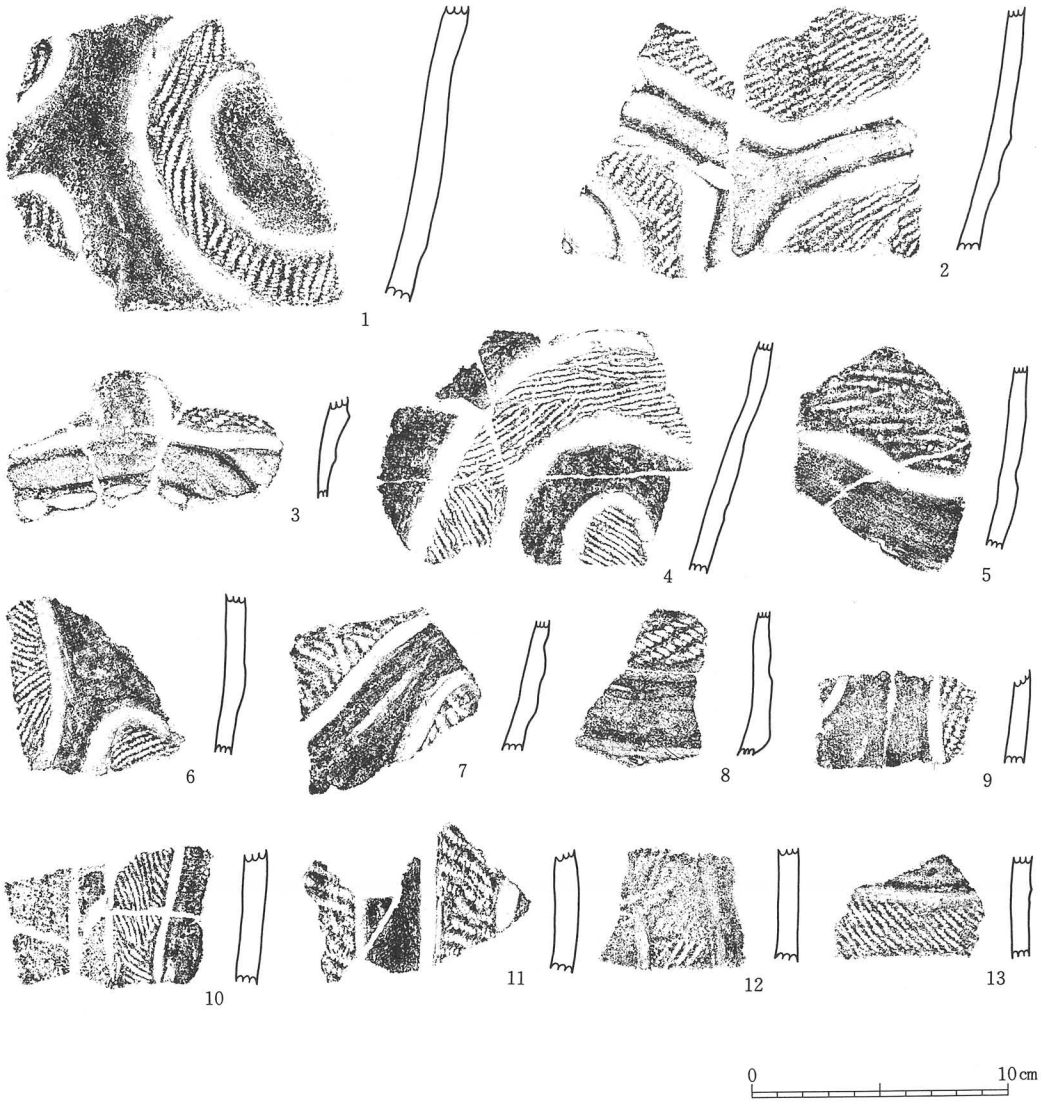


図 46　SI-5 竪穴住居跡出土土器観察表

番号	地　区	層	器　形	分　類	特　　徴	写真図版番号	番号	地　区	層	器　形	分　類	特　　徴	写真図版番号
1	P-42		深鉢	II群	区画沈線・RL 縄文	27−13	7	B 区	1	深鉢	II群	区画沈線・RL 縄文	27−18
2	P-45		〃	〃	区画隆線(稜線)・LR 縄文	27−14	8		1.2	〃	〃	区画沈線・LR 縄文	27−19
3	C 区 P-48	1 床	〃	〃	区画隆線(稜線)・LR 縄文	27−15	9	B 区	1	〃	〃	区画沈線・RL 縄文	27−20
4	P-41		〃	〃	区画沈線・LR 縄文	27−16	10	A 区	2	〃	〃	区画沈線	27−21
5	C 区	1	〃	〃	区画沈線・LR 縄文	27−17	11	D 区	1	〃	〃	区画隆線・LR 縄文	27−22
6	C 区	1	〃	〃	区画沈線・LR 縄文								

図46　SI-5 竪穴住居跡出土土器（3）

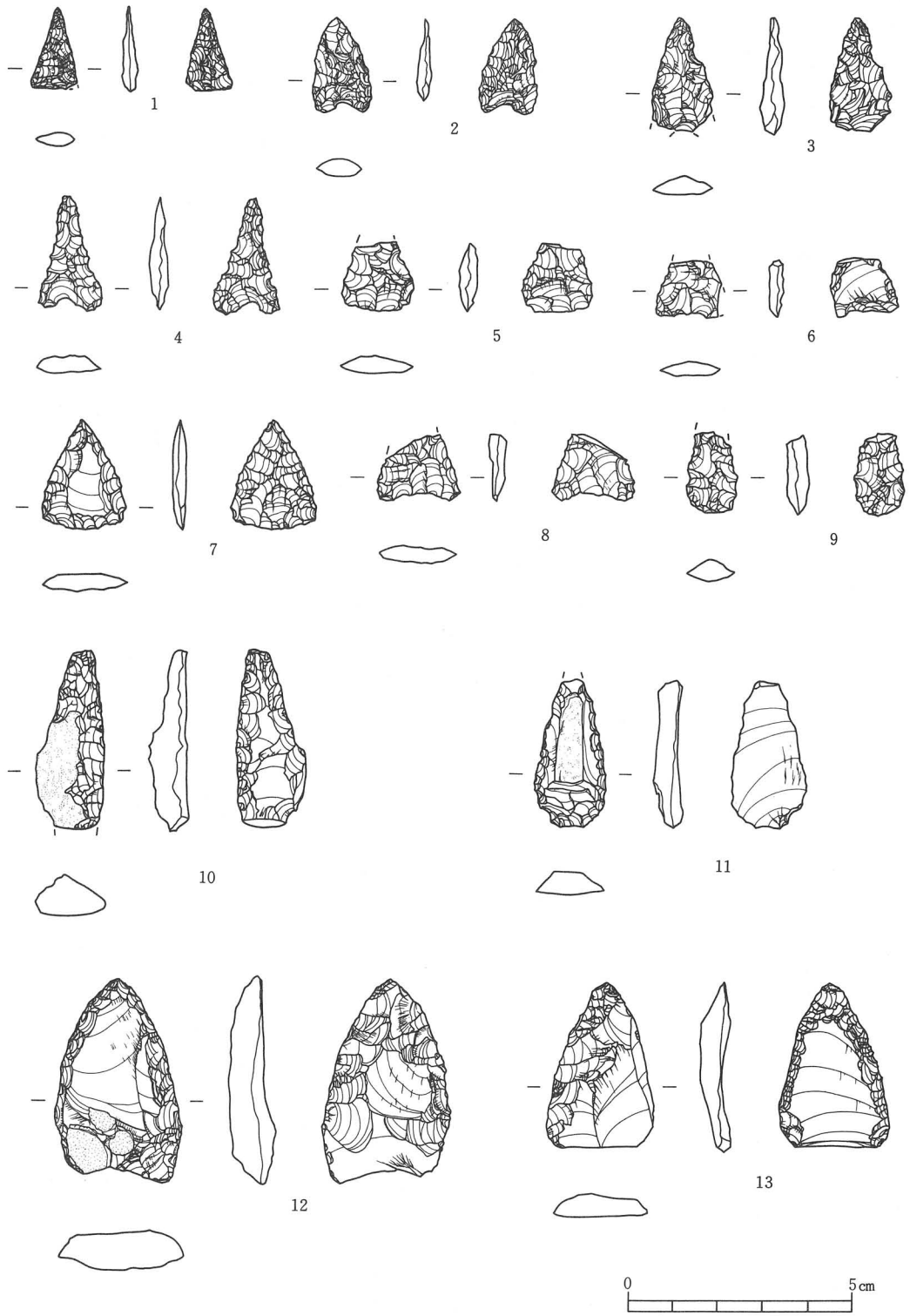


図47　ＳＩ－５竪穴住居跡出土石器（１）

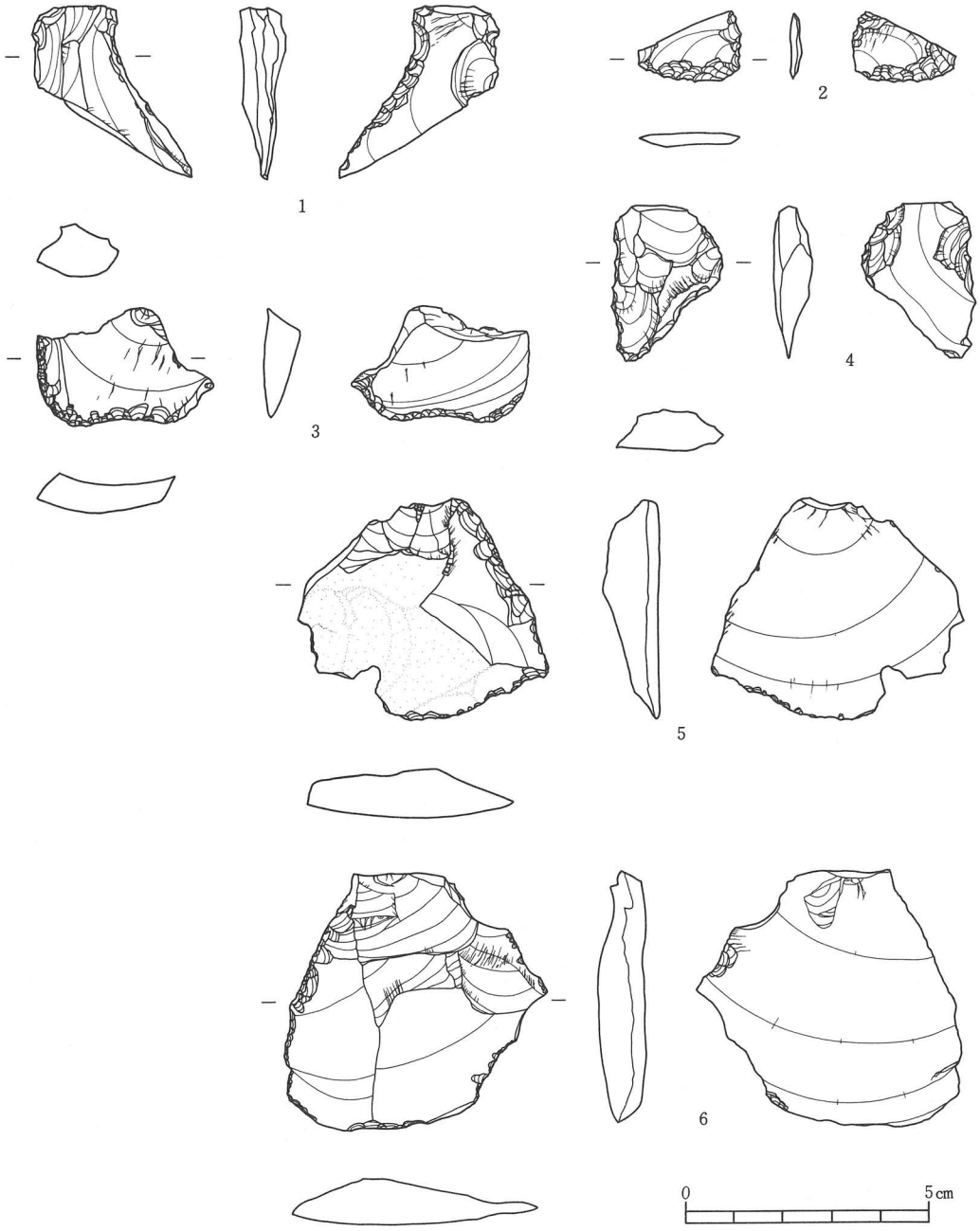


図48　ＳＩ－５竪穴住居跡出土石器（２）

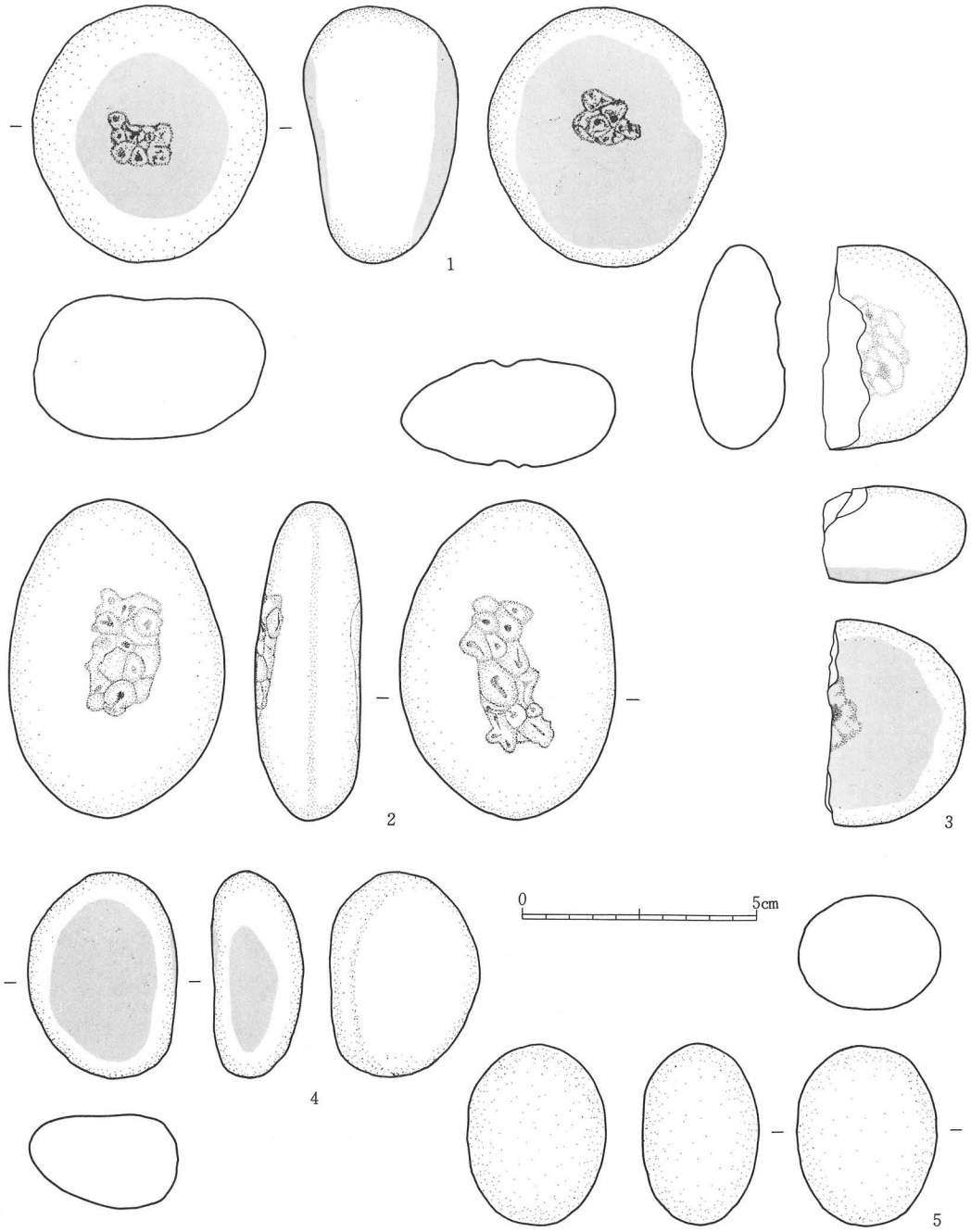


図 49　SI-5 竪穴住居跡出土石器観察表

番号	地　区	層位	器　　種	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重量(g)	石　材	使　用　痕	写真図版番号
49-1	C区	1層	磨凹石	109	100	63	1,000		磨－両面、凹－片面	41－9
49-2	S-21	床直	凹石	137	91	45	640		凹－両面	41－10
49-3	C区	1層	磨凹石	(58)	(87)	(41)	(310)		磨－片面、凹－両面	41－11
49-4		1.2層	磨石	88	64	38	290		磨－片面、片側面	41－12
49-5	S-24	床直	礫石器	77	58	50	310			41－13

図49　SI-5 竪穴住居跡出土石器

SI-6 竪穴住居跡

［遺構確認］　FJ-5 区に位置し、5 層上面で検出された。炉の造り替えに伴って改築されている。

［規模・平面形］　長軸 4.90 m、短軸 4.60 m、楕円形を基調とする。

［埋土］　3 層に大別される。いずれも自然堆積である。

［壁］　15～25 cm 程度残存している。床面から急な角度で立ち上がっている。

［床面］　若干の凹凸はみられるが、床面レベルはほぼ一定である。

［柱穴］　住居跡内から20個のピットが検出された。いずれも掘り方のみで柱痕跡は認められなかった。炉の造り替えに合わせて主柱穴が 3 本柱から 4 本柱へ変わっている可能性がある。

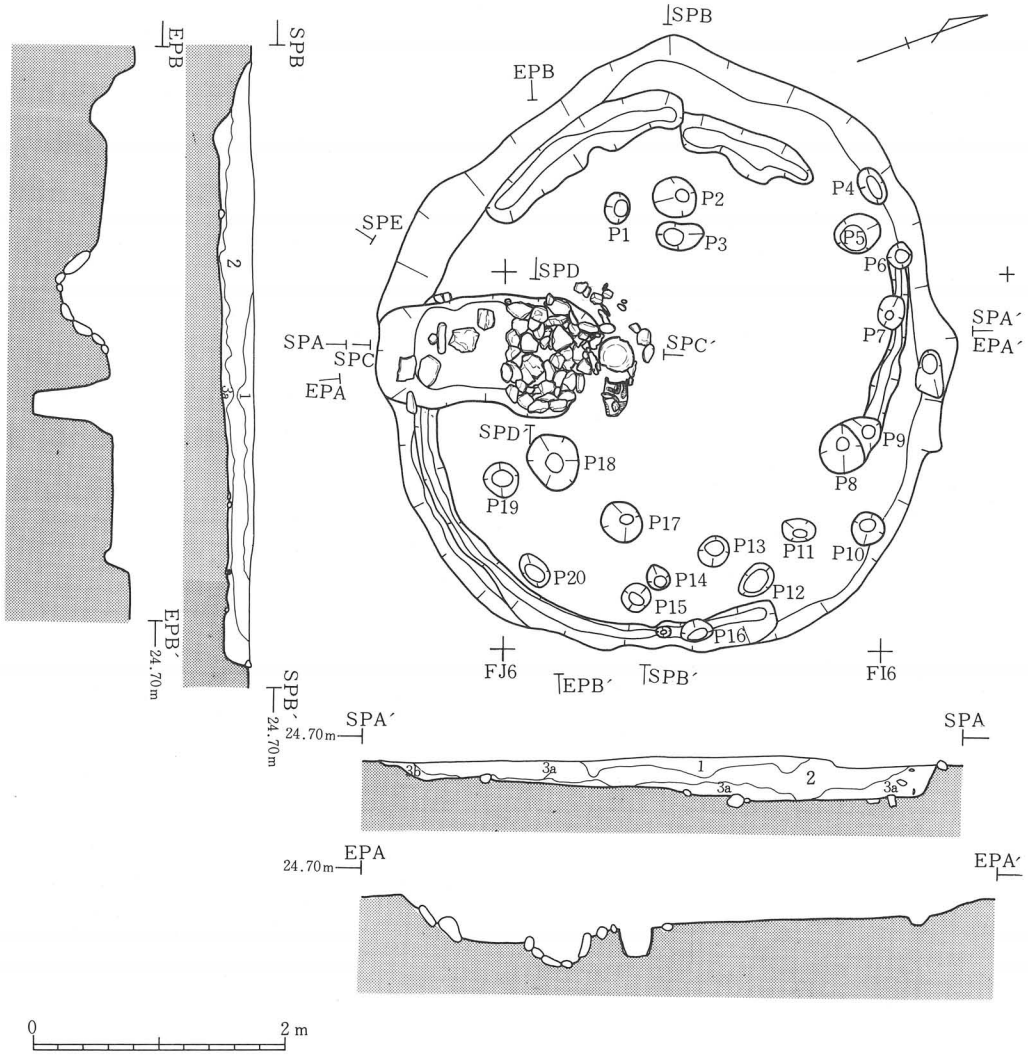


図50　S I - 6 竪穴住居跡

『炉新段階－6b 住居跡』

P1・P4・P10・P17 は炉の長軸線上から対象となる位置にある。この 4 個のピットを結んだ線は長方形を呈し、規模もほぼ同様で配置に規則性がみられることから 4 本主柱の構造になるとおもわれる。

『炉古段階－6a 住居跡』

P3・P18 は炉の長軸線上から対象となる位置にあり、P8 は長軸線上にある。この 3 個のピットを結んだ線は正三角形を呈し、規模も同様であることから主柱穴と考えられる。P7・P11 は補助的な柱としての機能が考えられ、炉の掘り込み部底面で検出されたピットも同様の可能性がある。

［その他の施設］　住居跡をほぼ巡る周溝を検出している。検出された周溝の位置が西壁部分では壁際から離れていることから、古い段階の6a 住居跡に伴うものである可能性が高い。

巾 10～35 cm、深さ 5～10 cm と一様ではなく、西壁側が巾も広く若干深めとなっている。

［埋設土器］　炉埋設土器東側に接するように横位の状態で埋設されていた。掘り方があり、口縁部を欠いているが、口縁方向を西にして炉の長軸に直交する形で埋められている。土器内の埋土には焼土・炭化物が混じり、炉埋設土器との間は焼土化していた。

炉

前述のとおり炉の造り替えが行なわれており、新・旧の 2 時期がある。

『新炉－6b 住居跡』

［位置・方位］　住居跡南部に位置しており、掘り込みの端は住居壁の一部になっている。旧

SI-6 住居跡土層注記表

	層	土　色	土性	備　考
SI-6 埋土	1	黒色 10 YR2/1	シルト	2～3 mm 大の小石まじり
	2	黒褐色 10 YR2/2	シルト	黒褐色 10 YR3/1 がブロック状にまじる若干礫まじり、カーボン粒子若干
	3 a	黒褐色 10 YR2/2	シルト	にぶい黄褐色 10 YR4/3 がブロック状にまじる
	3 b	黒褐色 10 YR2/2 とにぶい黄褐色 10 YR4/3	シルト	

SI-6　住居跡ピット集計表

No	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
形状	楕円形	円形	不整円形	長楕円形	円形	円形	楕円形	不整円形	楕円形	円形
深さ(cm)	46	49	58	64	5	15	18	69	65	63
No	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
形状	不整円形	楕円形	円形	不整円形	円形	楕円形	円形	円形	円形	楕円形
深さ(cm)	13	5	12	35	11	32	51	68	23	10

SI－6　炉跡土層注記表

	層	土色	土性	備考		層	土色	土性	備考
炉(新)埋土	1	黒褐色 10 YR3/2	シルト		炉掘り方	⚠	黒褐色 10 YR2/3	シルト	焼土粒混若干
	2	黒褐色 10 YR2/2	〃	10 YR4/4 混		⚠	黒褐色 10 YR2/2	〃	焼土・カーボン粒混
	3	黒褐色 10 YR2/2	〃	カーボン粒混若干		⚠	黒褐色 10 YR3/1	〃	
	4	黒褐色 10 YR2/3	〃	10 YR4/4 混		⚠	黒褐色 10 YR2/2	〃	
炉(古)埋土	5	黒褐色 10 YR2/2	〃		炉跡東埋設土器	①	黒褐色 10 YR2/2	〃	焼土・カーボン粒混
埋設土器埋土	①	黒色 10 YR2/1	〃	カーボン粒混		②	にぶい黄褐色 10 YR4/3	砂礫土	
	②	黒褐色 10 YR3/2	砂質シルト	〃	炉(古)掘り方	①	黒褐色 10 YR2/2	シルト	10 YR4/4 混
	③	にぶい黄褐色 10 YR4/3	砂礫土			②	黒褐色 10 YR2/3	砂	

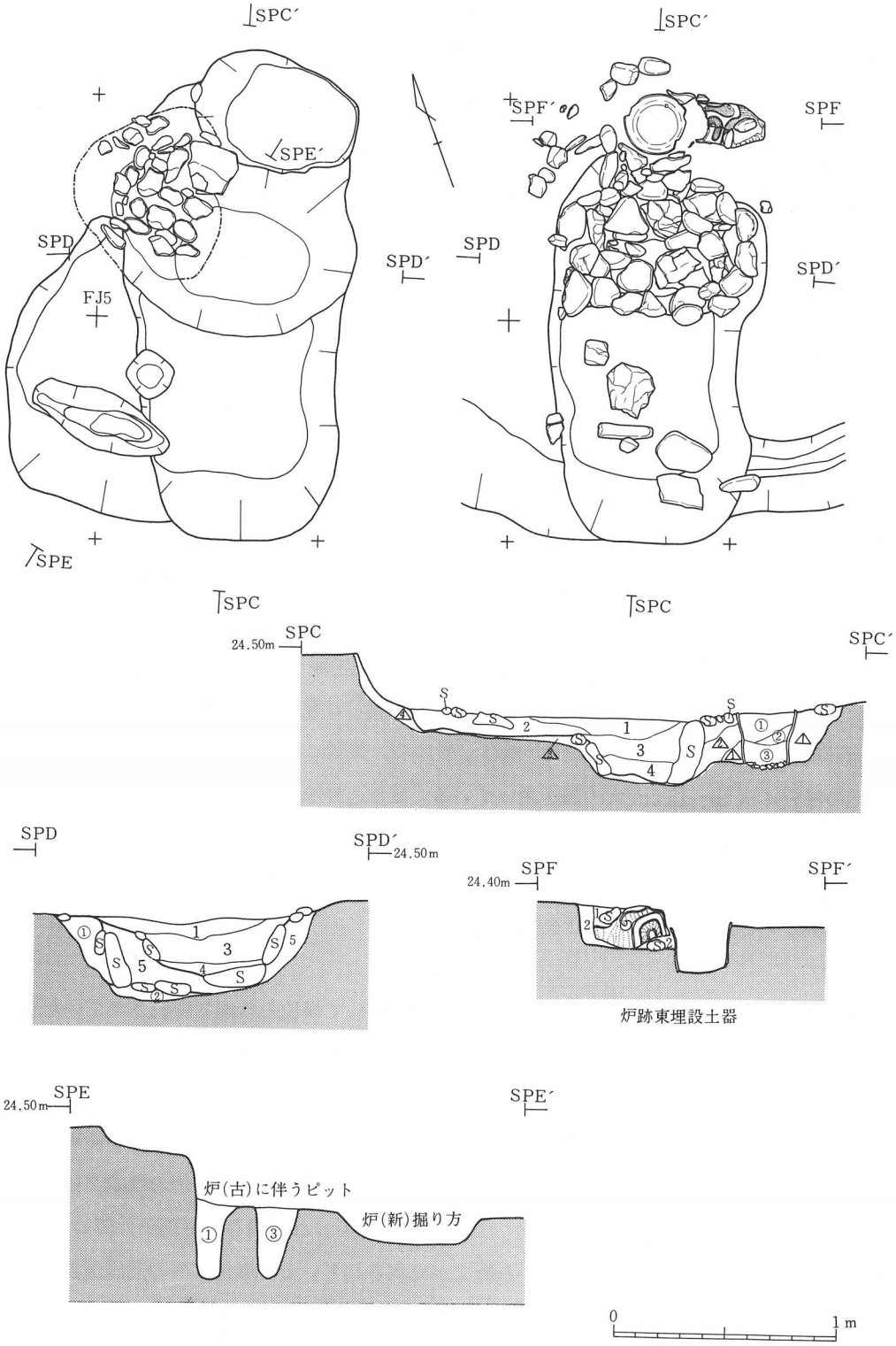


図51　SI-6竪穴住居炉跡

炉に対して主軸を東にずらして構築されている。炉の長軸方向はN-21°-Eである。

［規模・平面形］　最大長220 cm、最大幅100 cmの長方形である。

［構造］　土器埋設石囲部、敷石石組部、掘り込み部からなる複式炉である。

〈土器埋設石囲部〉　長さ45 cm、幅50 cmである。埋設土器が残存しているが、石組は一部にしか残っていない。埋設土器は口縁部と底部を欠いており、底面には2 cm大の小礫が敷き詰められていた。土器内の埋土下部には若干の炭化物がみられた。

〈敷石石組部〉　長さ60 cm、幅85 cmである。床面から敷石底面までの深さは約20 cmである。底面の石の上に奥壁および側壁部の石がのっている。底面には20 cm大の扁平な石が敷かれているが、奥壁や側壁部では10～15 cm大の石が2～3段に積まれている。火熱によって赤変したものもみられる。敷石石組部と掘り込み部の境の部分には石が敷かれていない。

〈掘り込み部〉　長さ100 cm、幅80 cmの方形である。床面から掘り込み部までの深さは20 cmである。

『旧炉－6a住居跡』

［位置・方位］　新しい炉によって東側を壊されている。床面検出時に旧炉の敷石石組部の側壁上部の石がのぞいていた。炉の長軸方向はN-60°-Eである。

［規模・平面形］　推定190 cm長、推定巾90 cmのダルマ形を呈すると思われる。

［構造］　複式炉であり、土器埋設部の位置は新炉と同じと考えられる。

〈敷石石組部〉　底面および側壁の石が残存している。奥壁に25 cm大の石が据えられているが、他の部分には10～15 cm大の礫を用いている。掘り込み部との境の部分には石が敷かれていない。床面から敷石底部までの深さは約35 cmで新炉よりも深くなっている。

〈掘り込み部〉　長さ70 cm、巾90 cm程で方形を呈していたと思われる。深さは15 cm程である。底面からピット1個が検出されている。

出土遺物

「土器」（図52・53）　図52-1は炉の埋設土器の東側に接して横位の状態で埋設されていた土器である。胴部が膨らみ口縁部は外湾している。平縁な口縁部には隆線が巡り、その下に隆線による「C」字状文が正対するように4単位描かれ縄文が充塡されている。単位文様の間隔のあいた部分には長楕円状の隆線区画がはいり、縄文が充塡されている。胴下半を巡る隆線がこの部分のみ「J」字状に垂下している。隆線の下は地文となっている。2は炉の埋設土器で、胴下半部を欠いている。丸みをおびた胴部が上部でわずかにくびれ平縁な口縁部が外湾している。沈隆線によって「C」字状が5単位描かれ縄文が充塡されている。単位文様の間隔が狭くなる部分では、「C」字文が連結して「ㄷ」状になっている。その下には沈隆線が巡り地文と区画している。3は炉（古）の埋土のもので、口縁部が強く外湾している。縄文の押圧に文様が二段

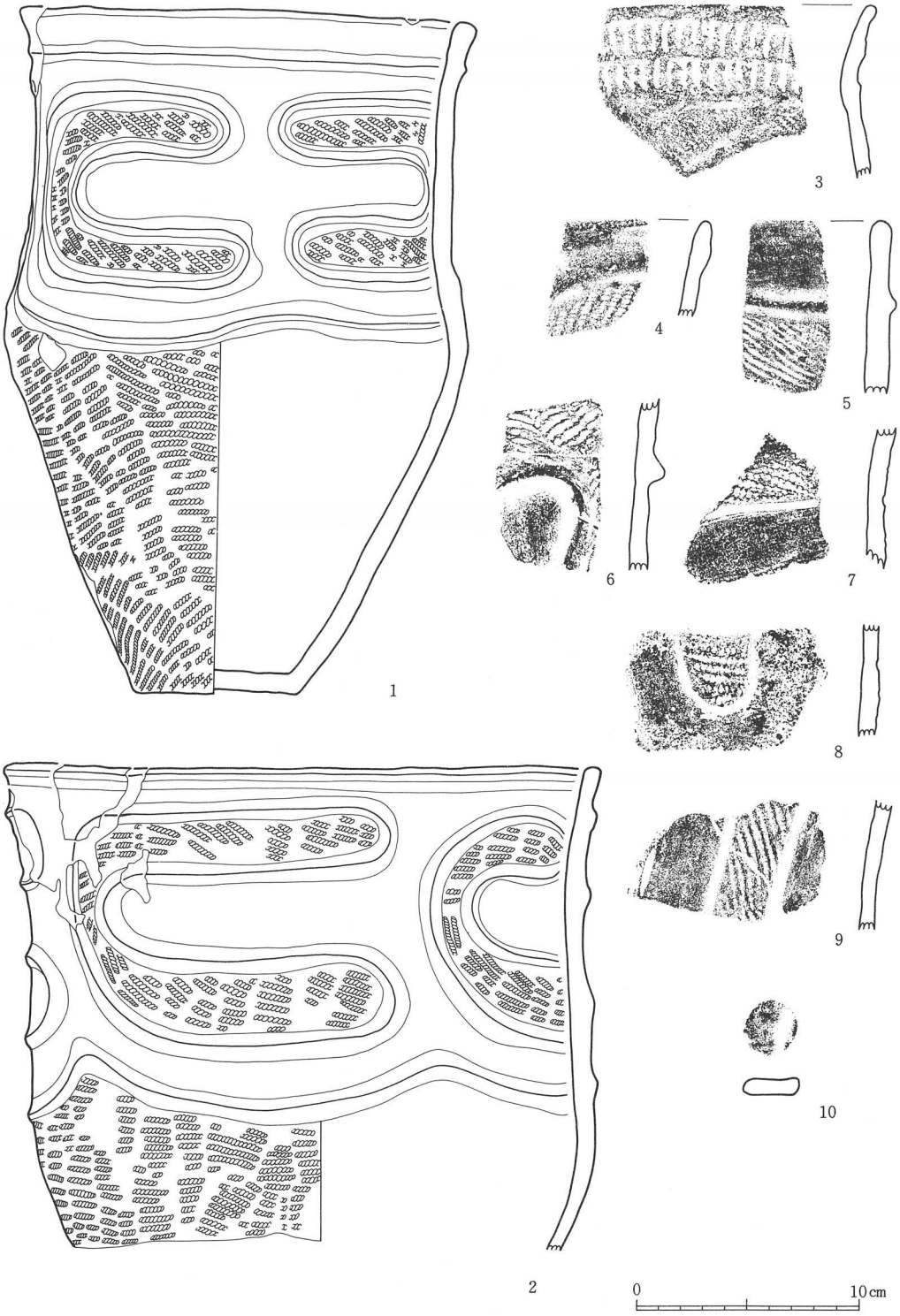


図52　ＳＩ－６竪穴住居跡出土土器（１）

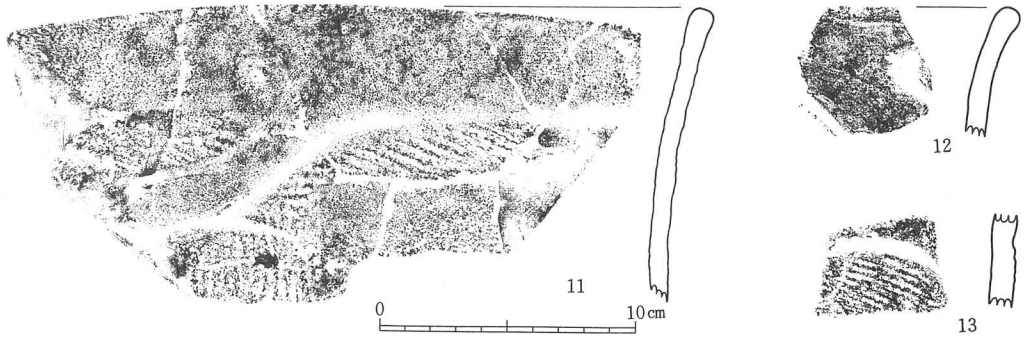


図 52，53　SI-6 竪穴住居跡出土土器観察表

番号	遺構No.	層	器　形	分　類	特　　徴	写真図版番号	番号	遺構No.	層	器　形	分　類	特　　徴	写真図版番号
1	床埋設		深鉢	II群	「C」字状文	28－2	8		床直	深鉢	II群	区画沈線 LR 縄文	28－8
2	炉埋設		〃	〃	「C」字状文	28－1	9	B 区	2	〃	〃	区画沈線 LR 縄文	28－9
3	炉（古）	P-2	〃	I 群	降帯 LR 縄文押圧	28－3	10		床	円盤状土製品			28－10
4	B 区	1	〃	II群	区画降線 LR 縄文	28－4	11	P-2	1 層	深鉢	II群	区画沈線	28－11
5	B 区	1	〃	〃	区画降線（稜線）	28－5	12		2	〃	〃	区画沈線	28－12
6	A 区	1	〃	〃	区画降帯	28－6	13	B 区	2	〃	〃	区画沈線	28－13
7	P-2	1	〃	〃	区画沈線 RL 縄文	28－7							

図53　S I - 6 竪穴住居跡出土土器（2）

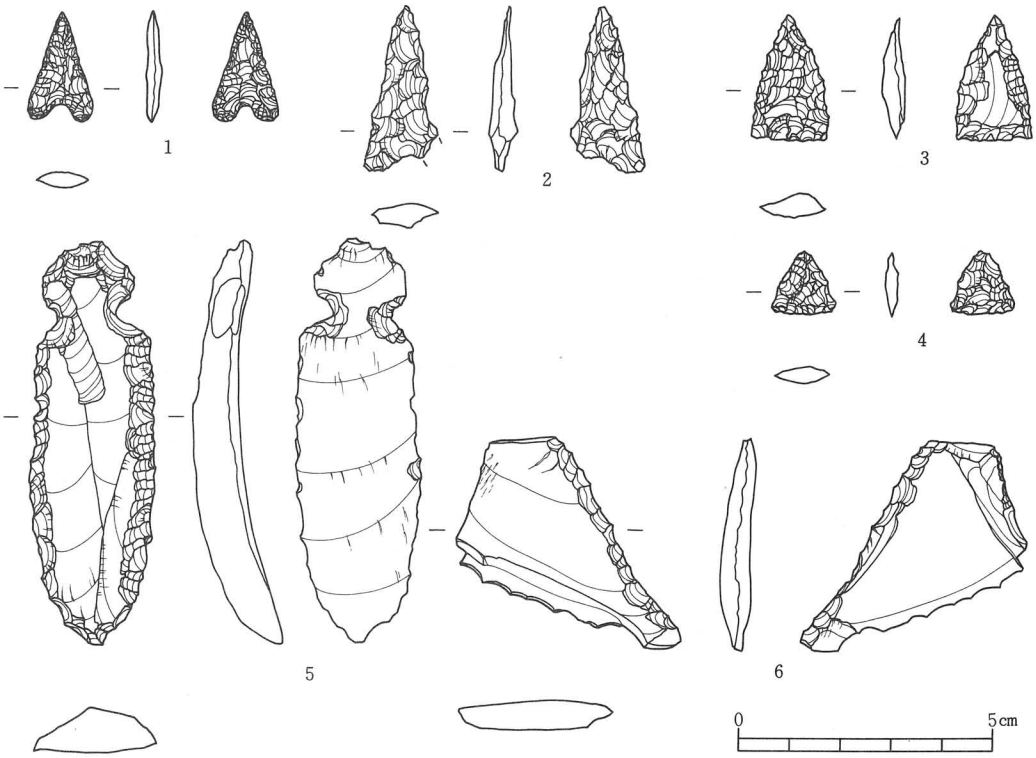


図 54　SI-6 竪穴住居跡出土石器観察表

番号	地　区	層位	器　種	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重量(g)	石　材	写真図版番号	備　考
54-1	A 区	1 層	石鏃 I B 類	2.2	1.2	0.3	0.5		39－9	
54-2	D 区	1 層	石鏃 I B 類	3.3	1.3	0.6	1.5		39－10	

図54　S I - 6 竪穴住居跡出土石器（1）

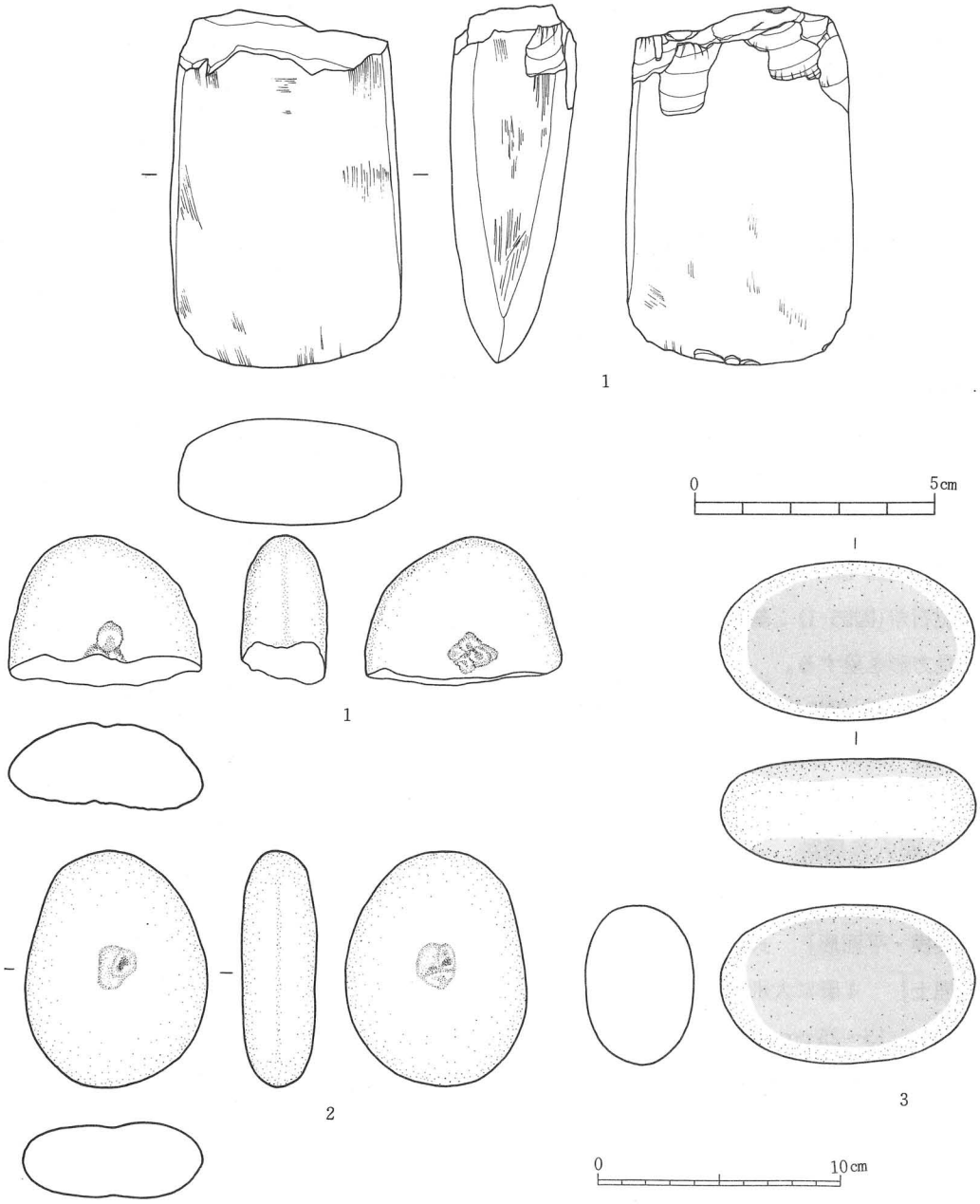


図 54，55　SI-6竪穴住居跡出土石器観察表

番号	地　区	層位	器　　種	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重量(g)	石　材	写真図版番号	備　考
54-3	C区	2層	石鏃II A類	2.5	1.5	0.5	1.3		39−11	
54-4		床直	石鏃II A類	1.3	1.2	0.54	0.3		39−12	
54-5	A区	1層	石匙I A類	4.0	1.2	0.5	19.7	頁岩	39−14	
54-6		床直	不定形石器A類	4.3	3.2	0.65	8.1		39−13	
55-1		2層	磨製石斧	7.5	4.75	2.6	141.1		39−15	

図55　S I-6竪穴住居跡出土石器（2）

図55　SI-6竪穴住居跡出土石器観察表

番号	地　区	層位	器　種	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重量(g)	石　材	使　用　痕	写真図版番号
55-1		炉石23	凹石	(63)	80	(36)	(210)		凹－両面	41－14
55-2	S-2	1層	凹石	98	75	31	310		凹－両面	41－15
55-3		床直	磨石	106	67	45	490		磨－両面	41－16

つけられその下は無文となっている。4～6は沈隆線によって縄文帯と無文帯を区画するもので、4・5は口縁部、6は胴部資料である。7～9は胴部資料で、沈線によって区画している。10は円盤状土製品で、胴部片を打ち欠いて成形している。11～13は沈線によって区画されるもので11・12は平縁な口縁部が外湾し、13は胴部資料である。

「石器」(図54・55)　石鏃4点、石匙1点、磨製石斧1点、不定形石器3点、礫石器3点が出土している。

石鏃（図54-1～4）：1・2は基部が凹基で直線的な側縁となっている。3・4は基部が平基で外湾する側縁となっている。

石匙（図54-5）：5は縦長の石匙で、二側縁構成の身部となる。

磨製石斧(図55-1)：基部を欠いているが最大巾が刃部にくるもので、横断面は上下がふくらんだ長方形を呈する。

不定形石器（図54-6）：6は側辺に両側からはいる二次加工によって刃部を作り出している。

礫石器（図55-2～4）：2・3は凹石で両面に凹部をもっている。4は磨石で両面に磨面をもっている。

SI-7 竪穴住居跡

［遺構確認］　FJ-1・2・3区に位置し、5層上面で検出された。

［規模・平面形］　長軸5.00 m、短軸5.00 m、隅丸の方形に近い円形を基調とする。

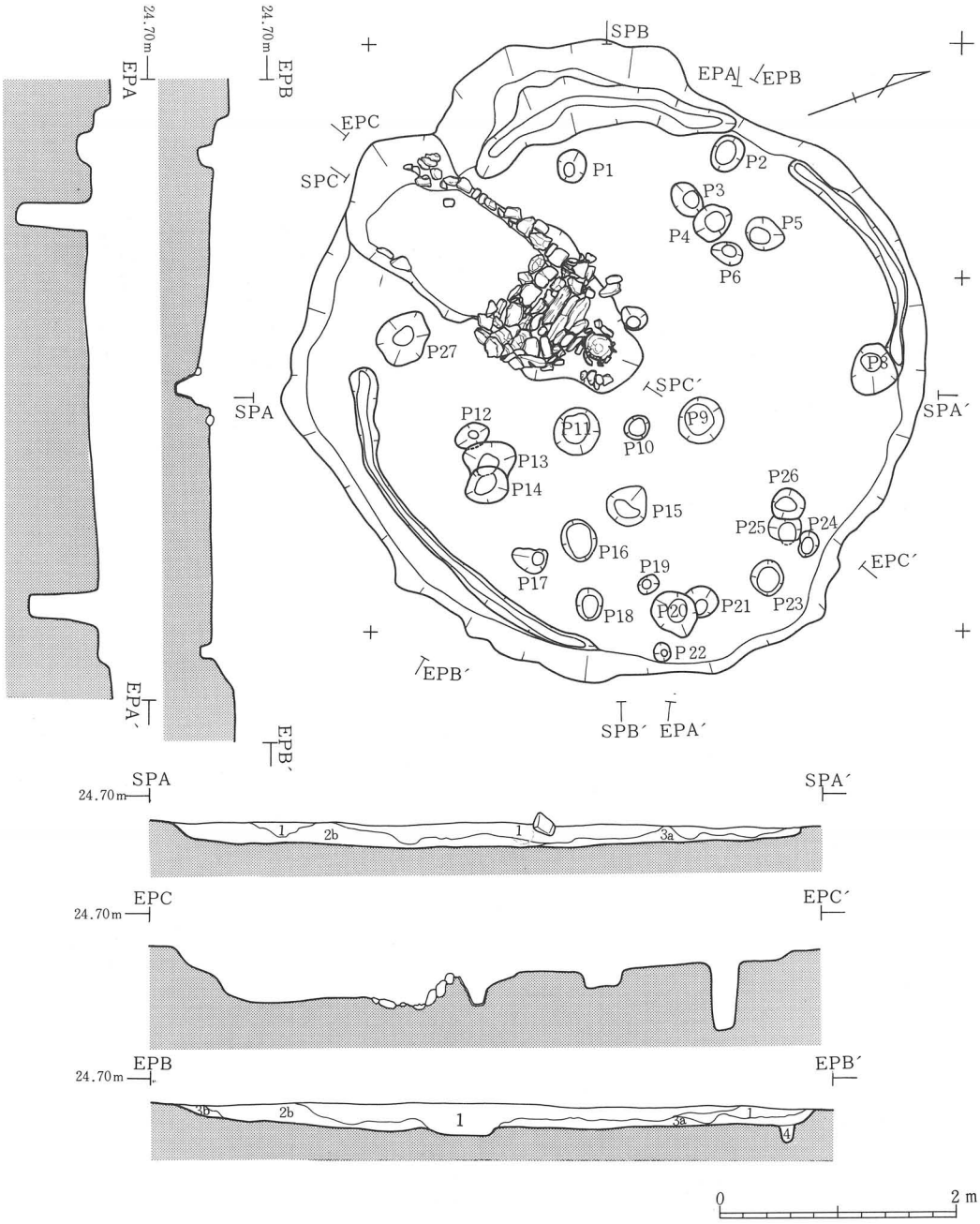
［埋土］　4層に大別される。いずれも自然堆積である。

［壁］　15～25 cm程度残存している。床面から急な角度で立ち上がっている。

［床面］　若干の凹凸はみられるが、床面レベルはほぼ一定でわずかに南に向かって傾斜している。

SI-7　住居跡ピット集計表

No	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
形状	円形	楕円形	楕円形	円形	不整円形	楕円形	隅丸方形	楕円形	円形	円形
深さ(cm)	28	14	54	63	17	21	12	59	20	7
No	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
形状	円形	楕円形	長楕円形	円形	不整円形	不整円形	不整円形	楕円形	楕円形	円形
深さ(cm)	7	28	31	58	12	10	17	13	16	61
No	21	22	23	24	25	26	27			
形状	円形	円形	円形	楕円形	方形	不整円形	不整形			
深さ(cm)	53	8	9	22	26	58				



SI－7　住居跡土層注記表

遺構 No	層	土　色	土　性	備　考	遺構 No	層	土　色	土　性	備　考
SI-7 埋土	1	黒色 10 YR2/1	シルト	カーボン粒混若干		3 a	10 YR3/1・10YR4/3	シルト	
	2 a	黒褐色 10 YR3/1	〃	〃		3 b	黒褐色 10 YR2/2	〃	
	2 b	黒褐色 10 YR3/1	〃		周溝	4	黒褐色 10 YR3/1	〃	10 YR3/2 混

図56　ＳＩ－７ 竪穴住居跡

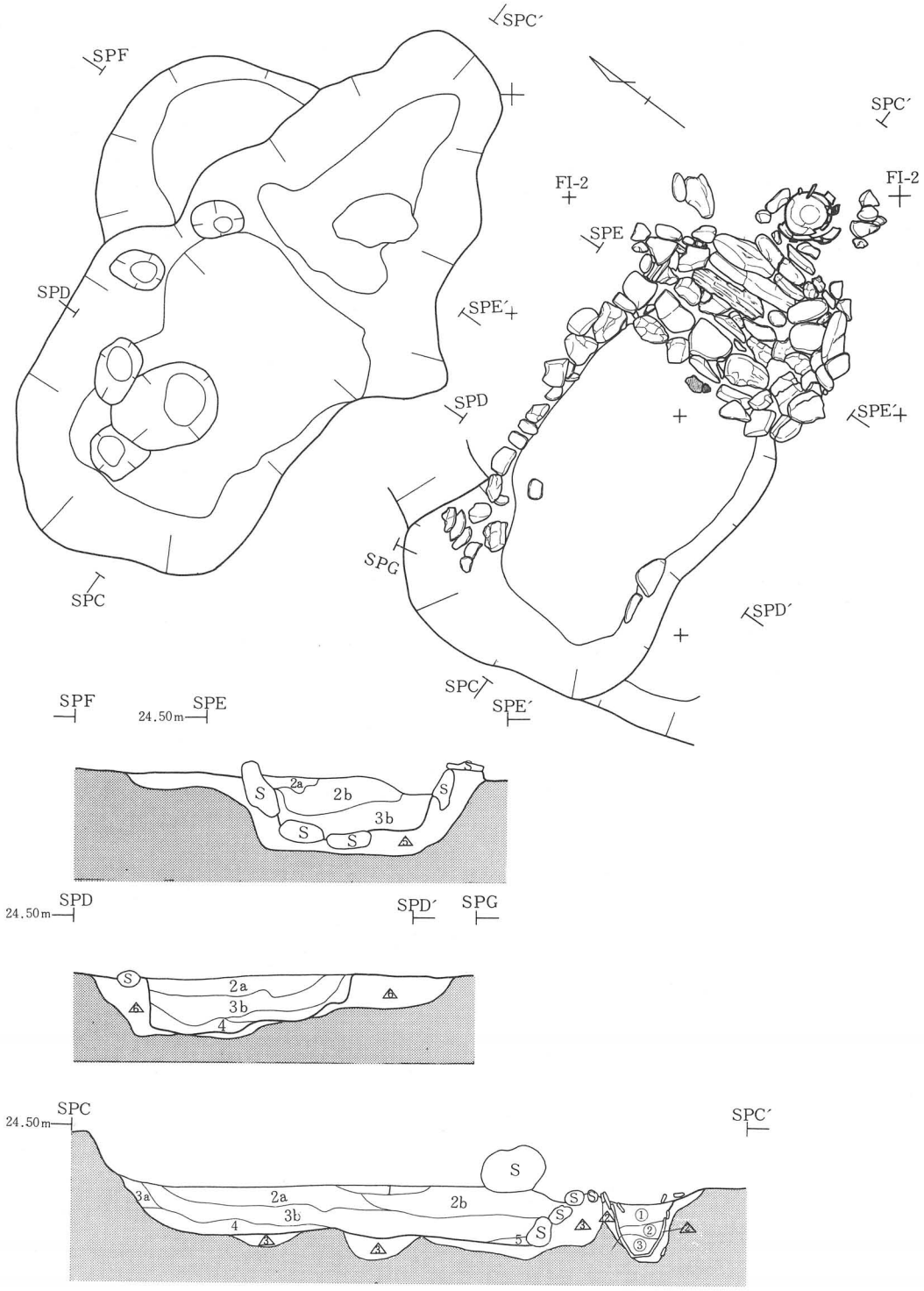


図57　SI-7竪穴住居炉跡

SI－7　炉跡土層注記表

	層	土色	土性	備考		層	土色	土性	備考
炉埋土	1	黒色 10 YR2/1	シルト	砂粒混	埋設土器埋土	①	黒褐色 10 YR2/2	シルト	砂粒混
	2a	黒褐色 10 YR2/2	〃			②	黒褐色 10 YR3/1	〃	〃
	2b	黒褐色 10 YR3/1	〃	カーボン粒多		③	暗褐色 10 YR3/3	砂質シルト	
	3a	黒褐色 10 YR2/3	〃		炉掘り方	⚠	黒色 10 YR2/1	シルト	
	3b	黒褐色 10 YR3/1	〃	カーボン粒若干混		⚠	暗オリーブ褐色 2.5 Y3/3	砂質シルト	
	4	黒褐色 10 YR2/2	〃			⚠	黒褐色 10 YR2/2	シルト	礫まじり
	5	黒褐色 10 YR3/1	〃	カーボン粒若干混		⚠	黒褐色 10 YR2/3	〃	10 YR2/2 混
						⚠	黒褐色 10 YR2/2	〃	礫まじり

［柱穴］　住居跡内から27個のピットが検出された。いずれも掘り方のみで柱痕跡は認められなかった。P4・P8・P14・P20 は炉の長軸線上から対象となる位置にあり、この 4 個のピットを結んだ線は長方形を呈し、規模も同様で配置に規則性がみられることから、4 本主柱とおもわれる。また P26 は炉の長軸線上に位置し、これも主柱となる可能性がある。

P3・P13・P21 はそれぞれ主柱と考えられるピットと重複しており、その規模も同様であることから、これも主柱と考えれば改築が行なわれている可能性もある。

［その他の施設］　北東部を除き住居跡をほぼ巡る周溝を検出している。巾 10～15 cm、深さ 10～15 cm と一定しているが、西壁では巾 30～60 cm、深さ 30 cm と大きくなっている。

炉

［位置・方位］　住居跡西部に位置しており、掘り込みの端は住居壁の一部になっている。炉の長軸方向は N-60°-E である。

［規模・平面形］　最大長 285 cm、最大幅 115 cm の長方形である。

［構造］　土器埋設石囲部、敷石石組部、掘り込み部からなる複式炉である。

〈土器埋設石囲部〉　長さ 50 cm、幅 65 cm である。埋設土器が残存し、ややくずれているが石組が巡っている。埋設土器は口縁部を欠いており、埋土内に炭化物や焼土はみられなかった。

〈敷石石組部〉　長さ 70 cm、幅 110 cm である。床面から敷石底面までの深さは約 25 cm である。底面には 20 cm 大の石が敷かれ、その上に奥壁および側壁部の石がのっている。奥壁には 30～40 cm 大の細長い石が 3 段に積まれているが、側壁では 15～20 cm 大の礫を 2 ～ 3 段積んでいる。敷石石組部と掘り込み部の境の部分には石が敷かれていない。

〈掘り込み部〉　長さ 175 cm、幅 100 cm の方形である。床面から掘り込み部までの深さは 20 cm である。西側壁上部には石組部から続く石が据えられていた。東側壁部には 2 個の石がのこり、本来は東側壁部にも石が据えられていたと思われる。

出土遺物

「土器」（図58）　1 は炉の埋設土器で、口縁部を1/2程度欠いているがほぼ完形のものである。胴中央部でわずかにくびれ上部は内湾しながら口縁部がわずかに外湾している。平縁な口縁部

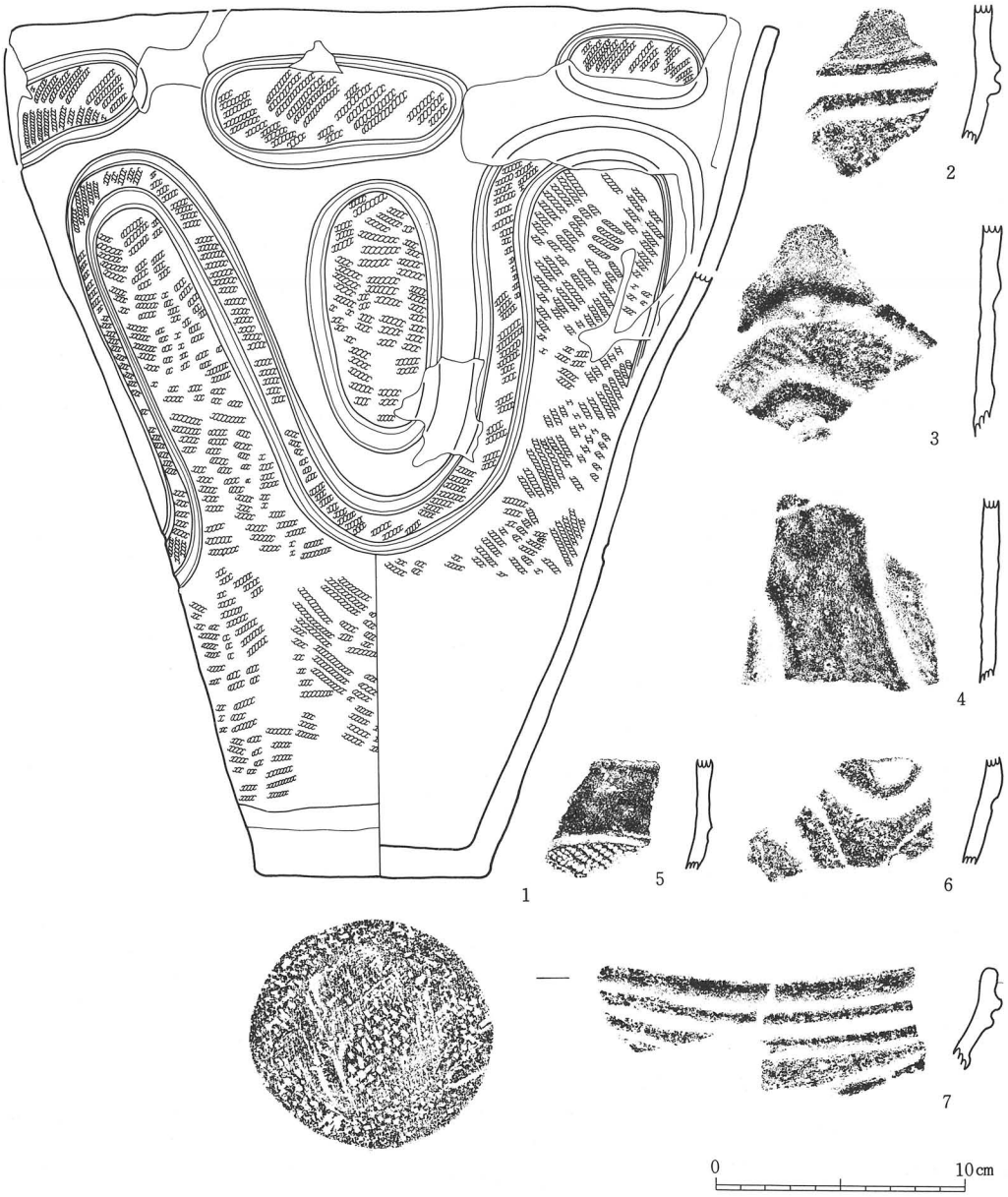


図 58　SI-7 竪穴住居跡出土土器観察表

番号	地　区	層	器　形	分　類	特　　徴	写真図版番号	番号	地　区	層	器　形	分　類	特　　徴	写真図版番号
1	炉埋設		深鉢	II群	楕円区画文	29－1	5	A区	2	深鉢	II群	隆線（稜線）区画・RL縄文	29－5
2	D区	1	〃	〃	沈隆線区画	29－2	6	C区	〃	〃	〃	沈線区画	29－6
3	C区	1.2	〃	〃	沈隆線区画	29－3	7	炉内		〃	〃	沈隆線区画	29－7
4	C区	2	〃	〃	沈線区画	29－4							

図58　SI-7竪穴住居跡出土土器

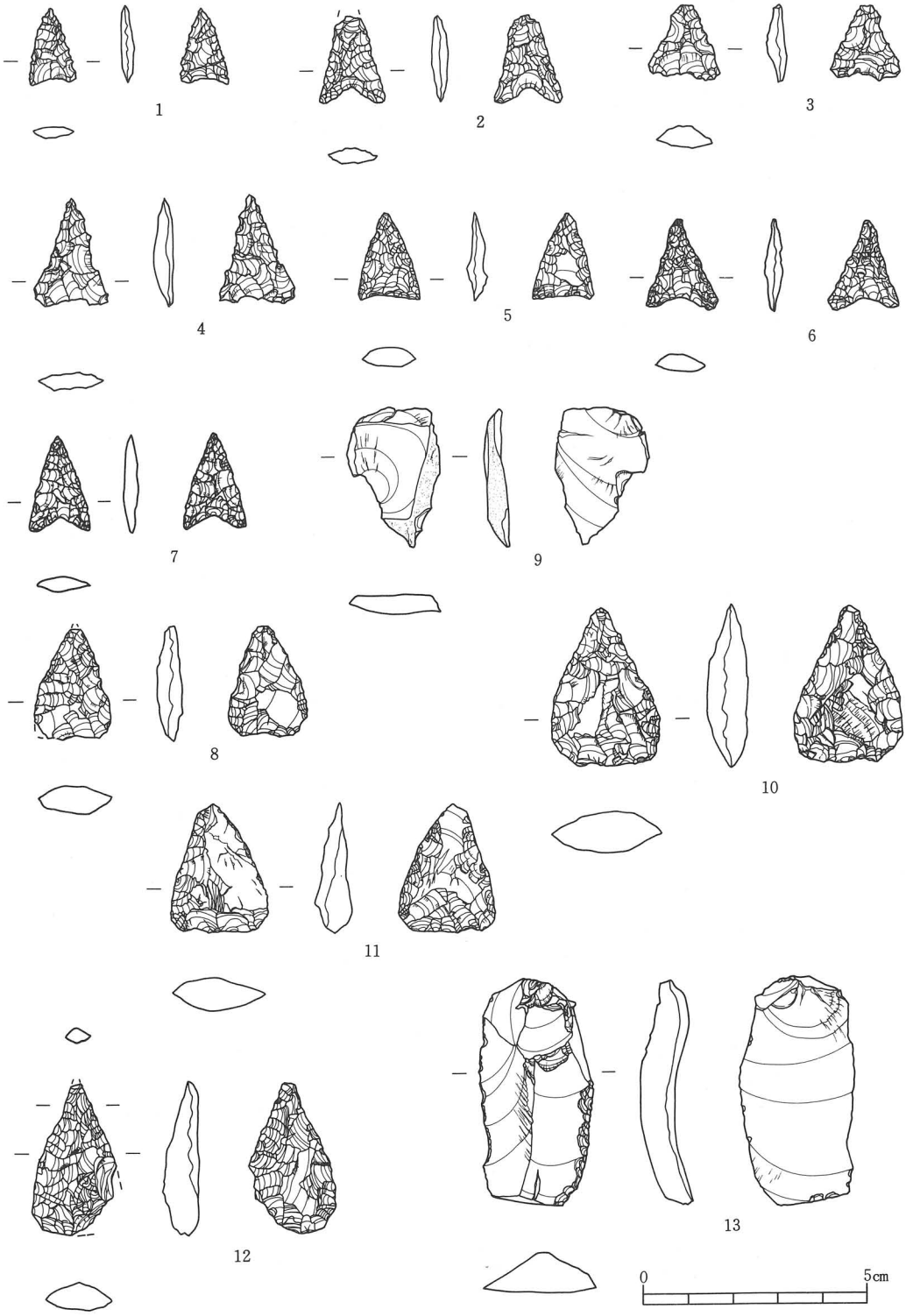


図59　SI-7竪穴住居跡出土石器（1）

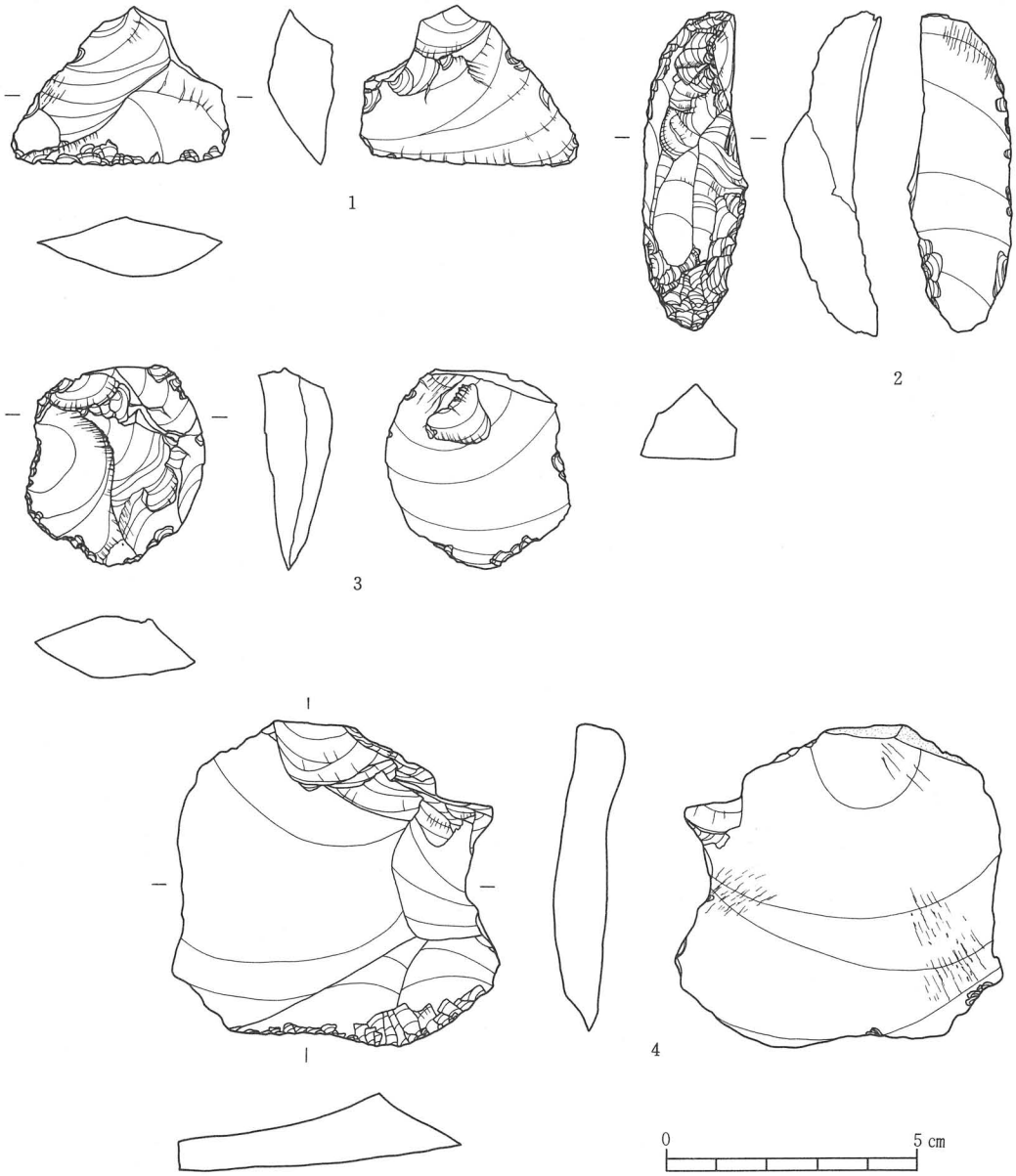
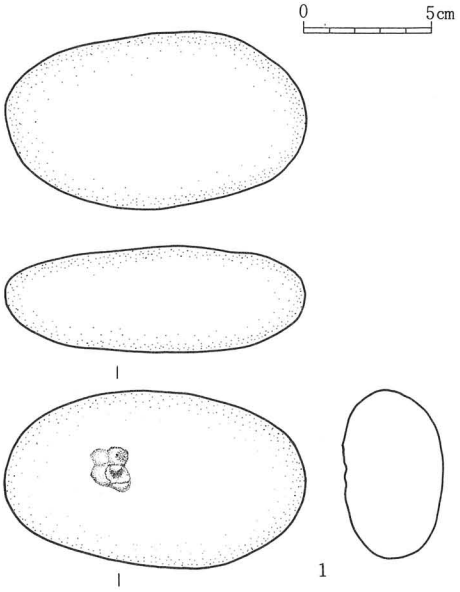


図 59　SI-７竪穴住居跡出土石器観察表

番号	地　区	層位	器　　種	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重量(g)	石　材	写真図版番号	備　考
59-1	A区	1層	石鏃ⅠA類	1.8	1.1	0.3	0.4		39−16	
59-2		埋土中	石鏃ⅠB類	(2.0)	1.5	0.4	0.8		39−17	
59-3	C区	2層	石鏃ⅠB類	1.7	1.6	0.42	0.9	頁岩	39−18	
59-4	A区	1層	石鏃ⅠB類	2.5	1.7	0.45	0.9	頁岩	39−19	
59-5		S-3	石鏃ⅠB類	2.1	1.5	0.37	0.8		39−20	
59-6	C区	1層	石鏃ⅠB類	2.0	1.55	0.36	0.8		39−21	
59-7	C区	2層	石鏃ⅠB類	2.1	1.3	0.3	0.6	頁岩	39−22	
59-8		1層	石鏃ⅡA類	(2.1)	1.3	0.3	2.2		39−25	
59-9		S-4	不定形石器C類	3.1	2.1	0.5	2.6		39−26	

図60　SI-７竪穴住居跡出土石器（２）



の下に沈線によって横位の楕円区画文が描かれ縄文が充填されている。その下には縄文の充填された波状文の間に縦位の楕円区画文が4単位描かれている。2・3・7は沈隆線によって縄文帯と無文帯が区画されるもので、4～6・9・10は沈線によって区画されている。

「石器」(図59・60・61)　石鏃10点、尖頭器1点、石錐1点、スクレイパー2点、不定形石器3点、石製品1点、礫石器1点が出土している。

石鏃（図59-1～8）：基部形態は8が平基のほかはすべて凹基で、2・6・7は深い抉りがはいっている。側縁の形状は直線のものが多いが、1・5・8は外湾気味になっている。

図61　SI-7竪穴住居跡出土石器（3）

図59、60　SI-7竪穴住居跡出土石器観察表

番号	地区	層位	器種	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重量(g)	石材	写真図版番号	備考
59-10		1層	尖頭器	3.5	2.4	0.9	7.2	頁岩	39－23	
59-11	C区	床直	尖頭器	2.9	2.1	0.8	3.8		39－24	
59-12	C区	1層	石錐II類	(3.5)	1.8	0.72	4.4		39－27	
59-13	D区	2層	不定形石器C類	5.1	2.6	0.9	12.4	頁岩	40－1	
60 1		2層	不定形石器C類	3.2	4.4	1.27	12.0	頁岩	40－2	
60-2	C区	1層	スクレイパー	6.5	2.1	1.5	21.4	頁岩	40－4	
60-3		2層	不定形石器A類	4.0	3.6	1.3	14.9	頁岩	40－3	
60-4		2層	不定形石器A類	6.6	6.5	1.14	54.1		40－5	

図61　SI-7竪穴住居跡出土石器観察表

番号	地　区	層位	器　種	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重量(g)	石　材	使　用　痕	写真図版番号
61-1		炉石21	凹石	119	69	42	500		凹－片面	41－17
61-2		周溝内	石製品	424	80	45		珪化木		44－1

尖頭器（図59-10．11）：小型のもので平坦な基部となっている。側縁の形状は外湾しており、やや厚みがある。

石錐（図59-12）：尖端部を欠いているが両面加工のものである。

スクレイパー（図60-2．3）：2は両側縁加工によって尖端部が作り出されている。細身で小型のものである。3は片面にのみ二次加工が施され刃部が作られている。

不定形石器（図59-9・13・図60-1．4）：いずれも素材の形態をあまり変えずに、側縁の一部に二次加工を施して刃部を作り出している。

石製品(図61-2)：炉西側の周構内から出土している。珪化木を加工せずにそのまま利用した石柱状のもので端部は磨耗している。

礫石器（図61-1）：凹石で片面に浅い凹みがはいっている。

SI-8 竪穴住居跡

［遺構確認］　FM-2区に位置し、5層上面で検出された。炉の造り替えが行なわれ、それに伴って改築されている可能性もある。

［規模・平面形］　長軸5.00 m、短軸4.40 m、円形を基調とする。

［埋土］　3層に大別される。いずれも自然堆積である。

［壁］　15～25 cm程度残存している。床面から急な角度で立ち上がっている。

［床面］　撹乱によって床面がかなり影響を受けており、明確な床面は北側の一部にしか残っていない。

［柱穴］　住居跡内から10個のピットが検出された。いずれも掘り方のみで柱痕跡は認められなかった。P1・P4・P6は炉の長軸線上から対象となる位置にある。この3個のピットを結んだ線は方形を呈するようであり、4本主柱だった可能性がある。長軸線上にあるP2とP5は補助的な柱としての機能が考えられる。

［その他の施設］　東・西壁の一部に周溝を検出している。巾20～25 cm、深さ10 cmと一定しているが、西壁部では巾40 cmと広くなっている。

［埋設土器］　炉の長軸線上の床面北側に検出された。径40 cm、深さ20 cm程の掘り方のなかに深鉢型土器の胴部を埋設している。

炉

［位置・方位］　住居跡ほぼ中央に位置している。炉の長軸方向はN-16°-Wである。炉跡の西

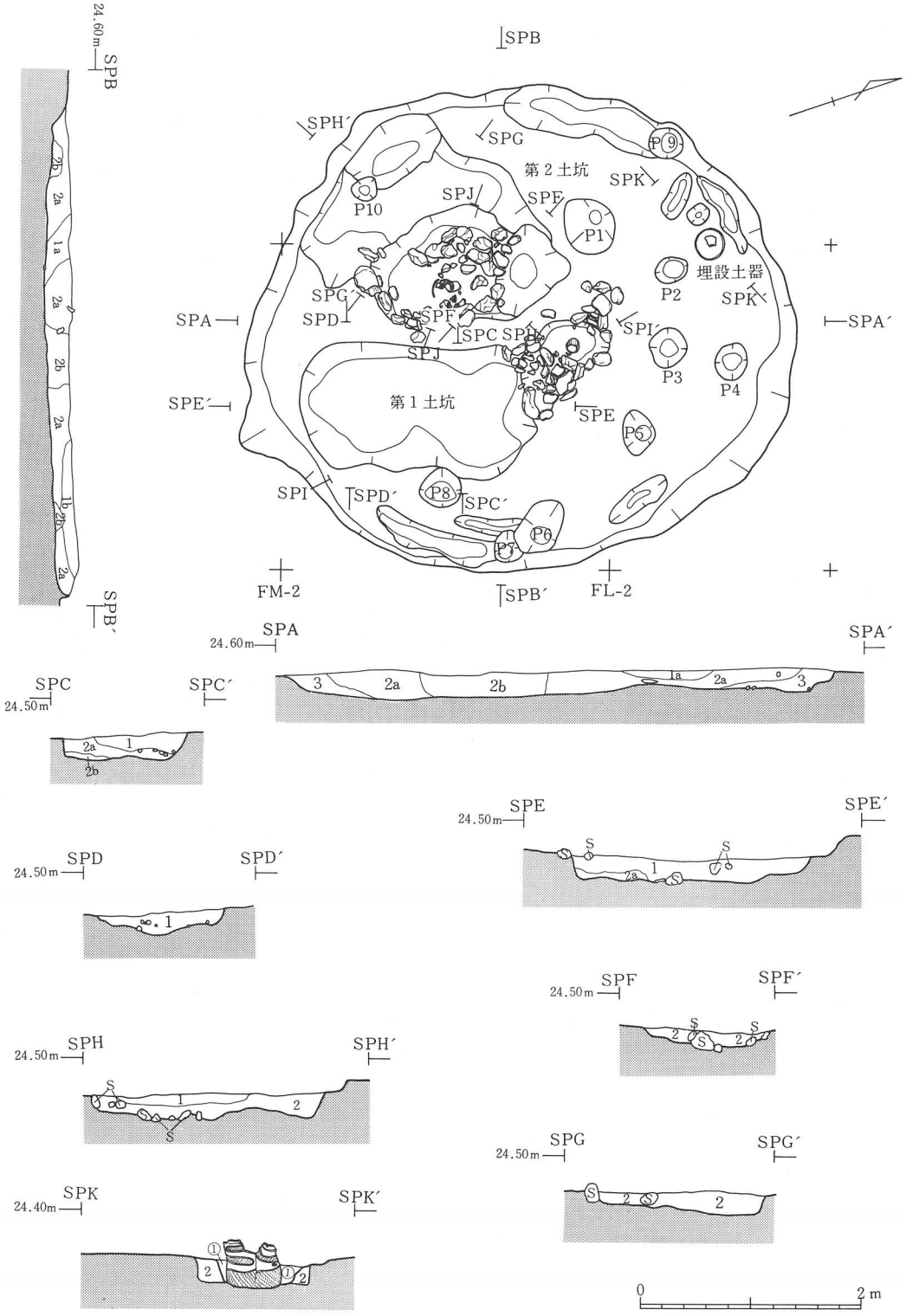
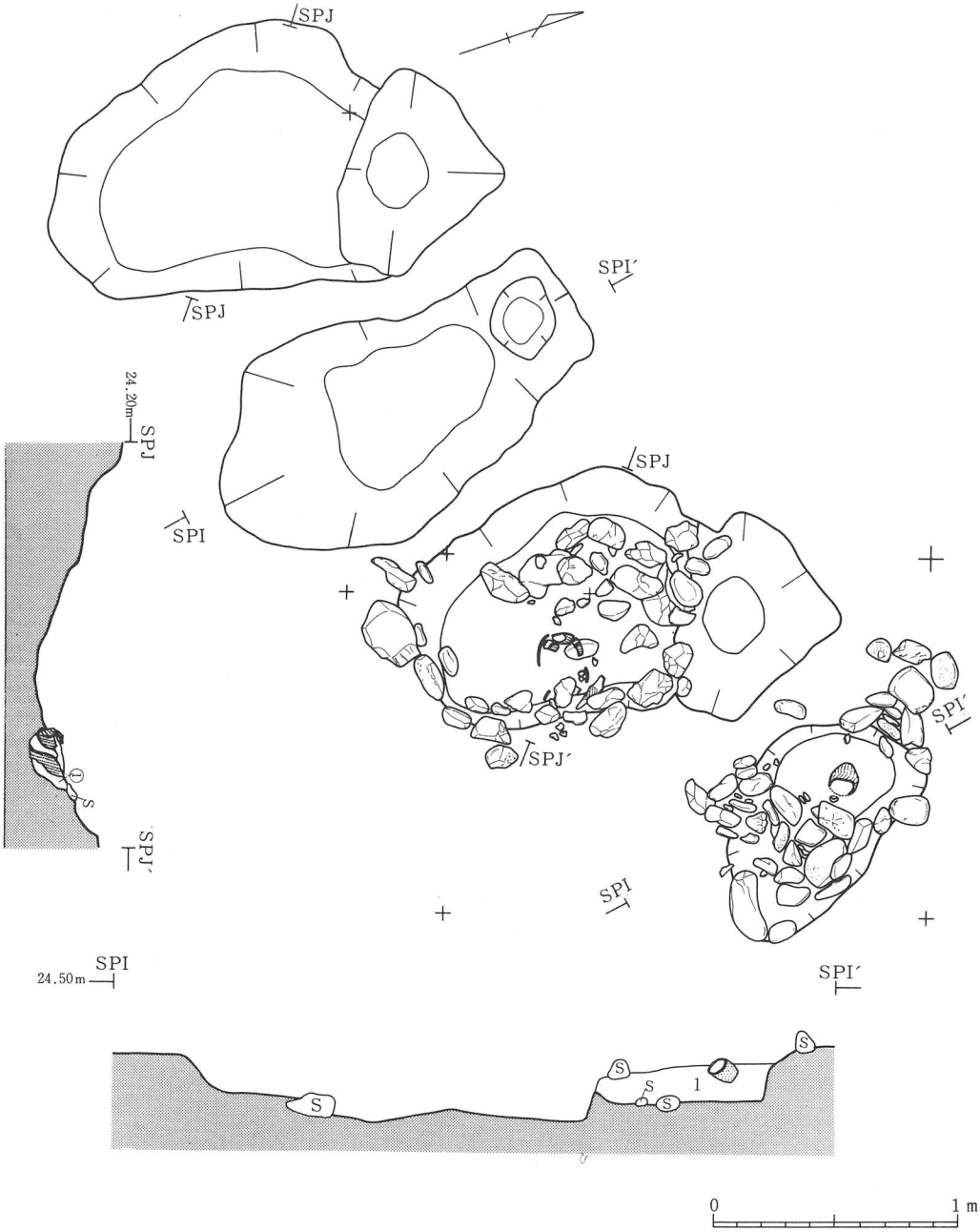


図62　ＳＩ－８竪穴住居跡



SI－8　炉跡土層注記表

	層	土　色	土性	備　考
炉埋土	1	黒色 10 YR2/1	シルト	多量の礫まじり

図63　SI－8 竪穴住居炉跡

側に古い炉跡と考えられる土坑があり、炉の造り替えが行なわれている可能性もある。

［規模・平面形］　残存長 120 cm、残存幅 70 cm で長方形である。

［構造］　土器埋設石囲部、敷石石組部、掘り込み部からなる複式炉であったとおもわれるが、敷石石組部・掘り込み部ともにほとんど壊されており、明確ではない。

〈土器埋設石囲部〉　長さ 45 cm、巾 50 cm、深さ 20 cm の掘り方のみで埋設土器は残存していない。埋土上面に小型鉢が出土している。

『炉（古）』（第 2 土坑）

［位置・方位］　住居跡西側に位置する。長軸方向は N-14°-E である。

［規模・平面形］　残存長 180 cm、巾 100 cm、深さは 10～30 cm を計る。

［構造］　複式炉であったとおもわれるがほとんど壊されており、炉石と考えられる石が残っている程度であまり明確ではない。

出土遺物

「土器」（図64・図65）　図64-1は外湾する口縁部の破片資料で、全体の文様構成は不明であるが、沈線による「ᔕ」字状文が描かれ縄文が充塡されているようである。単位文様間の上部には沈線によって「Y」字状の区画が描かれている。2 は炉（古）と考えられる土坑の埋土中のもので胴下部を欠いている。丸みをもった胴部が上部でくびれ、緩やかな波状を呈する口縁部は外湾している。沈線による「ᔕ」字状文が 2 単位描かれ縄文が充塡されている。単位文様の間には「◠」状の沈線区画が描かれ縄文が充塡されている。胴部には沈線が巡りその下は地文となっている。3 は床面に埋設れさていた土器で胴下部を欠いている。口縁部は平縁でゆるく外湾している。断面三角の稜線をもった隆線によって、分節波濤文が 4 単位描かれている。縄文帯は「雁股状分節波濤文」となっている。胴部には稜線をもった隆線が巡り、その下は地文となっている。8 は炉（新）の埋土中のもので、地文のみB群の小型の鉢である。

SI-8　住居跡ピット集計表

No	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
形状	円形	楕円形	隅丸方形	楕円形	不整形	不整形	円形	不整円形	円形	不整円形
深さ(cm)	48	37	24	35	43	46	27	7	23	29

SI－8　住居跡土層注記表

遺構 No	層	土　色	土　性	備　考	遺構 No	層	土　色	土　性	備　考
SI-8 埋土	1 a	黒色 10 YR2/1	シルト		第 1 土坑埋土	1	黒褐色 10 YR3/1	砂質シルト	礫まじり
	1 b	黒褐色 10 YR3/1	〃			2 a	褐色 10 YR4/6	礫砂	
	2 a	黒褐色 10 YR3/1	〃	10 YR2/2 混		2 b	黒褐色 10 YR2/2	〃	
	2 b	黄褐色 10 YR5/6	礫層	地山土	第 2 土坑埋土	1	黒褐色 10 YR3/1	砂質シルト	礫まじり
	2 c	黒色 10 YR3/1	シルト			2	黒色 10 YR2/1	〃	〃
	3	黒褐色 10 YR2/2	〃	礫まじり					
埋設土器掘り方	①	黒色 10 YR2/1	砂質シルト						
	2	にぶい黄褐色 10 YR4/4	礫	地山土					

図64　SI-8 竪穴住居跡出土土器（1）

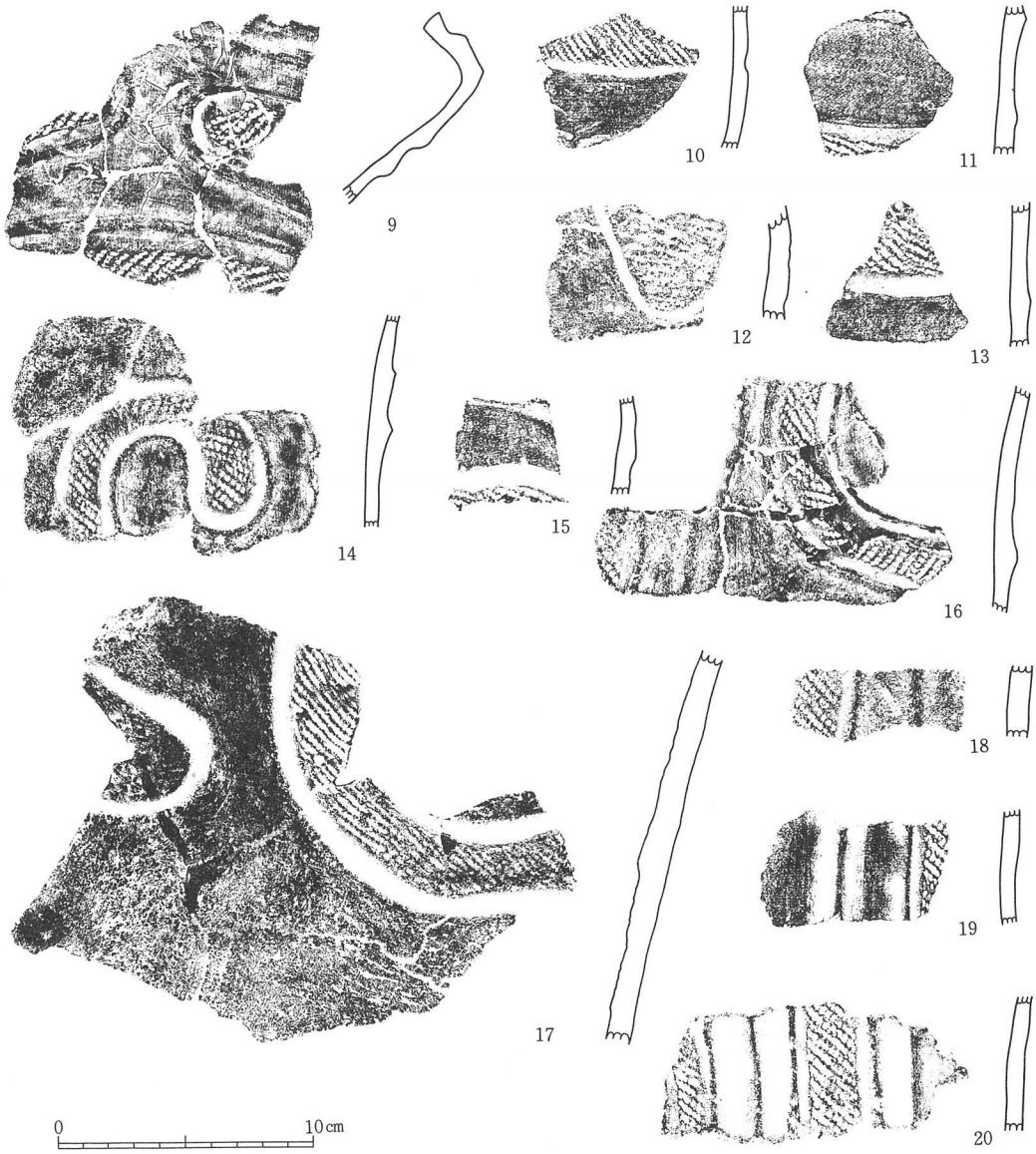


図 64、65　SI-8 竪穴住居跡出土土器観察表

番号	地　区	層	器　形	分　類	特　　徴	写真図版番号	番号	地　区	層	器　形	分　類	特　　徴	写真図版番号
1	P-15		深鉢	II群	「S」字状文	30－7	11	P-14	1	深鉢	II群	隆線(稜線)区画・LR 縄文	31－4
2			〃	〃	「S」字状文	30－1	12	B 区	2	〃	〃	沈線区画	31－5
3	床埋設		〃	〃	分節波濤文	31－1	13	A 区	1	〃	〃	沈線区画・LR 縄文	31－6
4		1.2	〃	〃	沈線区画	30－3	14	P-23		〃	〃	隆線(稜線)区画、RL 縄文	31－7
5	C 区	1	〃	〃	沈線区画	30－4	15		3	〃	〃	沈隆線区画・LR 縄文	31－8
6	P-4	1	〃	B 群	RL、LR 縄文	30－5	16	P-18、22	1~3	〃	〃	隆線(稜線)区画・RL 縄文	31－9
7	P-1	1	〃	II群	隆線(稜線)区画	30－6	17	P-25		〃	〃	沈隆線区画・RL 縄文	31－10
8	炉(新)内		小型鉢	B 群	RL 縄文	30－2	18			〃	〃	隆線(稜線)区画・RL 縄文	
9			鉢	II群	隆線(稜線)区画・LR 縄文	31－2	19	P-19	3	〃	〃	隆線(稜線)区画・RL 縄文	31－11
10	P-6	1	深鉢	〃	沈隆線区画・RL 縄文	31－3	20	P-24		〃	〃	隆線(稜線)区画・RL 縄文	31－12

図65　SI-8 竪穴住居跡出土土器（2）

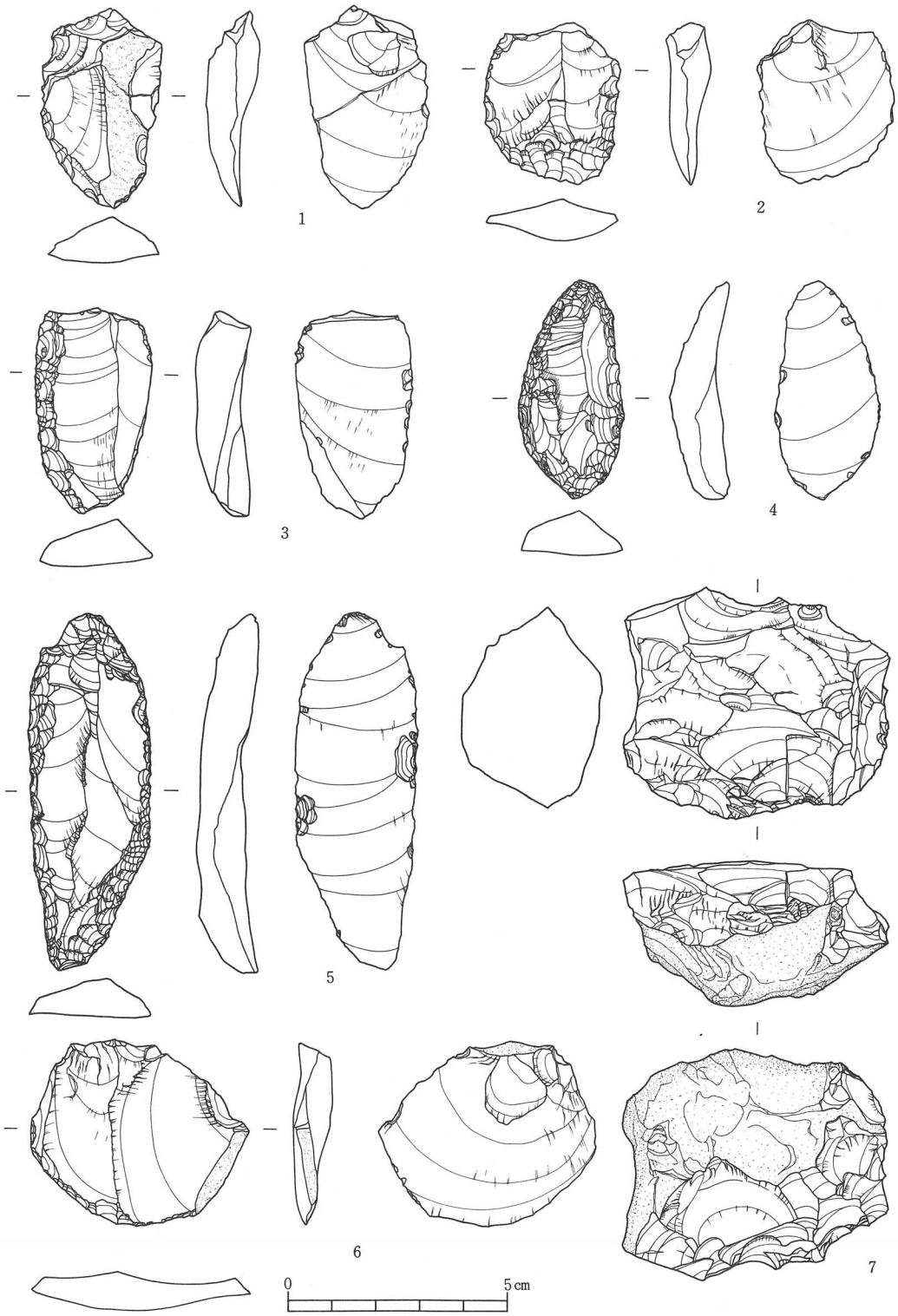


図66　SI-8 竪穴住居跡出土石器（1）

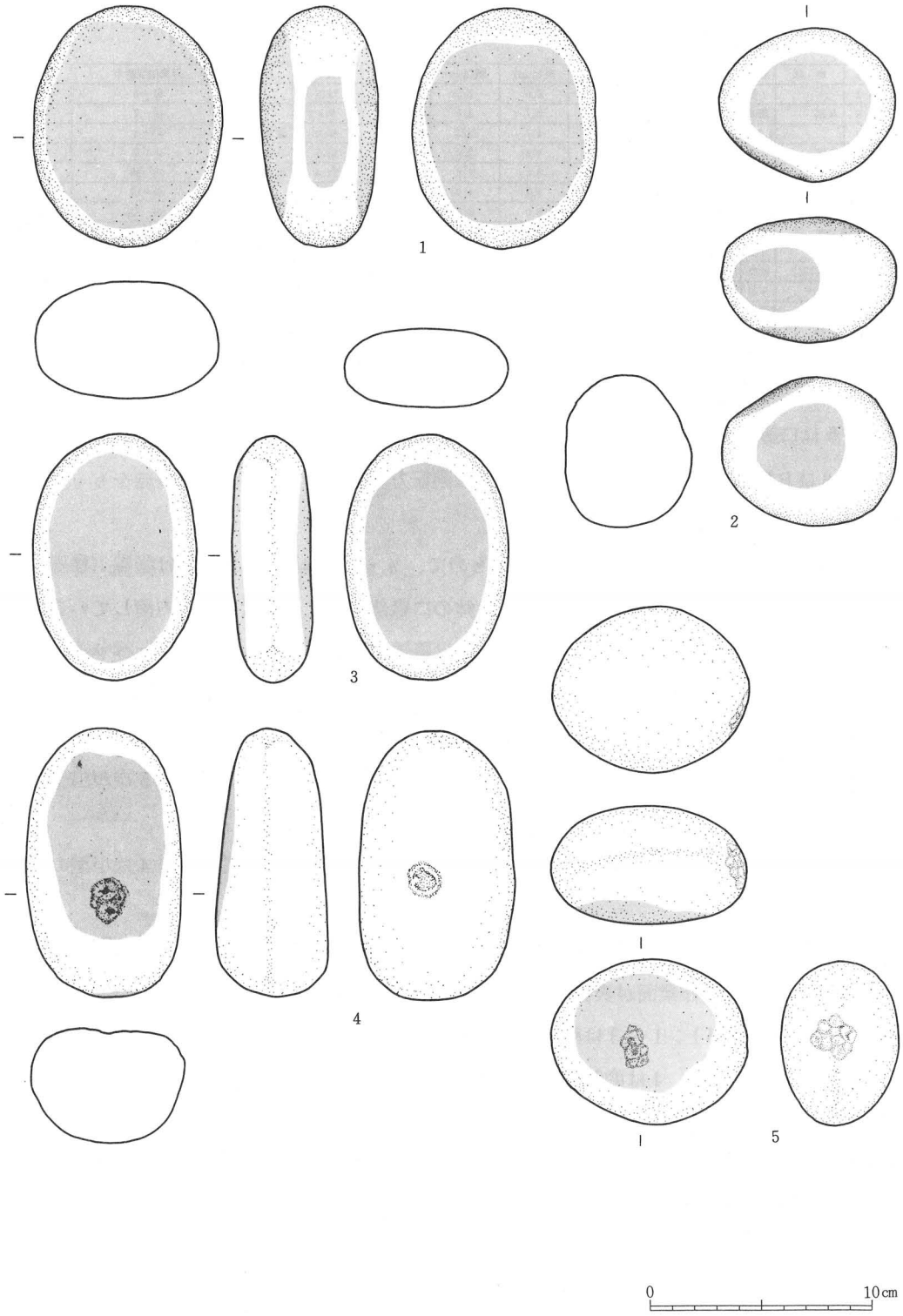


図67　SI-8 竪穴住居跡出土石器（2）

図 66、67　SI-8 竪穴住居跡出土石器観察表

番号	地　区	層位	器　　種	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重量(g)	石　材	写真図版番号	備　考
66-1		1層	不定形石器B類	4.5	2.2	1.15	11.8		40－6	ⅡC類
66-2	A区	床直	不定形石器A類	3.7	3.0	0.95	9.8		40－7	
66-3		1.2層	不定形石器A類	4.7	2.6	1.1	15.0	頁岩	40－8	
66-4	B区	2層	スクレイパー	4.8	2.4	1.1	12.6	頁岩	40－9	
66-5	B区	2層	スクレイパー	8.2	2.8	1.1	24.4	頁岩	40－10	
66-6	B区	2層	不定形石器A類	4.2	4.9	0.9	14.2		40－11	
66-7		1層	石核	6.0	5.2	3.3	112.9		40－12	
番号	地　区	層位	器　　種	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重量(g)	石　材	使　用　痕	写真図版番号
67-1	S-3	床直	磨石	110	84	53	740			41－18
67-2	C区SK2	底面	磨石	80	69	57	440			41－19
67-3	S-7	1層	磨石	113	74	36	500			40－20
67-4		炉石12(新)	磨凹石	123	70	49	690			41－21
67-5	S-16		磨凹敲石	89	74	54	490			41－22

4～5は口縁部資料で、6が内湾するほかは外湾している。4・5は沈線によって区画されている。6はB群の土器で口縁文と胴部で縄文の回転方向を変えている。7は稜線をもった隆線によって区画している。

図65-10・13・15・17は沈隆線区画によるもので、9・11・14・16・18～20は隆線（稜線）によって無文帯と縄文帯を区画している。9は鉢の口縁部で「く」字状に強く内湾している。巾広の無文帯と内面はよく磨かれている。14・16は隆線（稜線）によってアルファベット文系の区画が描かれ、17は沈隆線によって同様の区画がされている。18～20は縦位の隆線（稜線）区画の間に縄文が施文されており、無文帯はよく磨かれている。

「石器」（図66・67）　スクレイパー2点、不定形石器4点、石核1点、礫石器5点が出土している。

スクレイパー（図66-4．5）：両側縁加工によって尖端部が作り出されている。4は小型のものである。

不定形石器（図66-1～3．6）：片面の側縁の一部に二次加工が施され刃部が作られている。

石核（図66-7）：剥離作業面が表裏二面にみられるものである。

礫石器（図67-1～5）：1～3は磨石で、1・2は両面及び側面に磨面を持っている。3は両面に磨面をもっている。4は磨凹石で、一磨面と両面に凹部をもっている。5は磨面敲石で磨面と凹部が同じ面にある。長軸の一端に敲き痕跡がみられる。

②土坑群

調査区全域で100基あまり検出されているが、倒木等の影響によると考えられるものを除き、遺構ととらえられた40基についてとりあげる。

形態については、円形・楕円形・不整の円形あるいは、それらを基調としたものが中心となっている。規模は、長軸が100～150 cm、短軸が80～120 cmの範囲に入るものが多くなってい

る。埋土については、自然堆積のものが一般的であり、人為的に埋め戻されたような状況を呈するものはみられない。

遺構の性格上、全体的に出土遺物は多くないが、時期については縄文時代のものと考える。この内特徴的な2基の土坑以外は表記載とする。

〈SK66〉 FV-9区で検出された(図69)。長軸130×短軸120 cmの不整の方形を呈する。深さは10～15 cm程で、底面はほぼ平坦である。東半部に、15～30 cm大の礫13個が重なるように出土し、周辺に焼土や炭化物が拡がっていた。土坑底面には火熱をうけた跡はみられないが、礫は火熱を受けて変色している。検出状況からみて、土坑内で直接火が焚かれたのではなく、二次的に投げ込まれたものと考えられる。出土遺物はなかった。

〈SK73〉 FJ-4区、SI-7竪穴住居跡の東で検出された(図70)。長軸130×短軸120 cmの隅丸の方形を呈する。深さは20 cm程で、底面はほぼ平坦である。出土遺物としては、土器（図72-12～17)、石器（図73-4・6）がある。この他に図示することはできなかったが、火熱を受けて劣化した剝片（頁岩）がまとまって出土しているが接合はしなかった。

土坑群出土遺物

「土器」(図72) 1は隆帯の貼りつけによって肥圧させた口唇部に弧状の押圧縄文がつけられ、その下に縦位の押圧縄文が巡り体部には弧状の押圧縄文が施文されている。2は小突起状の波状口縁で、隆線に沿って縄文が押圧されている。4はボタン状の貼りつけ文から隆帯が垂下し、これに沈線が沿っている。5～7は同一固体の資料である。縦位に縄文の押圧された弧状の隆線文と隆線の両側に沿って縄文が押圧され、地文には縄文が施文されている。8～13・15・16は沈線によって縄文帯と無文帯を区画している。13は口縁部資料で巾の広い沈線によって区画されている。14・17は隆線（稜線）によって区画され、波状口縁が内湾気味に立ち上がっている。

「石器」 石鏃4点、石匙1点、不定形石器4点、石核1点、石製品1点、礫石器1点が出土している。

石鏃（図73-1・2)：1・2は基部の形態が凹基となるもので、深い抉りがはいっている。

尖頭器(図73-3)：3は小型のものであるが二次加工がほぼ表裏全面に及び、槍形をした尖頭部をもつ有茎のものである。

石匙(図73-5)：三縁辺構成の横型の石匙で大きさに比べて抉りがあさく小さなつまみ部となっている。

不定形石器（図73-6．7・図74-1．2)： 6は両側縁に両面加工によって刃部を作り出している。7は素材の形態を変えずに一側縁に二次加工を施して刃部を作り出している。

石核（図73-8)：剝離作業面が表裏二面にみられるものである。

石製品（図75-2）：珪化木を加工せずにそのままもちいた石柱状のものである。

礫石器（図74-1～3．図75-1）：図74-1は凹石で両面に深い凹部がある。2は磨石で三角形状の石の底面と一側面に磨面がある。3は磨敲石で両面と一側面に磨面があり、長軸の一端に敲き痕跡がみられる。図75-1は磨石で両面と一側面に磨面がある。

③溝跡

調査区東南部、FN-15～FX-11区にかけて検出された。巾40～180cm、深さ5～20cmを計る。底面のレベルは南に向かって緩やかに傾斜している。埋土は黒色10YR2/1砂質シルトの単層である。出土遺物としては、縄文土器片がある。

土坑土層注記表

図版No.	土坑No.	層	土　色	土　性	備　考	図版No.	土坑No.	層	土　色	土　性	備　考
図68	SK8	1	黒褐色 10 YR2/3	砂質シルト		図69	SK65		黒色 10 YR2/1	シルク	底面は砂層面となる
		2	黒褐色 10 YR2/2	〃		〃	SK66		黒色 10 YR2/1	〃	カーボン・焼土粒混じる
〃	SK11	1	黒褐色 10 YR2/2	〃		図70	SK67		黒色 10 YR2/1	〃	
		2	暗褐色 10 YR3/3	〃		〃	SK68		黒褐色 10 YR2/2	〃	10 YR2/1 が混じる
		3	黒褐色 10 YR3/2	〃		〃	SK69		黒褐色 10 YR2/2	〃	10 YR4/4 が若干混じる
〃	SK12		黒褐色 10 YR2/2	〃		〃	SK72		黒褐色 10 YR2/2	〃	
〃	SK13	1	黒色 10 YR2/1	シルト		〃	SK76	1	黒色 10 YR2/1	〃	
		2	黒褐色 10 YR3/1	〃				2	暗褐色 10 YR3/3	〃	10 YR2/1 が若干混じる
		3	黒褐色 10 YR2/3	〃		〃	SK74		黒褐色 10 YR2/2	〃	10 YR4/4 が混じる
〃	SK16		10 YR2/1 にぶい黄褐色 10 YR4/3	〃		〃	SK75		黒褐色 10 YR2/2	〃	10 YR4/4 が混じる
〃	SK17	1	黒色 10 YR2/1	〃		〃	SK73		黒色 10 YR2/1	〃	10 YR4/3 が混じる
		2	黒褐色 10 YR2/2	〃		〃	SK77		黒褐色 10 YR2/2	〃	
〃	SK24	1	黒色 10 YR2/1	〃		〃	SK79		黒褐色 10 YR3/1	〃	
		2	にぶい黄褐色 10 YR4/3	〃		〃	SK80	1	黒褐色 10 YR2/2	〃	
〃	SK26		黒褐色 10 YR3/2	砂質シルト				2	黒褐色 10 YR3/1	〃	10 YR4/3 砂が混じる
〃	SK38	1	黒褐色 10 YR3/1	シルト		〃	SK82		黒褐色 10 YR2/2	〃	
		2	にぶい黄褐色 10 YR4/3	砂	10 YR3/1 が混じる	図71	SK84	1			
図69	SK42		黒褐色 10 YR3/1	砂質シルト	10 YR4/3 が若干混じる			2			
〃	SK43		黒褐色 10 YR3/1	シルト				3			
〃	SK53		黒褐色 2.5 Y3/2	〃		〃	SK88	1	黒褐色 10 YR3/1	〃	
〃	SK54		にぶい黄褐色 10 YR4/3	〃				2	黒褐色 10 YR2/2	〃	
〃	SK55		黒色 10 YR2/1	〃	カーボン粒若干混じる		SK85	1	黒色 10 YR2/1	〃	
〃	SK56		黒色 10 YR2/1	〃	10 YR4/3 が若干混じる			2	暗オリーブ褐色 2.5 Y3/3	砂	
〃	SK60		黒褐色 10 YR3/1	〃		〃	SK86	1	黒褐色 10 YR2/2	シルト	
〃	SK61	1	黒褐色 10 YR3/1	〃				2	褐色 10 YR4/4	砂質シルト	
		2	にぶい黄褐色 10 YR4/3	〃		〃	SK94	1	黒褐色 10 YR2/2	〃	カーボン粒が若干混じる
〃	SK62		黒褐色 10 YR3/1	〃	10 YR4/3 が混じる			2	黒褐色 10 YR3/2	〃	カーボン粒が若干混じる
〃	SK63		黒色 10 YR2/1	〃							
〃	SK64	1	黒色 10 YR2/1	〃	カーボン粒若干混じる						
		2	黒褐色 10 YR3/1	〃	10 YR4/3・カーボン粒混じる						

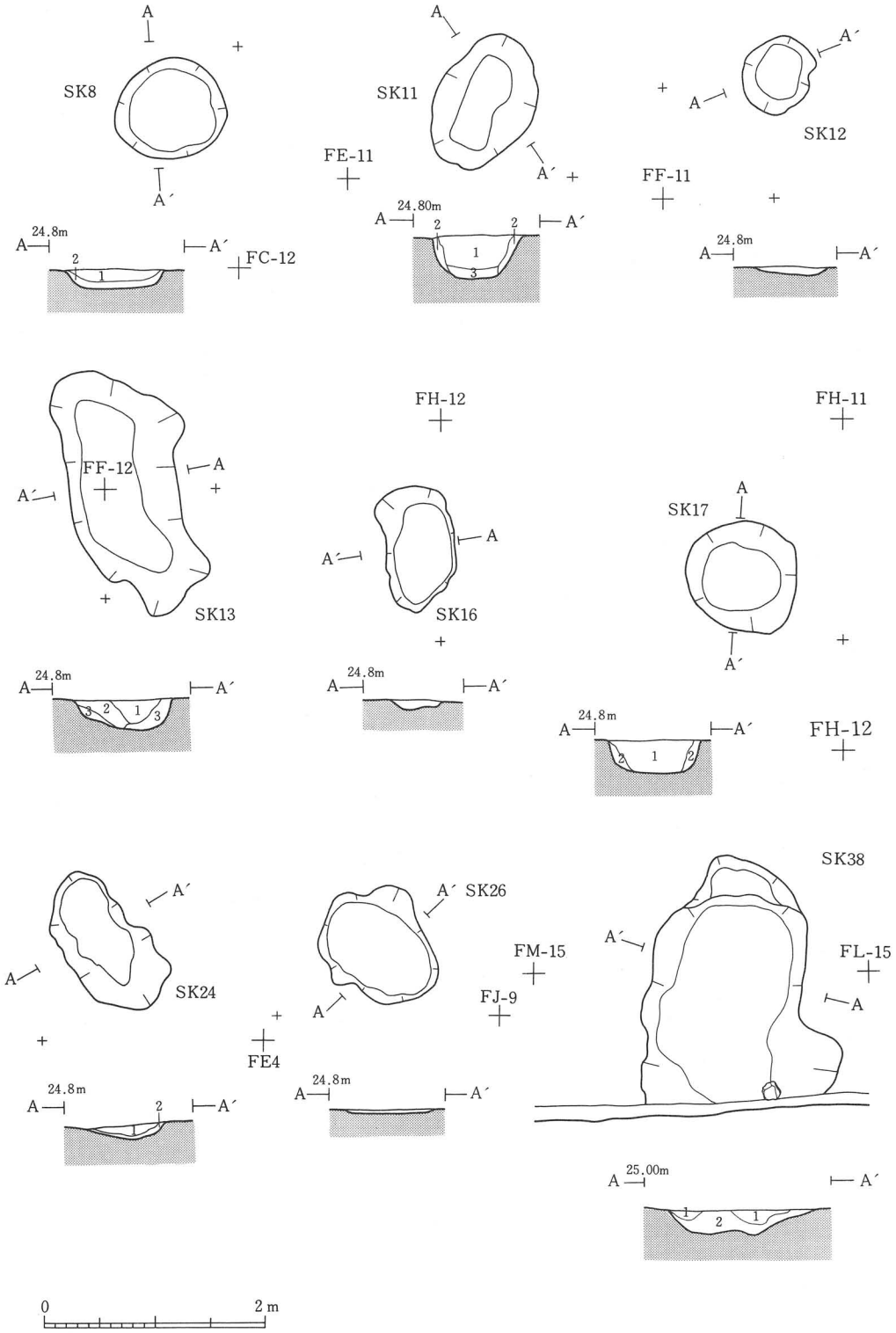

SK8
SK11
SK12
FE-11
FF-11
FC-12
24.8m
24.80m
FF-12
FH-12
FH-11
SK13
SK16
SK17
FH-12
SK24
SK26
SK38
FM-15
FL-15
FJ-9
FE4
25.00m
0
2 m

図68　土　　坑（1）

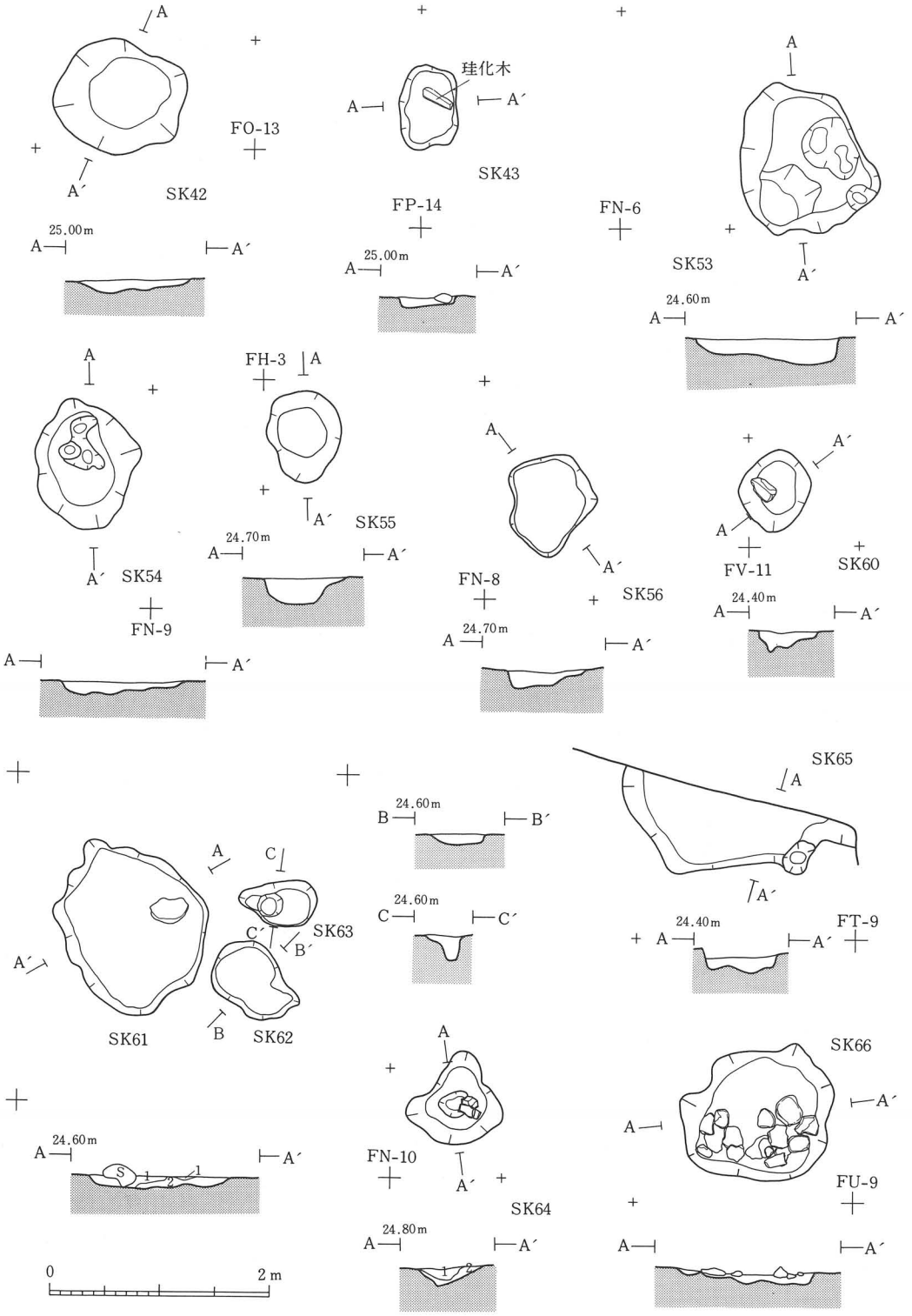

SK42
FO-13
珪化木
SK43
FP-14
FN-6
SK53
25.00m
24.60m
FH-3
SK55
SK54
FN-9
24.70m
FN-8
SK56
FV-11
SK60
24.40m
SK65
FT-9
SK61
SK62
SK63
SK66
FU-9
FN-10
SK64
24.80m
0
2 m

図69 土　坑（2）

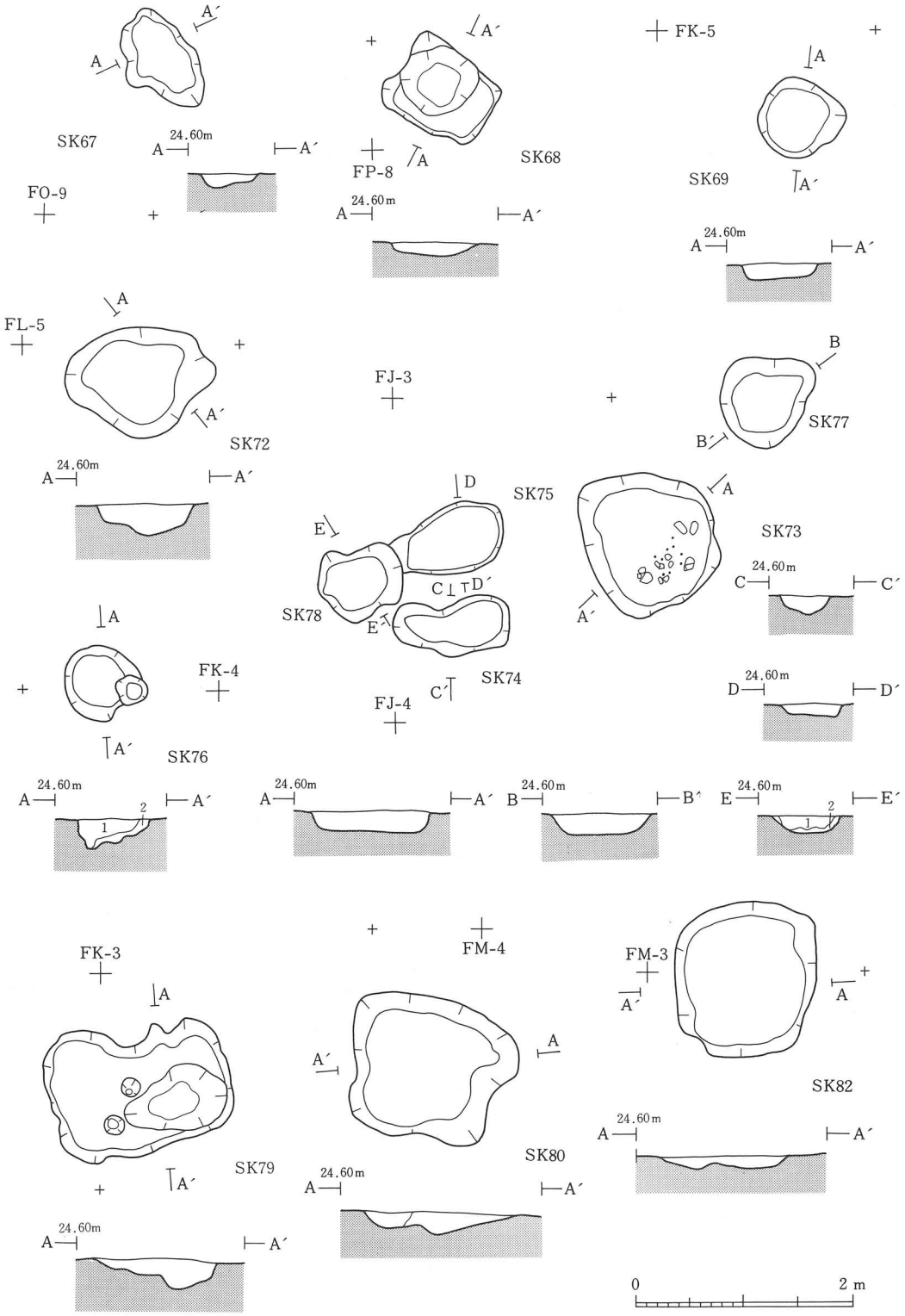

SK67
SK68
SK69
FK-5
FP-8
FO-9
FL-5
FJ-3
SK72
SK77
SK75
SK73
SK78
SK74
FK-4
FJ-4
SK76
FK-3
FM-4
FM-3
SK82
SK79
SK80
24.60m
0
2 m

図70　土　　坑（3）

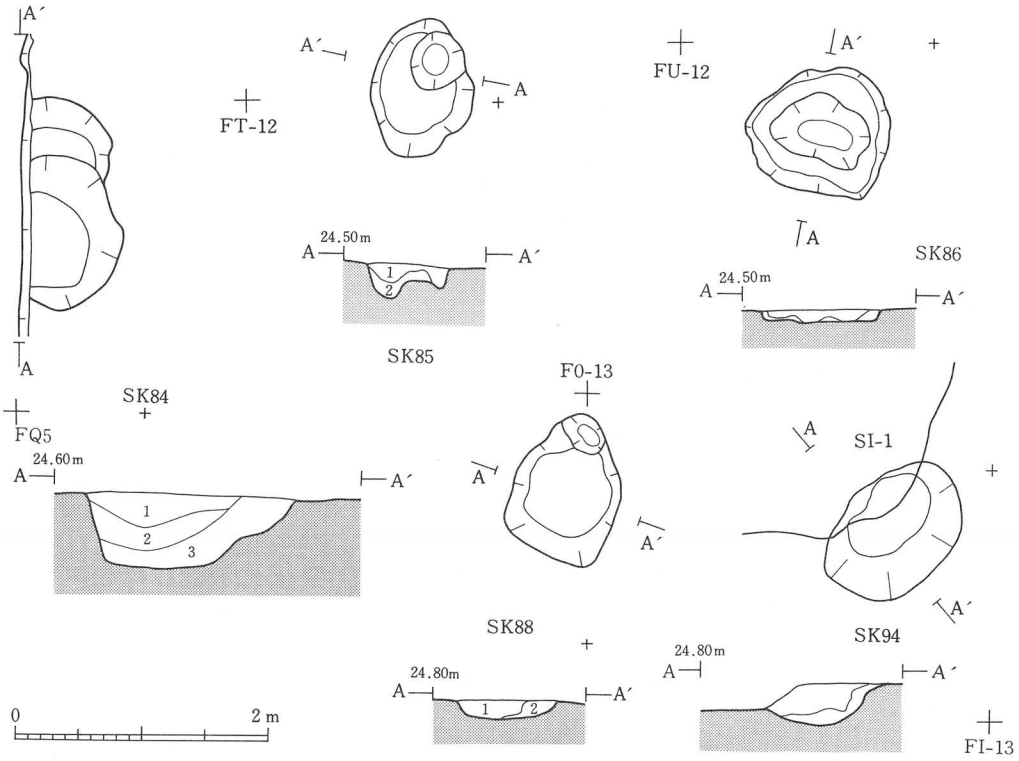


図71　土　　坑（4）

土坑観察表

図版No.	土坑No.	地　区	平面形	規　模(cm)	壁高(cm)	図版No.	土坑No.	地　区	平面形	規　模(cm)	壁高(cm)
図 68	SK8	FD-12	円形	100× 90	24	図 69	SK65	FU-9	不整形？	222× 76	30
〃	SK11	FE-11	楕円形	127× 89	63	〃	SK66	FV-9	不整方形	130×120	20
〃	SK12	FF-11	不整円形	72× 59	7	図 70	SK67	FO-9	不整形	100×65	16
〃	SK13	FF-12・13	不整形	134×103	32	〃	SK68	FP-8	方形	100×80	20
〃	SK16	FH-13	不整方形	114× 60	16	〃	SK69	FK-6	円形	73× 70	27
〃	SK17	FI-12	円形	118×101	35	〃	SK72	FL-6	不整形	137×101	21
〃	SK24	FF-4	不整形	140× 67	23	〃	SK73	FJ-4	隅丸方形	130×120	22
〃	SK26	FK-9	不整円形	114× 92	12	〃	SK74	〃	不整形	105× 48	21
〃	SK38	FM-16	不整方形	223×142	31	〃	SK75	〃	楕円形	100× 52	10
図 69	SK42	FP-13	不整円形	112×106	16	〃	SK76	FL-4・5	円形	69× 66	23
〃	SK43	FP-14	不整方形	74× 51	13	〃	SK77	FI-3・4	不整円形	83× 80	24
〃	SK53	FN-6	不整形	142×112	29	〃	SK78	FK-4	〃	78× 60	26
〃	SK54	FO-9	不整円形	122× 98	29	〃	SK79	FL・K-4	不整形	170×110	32
〃	SK55	FH-4	楕円形	84× 68	25	〃	SK80	FN-5	不整方形	135×130	28
〃	SK56	FN-8	不整形	92× 76	35	〃	SK82	FM-3・4	方形	143×129	26
〃	SK60	FV-11	方形	76× 65	16	図 71	SK84	FQ-5	不整円形？	168× 63	62
〃	SK61	FT-11	不整方形	144×132	19	〃	SK85	FT-12・13	楕円形	110× 81	39
〃	SK62	〃	〃	81× 56	11	〃	SK86	FU-13	円形	108×102	23
〃	SK63	〃	不整形	72× 41	56	〃	SK88	FP-14	不整方形	114× 83	31
〃	SK64	FN-10	〃	85× 81	42	〃	SK94	FJ-13	楕円形	122× 87	33

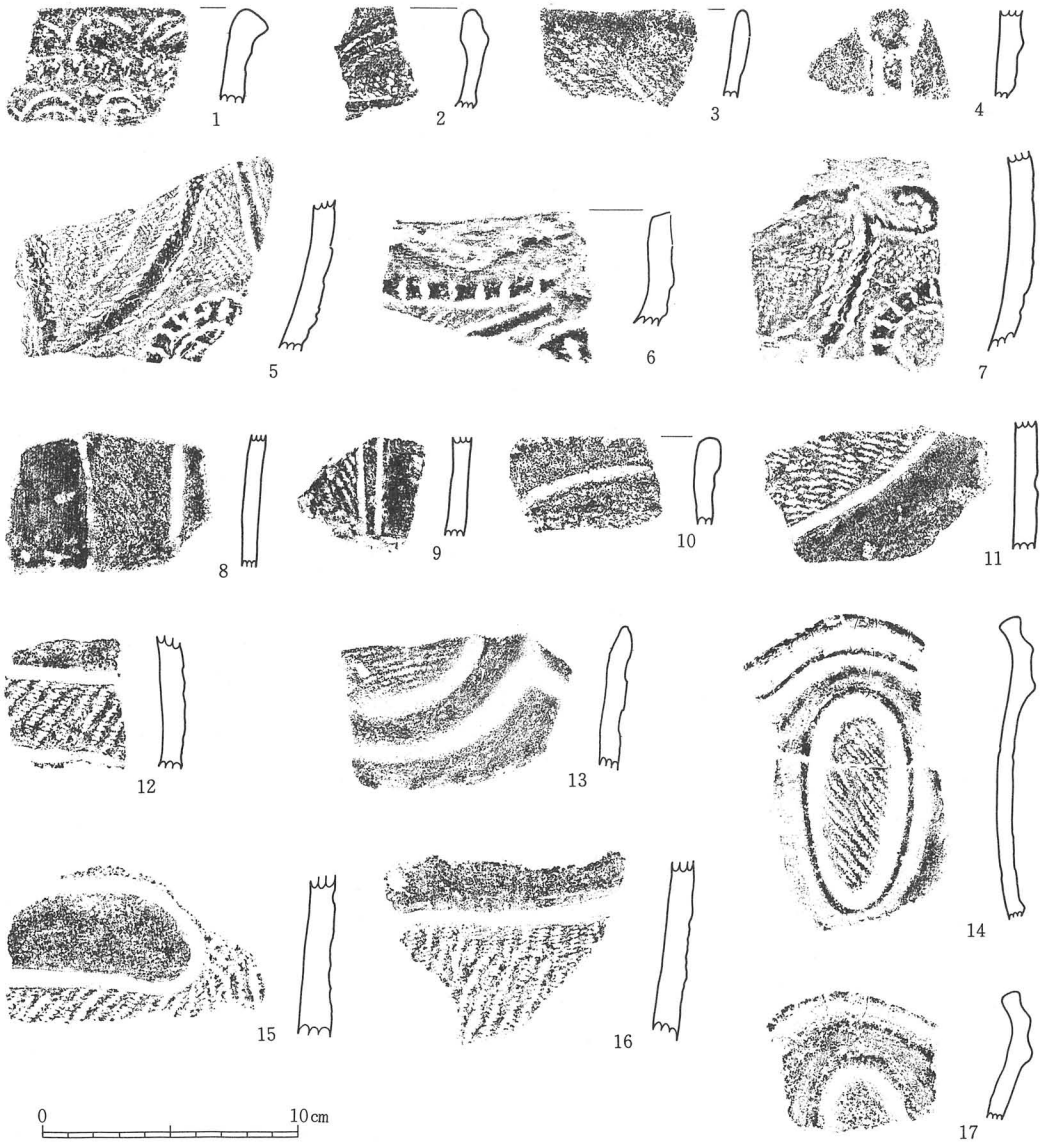


図 72 土坑出土土器観察表

番号	地 区	層	器 形	分 類	特 徴	写真図版番号	番号	地 区	層	器 形	分 類	特 徴	写真図版番号
1	SK14		深鉢	I 群	弧状の押圧縄文	32−1	10	SK64	P-4	深鉢	II群	沈線区画	32−10
2	SK35	1	〃	〃	隆線に沿って押圧縄文	32−2	11	SK64		〃	〃	沈線区画・RL 縄文	32−11
3	SK40	〃	〃	B 群	LR 縄文	32−3	12	SK73	P-2	〃	〃	沈線区画・RL 縄文	32−12
4	SK52	〃	〃	I 群	ボタン状貼付、隆帯に沿った沈線	32−4	13	SK84	1	〃	〃	沈線区画	32−17
5	SK55	〃	〃	〃	弧状の隆線に沿って押圧縄文	32−5	14	SK73	P-2	〃	〃	隆線(稜線区画)LR 縄文	32−13
6	SK55		〃	〃	隆線上に縦位の押圧縄文	32−6	15	SK73	1	〃	〃	沈線区画、RL 縄文	32−15
7	SK59	1	〃	〃	弧状の隆線に沿って押圧縄文	32−7	16	SK73	〃	〃	〃	沈線区画、RL 縄文	32−16
8	SK57	〃	〃	II群	沈線区画	32−8	17	SK73	P-6	〃	〃	隆線(稜線区画)	32−14
9	SK64		〃	〃	沈線区画	32−9							

図72　土坑出土土器

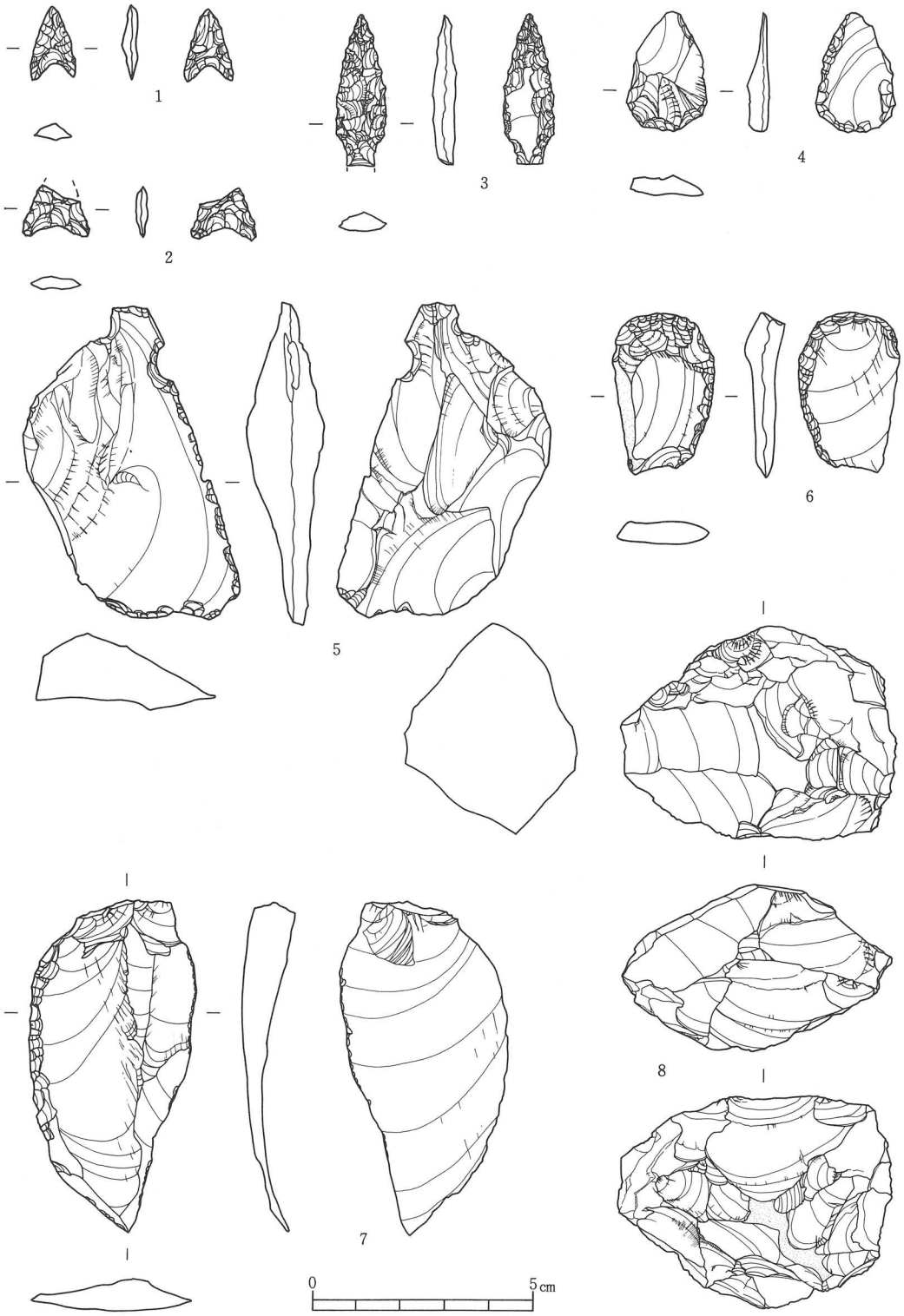


図73　土坑出土石器（1）

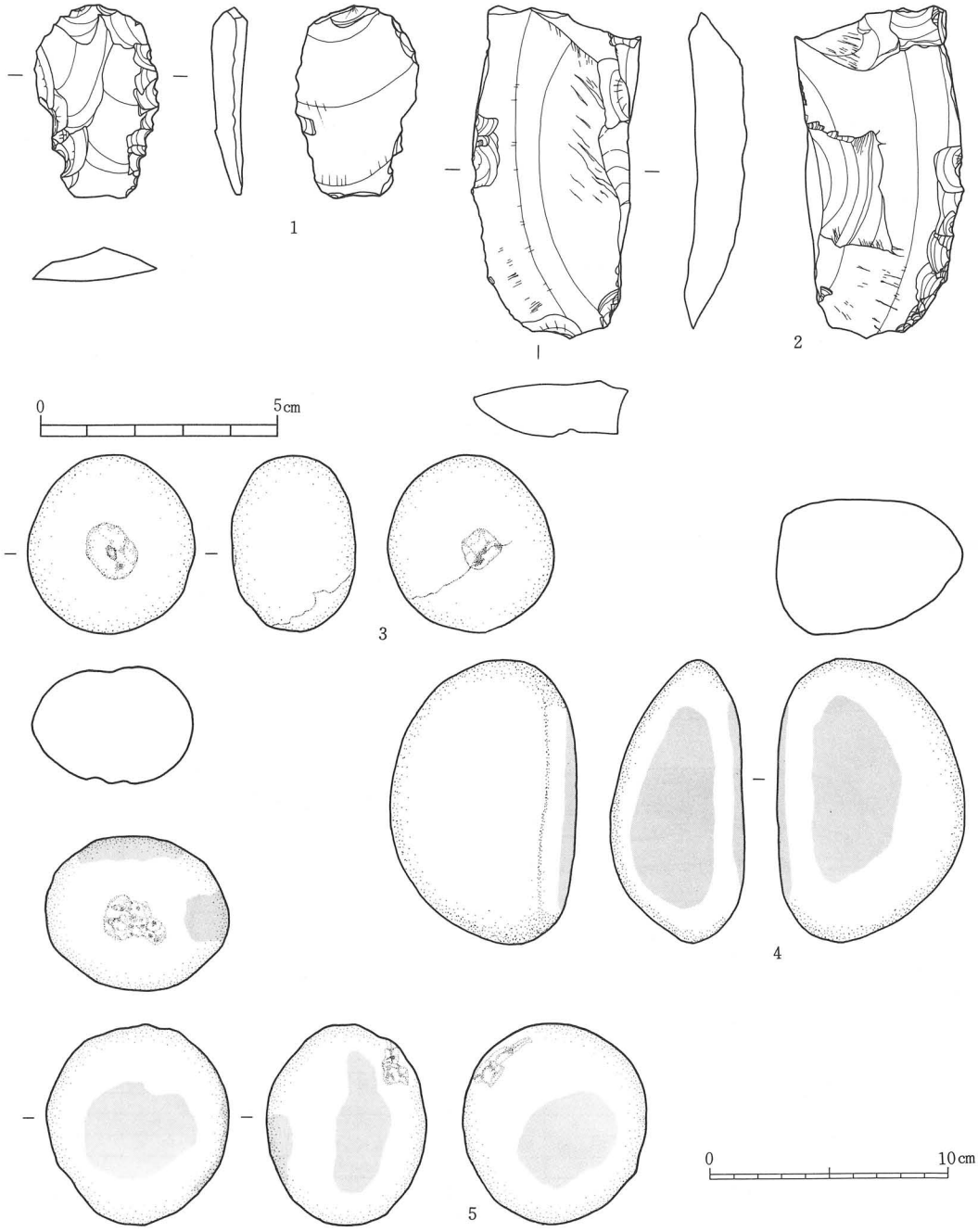


図 73　土坑出土石器（1）

番号	地　区	層位	器　　種	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重量(g)	石　材	写真図版番号	備　考
73-1	SK63		石鏃Ⅰ A 類	1.6	1.1	0.3	0.3	頁岩	42－1	
73-2	SK53		石鏃Ⅰ類	(1.2)	1.5	0.25	0.3		42－2	
73-3	SK41	1層	尖頭器	(3.5)	1.1	0.45	1.6	頁岩	43－3	
73-4	SK73	1層	石鏃Ⅳ類	2.7	1.7	0.4	2.1		43－4	未製品
73-5	SK14		石匙Ⅰ B 類	7.1	3.9	1.7	34.6		43－7	
73-6	SK73		不定形石器Ⅰ A 類	3.6	2.25	0.75	5.9		43－6	
73-7	SK25		不定形石器Ⅰ B 類	7.6	3.7	1.0	16.0	頁岩	43－8	
73-8	SK37	1層	石核	6.2	4.8	3.9	106.7		43－9	

図74　土坑出土石器（2）

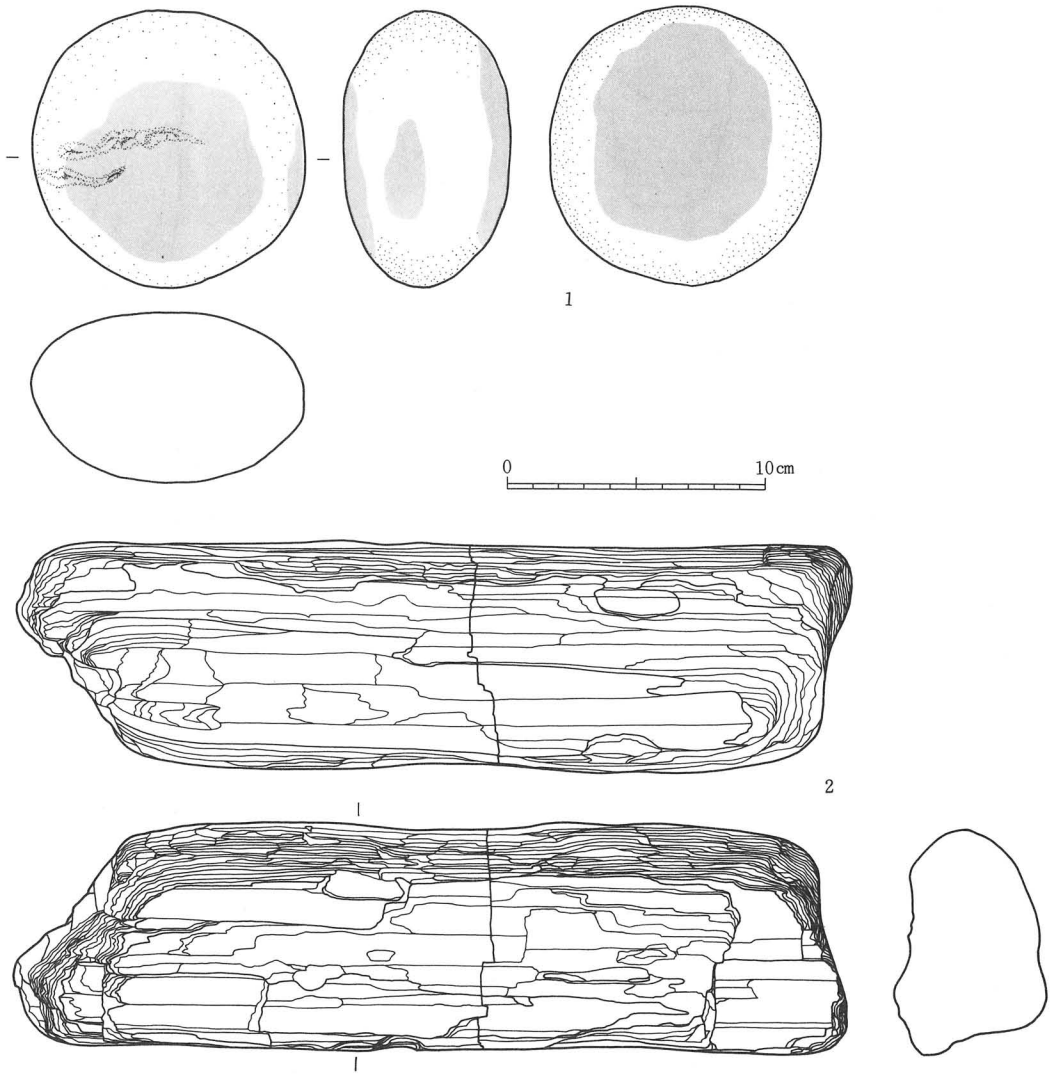


図 74、75　土坑出土石器（2）観察表

番号	地　区	層位	器　　種	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重量(g)	石　材	写真図版番号	備　考
74-1	SK58	1層	不定形石器ＩＡ類	4.1	2.6	0.7	5.8		42－5	
74-2	SK27		不定形石器ＩＡ類	7.0	3.3	105	401		42－10	
番号	地　区	層位	器　　種	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重量(g)	石　材	使　用　痕	写真図版番号
74-3	SK37		凹石	77	70	52	340		凹－両面	44－3
74-4	SK17		磨石	122	78	57	760		磨－片面・片側面	44－4
74-5	39トレンチ	SD内	磨石	86	77	69	570		磨－両面・片側面	44－5
75-1	SK58		磨石	110	106	66	1,100		磨－両面・片側面	44－6
75-2	SK43	1層	石製品	328	90	60		珪化木		44－2

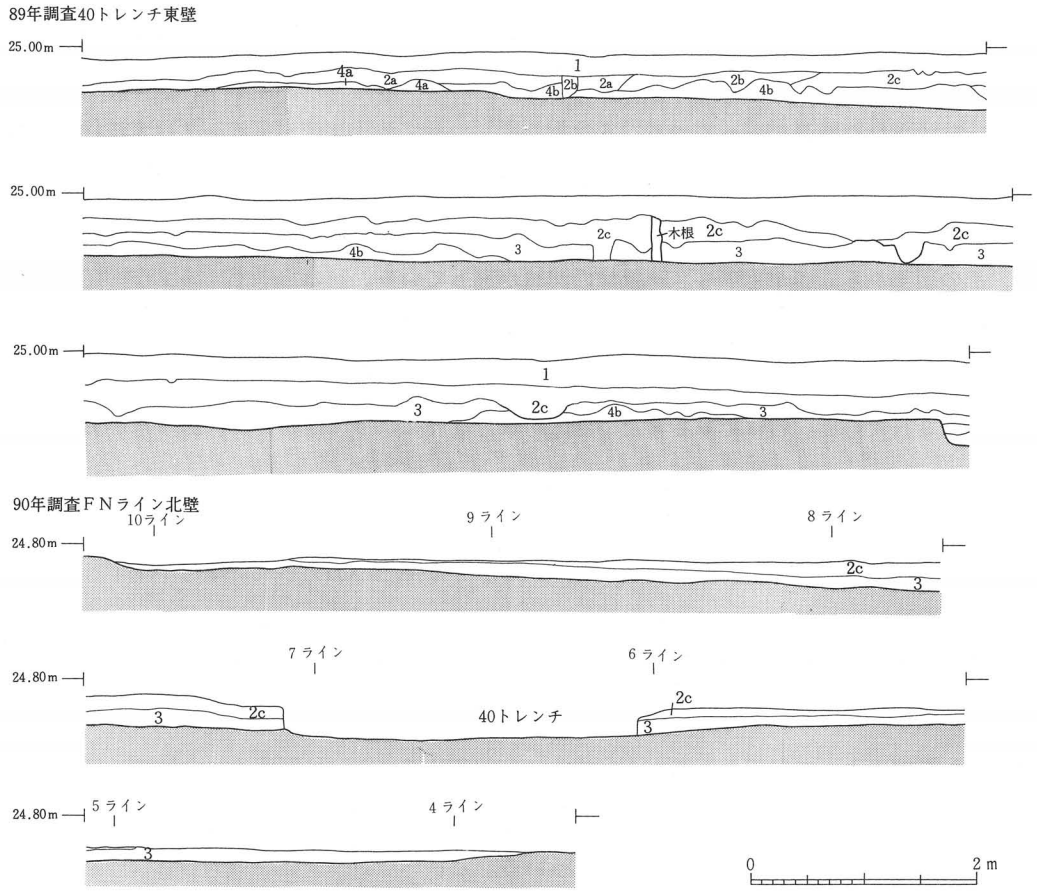
図75　土坑出土石器（3）

④遺物包含層出土遺物

調査区ほぼ中央部に遺物包含層が検出されている。この包含層は北から南に向かって走る浅い沢状の地形を呈する部分に形成されており、本来は南側の調査区域外にまで延びていたと思われるが、近年の開田によって失われていた。

包含層は２層に分かれるが、多くの遺物は各層中から不規則に出土している。

遺物は、縄文時代中期前葉と末葉のものが出土している。各時期の遺物は、層位ごとに明確



層	土　色	土 性	備　考
1	暗褐色 10 YR3/3	シルト	現在の畑耕作土
2 a	10 YR3/3・10YR2/2 ブロック層	〃	
2 b	黒褐色 10 YR2/2	〃	
2 c	黒色 10 YR1.7/1	〃	遺物包含層
3	黒褐色 10 YR3/2	〃	２ｃ層がブロック状に混じる。遺物包含層
4 a	暗褐色 10 YR3/4	〃	
4 b	にぶい黄褐色 10 YR4/3		

図76　遺物包含層　89年調査40トレンチ東壁
90年調査ＦＮライン北壁

に分離して出土する状況はみられず混在するという状況であった。確認調査時の40トレンチがちょうど包含層を縦断する形で入っていたため、遺物のほとんどは一括して取り上げられており、これらの遺物については整理時にグリット単位の出土遺物に分離することができなかった。

『土器』（図77～80）

図77・78は89年調査の40トレンチ出土遺物で、図79・80は90年調査のものである。

図77-1・2・3は大波状口縁の頂部で１・２は肥厚した口縁部に細い粘土紐による波形の隆線文がつけられている。３は口唇部に刻み目が入り、押圧の加えられた隆帯が巡る。４は小波状を呈する口縁の頂部の両側に円文がつけられ、そこから垂下する「Y」字状の隆帯に沿って交互刺突がされている。５は大波状口縁の頂部で、口唇部に縄文を押圧するもので、その下に両側面を押圧された隆帯が巡っている。６は折り返し口縁に波状沈線が巡る。７は大波状口縁の頂部で５と同一固体の可能性がある。９は小突起状の波状口縁の頂部両面に円文がつき、その下には二段の押し引き文が巡っている。地文は撚り糸文である。10は平口縁に小突起がつけられ、その頂部から隆線が垂下し、連弧状の沈線が巡っている。11は口縁部に縄文が押圧され、押圧の加えられた隆帯が垂下している。12は肥厚させた口縁部に押し引きが巡る。13は口唇部に縦位の単沈線がいれられている。14～16はB群の土器で、いずれも折り返し口縁で全面に縄文が施文されている。17は肥厚させた口縁部が並行沈線によって区画され、撚り糸が施文されている。

図78-1は大波状口縁の一部で、押圧の加えられた隆帯がつけられている。２は側面に交互刺突のはいった隆帯が垂下し、沈線区画されている。３は押圧の加えられた隆帯が垂下し、４・５は縄文の施文された隆帯が垂下している。６は大波状口縁で沈線による楕円区画と隆線がつけられている。７は鉢の口縁部で「く」の字状につよく外湾し、沈線と隆線によって玉抱き三又状に区画されている。８は大波状口縁部である。10・11は頸部に橋状把手がつき、その下には沈線と隆線によって区画されている。12・13は並行沈線によって区画され、12では区画内に「Y」字状の沈線が垂下している。14は浅鉢の口縁部で、内湾気味に立ち上がる口縁には刻目状の小突起がつけられ、縄文が押圧され巡っいる。

図79-1～8は口縁部に横位の押圧縄文・沈線・隆線によって施文されるものである。１は強く外湾する口縁部に押圧縄文が三条巡り、その下は縄文が施文されている。２は平口縁に押圧縄文と隆線が巡る。３は波状口縁で、口縁に沿って押し引き文がはいりその下は沈線区画されている。４は綾くり文が施文されている。７は沈線間に縦位の押圧縄文と単沈線が入れられている。9～18は沈線・交互刺突・縄文の施文された隆帯によって施文されるものである。12は強く外湾する口縁部に並行沈線と交互刺突が巡り、その下は沈線区画されている。15は並行沈線と波状沈線による弧状の区画がつけられるもので地文は無文である。

図80-1～20は沈線または沈隆線（稜線）によって縄文帯と無文帯が区画される土器群である。1・2は口縁部資料で、1は波状口縁が内湾気味に立ち上がり、口縁に沿った沈線区画がはいる。3～9・11は沈線によって区画している。12～20は沈隆線（稜線）によって区画している。21は浅鉢の口縁部で、小突起状の口縁部の裏には右下がりの切り込みがはいり、体部には浮彫的な雲形文が施文される。晩期の土器は今回これ1点だけが出土している。

『石器』（図81～86）　石鏃9点、石錐6点、篦状石器4点、石匙2点、スクレイパー1点、不定形石器4点、礫石器13点が出土している。

石鏃（図81-1・図82-1～8）：図81-1は細身で大型のものである。基部を破損している凹基で、直線的な側縁となっている。図82-1・4・7・8はいずれも凹基で直線的な側縁となっている。5は基部が丸凸基で外湾する側縁のもので、二次加工は側縁部に施されている。

石錐（図81-4．5．6・図82-9～11）：図81-4・図82-9は両面加工が施された棒状のものである。図81-5・6は片面に部分的な二次加工が施されたつまみ部と尖端部からなるものである。図82-10・11は両面に二次加工が施されたつまみ部と尖端部からなるものである。

篦状石器（図81-3．4・図83-6．7）：図81-3・図83-6はバチ形の整った形態のもので、両面の側縁を中心に二次加工が施されている。4は不定形の形態のもので、片面に素材面を残すのが反対面では全面に剝離が及び、側縁の二次加工によって刃部を作り出している。図83-7は小型の短冊形の形態のもので、表裏全面に加工がおよんでいる。

石匙（図83-1．2）：ともに巾の広い縦型のものである。1は横長の剝片をもちいており、二縁辺構成の身部は片面の縁辺を主とした二次加工によって作り出されている。2は粗雑な二次加工によって作られた刃部をもつものである。

スクレイパー（図83-3）：細身のもので側縁の二次加工によって刃部を作り出している。

不定形石器（図81-7・図83-4．5・図84-1）：図81-7は側縁の一部に二次加工を施して刃部を作り出している。図83-4，5・図84-1は素材の形態をあまり変えずに部分的な二次加工を施して刃部を作り出している。

礫石器（図84・図85・図86）：図84-1は凹石で、両面に深い凹部が縦方向に連続している。2・3は磨石で、2は片面に3は片面及び一側面に磨面がある。図85-1～3は凹石で、1は両面に浅い凹部があり2・3は片面に凹部がある。4は磨凹石で、磨面と凹部は反対面にある。5は磨石で片面に磨面がある。図86-1～5は凹石で、1・4は片面に凹部がある。2・3・5は両面に凹部がある。

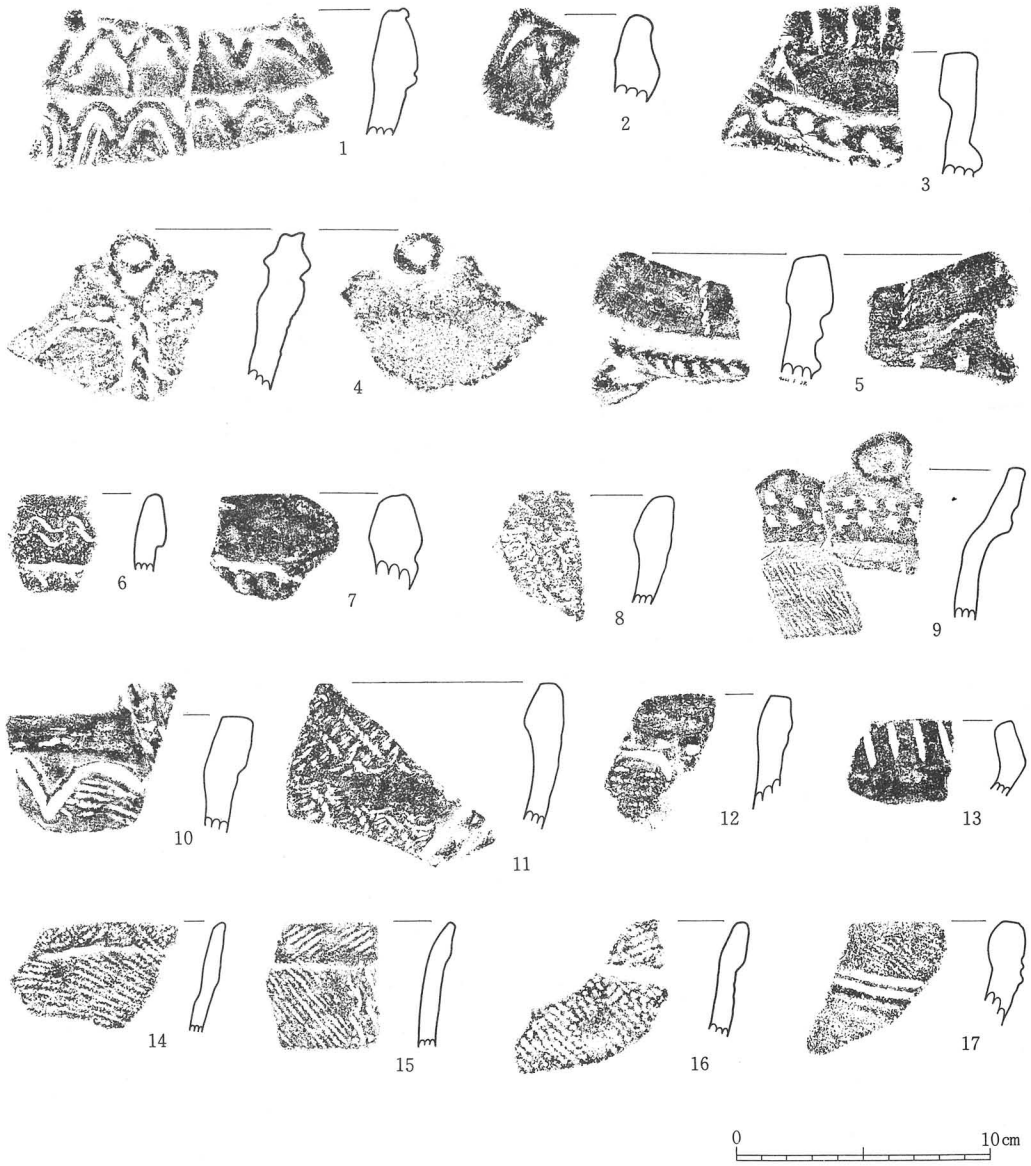


図 77　包含層出土土器（89 年／ 40 トレンチ）観察表

番号	地　区	層	器　形	分　類	特　　徴	写真図版番号	番号	地　区	層	器　形	分　類	特　　徴	写真図版番号
1	40 トレD区	2	深鉢	Ⅰ群	大波状口縁・粘土紐貼付	33－1	10	40 トレF区	2	深鉢	Ⅰ群	口縁に小突起弧状沈線・RL 縄文	33－10
2	40 トレD区	〃	〃	〃	〃　〃	33－2	11	40 トレC区	3	〃	〃群	RL 縄文押圧・隆帯に押圧	33－11
3	40 トレF区	〃	〃	〃	大波状口縁、口唇に刻目・隆帯に押圧	33－3	12	40 トレF区	〃			押し引き文・沈線区画・LR 縄文	33－12
4	40 トレF区	〃	〃	〃	口縁に円文貼付、「Y」字状隆帯	33－4	13	40 トレC区	2	浅鉢	Ⅰ群	口縁部に縦位の単沈線	33－13
5	40 トレF区	〃	〃	〃	大波状口縁・口唇に縄文押圧	33－5	14	40 トレE区	〃	深鉢	B 群	折り返し口縁・LR 縄文	33－14
6	40 トレD区	3	〃	〃	折り返し口縁・波状沈線	33－6	15	40 トレD区	〃	〃	〃	折り返し口縁・綾くり文	33－15
7	40 トレF区	2	〃	〃	大波状口縁	33－7	16	40 トレF区	〃	〃	〃	折り返し口縁・LR 縄文	33－16
8	40 トレC区	〃	〃	〃	RL 縄文	33－9	17	40 トレC区	3	〃	Ⅰ群	沈隆線・ℓ撚り糸	33－17
9	40 トレG区	〃	鉢	〃	波状口縁に円文貼付 ℓ撚り糸・押し引き文	33－9							

図77　包含層出土土器（1）　89年40トレンチ

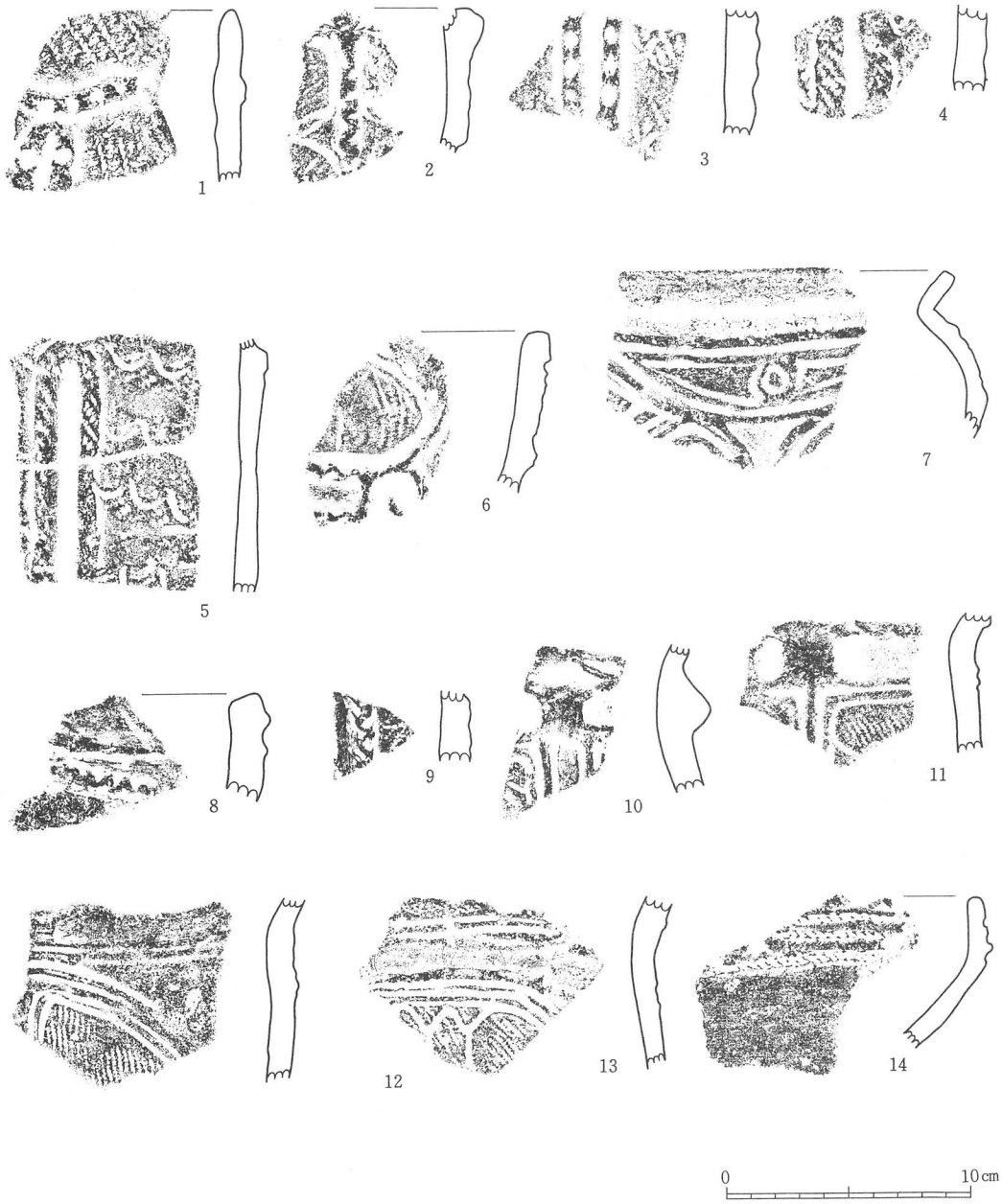


図 78　包含層出土土器　（89 年 40 トレンチ）観察表

番号	地　区	層	器　形	分　類	特　　徴	写真図版番号	番号	地　区	層	器　形	分　類	特　　徴	写真図版番号
1	40トレC区	2	深鉢	Ⅰ群	大波状口縁・隆帯に押圧	34－1	8	40トレE区	2	深鉢		大波状口縁	35－3
2	40トレA区	〃	〃	〃	交互刺突沈線区画	34－2	9	40トレD区	〃	〃		隆帯に交互刺突	35－4
3	40トレB区	〃	〃	〃	隆帯に押圧	34－3	10	40トレF区	〃	〃	Ⅰ群	橋状把手	35－5
4	40トレE区	〃	〃	〃	隆帯に縄文	34－4	11	40トレF区	〃	〃	〃	〃	35－6
5	40トレE区	〃	〃	〃	隆帯に縄文	34－5	12	E区	〃	〃	〃	並行沈線による区画	35－7
6	40トレE区	〃	〃	〃	大波状口縁・沈隆線区画	35－1	13	C区	〃	〃	〃	並行沈線「Y」字状沈線区画	35－8
7	40トレ	－	鉢	〃	沈隆線による玉抱き三又文	35－2	14	D区	〃	浅鉢	〃	平口縁・小突起・縄文押圧	35－9

図78　包含層出土土器（2）　89年40トレンチ

図 79　包含層出土土器（3）

番号	地　区	層	器　形	分　類	特　　徴	写真図版番号	番号	遺構№	層	器　形	分　類	特　　徴	写真図版番号
1	FP-11	3	鉢	Ⅰ群	平口縁・LRL 縄文押圧	36－1	10	FN-9	1	深鉢	Ⅰ群	沈線区画・弧状沈線	36－8
2	FO-9	1	深鉢	〃	平口縁・RL 縄文押圧	36－2	11	FU-10	2	〃	〃	弧状隆帯貼付	36－9
3	FK-5	2	〃	〃	波状口縁・押し引き文	36－3	12	FT-9	2 b	鉢	〃	並行沈線・交互刺突	36－10
4	FR-9	2 b	〃	〃		36－4	13	FL-7	3	深鉢	〃	沈線区画・隆線・RL 縄文	36－11
5	FT-11	2 b	鉢	〃	平口縁・RL 縄文押圧		14	FN-9	1	〃	〃	並行沈線・RL 縄文押圧	36－12
6	FN-9	1	深鉢	〃	平口縁・沈線	36－5	15	FP-7	2	〃	〃	弧状並行沈線	36－13
7	〃	2	〃	〃	平口縁・R 押圧・並行沈線	36－6	16	FM-5	〃	〃	〃	沈線区画・LR 縄文	36－14
8	FP-11	3	〃	〃	平口縁・隆帯貼付		17	FL-7	〃	〃	〃	沈線	36－15
9	FM-8	3	〃	〃	沈線	36－7	18	FR-9	2 b	〃	〃		36－16

図79　包含層出土土器（3）

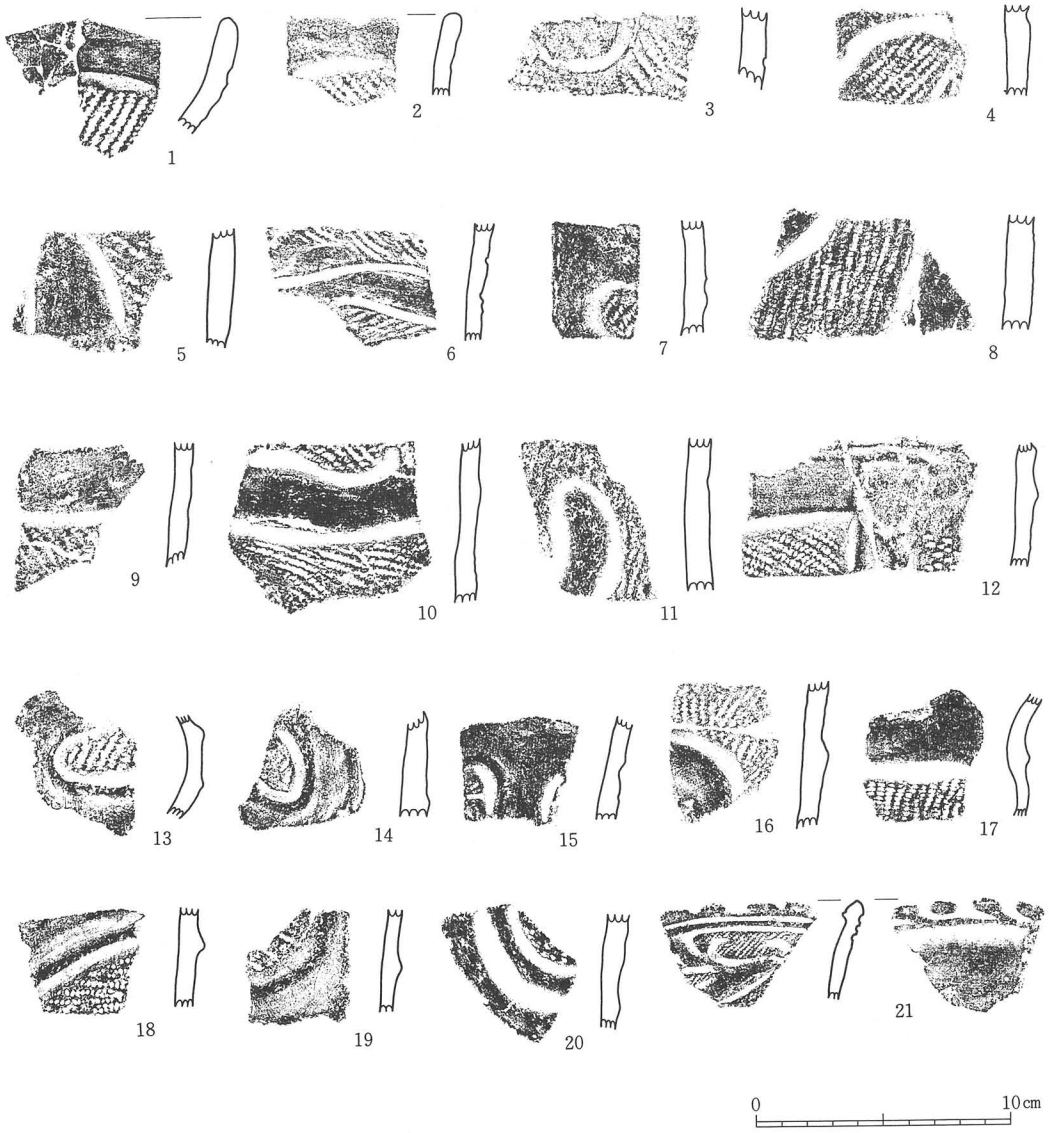


図 80　包含層出土土器（4）

番号	地　区	層	器　形	分　類	特　　徴	写真図版番号	番号	地　区	層	器　形	分　類	特　　徴	写真図版番号
1	FK-4	3	鉢	II群	波状口縁・沈線区画・RL 縄文	37－1	12	FI-5	3	深鉢	II群	隆線（稜線）区画・LR 縄文・刺突文	37－10
2	FH-2	3	深鉢	〃	平口縁・沈線区画・RL 縄文	37－2	13	FI-3	3	〃	〃	隆線（稜線）区画・RL 縄文	37－11
3	FJ-2	－	〃	〃	沈線区画・LR 縄文	37－3	14	FQ-4	3	〃	〃	沈隆線区画	37－12
4	FL-5	3	〃	〃	沈線区画・LR 縄文	37－4	15	FM-7	2	〃	〃	沈隆線（稜線）区画	37－13
5	FK-5	2	〃	〃	沈線区画・LR 縄文	37－5	16	FJ-5	3	〃	〃	沈隆線（稜線）区画・RL 縄文	
6	FJ-4	3	〃	〃	沈線区画・LR 縄文	37－6	17	FE・F-5	1	〃	〃	沈隆線（稜線）区画・RL 縄文	
7	FL-5	2	〃	〃	沈線区画・LR 縄文	37－7	18	FQ-4	3	〃	〃	隆線（稜線）区画・LR 縄文	37－14
8	FE・F-5	〃	〃	〃	沈線区画・RL 縄文		19	FI-4	1	〃	〃	隆線（稜線）区画	37－15
9	FJ-4	3	〃	〃	沈線区画・RL 縄文		20	FE-2	〃	〃	〃	隆線区画	37－16
10	FK-3	2	〃	〃	隆線（稜線）区画・LR 縄文	37－8	21	FI-4	1	浅鉢		浮彫的な雲形文	37－17
11	FE・F-5	1	〃	〃	沈線区画・RL 縄文	37－9							

図80　包含層出土土器（4）

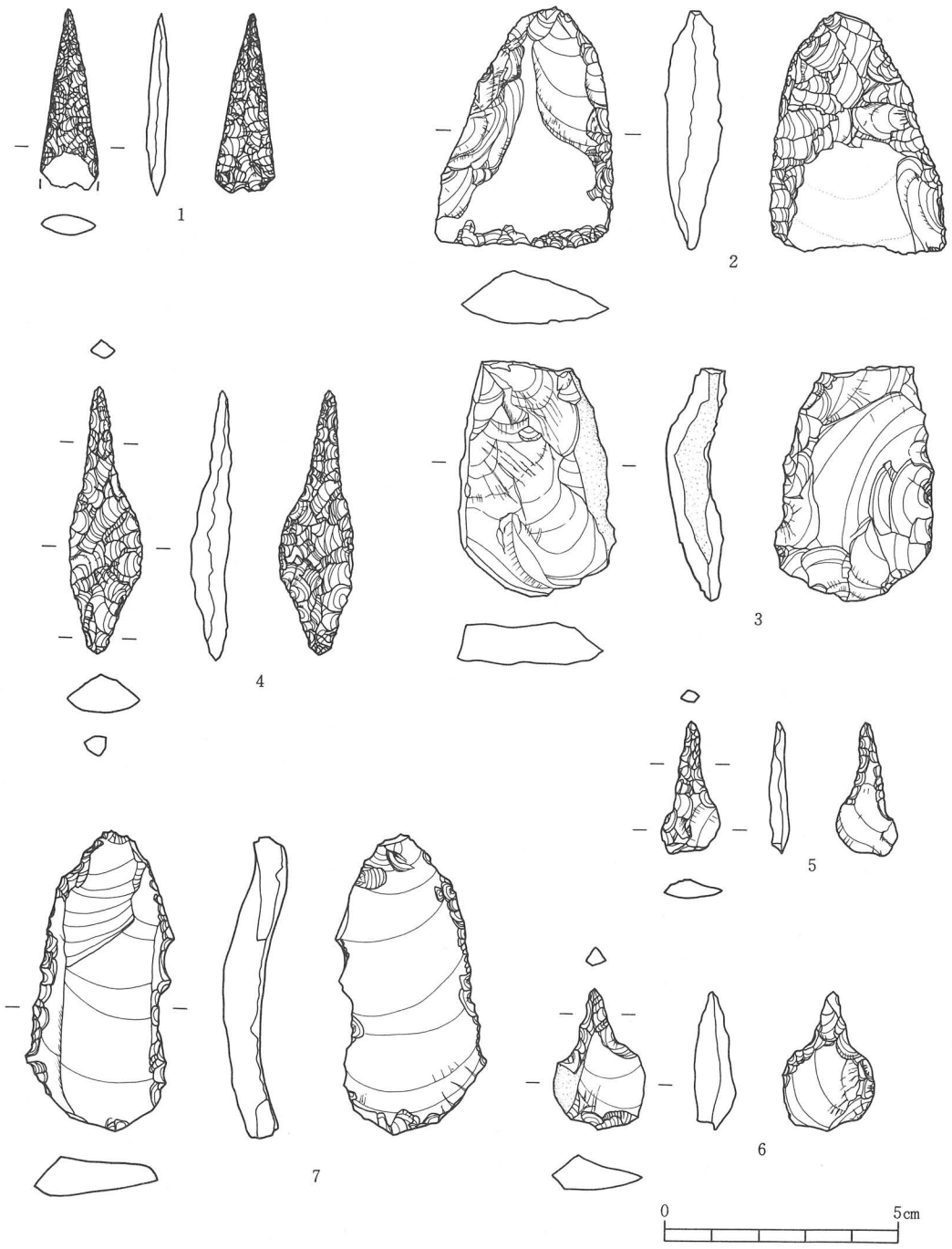


図81　包含層出土石器（1）　（40トレンチ）

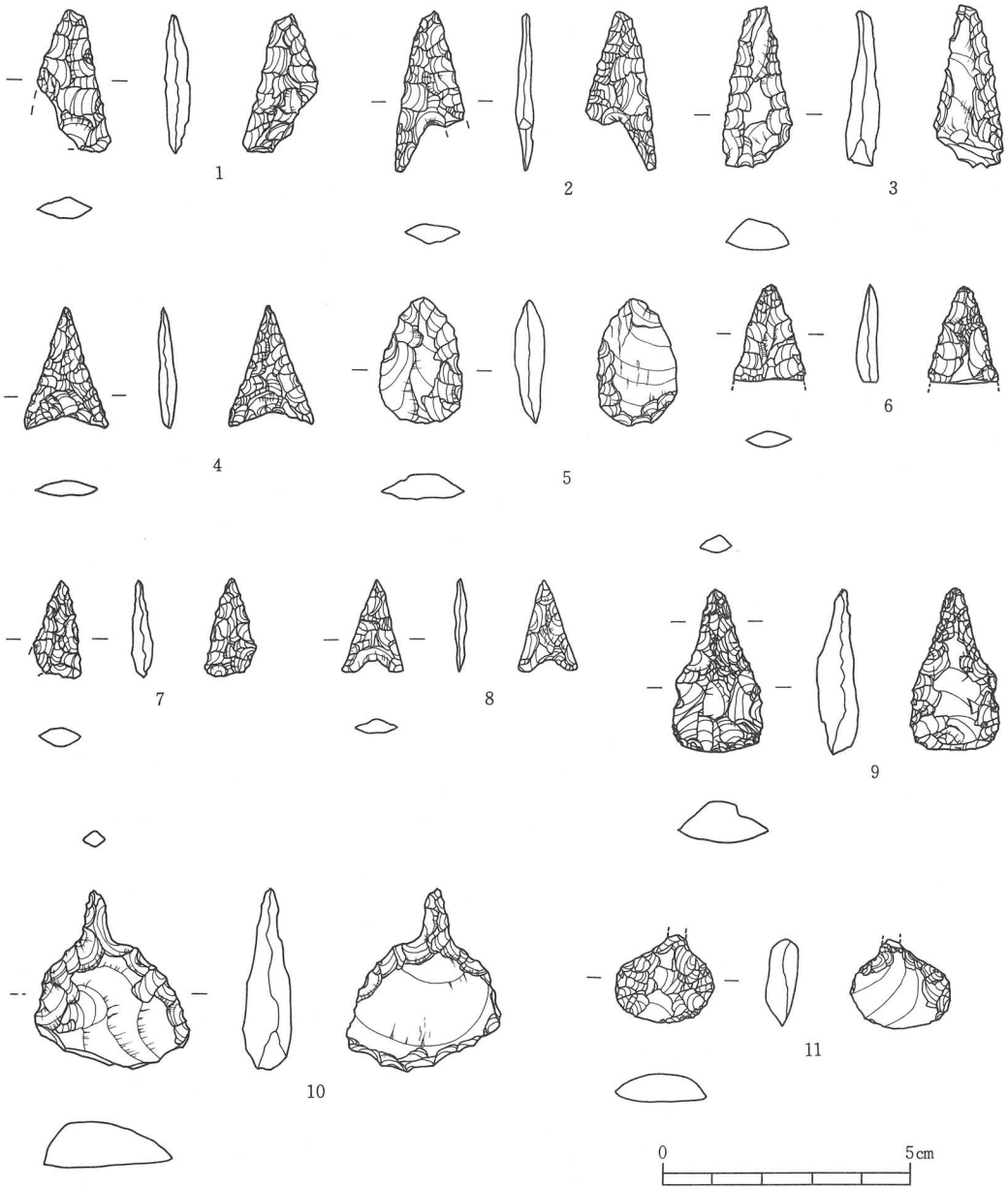


図 82　包含層出土石器観察表

番号	地　区	層位	器　　種	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重量(g)	石　材	写真図版番号	備　考
82-1	FI-6	3層	石鏃ⅠB類	(2.8)	1.1	0.5	1.2		43－4	
82-2	FK-5	2層	石鏃ⅠA類	3.2	1.3	0.4	0.9		43－5	
82-3	FM-7	2層	石鏃ⅠB類	(3.2)	1.4	0.65	2.5		43－6	
82-4	FN-9	1層	石鏃ⅠB類	2.4	1.8	0.4	0.8		43－7	
82-5	FV-11	2B層	石鏃Ⅳ類	2.6	1.6	0.6	2.2		43－8	
82-6	FH-2	3層	石鏃A類？	1.9	1.4	0.4	0.8	頁岩	43－9	
82-7	FK-3	3層	石鏃ⅠB類	2.0	0.9	0.5	0.7		43－10	
82-8	FI-2	3層	石鏃ⅠB類	1.8	1.2	2.25	0.3		43－11	
82-9	FO-10	3層	石錐Ⅱ類	3.3	1.8	0.8	4.0		43－13	
82-10	FO-9	2層	石錐Ⅱ類	3.8	3.0	1.0	8.8		43－12	
82-11	FE・F-5	1層	石錐Ⅱ類	(1.7)	2.0	0.55	1.9		43－14	

図82　包含層出土石器（2）

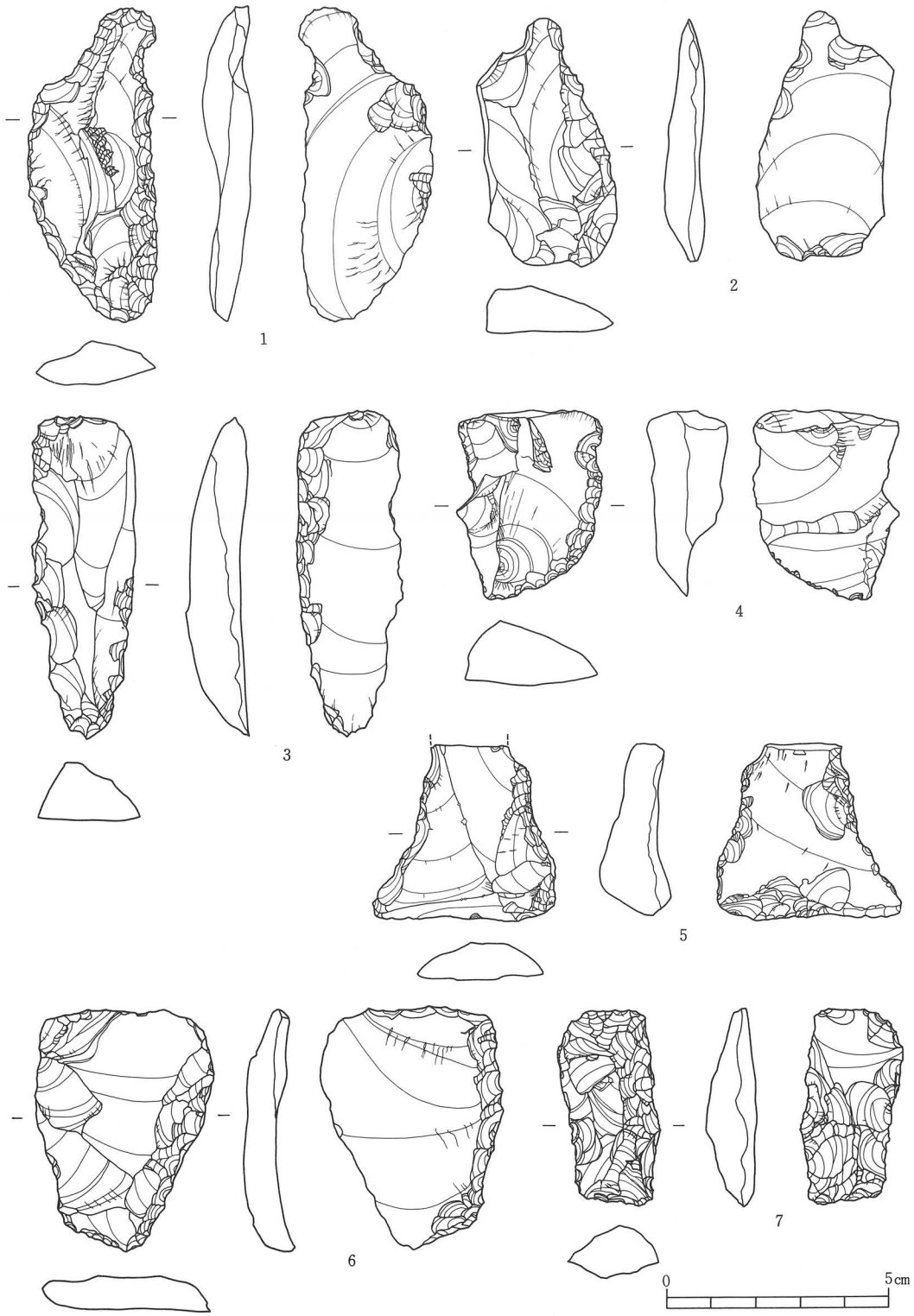


図83　包含層出土石器（3）

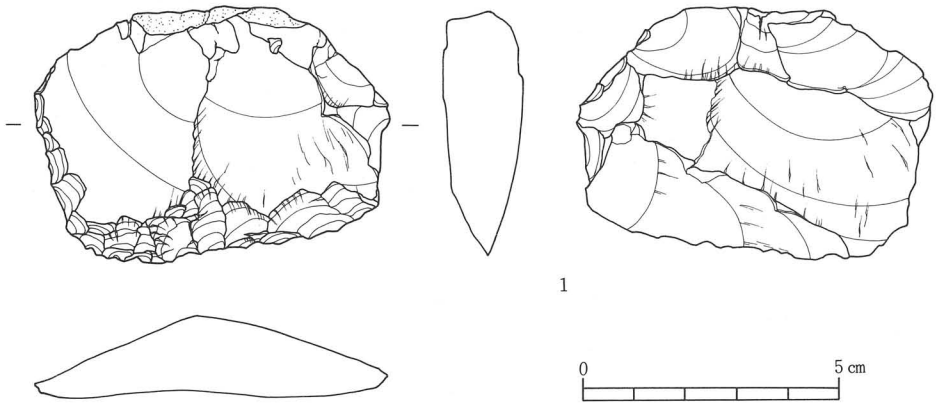


図 83、84　包含層出土石器観察表

番号	地　区	層位	器　　種	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重量(g)	石　材	写真図版番号	備　考
83-1	FO-8	3層	石匙ⅠA類	7.1	3.0	1.2	16.5	頁岩	43−15	
83-2	FL-11	1層	石匙ⅠB類	5.6	2.9	0.9	14.3		43−16	
83-3	FO-5	2層	スクレイパー	7.4	2.4	1.3	22.6	頁岩	43−17	
83-4	FN-9	1層	不定形石器ⅠB類	4.3	3.3	1.8	21.7		43−18	
83-5	FV-12・13	1層	不定形石器ⅠA類	(4.0)	4.1	1.5	19.8		43−19	
83-6	41トレンチ	2層	石篦	5.6	4.15	0.95	22.1	頁岩	43−20	
83-7	FL-7	2層	石篦	4.4	2.15	1.1	11.3	頁岩	43−21	
84-1	FP-11	3層	不定形石器ⅠA類	5.0	7.0	1.6	49.7		43−22	

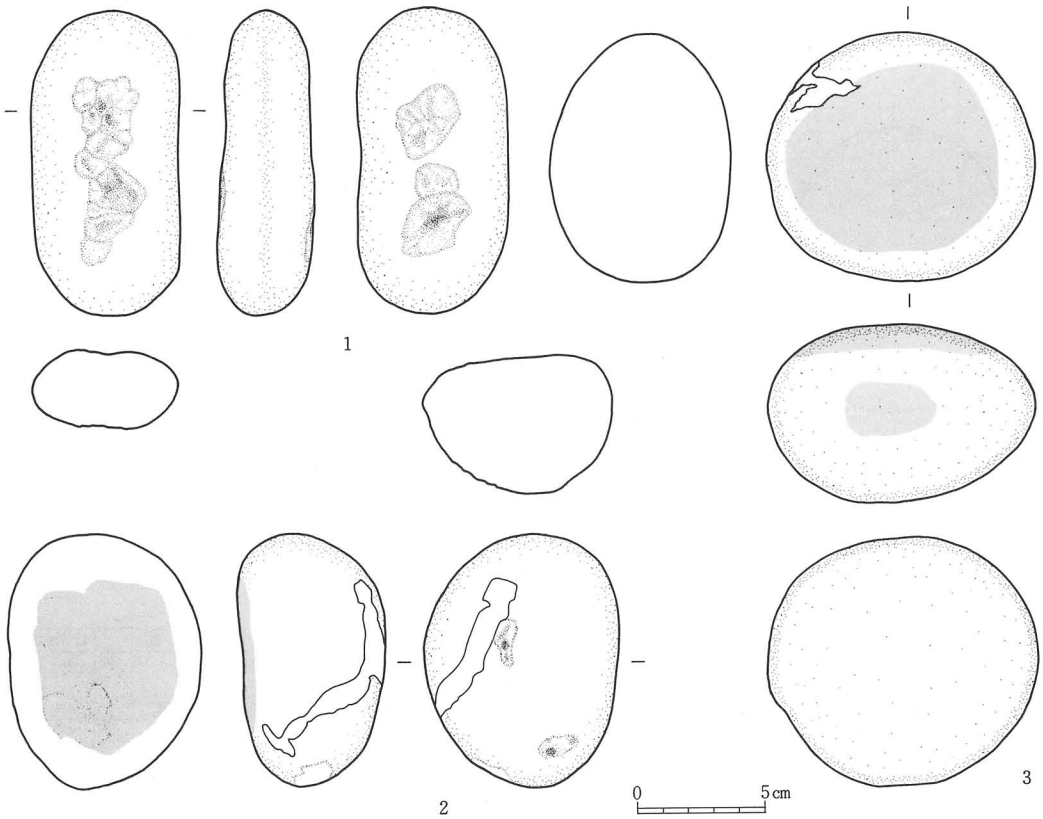


図84　包含層出土石器（4）

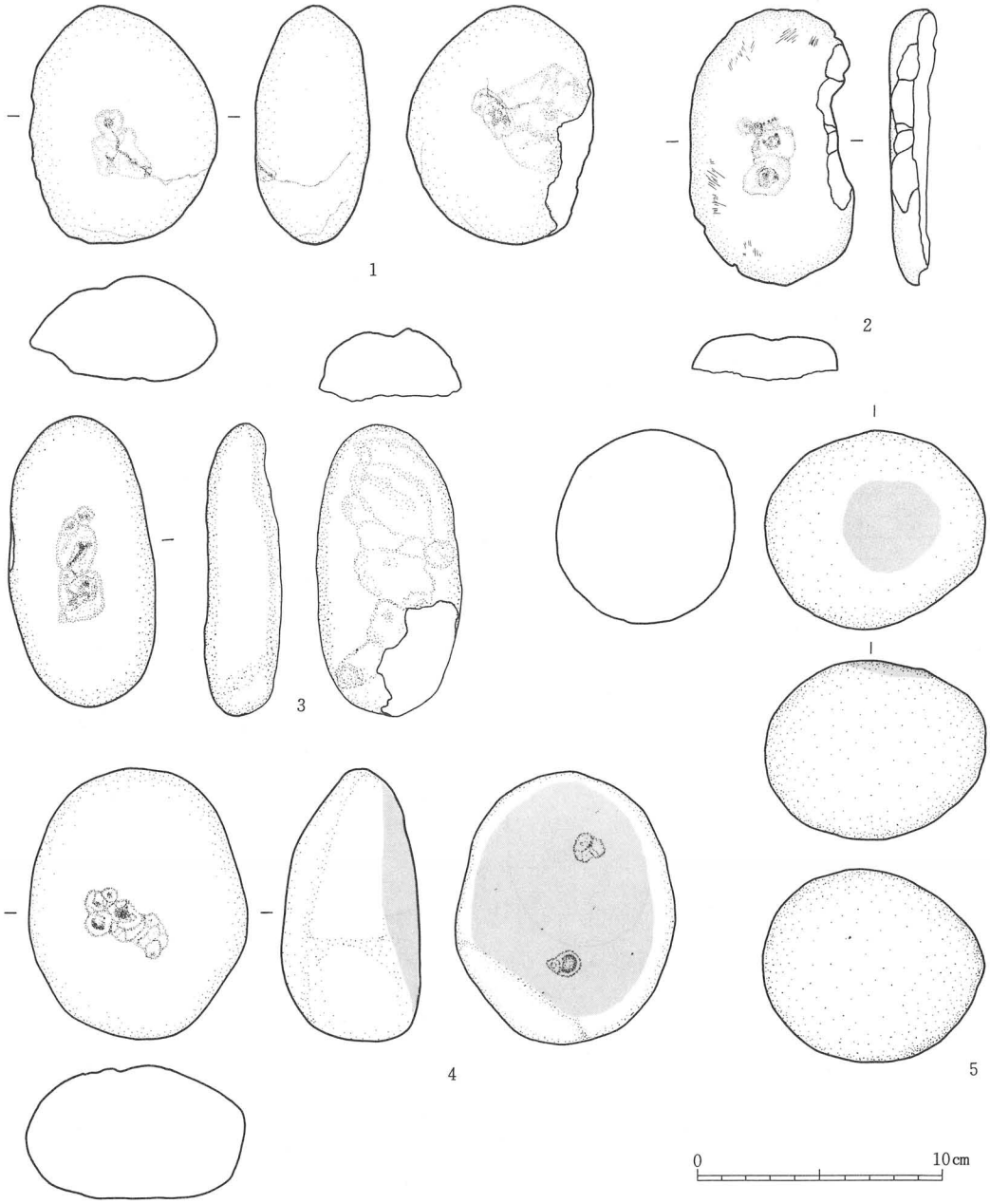


図 84、85　包含層出土石器観察表

番号	地　区	層位	器　　種	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重量(g)	石　材	使　用　痕	写真図版番号
84-1	FEF　-　5	1層	凹石	121	59	36	380		凹－両面	44－7
84-2	FO-12・13	1層	磨石	101	72	57	590		磨－片面	44－8
84-3	FN-9	2.3層	磨石	105	99	70	1,040		磨－片面、片側面	44－9
85-1	40トレンチE区	2層	凹石	99	(79)	47	(420)		凹－両面	44－10
85-2	49トレンチ	〃	凹石	115	67	(19)	(130)		凹－片面	44－11
85-3	51トレンチ	〃	凹石	121	61	32	280		凹－片面	44－12
85-4	40トレンチB区	〃	磨凹石	113	91	57	820		磨凹－片面(反対面)	44－13
85-5	40トレンチE区	〃	磨石	91	83	74	690		磨－片面	44－14

図85　包含層出土石器（5）
礫石器（2）

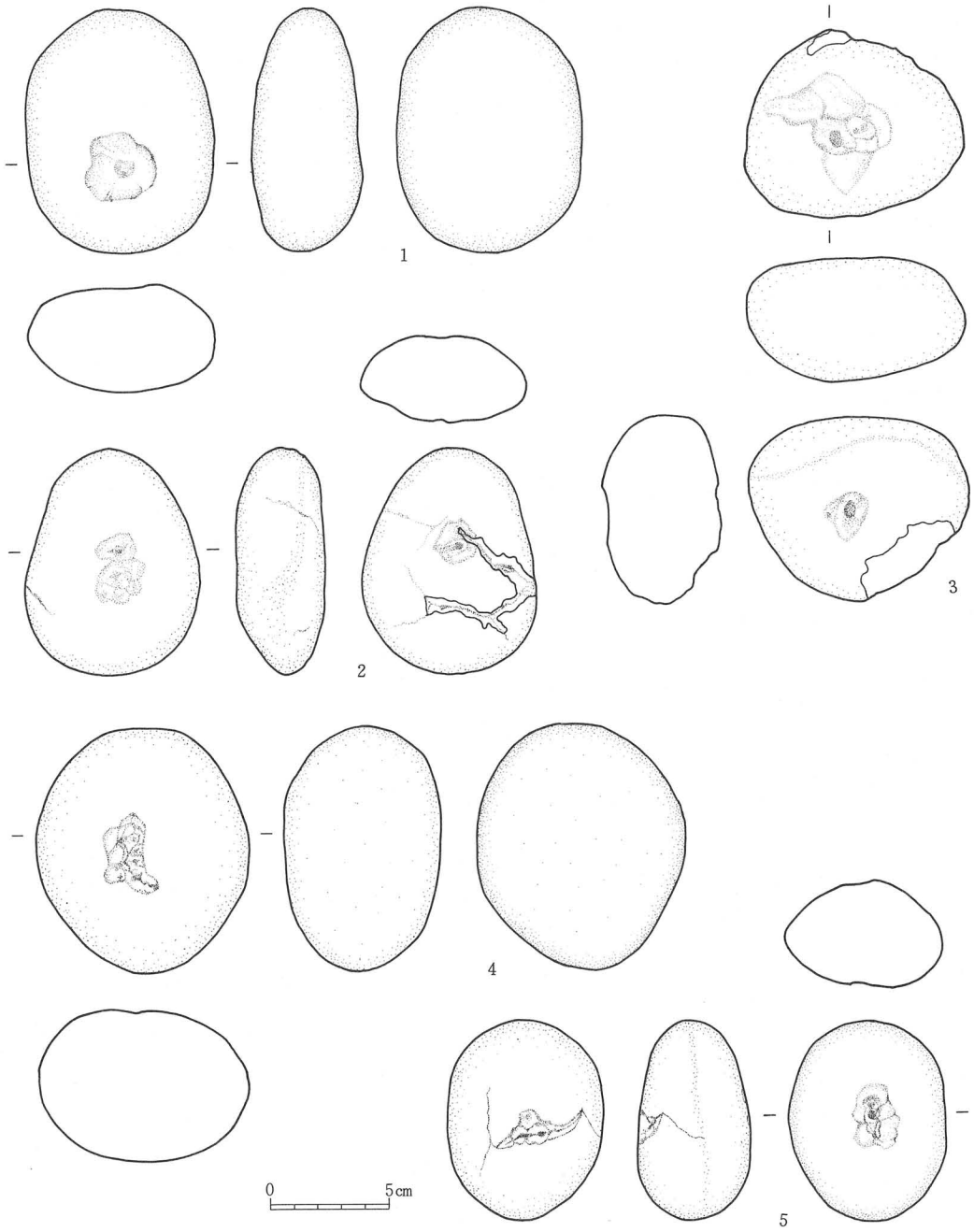


図 86　包含層出土石器観察表

番号	地　区	層位	器　種	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重量(g)	石　材	使　用　痕	写真図版番号
86-1			凹石	104	78	46	520		凹－片面	44－15
86-2	FEF-5		〃	97	74	38	350		凹－両面	44－16
86-3	FK-5	2層	〃	92	80	53	470		凹－両面	44－17
86-4			〃	104	90	67	890		凹－片面	44－18
86-5	FH-2	3層	〃	84	67	48	303		凹－両面	44－19

図86　包含層出土石器（6）
礫石器（3）

6．縄文時代の遺構と遺物

『土器』

出土した土器はそれぞれの特徴から次の3群に分類した。時期区分の可能なもの(A群)、地文のみのもの（B群)、磨滅等により不明のもの（C群)。さらにA群の土器については、Ⅰ・Ⅱ群に大別された。Ⅰ群としたものは遺物包含層から主体的に出土しているもので、その文様の特徴から大木7 a•b式期に比定される土器群である。Ⅱ群としたものは、竪穴住居跡や土坑から主体的に出土しているものである。それらのうち復元資料を中心に分類し検討してみる。Ⅱ群とした土器群は、文様構成の点から次のように分けられる。

第1類　楕円文のもの（図58-1)

第7住炉埋設土器がこれにあたる。器形は平口縁で、底部が小さく胴上部でふくらんだ口縁部は内湾している。沈線によって口縁部に横位の楕円文が施文され、胴部に大波状沈線が巡りその間に縦位の楕円文が4単位描かれる。

第2類　「J」字状文のもの（図40-8・図44-2)

第4住炉埋設土器・第5住出土浅鉢土器がこれにあたる。1は波状口縁で底部を欠いているが、器形は胴部が直線的に立ち上がり、口縁部が強く外湾している。口縁部に沿って、沈線による「J」字状の無文帯が4単位に描かれている。2は台付きの浅鉢形土器で吊り手状の把手が4単位についている。器形は胴上部が「く」字状にくびれ平縁な口縁部が鍔状に張り出している。把手から続く隆線によって胴部に「J」字状の無文帯が4単位描かれている。

第3類　「C」字状文のもの（図25-1・図52-1・図52-2)

(1)第1住炉埋設土器（図25-1)・(2)第6住炉埋設土器（図52-1）及び(3)床埋設土器（図52-2）がこれにあたる。(1)は平口縁で、器形は丸く膨らんだ胴部が上部でくびれ、口縁部は外湾している。沈線によって「C」字状文が3単位描かれ、縄文が充塡されている。(2)は平口縁で、器形は口縁部が緩やかに外湾し、胴部はやや膨らんでいる。隆（稜）線によって「C」字状文が4単位描かれ、縄文が充塡されている。胴部中央に隆（稜）線による区画線がめぐり、その下は地文となっている。(3)は平口縁で、器形は口縁部がゆるく外湾し、胴中央部が膨らんでいる。隆（稜）線によって「C」字状文が4単位描かれ、縄文が充塡されている。口縁部と胴中央部

図81　包含層出土石器（40トレンチ他）観察表

番号	地　区	層位	器　種	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重量(g)	石　材	写真図版番号	備　考
81-1	49トレンチ	2層	石鏃Ⅰ B類	(3.9)	1.2	0.4	1.6	頁岩	42−11	
81-2	55トレンチ		石篦	5.2	3.7	1.1	21.6		42−12	
81-3	17トレンチ		石篦	5.1	3.3	0.9	19..8		43−1	
81-4	40トレンチF区		石錐Ⅱ類	5.8	1.6	0.8	5.3	頁岩	42−13	
81-5	40トレンチE区	2層	石錐Ⅱ類	2.8	1.3	0.4	0.8		43−2	
81-6	40トレンチB区	2層	石錐Ⅱ類	3.0	2.0	0.9	2.9		43−3	
81-7	16トレンチ	2層	不定形石器A類	6.5	3.1	0.9	18.7	頁岩	42−14	

に、隆（稜）線による区画線が巡り、「C」字状文の下は地文となっている。

第4類「∽」字状文のもの（図64-1．2）

第8住出土土器（1．2）がこれにあたる。2は緩やかな波状口縁で、器形は丸く膨らんだ胴部が上部でくびれ、口縁部は外湾している。沈線によって「∽」字状文が2単位描かれ、縄文が充塡されている。胴中央部に沈線による波形の区画線がめぐり、その下は地文となっている。1は平口縁で、口縁部は外湾している。沈隆線によって「∽」字状文が描かれ、縄文が充塡されている。

第5類　分節波濤文のもの（図36-1．図64-3）

第3住炉埋設土器(1)・第8住床埋設土器(2)がこれにあたる。1は胴部資料で、胴中央部が膨らんでおり、沈線によって分節波濤文が4単位描かれている。2は胴部資料で、わずかに膨らみ、隆（稜）線によって分節波濤文が4単位描かれている。縄文の充塡された区画は雁股状分節波濤文となっている。その下を巡る区画線の下は地文となっている。

今回出土した第II群土器は、仙台市内では山田上ノ台遺跡・観音堂遺跡・北前遺跡、宮城県内では蔵王町二屋敷遺跡・七ケ宿町大梁川遺跡・小梁川東遺跡・利府町郷楽遺跡などの遺跡に出土例がみられ、大木10式期に属するものである。大木10式については、その設定以来細分が考えられてきており、第I段階から第IV段階までの変遷が考えられている(丹羽：1981.1982)。近年では、大梁川遺跡の発掘調査による新しい資料によって再度編年が検討され、3段階にわたる変遷が呈示されている（相原・加藤：1988)。

今回の出土資料をこれと比較すると、第1類～第3類のものは、楕円文・「J」字状文・「C」字状文などの特徴から、大木10式前半期、第I段階に位置付けられる。第4・5類のものは、「∽」字状文と分節波濤文を特徴としており、大木10式前半の新しい時期、第II段階に位置付けられる。

『石器・石製品』

今回の調査で出土した石器・石製品には、石鏃・石匙・石錐・尖頭器・篦状石器・スクレイパー・不定形石器・石核・磨製石斧・石柱状石製品・礫石器等がある。

石器の分類と特徴

［石　鏃］　石鏃は、41点出土している。基部形態と側辺の形態によって分類した。基部形態については、凹基（I類)、平基（II類)、有茎石鏃（III類)、丸凸基（IV類）がある。側辺の形状には外湾（A類)、直線（B類）がある。

［尖頭器］　左右対称の側縁をもち鋭角な尖頭部を作り出しているもので、4点出土している。石鏃と同様基部に抉りの入っているものと、平坦なものがあるが大型のものはない。

［石　錐］　基部と錐状の先端部をもつもので、9点出土している。基部と先端部の区別が

明確でなく棒状を呈するもの（Ⅰ類）、明確なもの（Ⅱ類）、区別が不明確なもの（Ⅲ類）がある。

［篦状石器］　平面形が撥形あるいは短冊形で側縁の二次加工により刃部を作り出しているもので、4点出土している。

［石　匙］　両側縁から入れられた抉りによって作り出されたつまみ部と広い刃部からなるもので、9点出土している。縦長のもの（Ⅰ類）、横長のもの（Ⅱ類）がある。Ⅰ類の身部の形状には、二縁辺構成（A類）と三縁辺構成（B類）とがある。

［磨製石斧］　磨製石斧は、竪穴住居跡から2点出土している。

［石　核］　石核は、2点出土している。

［スクレイパー］　剝離が全面に入れられ連続した二次加工による刃部をもつ石器で、形態的には長楕円形あるいは砲弾形を呈している。5点出土している。

［不定形石器］　素材の形態をあまり変化させず、部分的な二次加工によって必要な刃部を作り出しているもので、3種類に大別される。

A類：主として縁辺部に入れられた二次加工による刃部を有するもの。

B類：二次加工による刃部を有し、尖端部が作り出されるもの。

C類：顕著な二次加工のないもの。

［石製品］　珪化木を加工せずそのまま使用した石柱状のものが2点出土している。

［礫石器類］　これらの石器は、礫の表面にみられる磨面・凹部・敲打痕などの使用痕跡によって分類されるもので39点出土している。それぞれの痕跡が単独でみられるものもあるが、複数の痕跡がみられるものが多い。使用痕跡の組合せによって、磨石、凹石、磨凹石、敲石、磨凹敲石に分類することができる。

『竪穴式住居跡と炉跡』

今回の調査では竪穴式住居跡が8軒が検出された。これらの住居跡は炉埋設土器などから、大木10式期前半のものと考えられる。この時期の竪穴住居跡については、これまでの調査例から柱穴の配置、炉跡の形態および構造に強い類似性があることが指摘されている。そこで今回の8軒の住居跡について項目ごとにまとめ検討してみたい。

「平面形・規模」　平面形には円形基調のもの（第1～3・6・8号住居跡）、隅丸方形状のもの（第4・5・7号住居跡）がある。規模について床面積をみると、9～13 m²（第1～5号住居跡）、17～20 m²（第6～8号住居跡）という結果になり、平面形に関係なくそれぞれに大小の違いがみられるようである。

「柱穴」　すべての住居跡から検出されており、柱穴の配置については炉の位置がつよく関係し、つぎの3通りの形態が考えられる。

a：主柱３本＋補助柱（第２・４・５・６（古）号住居跡）

炉の長軸線上に１本、長軸線上からほぼ対象となる炉埋設土器の両側に２本位置し、この３本を結ぶ線は三角形を呈する。補助柱の位置についても規則性がみられ、長軸線上の炉の掘り込み部端に１本、長軸線上にある柱穴から対称となる位置に２本配置される。

b：主柱４本（第１・６（新）・７・８号住居跡）

炉の長軸線上からほぼ対称となる位置に配置され、４本を結ぶ線は長方形を呈する。そのうちの２本は炉埋設土器の両側に位置する。

c：主柱２本＋補助柱（第３号住居跡）

主柱２本は炉の長軸線上からほぼ対称となる土器埋設石囲部と敷石石囲部の境目の両側に配置される。補助柱は主柱の延長線上で炉の長軸線上から対称となる位置にそれぞれ２本配置される。

「周溝」

第１・２号住居跡を除いて検出されているが、全周するものはない。

a：炉の掘り込み部と壁沿いの位置部を除き巡るもの（第５・６・７号住居跡）

b：壁沿いの位置部にみられるもの（第３・４・８号住居跡）

８号住居跡については床面の撹乱がいちじるしくこれが本来の在り方がどうかは明らかではない。

沼遺跡竪穴住居跡観察表

	平面形	面積(㎡)	周　溝	柱穴主柱構造	炉主軸方位	炉　構　造	床に占める割合炉面積	炉埋設土器	備　　考
1住	楕円形	9.5 m²	無	4本柱 (2本柱＋補助柱2本？) (台形状)	N-13°-E	複式炉、埋設土器有 奥壁部に偏平な石 炉全長 2.2 m	2.1 m² (20 %)	Ⅰ段階 「Ⓤ」字状文	
2住	ほぼ円形	11.3 m²	無	3本柱＋補助柱3本 (三角形)	N-9°-E	複式炉、埋設土器無 炉全長 1.85 m	1.44 m² (13 %)		炉の北、長軸線上に焼土炉の西、土坑 90×65×10。不整方形で主柱と考えられる Pit に切られている
3住	楕円形	10.7 m²	西壁側のみ残存	主柱２本＋補助柱６本 (五角形)	N-5°-E	複式炉、埋設土器有 奥壁及び底面に偏平な石 炉全長 2.0 m	2 m² (17 %)	Ⅱ段階 波濤文	
4住	隅丸の方形 (に近い円形)	9.6 m²	西～北壁にかけて残存	3本柱＋補助柱3本 (三角形)	N-38°-E	複式炉、埋設土器有 奥壁に偏平な石 掘り込み部のほうが石組み部よりも底面が深く壁に向って傾斜している 炉全長 1.85 m	2 m² (21 %)	Ⅰ段階 「Ｊ」字状文	
5住	隅丸の方形 (に近い円形)	13.2 m²	東壁の一部をのぞきほぼめぐる	3本柱＋補助柱3本 二等辺三角形	N-13°-W	複式炉、埋設土器有 炉全長 2.0 m	1.44 m² (11 %)	Ⅰ段階 「Ｊ」字状文	床直上に完形に近い土器 埋層中にレンズ状に多量の土器片
6住	楕円形	18.1 m²	炉、東壁の一部をのぞいてほぼめぐる	(新) 4本柱（長方形） (2本柱＋補助柱2本) (古)正三角形 3本柱＋補助柱3本	(新) N-21°-E (古) N-60°-E	複式炉、埋設土器有 埋設土器部を同一にして炉の改築あり炉全長 2.2 m	2.1 m² (12 %)	Ⅰ段階 「Ｃ」字状文	炉埋設土器に接して、横位の埋設土器あり
7住	隅丸の方形 (に近い円形)	19.6 m²	炉、北東部をのぞきほぼめぐる	4本柱 or 5本柱 補助柱 2～3本、長方形	N-60°-E	複式炉、埋設土器有 炉全長 2.7 m	2.4 m² (12 %)	Ⅰ段階 楕円文	
8住	円形	17.3 m²	東、西側の一部	(新) 4本柱？＋補助柱 長方形？	(新) N-16°-W (古) N-14°-E	炉全長(推) 2.0 m		Ⅰ段階 Ⅱ段階 「∽」状文、波濤文	

「炉」　撹乱をうけている８号住居跡を除き、いずれも土器埋設石囲部・敷石石組部・掘り込み部からなる複式炉である。炉の大きさは住居跡のほぼ半径に相当する長大なもので、炉の長軸方向は、住居跡の長軸に直交する第３・６号住居跡を除き住居跡の長軸と一致している。

土器埋設部は、炉の長軸線上に土器を正位の状態で据え、その周りを比較的小さな扁平な石で一重あるいは二重に囲んでいる。

敷石石組部は、炉の長軸に直交する長軸をもつ長方形を呈し、断面の形状は逆台形状である。敷石はほぼ同じ大きさの扁平なものを用いているが、奥壁部に比較的大きな石を据えたものもある。床面からの深さは20～30 cm である。

掘り込み部は、壁ぎわまで延びており、平面形は方形を呈している。床面からの深さは敷石石組部よりも浅くなっているが、第４号住居跡では逆に10 cm 程度深くなっている。

炉の全長は1.9～2.7 m、面積は1.4～2.4 m²の範囲に収まる。炉の床面積に占める割合は約10～20％である。

大木10式期の主柱３本と複式炉の構造をもつ住居跡の分布については、宮城県南部から福島県中央部・山形県中央部以南が中心域と考えられている。また、時期的には大木10式期の前半に集中して認められる傾向が指摘されており、本遺跡の住居跡についても、これまでの調査例と共通する特徴がうかがわれる。

VI. 調査のまとめ

１．沼遺跡は七北田川の形成した河岸段丘上に位置している。

２．今回の調査では、縄文時代中期・古代・中世・近世の各時代の遺構・遺物が検出された。

３．ｉ．縄文時代の遺物としては、中期の土器・石器が出土しており、特に竪穴住居跡からの遺物は中期末葉大木10式期のものである。

ii．縄文時代の遺構としては、竪穴住居跡・土坑・遺物包含層がある。

iii．竪穴住居跡は、中期末葉の大木10式期のものであり、複式炉をもっている。

iv．土坑は、竪穴住居跡とほぼ同時期のものとおもわれる。

ｖ．遺物包含層は、中期前葉大木７式期・中期末葉大木10式期の遺物が出土している。

４．古代の遺構は検出されていないが、遺物としては土師器が出土している。

５．ｉ．中世以降では、道路跡・掘立柱建物跡が検出されている。

ii．江戸時代の遺構としては、水田跡・土壙墓群が検出されている。

iii．その他時期不明のものとして、土坑・溝跡・ピットが検出されている。

引用参考文献

後藤勝彦他・上深沢遺跡（1978）宮城県文化財調査報告書第52集

丹羽　茂他・菅生田遺跡（1982）宮城県文化財調査報告書第92集

森　幸彦他・塩沢上原Ａ遺跡発掘調査概報（1984）福島県立博物館調査報告第10集

真山　悟他・小梁川東遺跡（1985）宮城県文化財調査報告書第107集

阿部　恵他・宮城町観音堂遺跡（1986）宮城県文化財調査報告書第118集

中村良幸・観音堂遺跡（1986）岩手県大迫町文化財報告第10集

相原淳一他・小梁川遺跡（1987）宮城県文化財調査報告書第117集

古川一明他・中ノ内Ａ遺跡（1987）宮城県文化財調査報告書第121集

主浜光朗・山田上ノ台遺跡（1987）仙台市文化財調査報告書第100集

相原淳一他・大梁川遺跡（1988）宮城県文化財調査報告書第126集

阿部　恵・庄子　敦他・利府町郷楽遺跡II（1989）宮城県文化財調査報告書第134集
利府町文化財調査報告書第５集

鈴鹿良一他・真野ダム関連遺跡発掘調査報告ＸIV（1990）福島県文化財調査報告書第230集

松本　茂他・法正尻遺跡（1991）福島県文化財調査報告書第243集

梅宮　茂・複式炉文化圏（1974）福島考古第15号　福島県考古学会

丹羽　茂・大木式土器（1981）縄文文化の研究４　雄山閣

柳沢清一・東北縄文中・後期編年の諸問題その１（1987）古代第84号　早稲田大学考古学会

柳沢清一・大木10式土器論続考（1988）北奥古代文化第19号　北奥古代文化研究会

泉市誌（1986）「第20章　民　俗　第１節　道路」

宮城県史24　資料編２「風土記」（1987）宮城県史編纂委員会

Ⅶ 分　析

1．沼遺跡におけるプラント・オパール分析

古環境研究所

1．はじめに

この調査は、プラント・オパール分析を用いて、沼遺跡における稲作跡の探査を試みたものである。

2．試料

試料は、遺跡の調査担当者によって容量50 ccの採土管を用いて採取され、当研究所に送られてきたものである。図1に、土層断面図と試料採取箇所を示す。試料数は計11点である。

3．分析法

プラント・オパールの抽出と定量は、「プラント・オパール定量分析法（藤原、1976）」をもとに、次の手順で行なった。

(1) 試料土の絶乾（105℃・24時間）、仮比重測定

(2) 試料土約1gを秤量、ガラスビーズ添加（直径約40 μm、約0.02 g）

※電子分析天秤により1万分の1gの精度で秤量

(3) 電気炉灰化法による脱有機物処理

(4) 超音波による分散（300 W・42 KHz・10分間）

(5) 沈底法による微粒子（20 μm以下）除去、乾燥

(6) 封入剤（オイキット）中に分散、プレパラート作成

(7) 検鏡・計数

同定は、機動細胞珪酸体に由来するプラント・オパール（以下、プラント・オパールと略す）をおもな対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行なった。計数は、ガラスビーズ個数が300以上になるまで行なった。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。試料1gあたりのガラスビーズ個数に、計数されたプラント・オパールとガラスビーズ個数の比率をかけて、試料1g中のプラント・オパール個数を求めた。

また、この値に試料の仮比重と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重、単位：10^{-5}g）をかけて、単位面積で層厚1 cmあたりの植物体生産量を算出した。換算係数は、イネは赤米、ヨシ属はヨシ、タケ亜科はゴキダケの値を用いた。その値は、それぞれ2.94（種実重は1.03）、6.31、0.48である（杉山・藤原、1987）。

4．分析結果

プラント・オパール分析の結果を表1および図1、図2に示す。なお、稲作跡の探査が主目

的であるため、同定および定量は、イネ、ヨシ属、タケ亜科、ウシクサ族（ススキやチガヤなどが含まれる）、キビ族（ヒエなどが含まれる）の主要な5分類群に限定した。巻末に各分類群の顕微鏡写真を示す。

5. 考察

水田跡（稲作跡）の検証や探査を行う場合、一般にイネのプラント・オパールが試料1gあたりおよそ5,000個以上と高い密度で検出された場合に、そこで稲作が行われていた可能性が高いと判断している。また、その層にプラント・オパール密度のピークが認められれば、上層から後代のものが混入した危険性は考えにくくなり、その層で稲作が行われていた可能性はより確実なものとなる。以上の判断基準にもとづいて、各地点ごとに稲作の可能性について検討を行った。

AL－11地点では、2～5層について分析を行った。その結果、これらのすべてからイネのプラント・オパールが検出された。このうち、2層では、密度が4,400個/gと比較的高いことから、稲作が行われていた可能性は高いと考えられる。3～5層では、密度が1,500～2,900個/gと比較的低いことから、稲作の可能性はあるものの、上層や他所からの混入の可能性も考えられる。

AM－12地点では、6層について分析を行った。その結果、イネのプラント・オパールは検出されたが、密度は800個/gと低い値である。したがって、同層で稲作が行われていた可能性はあるものの、上層や他所からの混入の可能性も考えられる。

AR－24地点では、2～4層について分析を行った。その結果、これらのすべてからイネのプラント・オパールが検出された。このうち、2層では、密度が4,700個/gと比較的高いことから、稲作が行われいた可能性は高いと考えられる。3～4層では、密度が1,500～1,800個/gと低いことから、稲作の可能性はあるものの、上層や他所からの混入の可能性も考えられる。

CB－0地点では、3～5層について分析を行った。その結果、3，4層からイネのプラント・オパールが検出された。このうち、3層では密度が4,600個/gと比較的高いことから、稲作が行われていた可能性は高いと考えられる。4層では、密度が1.600個/gと低いことから、稲作の可能性はあるものの、上層や他所からの混入の可能性も考えられる。

以上のように、AL－11地点の2層、AR－24地点の2層、CB－0地点の3層で、稲作の可能性が高いと判断された。また、CB－0地点の5層を除く各層でも稲作の可能性が認められた。

参考文献

杉山真二・藤原宏志（1987）「川口市赤山陣屋跡遺跡におけるプラント・オパール分析」赤山―古環境編―川口市遺跡調査会報告第10集（P281-298）

藤原宏志（1976）「プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)― 数種イネ科栽培植物の珪酸体標

本と定量分析法 —」考古学と自然科学（9：15-29）

藤原宏志（1979）「プラント・オパール分析法の基礎的研究(3)－福岡・板村遺跡（夜臼式）水田および群馬・日高遺跡（弥生時代）水田におけるイネ（O. sativa L.）生産総量の推定－考古学と自然科学（12：29-41）

藤原宏志・杉山真二（1984）「プラント・オパール分析法の基礎的研究(5)— プラント・オパール分析による水田址の探査 —」考古学と自然科学（17：73-85）

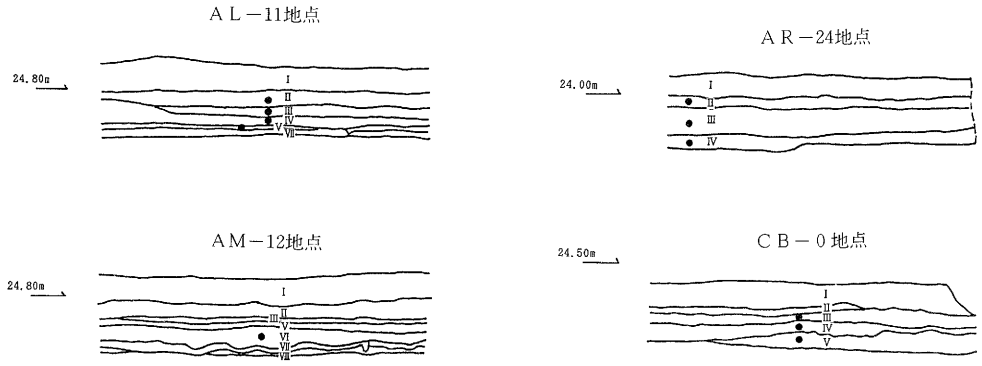


図１　土層断面図と分析試料の採取箇所

表１　プラント・オパール分析結果

	試料名	深さ cm	層厚 cm	仮比重	イネ 個/g	(籾総量) t/10a	ヨシ属 個/g	タケ亜科 個/g	ウシクサ族 個/g	キビ族 個/g
ＡＬ－11地点（西区水田）	2	20	11	1.31	4,400	6.46	0	37,100	2,200	0
	3	31	6	1.24	2,300	1.73	0	30,900	0	700
	4	37	6	1.24	2,900	2.16	0	52,400	0	0
	5	43	3	1.16	1,500	0.53	1,500	28,600	0	0
ＡＭ－12地点（西区水田）	6	38	12	0.95	800	0.87	0	29,300	1,600	0
ＡＲ－24地点（東区水田）	2	21	7	1.07	4,700	3.61	0	26,000	0	0
	3	28	17	1.27	1,800	3.85	0	34,700	0	900
	4	45	9	1.13	1,500	1.48	0	24,800	0	0
ＣＢ－０地点（北区水田）	3	29	4	1.21	4,600	2.27	0	40,500	900	0
	4	33	8	1.07	1,600	1.40	0	26,600	0	0
	5	41	9	1.07	0	0.00	0	10,900	0	0

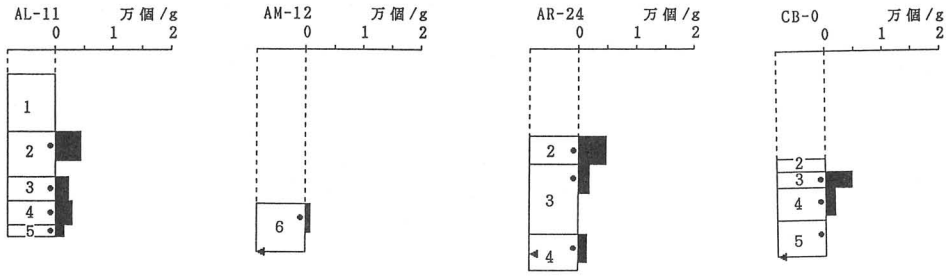


図2　イネのプラント・オパールの検出状況

（注）◀印は50cmのスケール、・印は分析試料の採取箇所

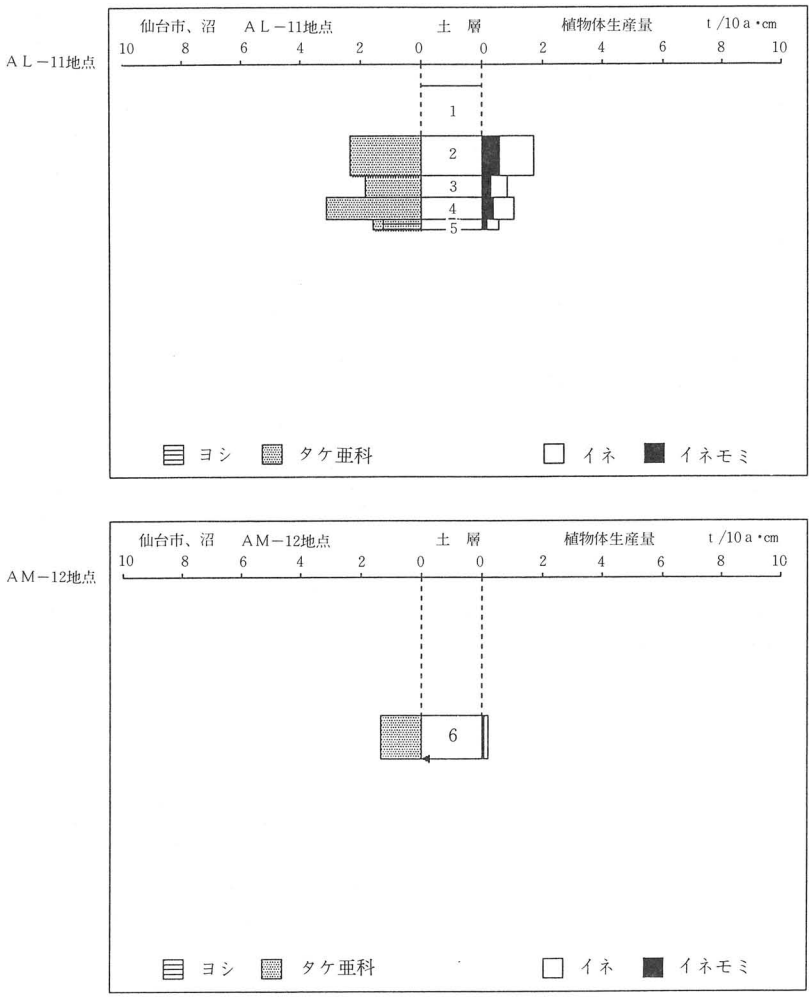
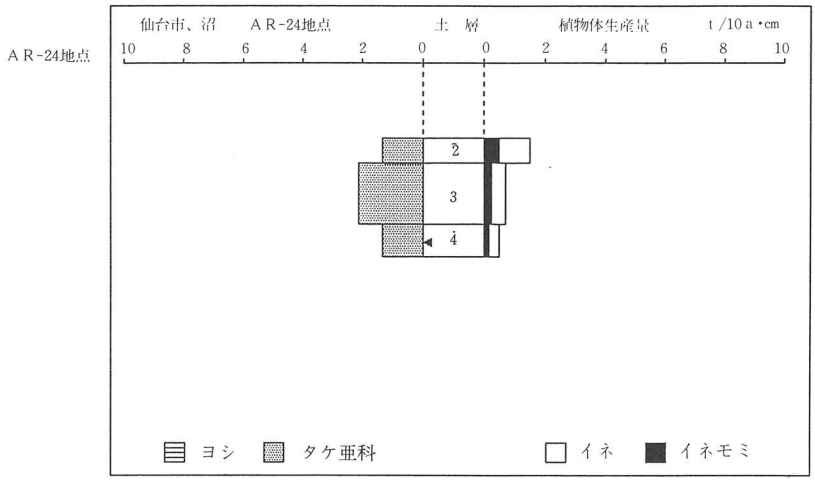


図3　おもな植物の推定生産量と変遷

（注）◀印は50cmのスケール



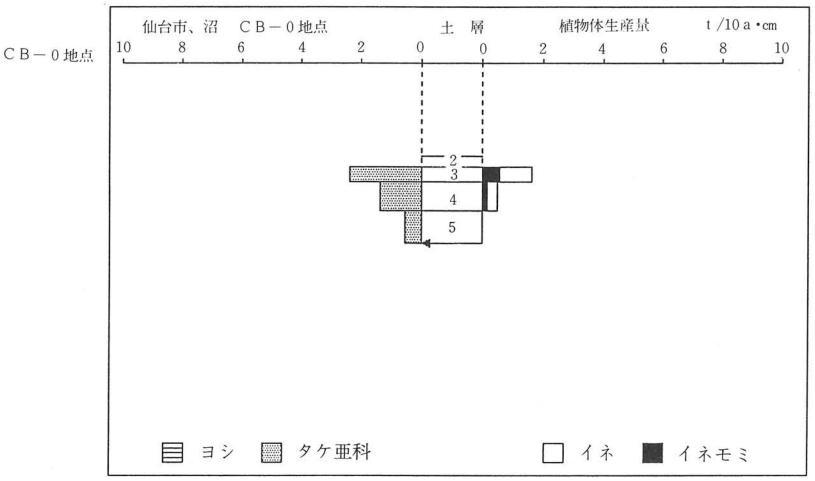


図４　おもな植物の推定生産量と変遷

（注）◀印は50cmのスケール

2．沼遺跡の花粉分析

東北大学理学部生物学教室　守田益宗

花粉分析を行なった試料は、表1に示した位置および層序より採取した。これらの試料は、腐植に富んでおり、腐植酸の除去にはKOH処理を数度繰返すことが必要であった。その後、$ZnCl_2$-Acetolysis処理を行なったが、硅酸分が多く花粉はほとんど抽出されなかった。そこで、新たにKOH-HF-Acetolysis処理を実施した。花粉の同定は、顕微鏡の倍率を250～1250倍にして行なった。

花粉分析の結果は、表1に示したとおりである。なお、検出された主なものについては顕微鏡写真を付した(写真48)。すべての試料で花粉含量が少なく、これをもとに過去の植生や遺跡をとりまく環境の論議は不可能である。

堆積物中の花粉含量の少ない原因は、Faegri & Iversen (1975) によれば、①花粉の供給量に比べ堆積物の堆積速度が大であった。②何らかの原因によって堆積した花粉が分解した。③もともと、付近の植生の花粉生産量が少なかった場合が考えられるという。今回の場合、遺跡は段丘上に立地しており、堆積物中の腐植含量が多いこと、植物硅酸体 (plant opal) を多く含むこと。花粉外膜が腐触していたり、破損している花粉が目立つことから、②の可能性が高い。

筆者のこれまでの経験では、黒ボク土や頻繁に適湿から乾燥状態に変化する地点の土壌では、このような花粉分析結果になることが多いことを付記しておく。

文献

Faegri, K. & Iversen, J. (1975) Textbook of Pollen Analysis (3rd ed.), Munksgaard, Copenhagen

表1　沼遺跡花粉分析結果一覧表（数字は個数を示す）

		2層	3層	SI5 炉埋設土器		SI6 炉東埋設土器		SI8 床面埋設土器
				埋土上半	埋土下半	埋土上半	埋土下半	
Pinus	マツ属	3						
Cryptomeria	スギ属	1	5	1				
Pterocarya	サワグルミ属				1			
Juglans	クルミ属						2	
Fagus	ブナ属	1						
Ulmus-Zelkova	ニレ属ーケヤキ属		1			1		
Salix	サナギ属							1
Gramineae	イネ科	4	1	1		3		
Cyperaceae	カヤツリグサ科	1	1			1		
Moraceae	クワ科				1			
Chenopodiaceae - Amaranthaceae	アカザ科ーヒユ科	2	1					
Umbelliferae	セリ科						1	
Cuscuta	ネナシカズラ属						1	
Artemisia	ヨモギ属	16	6		1		1	2
other Compositae	他のキク科	4	2		1		2	
1-lete type FS	単条溝型シダ胞子	6	7	1		3	2	
3-lete type FS	三条溝型シダ胞子		4					
Trees	高木	5	6	1	1	1	2	
Shrubs	低木							1
Herbs	草本	27	11	1	3	4	5	2
Ferns	シダ	6	11	1		3	2	
Unknown	不明	6	5		2	2	2	

写　真　図　版

写真１　沼遺跡航空写真（1947年撮影）

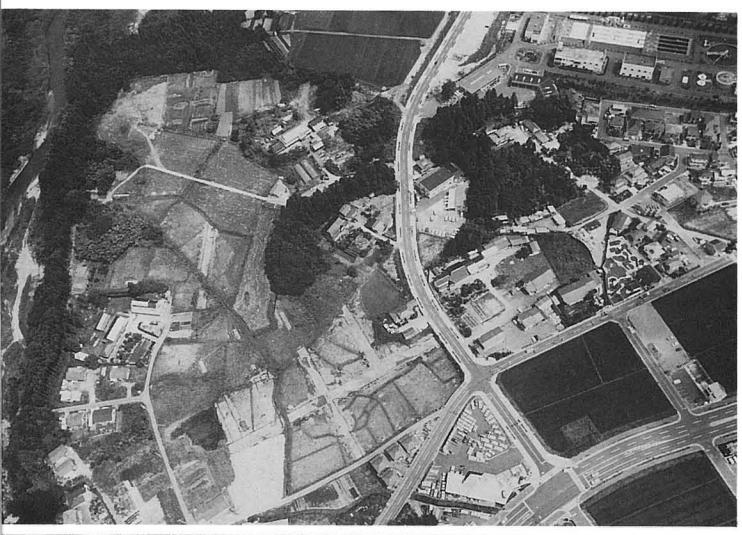


写真 2
沼遺跡航空写真
（南方上空）

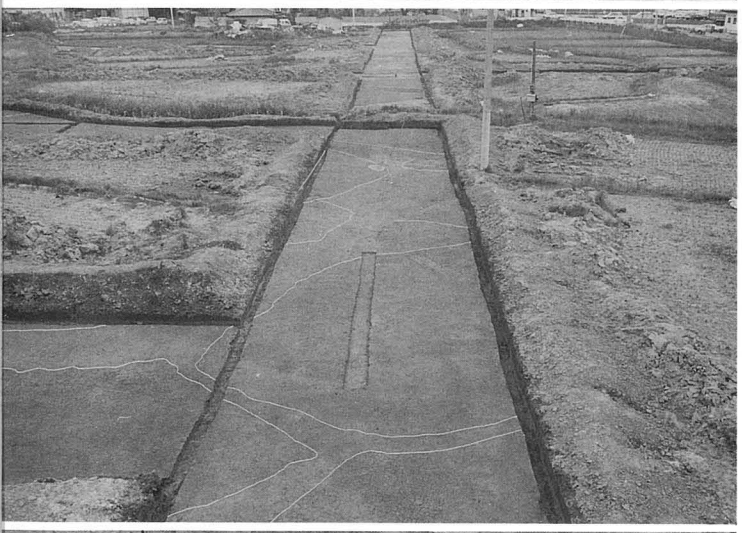


写真 3
西区水田跡検出状況
（西方より）

写真 4
東区水田跡検出状況
（南方より）

写真５
墓壙群（西区水田跡）
（西方より）

写真６
道路跡・掘立柱建物跡
（南方より）

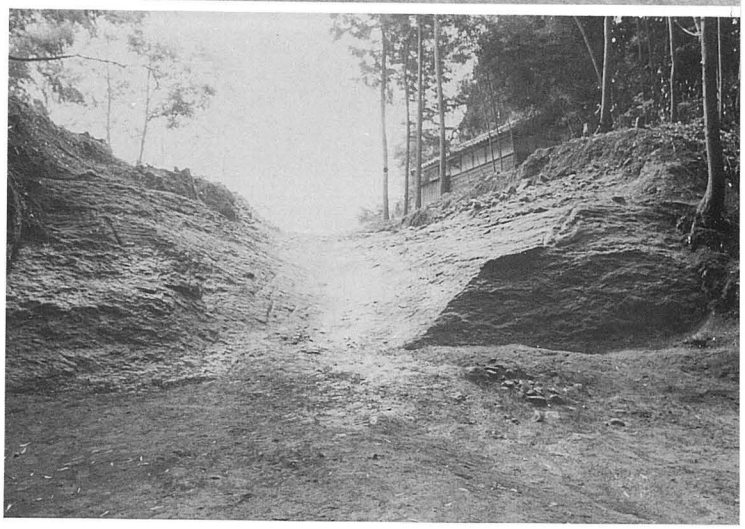


写真７
切り通し遺構
（北西より）

写真８
縄文包含層地区空撮
（南方より）

写真９
竪穴住居跡完掘状況
（東方より）

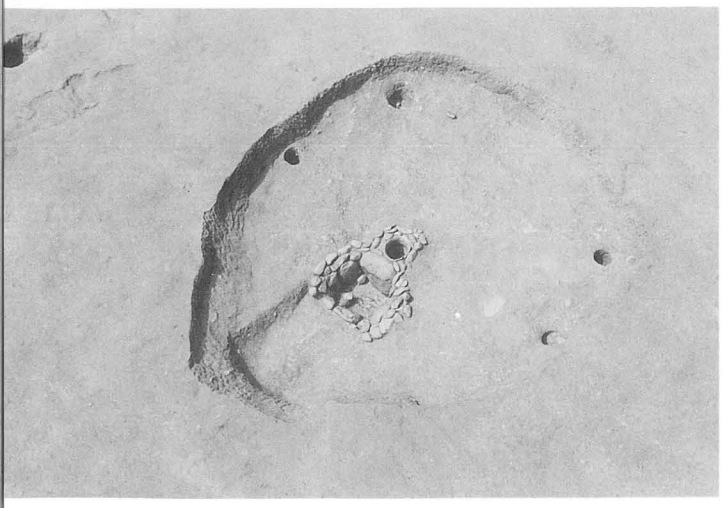


写真10
１号住居跡完掘状況
（東方より）

写真11
2号住居跡完掘状況
（南方より）

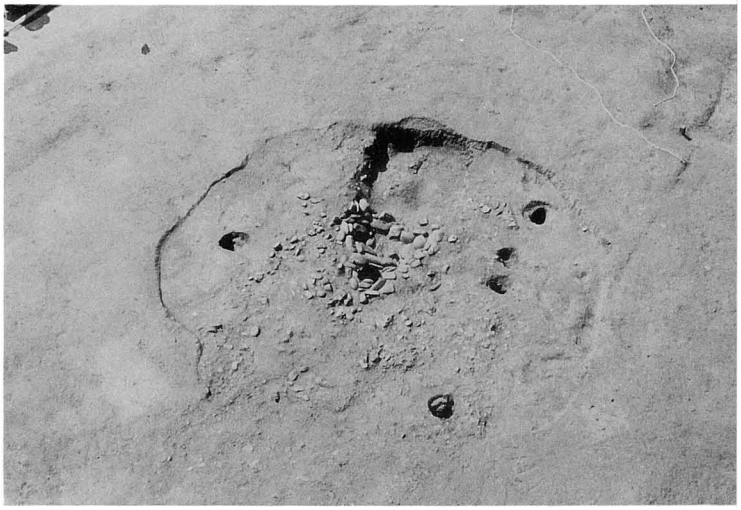


写真12
3号住居跡完掘状況
（北方より）

写真13
4号住居跡完掘状況
（東方より）

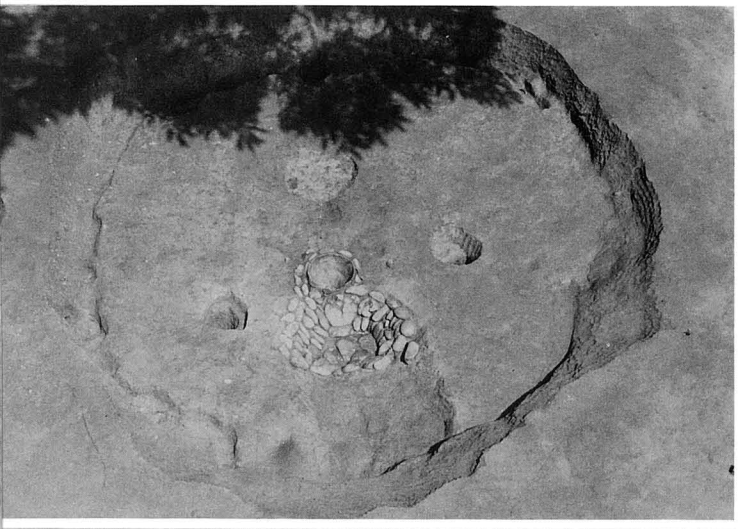


写真14
5号住居跡完掘状況
（南方より）

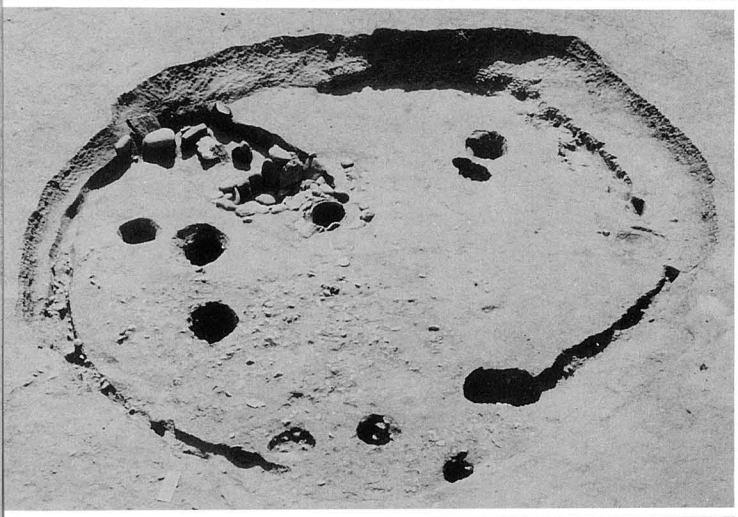


写真15
6号住居跡完掘状況
（東方より）

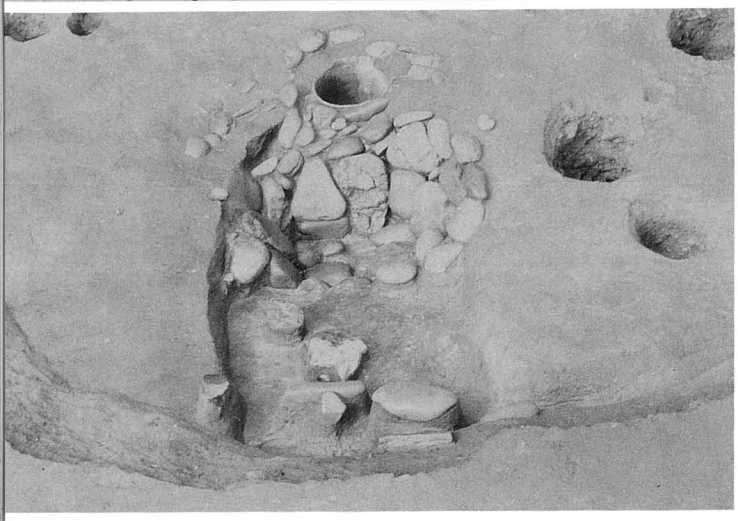


写真16
6号住居炉跡（新）
（南方より）

写真17
6号住居炉跡(古)
(南方より)

写真18
7号住居跡完掘状況
(北東より)

写真19
8号住居跡完掘状況
(西方より)

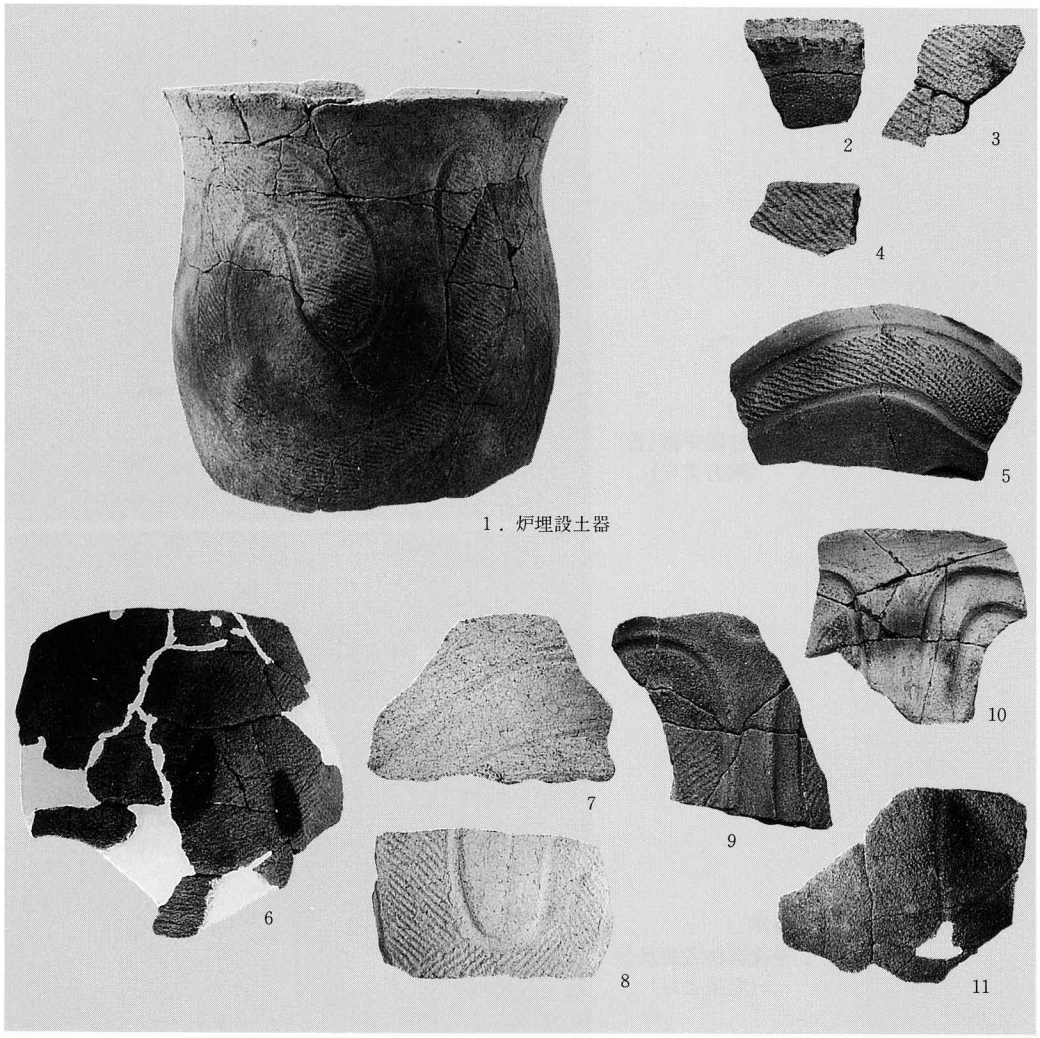


写真20　ＳＩ－１竪穴住居跡出土土器（図25・26）

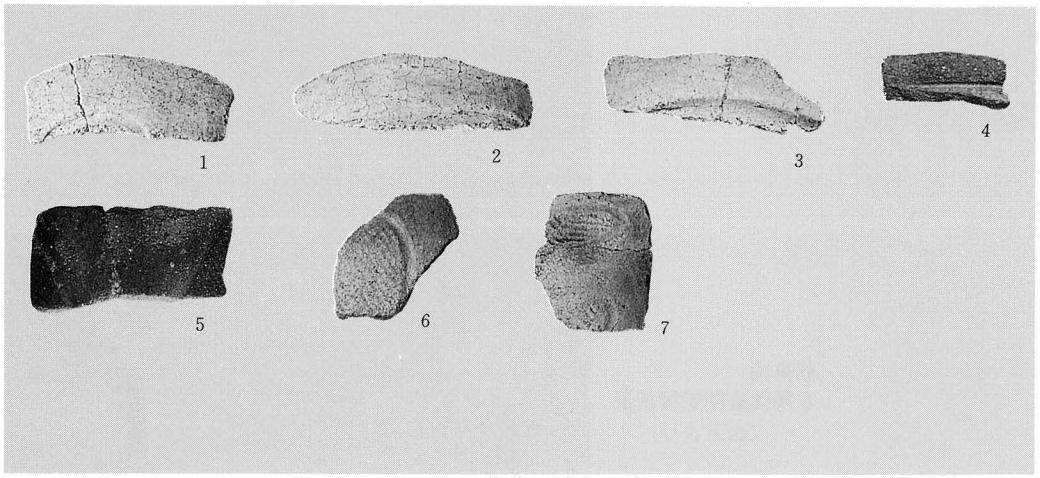


写真21　ＳＩ－２竪穴住居跡出土土器（図31）

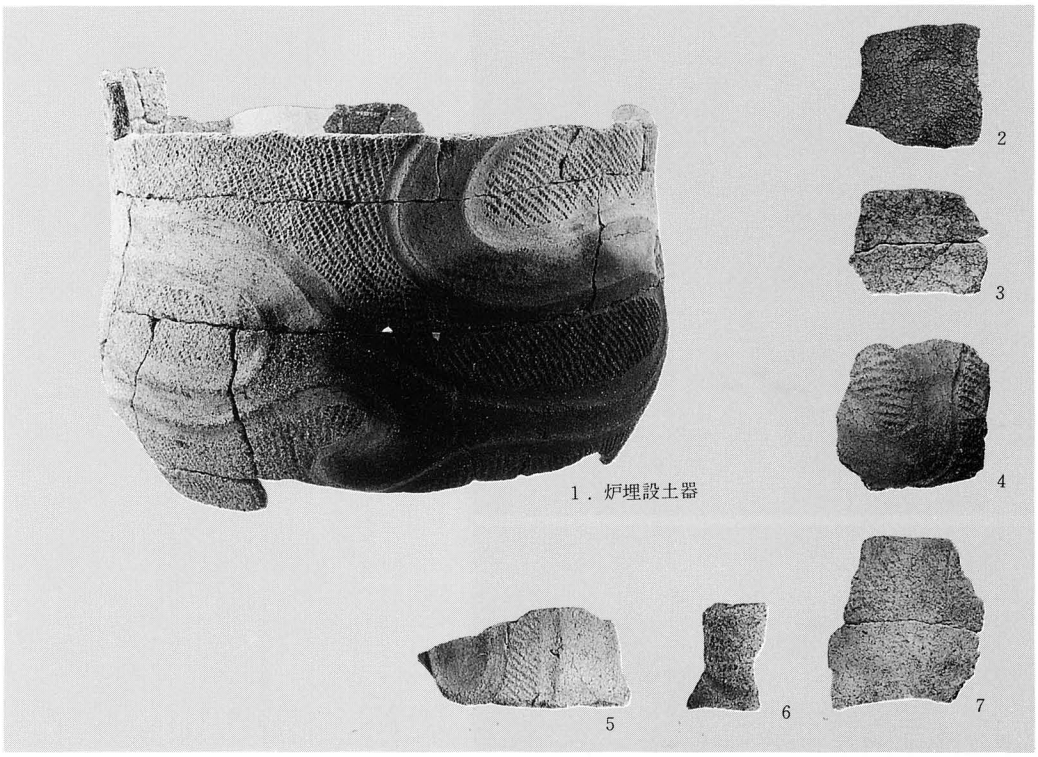


写真22　ＳＩ－３竪穴住居跡出土土器（図36）

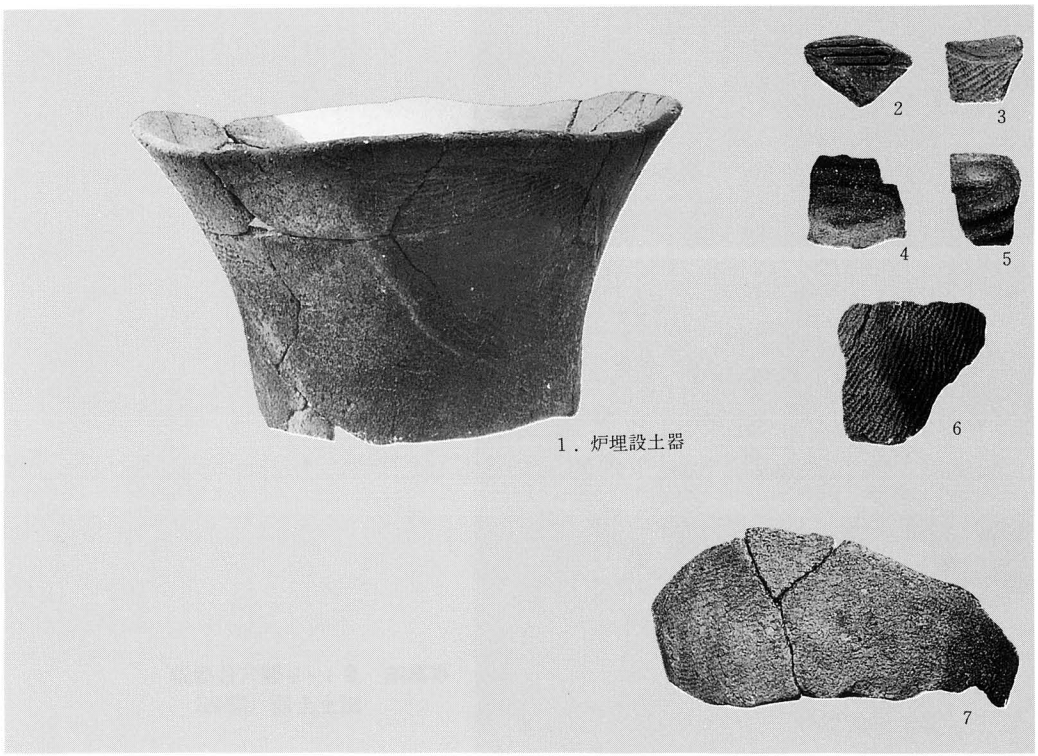


写真23　ＳＩ－４竪穴住居跡出土土器（図40）

写真24　ＳＩ－５竪穴住居跡
炉埋設土器（図44）

写真25　ＳＩ－５竪穴住居跡
出土土器（図44）

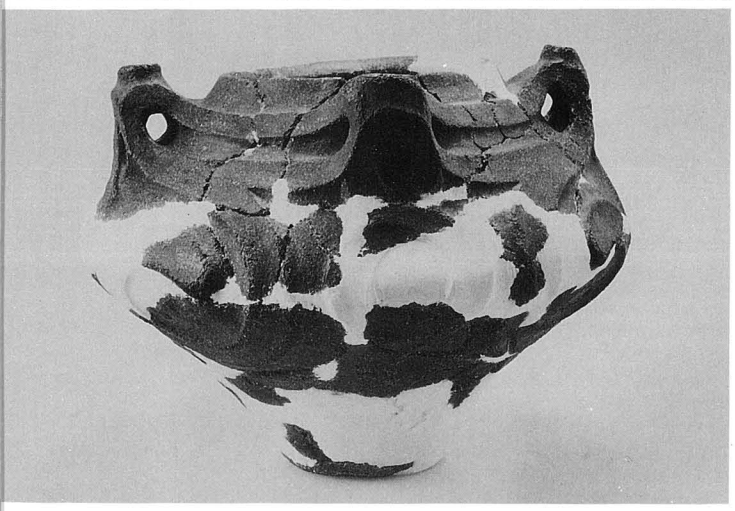


写真26　ＳＩ－５竪穴住居跡
出土土器（図45）

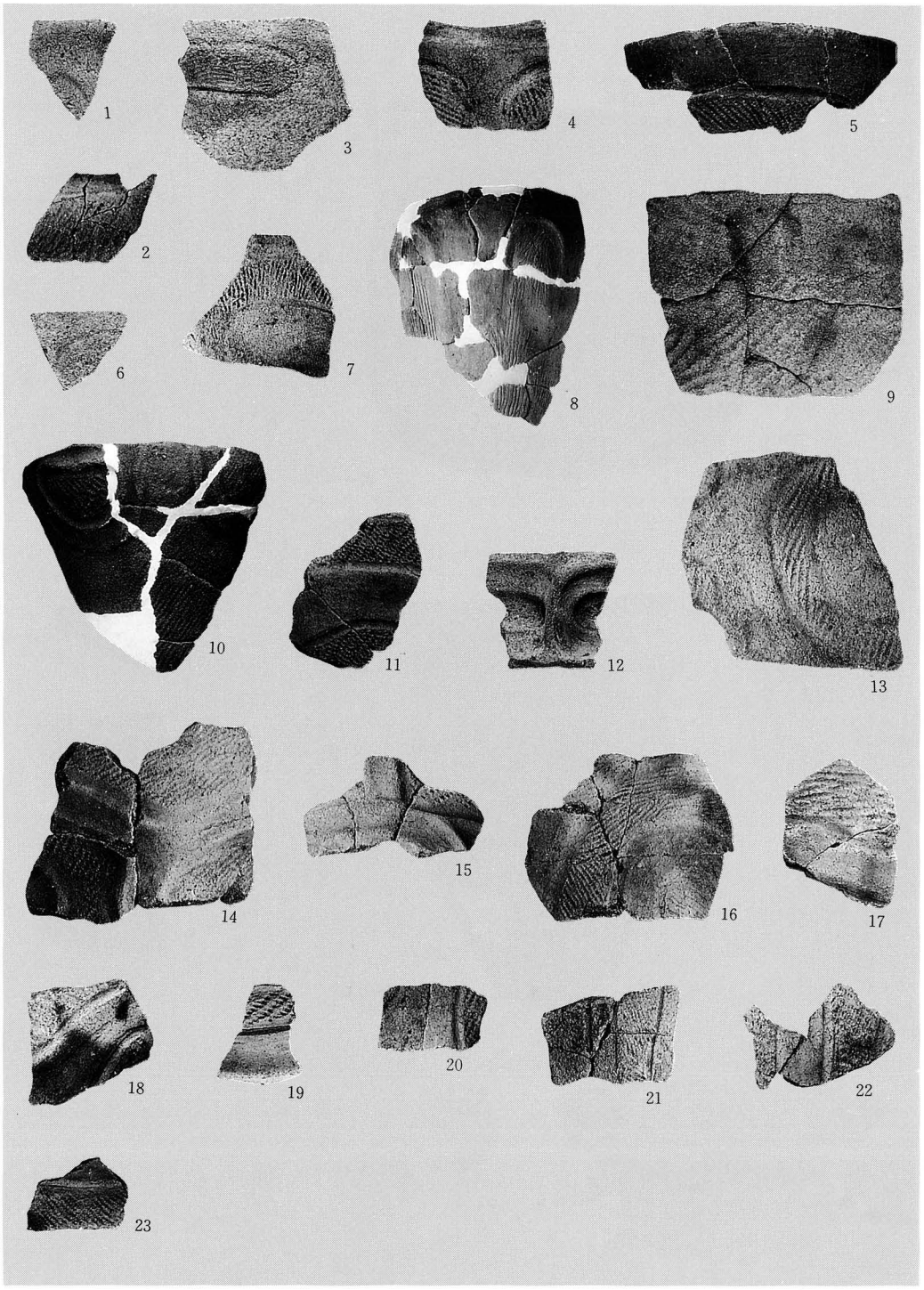


写真27　ＳＩ－５竪穴住居跡出土土器（図44・45・46）

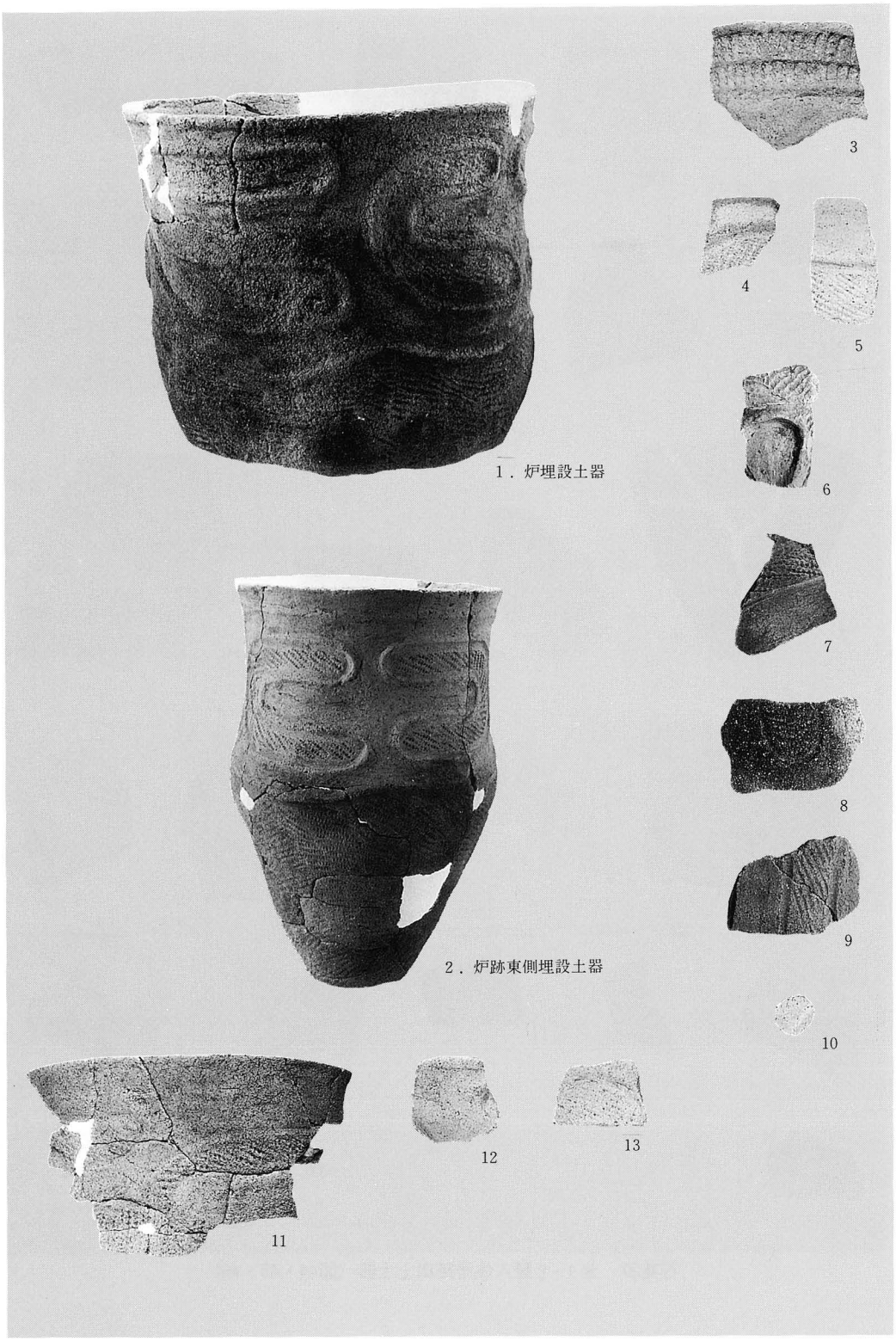


写真28　ＳＩ－６竪穴住居跡出土土器（図52・53）

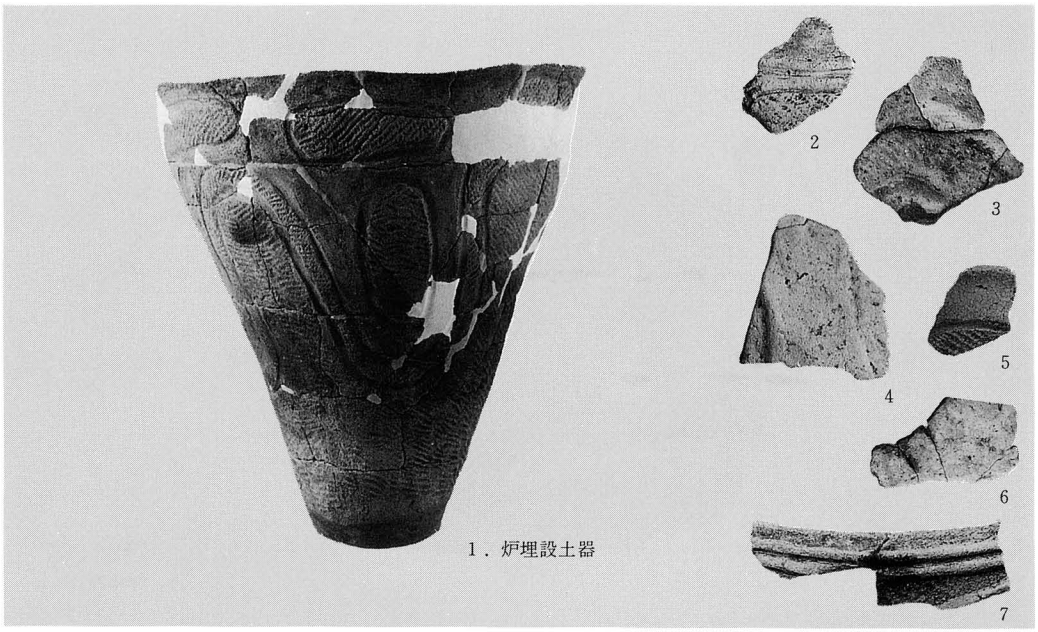


写真29　ＳＩ－７竪穴住居跡出土土器（図58）

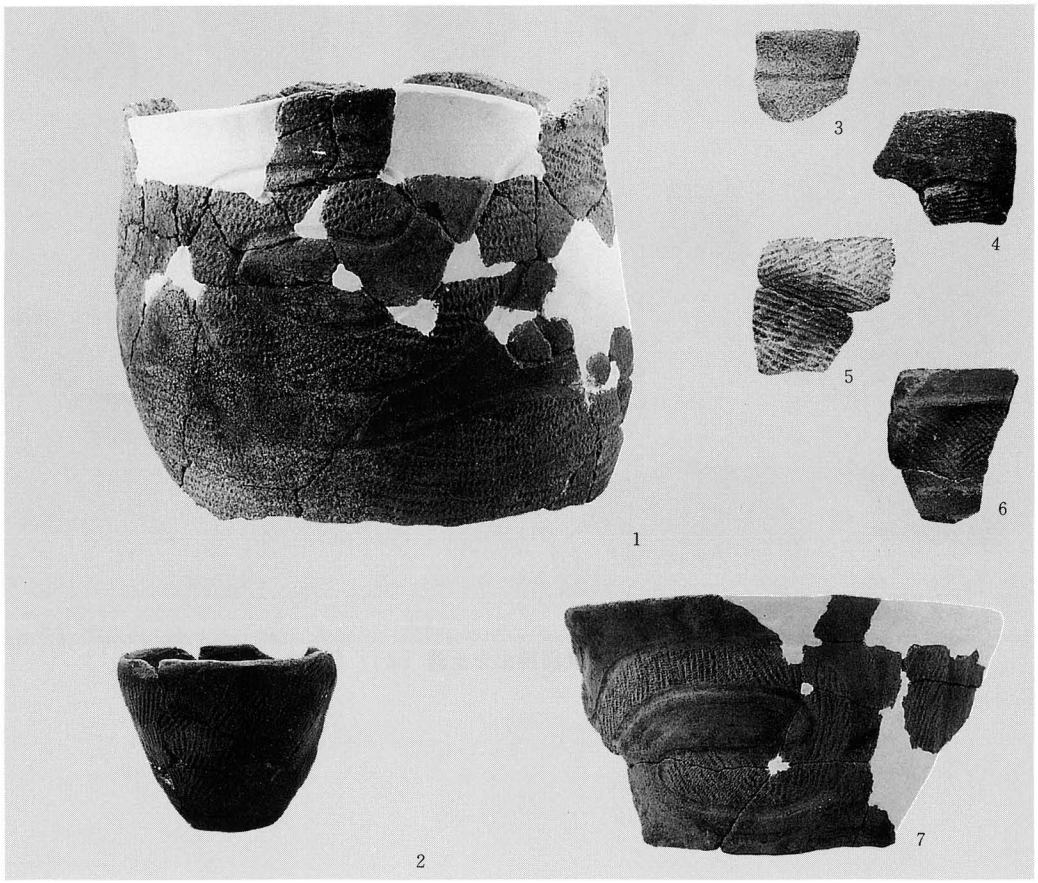


写真30　ＳＩ－８竪穴住居跡出土土器（１）（図64）

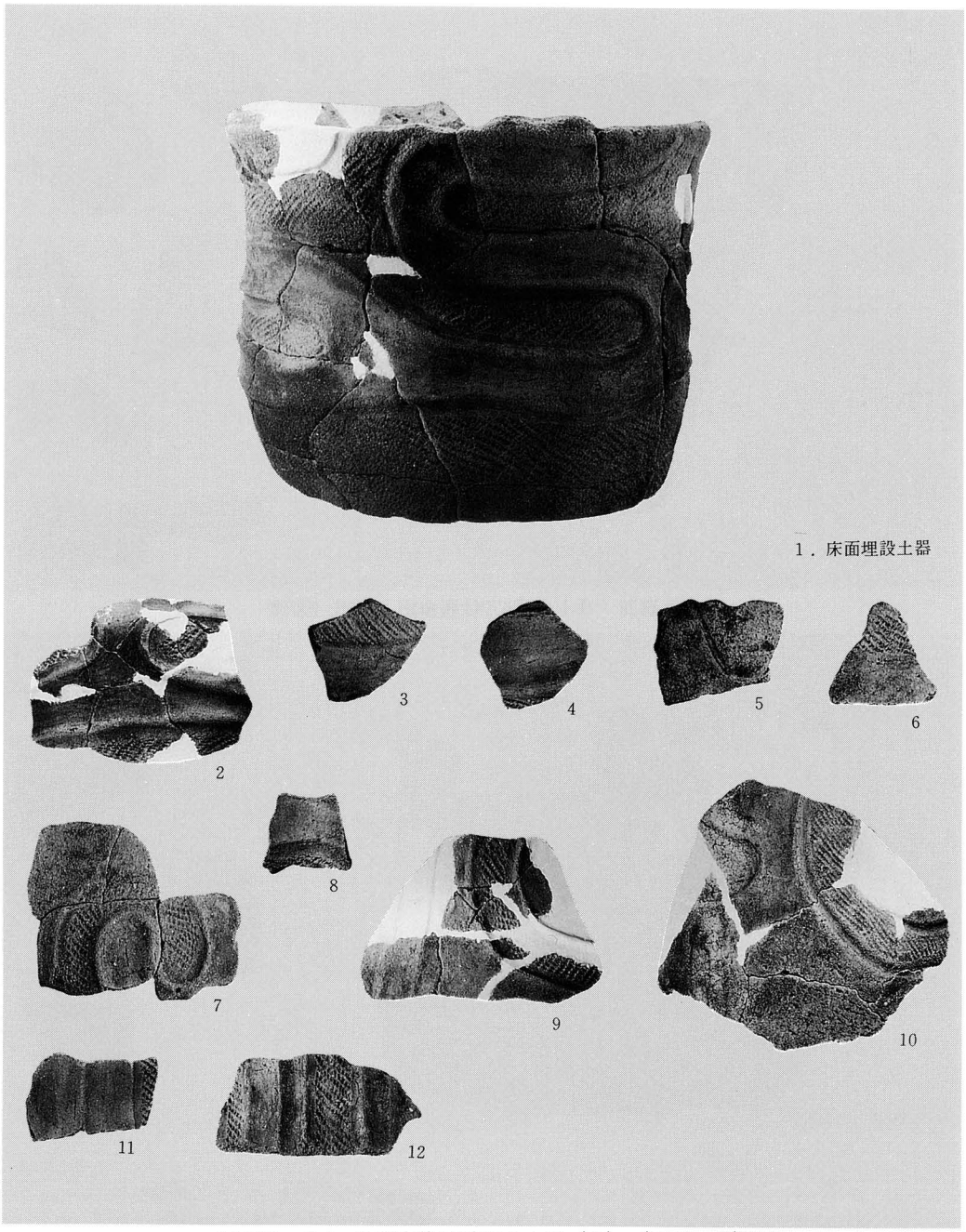


写真31　ＳＩ－８竪穴住居跡出土土器（２）（図64・65）

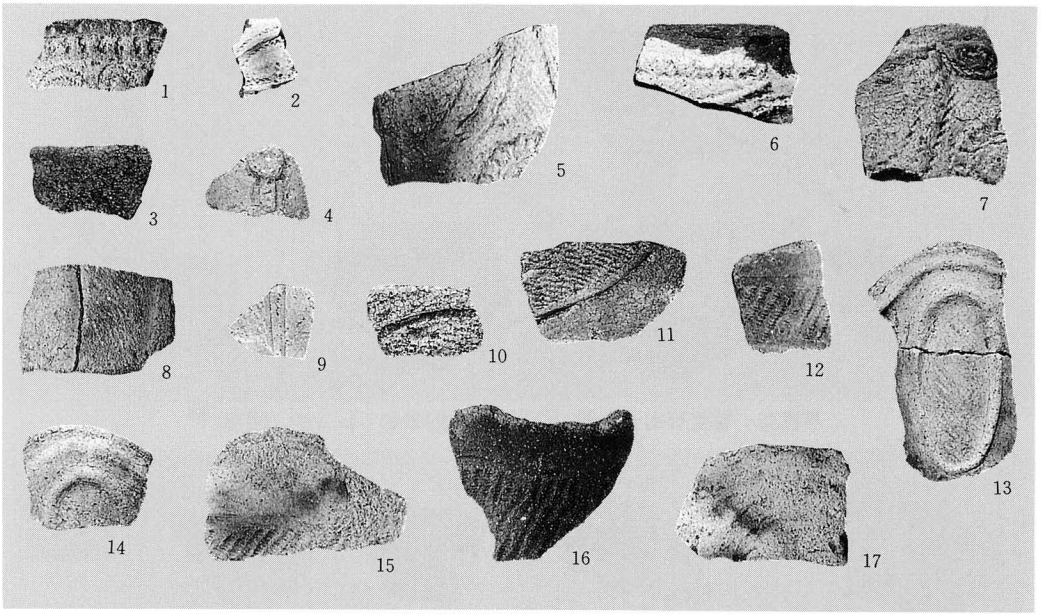


写真32　土坑出土土器（図72）

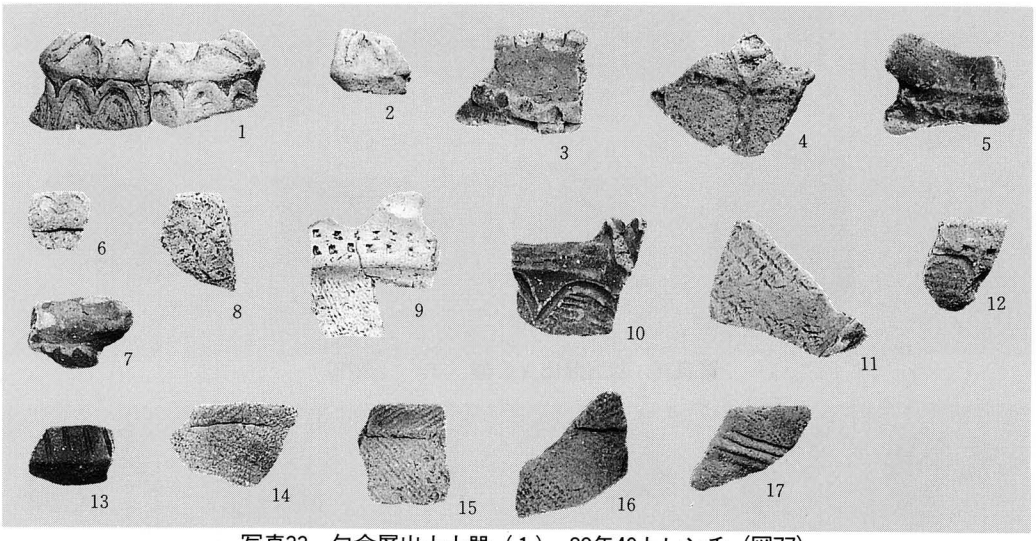


写真33　包含層出土土器（1）　89年40トレンチ（図77）

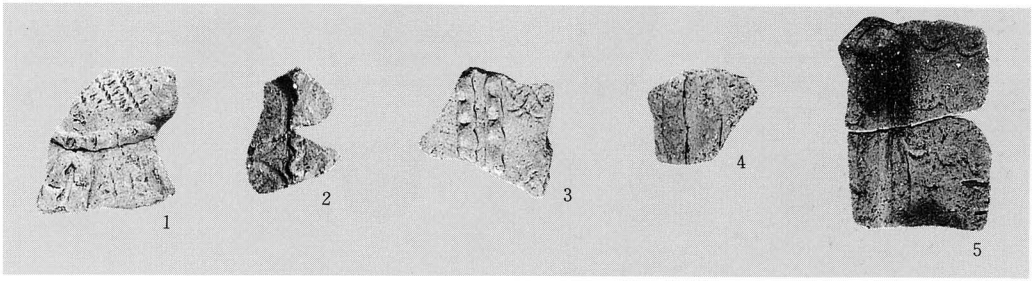


写真34　包含層出土土器（2－1）　89年40トレンチ（図78）

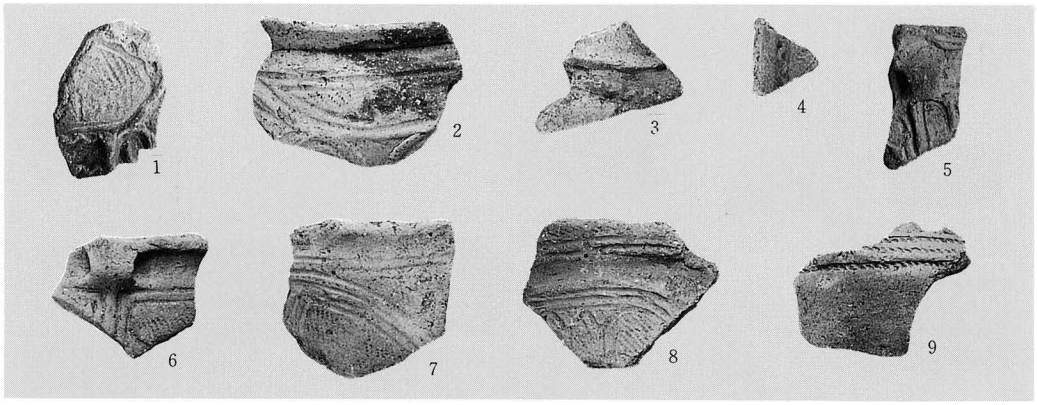


写真35　包含層出土土器（２－２）　89年40トレンチ（図78）

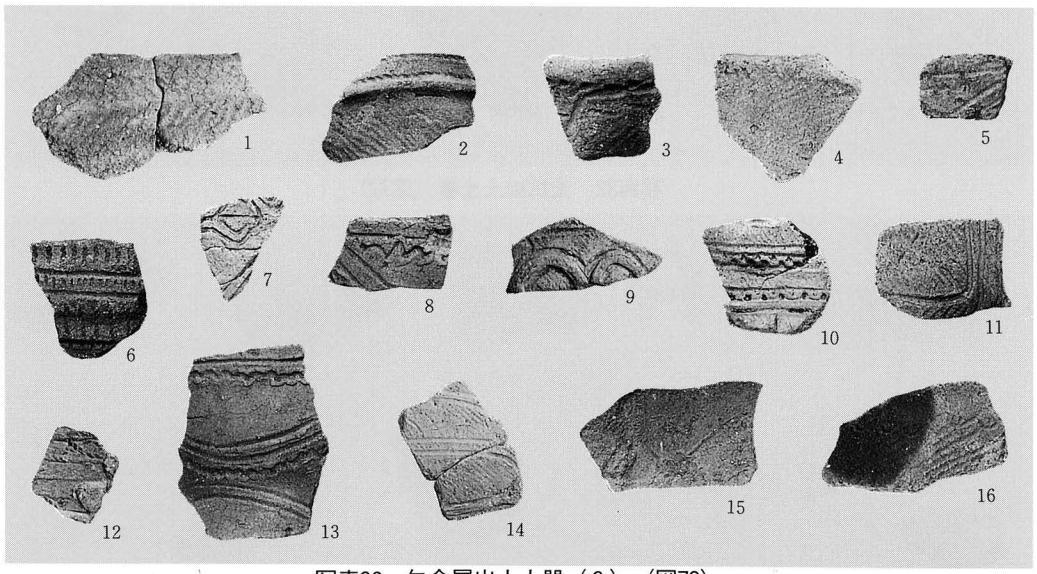


写真36　包含層出土土器（３）（図79）

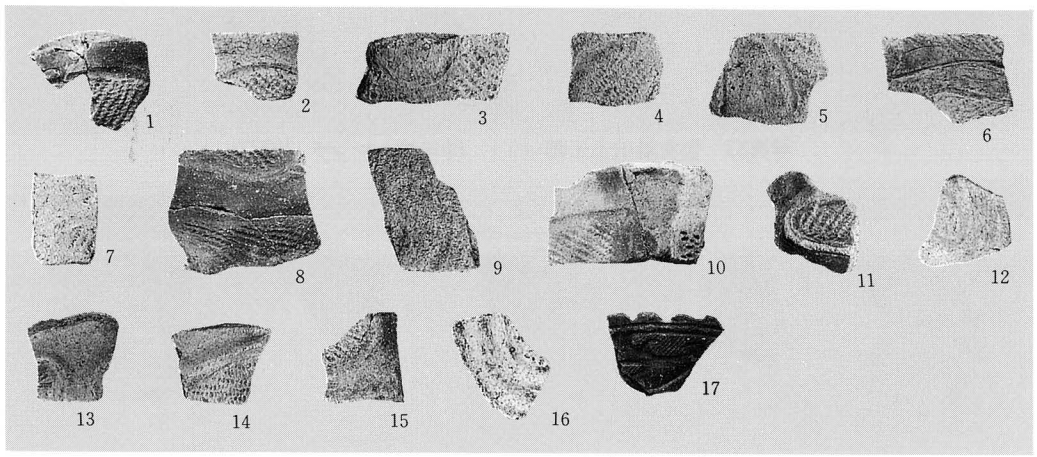
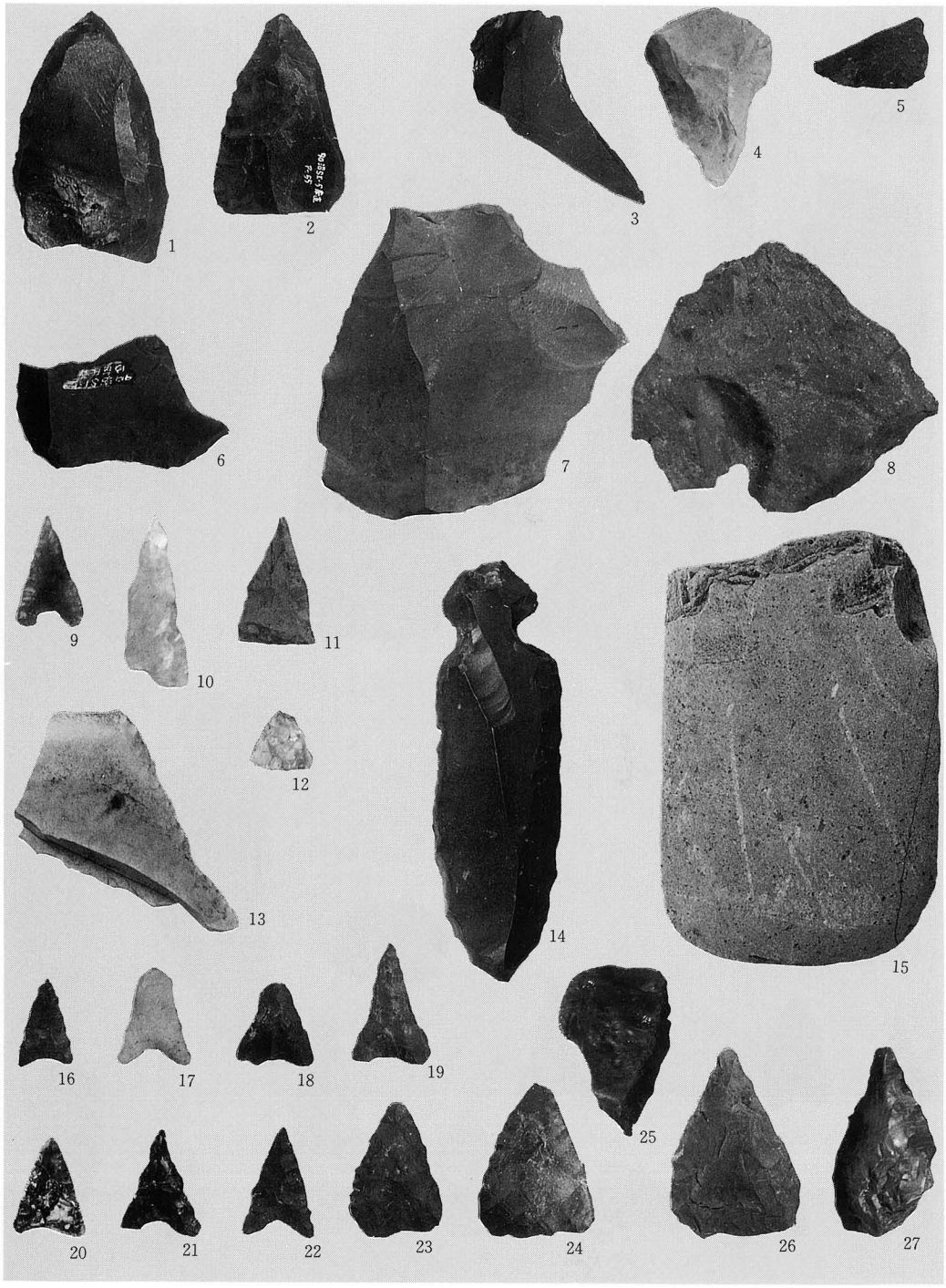


写真37　包含層出土土器（４）（図80）

ＳＩ－１ 竪穴住居跡出土石器（１～５―図27・28）
ＳＩ－２ 竪穴住居跡出土石器（６～９―図32）
ＳＩ－３ 竪穴住居跡出土石器（10・11―図35）
ＳＩ－４ 竪穴住居跡出土石器（12～16―図41）
ＳＩ－５ 竪穴住居跡出土石器（17～27―図47）

写真38　竪穴住居跡出土石器（ＳＩ－１～ＳＩ－５）

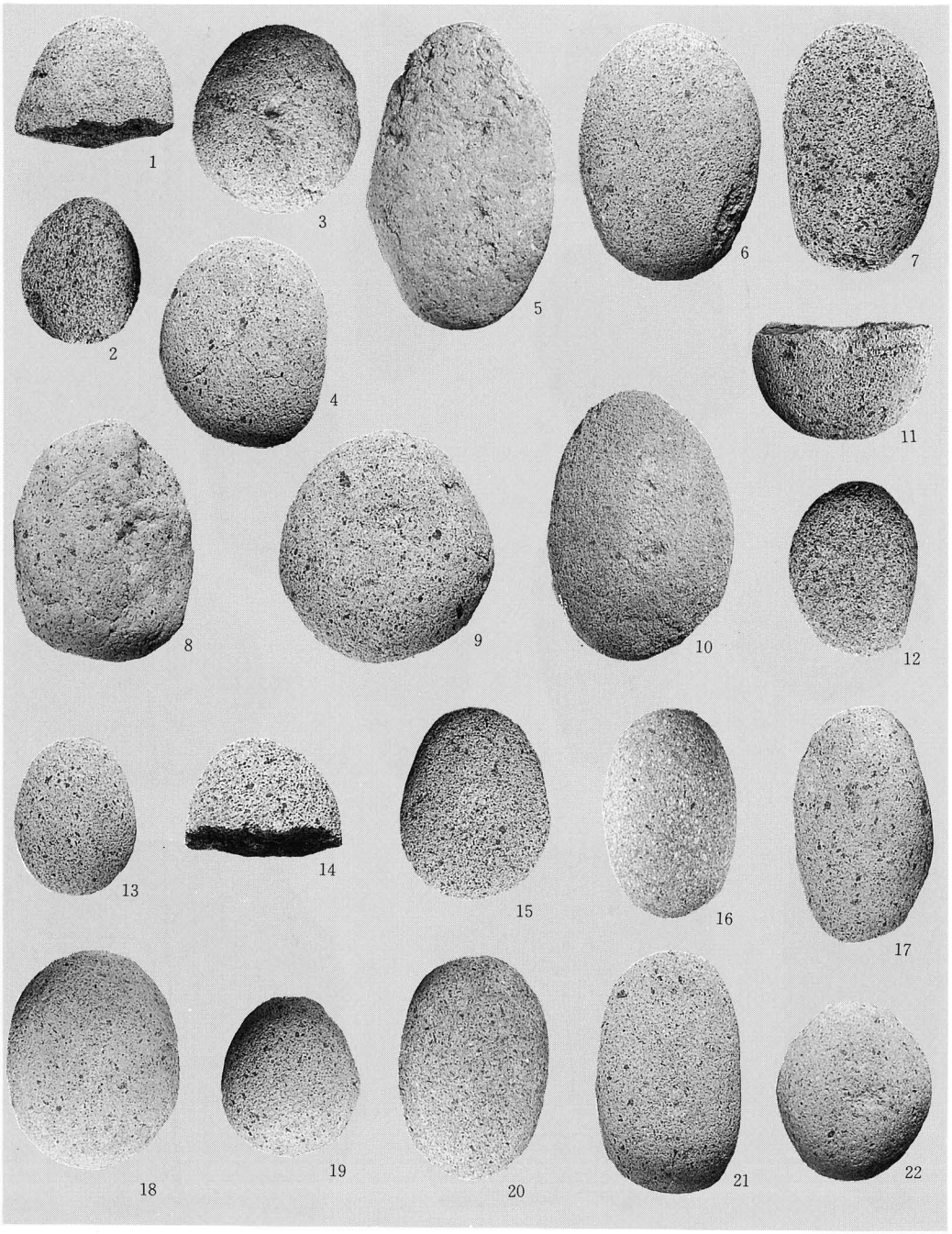


ＳＩ－５竪穴住居跡出土石器（１～８―図47・48）
ＳＩ－６竪穴住居跡出土石器（９～15―図54・55）
ＳＩ－７竪穴住居跡出土石器（16～27―図59）

写真39　竪穴住居跡出土石器（ＳＩ－５～ＳＩ－７）

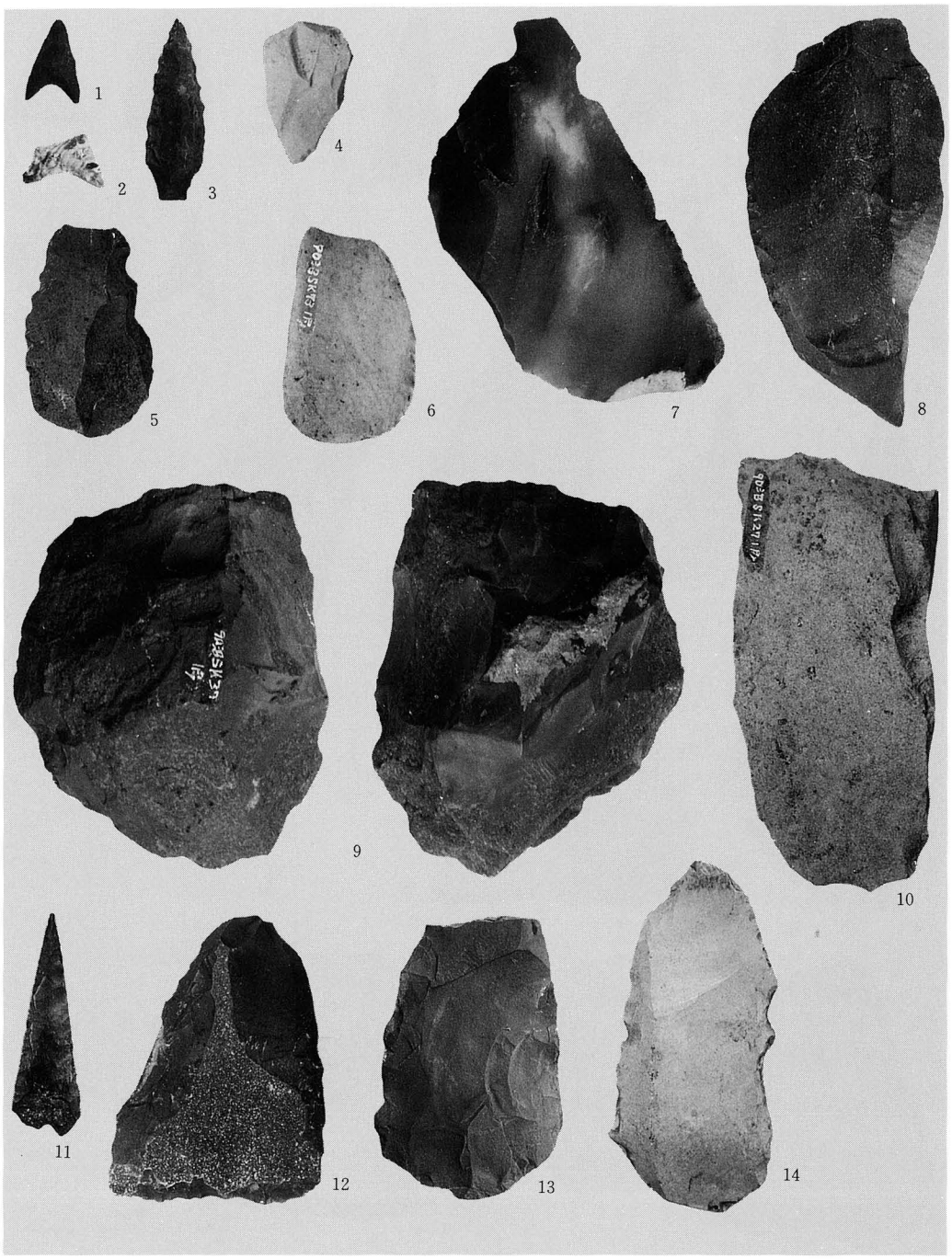
ＳＩ－７竪穴住居跡出土石器（１～５―図59・60）
ＳＩ－８竪穴住居跡出土石器（６～12―図66）

写真40　竪穴住居跡出土石器（ＳＩ－７・ＳＩ－８）



S I - 1 竪穴住居跡出土（1・2—図28）
S I - 2 竪穴住居跡出土（3～7—図33）
S I - 4 竪穴住居跡出土（8—図41）
S I - 5 竪穴住居跡出土（9～13—図49）
S I - 6 竪穴住居跡出土（14～16—図55）
S I - 7 竪穴住居跡出土（17—図61）
S I - 8 竪穴住居跡出土（18～22—図67）

写真41　竪穴住居跡出土礫石器



土坑出土石器（1～10―図73・74）
包含層出土石器（11～14―図81）

写真42　土坑・包含層出土石器（図73・74・81）

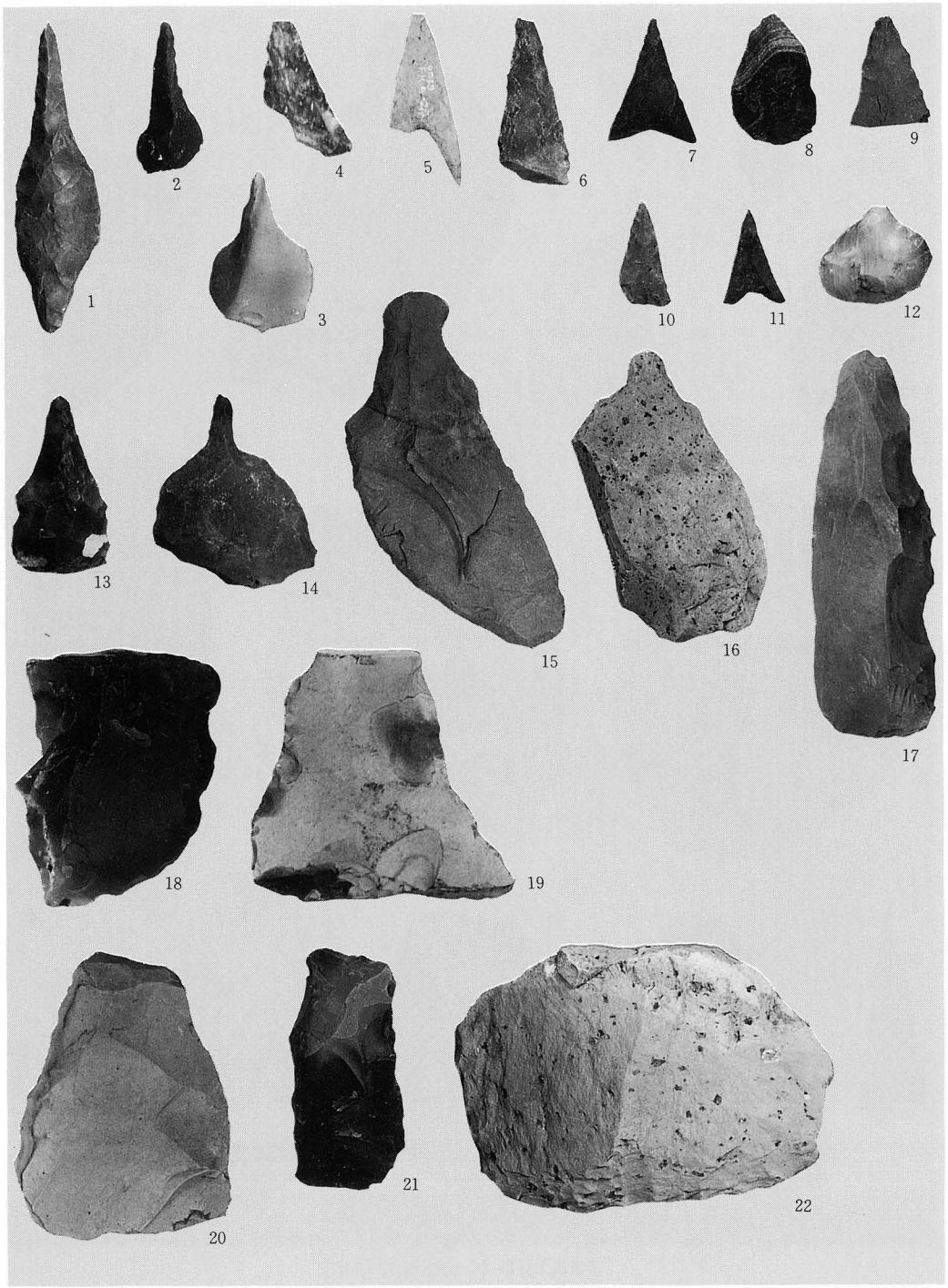
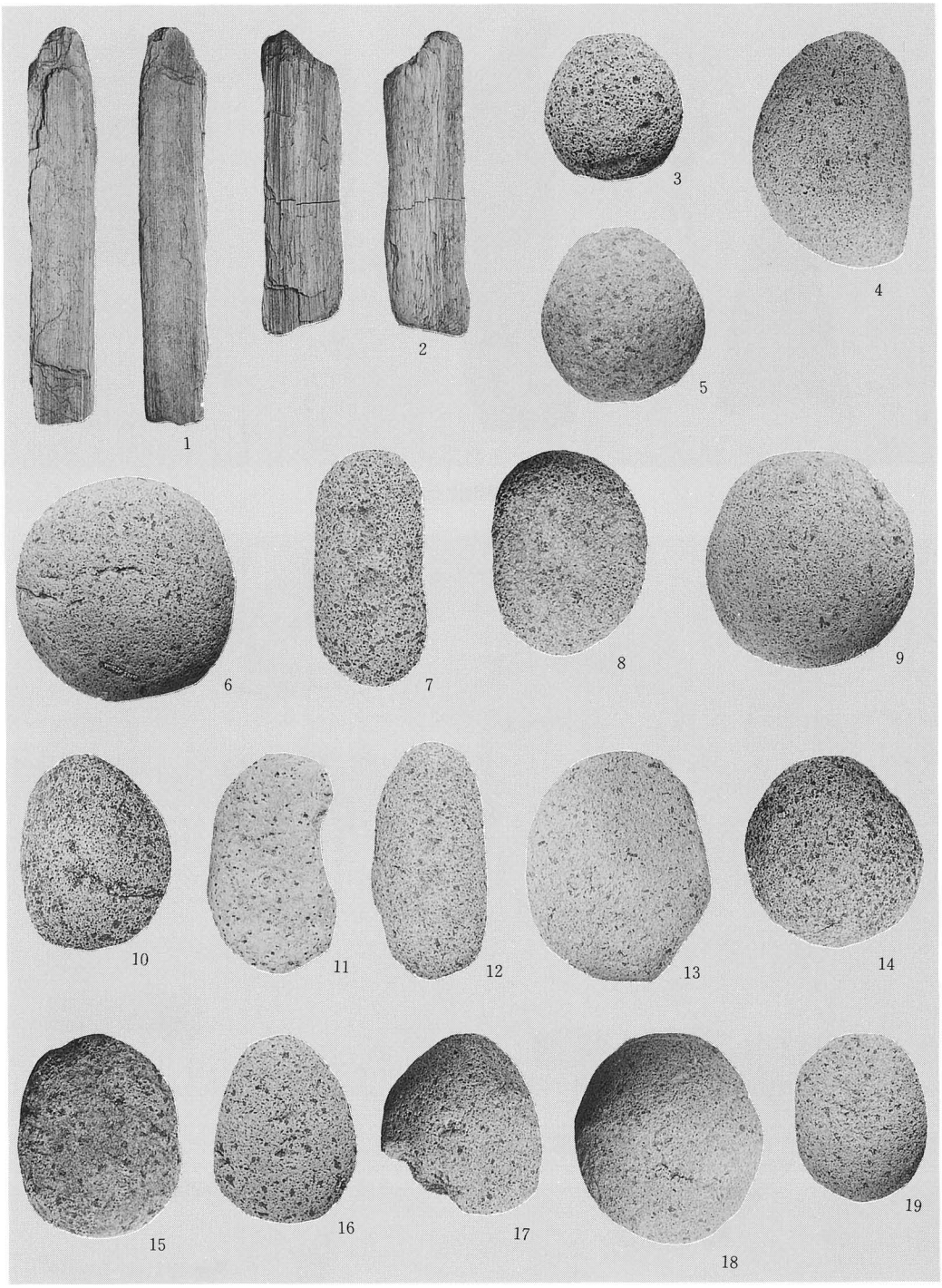


写真43　包含層出土石器（図81～84）



S I - 7 竪穴住居跡出土（1 ―図61）
土坑出土（2 ～ 6 ―図74・75）
包含層出土（7 ～ 9 ―図84）
包含層出土（10～14―図85）
包含層出土（15～19―図86）

写真44　土坑・包含層出土礫石器

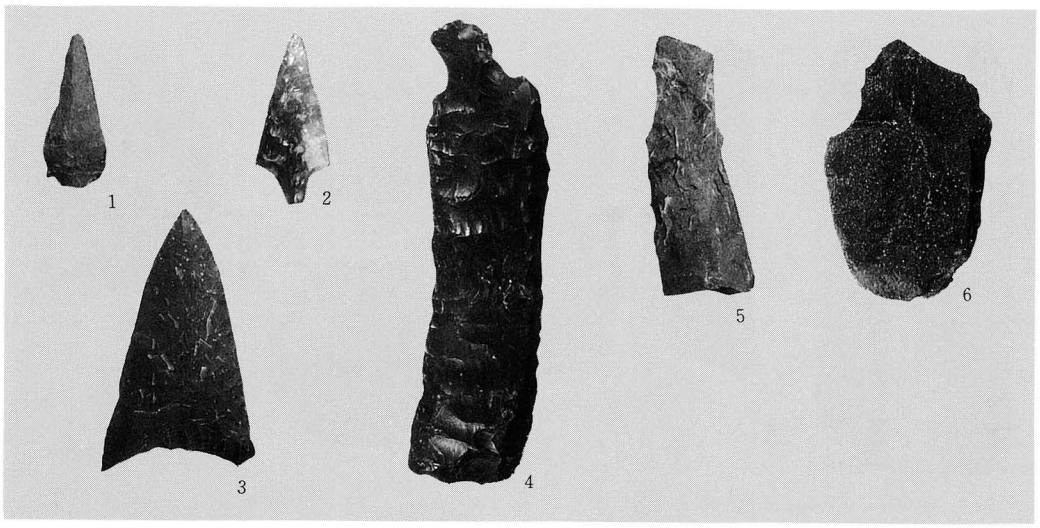
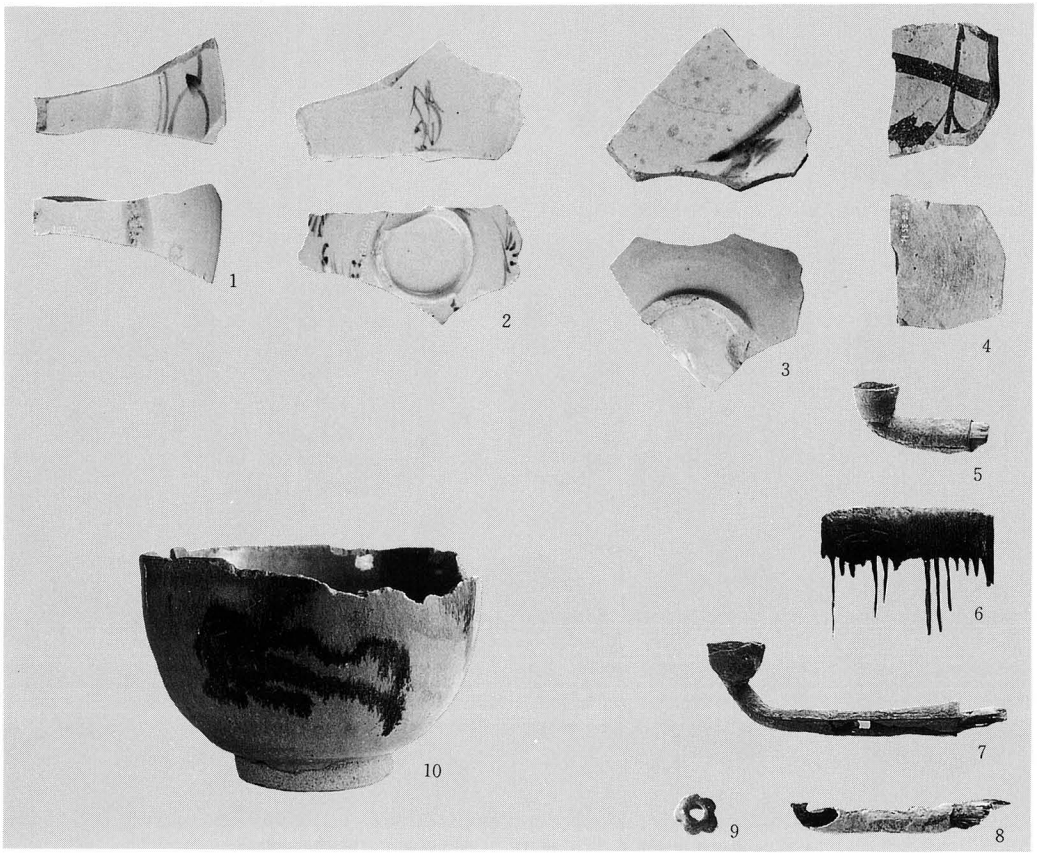
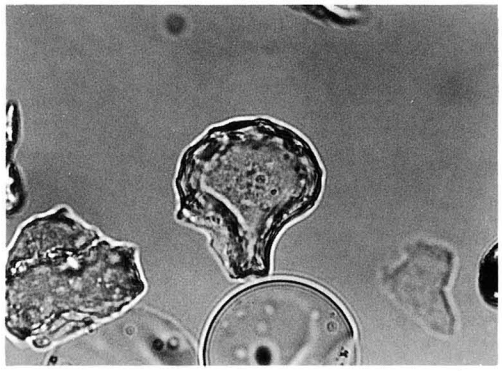


写真45　水田跡出土石器（図11）

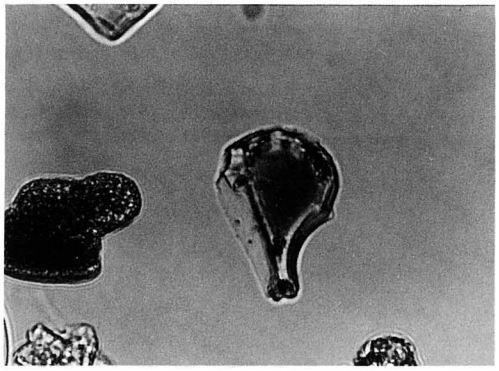


水田跡出土遺物（1～5―図10）
土壙墓出土遺物（6～10―図14）

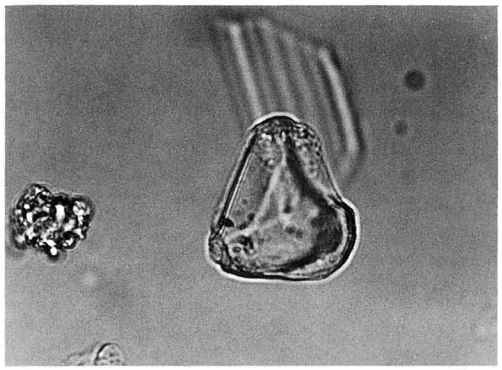
写真46　水田跡・土壙墓出土遺物（図10・14）



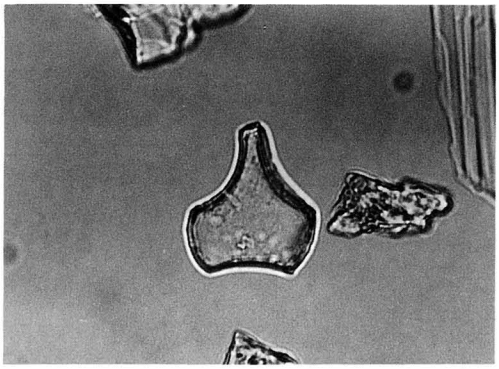
1



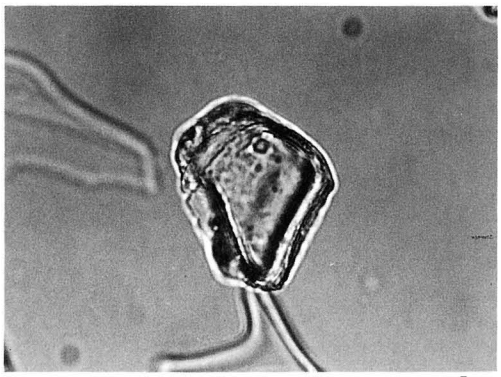
2



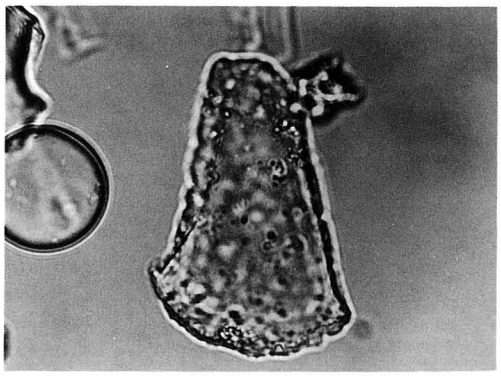
3



4



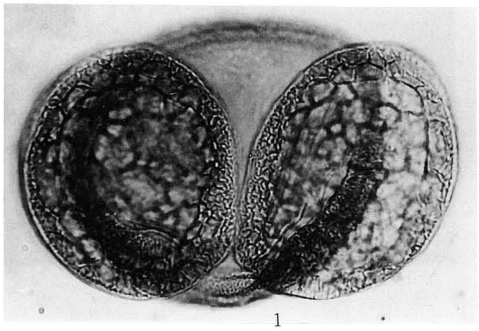
5

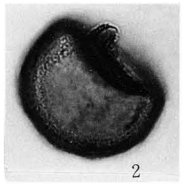


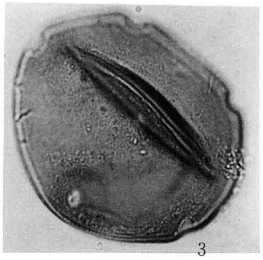
6

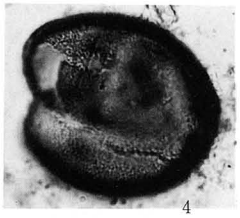
No.	分　類　群	地　点	試料名	倍率
1	イネ	ＡＬ－11	Ⅱ	400
2	イネ	ＣＢ－０	Ⅳ	400
3	ウシクサ族	ＡＭ－12	Ⅵ	400
4	シバ属	ＡＲ－24	Ⅲ	400
5	タケ亜科	ＡＲ－24	Ⅲ	400
6	不明	ＡＬ－11	Ⅳ	400

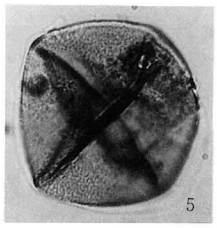
写真47　プラント・オパールの顕微鏡写真（スケール2/3）

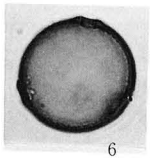


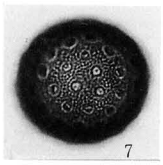


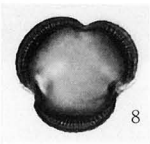


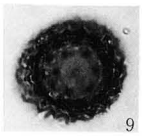


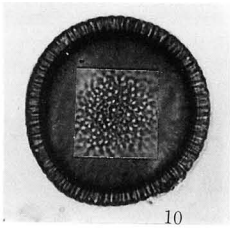


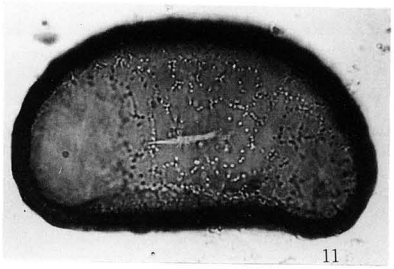












図版説明

1．*Pinus*	2層
2．*Cryptomeria*	2層
3．*Pterocarya*	5住炉埋設土器埋土下半
4．*Fagus*	2層
5．Gramineae	3層
6．Moraceae	5住炉埋設土器埋土下半
7．Chenopodiaceae-Amaranthaceae	2層
8．*Artemisia*	8住床面埋設土器埋土
9．other Compositae	2層
10．*Cuscuta*	6住炉東側埋設土器埋土下半
11．l-lete type FS	3層
12．Plant opal	5住炉埋設土器埋土下半

写真48　花粉の顕微鏡写真・倍率1,000倍（スケール2/3）

文化財課職員録

課　長　早坂　春一

管　理　課

係　長　鴇田　義幸

主　事　白幡　靖子

〃　佐藤　正幸

〃　高橋　三也

〃　庄司　厚

調査第一係

係　長　加藤　正範

主　任　熊谷　幹男

教　諭　佐藤　好一

主　任　篠原　信彦

〃　木村　浩二

主　事　佐藤　洋

〃　吉岡　恭平

教　諭　小川　淳一

主　事　主浜　光朗

〃　長島　榮一

教　諭　神成　浩志

〃　高倉　祐一

〃　稲葉　俊一

〃　菅原　裕樹

主　事　佐藤　淳

〃　渡部　紀

〃　大江美智代

教　諭　熊谷　裕行

調査第二係

係　長　田中　則和

教　諭　太田　昭夫

主　事　金森　安孝

〃　佐藤　甲二

〃　渡部　弘美

〃　工藤　哲司

〃　斎野　裕彦

〃　工藤信一郎

〃　荒井　格

〃　中富　洋

〃　平間　亮輔

教　諭　五十嵐康洋

〃　川名　秀一

仙台市文化財調査報告書第166集

沼　遺　跡

仙台市上谷刈土地区画整理事業関係調査報告書

１９９２年３月

発行　仙台市教育委員会

仙台市青葉区国分町 3-7-1

仙台市教育委員会文化財課

印刷　㈱東北プリント

仙台市青葉区立町24-24　TEL 263-1166